

志紀遺跡（その2・3・5・6）

大阪府営八尾志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書

第2分冊

2002年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

本文目次

第1分冊

巻頭カラー

序文	i
例言	iii
凡例	iv
目次	v

第1部 はじめに

第1章 調査にいたる経緯と経過	(本間)	1
第2章 位置と環境	(鹿野・本間)	4
第3章 調査の方法	(本間)	8
第4章 各調査区の対応関係	(市村)	10

第2部 2A・2B区の調査成果

第1章 調査の方法	(西川)	21
第2章 層序	(西川)	23
第3章 遺構と遺物	(西川・渡辺)	27
第4章 志紀遺跡2A区周辺における花粉分析	(文化財調査コンサルタント㈱)	71
第5章 小結	(西川・渡辺)	79
写真図版		81

第3部 3A・3B区の調査成果

第1章 調査の方法	(秋山・地村)	97
第2章 層序	(地村・秋山)	99
第3章 遺構と遺物	(秋山・地村)	103
第4章 自然科学的分析		
第1節 志紀遺跡3区における古環境復元	(㈱古環境研究所)	209
第2節 志紀遺跡3区発掘調査に伴う花粉化石等微化石分析	(文化財調査コンサルタント㈱)	233
第3節 志紀遺跡3区出土樹種鑑定の概要	(勸元興寺文化財研究所)	242
第4節 志紀遺跡3区出土土器片の付着物の分析	(勸元興寺文化財研究所)	245
第5節 志紀遺跡3区出土石鏃の付着物の分析	(勸元興寺文化財研究所)	255
第6節 志紀遺跡3区出土の鉄製鋤・鋤先の分析	(㈱九州テクノリサーチ)	259
第5章 小結	(地村・秋山)	268
写真図版		269

第4部 5区の調査成果

第1章 調査の方法	(本間)	297
第2章 層序	(本間)	298
第3章 遺構と遺物	(本間・野口・鹿野)	300
第4章 志紀遺跡5区の花粉・プラントオパール分析	(橈古環境研究所)	338
第5章 小結	(本間)	352
写真図版		355

第2分冊

第5部 6A区の調査成果

第1章 調査の方法	(市村)	365
第2章 層序	(市村)	366
第3章 遺構と遺物	(鹿野・市村)	368
第4章 志紀遺跡6A区第15層の花粉・植物珪酸体分析	(パリノサーヴェイ橈)	379
第5章 小結	(鹿野)	382
写真図版		383

第6部 6B区の調査成果

第1章 調査の方法	(市村)	385
第2章 層序	(市村)	387
第3章 遺構と遺物	(市村・鹿野)	391
第4章 自然科学的分析		
第1節 志紀遺跡6B区の花粉・植物珪酸体分析	(パリノサーヴェイ橈)	463
第2節 放射性炭素年代測定	(橈パレオ・ラボ)	471
第5章 小結	(鹿野)	473
写真図版		475

第7部 6C区の調査成果

第1章 調査の方法	(本間)	485
第2章 層序	(本間)	486
第3章 遺構と遺物	(本間・野口)	492
第4章 志紀遺跡6C区の花粉・植物珪酸体分析	(パリノサーヴェイ橈)	554
第5章 小結	(本間)	557
写真図版		559

第8部 考察

志紀遺跡の変遷と周辺遺跡	(市村)	575
八尾市志紀遺跡における縄文時代～中世の堆積環境の 変化過程とそれらに対応した耕作地の開発	(別所秀高)	595
志紀遺跡における縄文時代から中世の古環境解析	(辻本裕也・辻 康夫 ・田中義文・馬場健司)	605
志紀遺跡6区で認められた地震の痕跡	(寒川 旭)	614
昆虫化石群からみた遺跡の古環境復元	(西川)	625
志紀遺跡6区出土の動物遺体	(安部みき子)	639
志紀遺跡6区出土の植物遺体	(山口誠治)	647
河内湖岸域における初期弥生水田をめぐって	(秋山)	650
石くずからのメッセージ	(西川・渡辺)	664
志紀遺跡の石器製作	(野口)	677
志紀遺跡の条里水田	(地村)	689

第5部 6A区の調査成果

第1章	調査の方法	365
第2章	層序	366
第3章	遺構と遺物	368
第4章	志紀遺跡6A区第15層の 花粉・植物珪酸体分析	379
第5章	小結	382
	写真図版	383

第5部 6A区の調査成果

第1章 調査の方法

基本的な調査の方法は、第1部第3章に示してあるので、ここでは特に（その6）に関することを概括しておく。

調査区内のグリッド

今回の調査区は、第1部第3章で記した細分区画内で、「I04-MS~QT」の範囲内である。

遺構番号

遺構の種類や遺構面に関わらず、通し番号を付けた。

遺物の取り上げ

遺構出土の遺物は検出遺構別に、包含層出土の遺物は層位的には「面と層の呼称法」の「層」ごとに、平面的には「地区割り」の4m×4m単位の各グリッドごとに取り上げた。

図面作成

面ごとの調査区全体図は、1・9・15面がクレーン測量により1/50・1/100図面を作成し、それ以外の面は地区杭を基準とした測量で縮尺1/50図面を作成した。また、調査区断面図については、調査区の北側、東側に矢板から約1m幅で断面観察用のアゼを残し、1/20で作成した。他に、各種の遺構については、平面図、断面図、立面図を1/10等で適宜作成した。

各種分析

6A区においては、第15層の花粉分析およびプラントオパール分析を行った。この層は、周辺の調査区との対応関係が比較的追いやすい層であり、6B区や6C区でも同じ分析を行っている。

6A区の調査は（その6）調査の中で最も先行して行われた調査である。その為、近接する5区との層の対応関係を考えながら、6B区や6C区の試掘的意味合いをも加味し調査を行うこととした。また、分層しえた層を極力多く調査するよう心がけたため、（その6）調査各区の中でも調査面が最も多くなっている。なお、6A区の発掘調査は、本間・市村・野口・鹿野があたり、調査補助員岩崎美紀子・田中エミ子・松下知代・辻田有美・辻田多江の協力を得た。整理作業は、鹿野がおもに当たり、市村が補助した。調査補助員田中エミ子・辻田有美・辻田多江の協力を得た。

また、現地撮影以外の写真関係業務は中部調査事務所主査片山彰一が担当し、調査補助員水取康人の協力を得た。出土遺物の保存処理等は同所主査山口誠治が担当した。

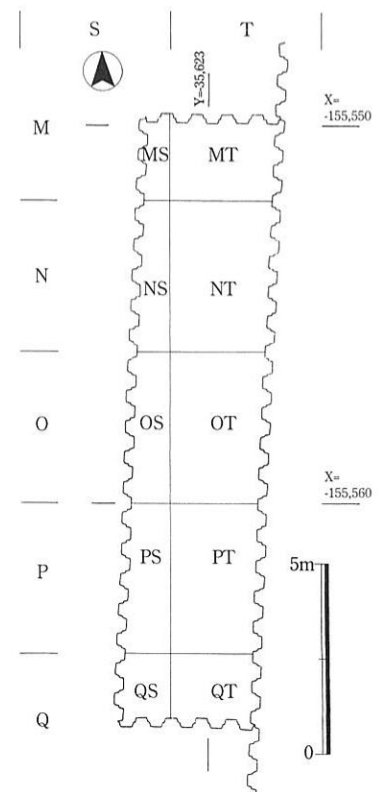


図246 6A区地区割り

第2章 層序

6A区の調査では、概ねT.P.+12.3mの現地表面からT.P.+10.3mまでの約2mを重機により掘削した。重機により攪乱や近世以降の土壤層、洪水による堆積層等を除去すると、鎌倉時代の洪水砂層（第0層）が確認できた（①～⑥）。以下では人力による掘削を行ったT.P.+10.3～7.4mまでの層序を記載する。

第1層は、灰色極細砂ブロック混じり砂質シルト（⑦）。層厚10cm前後。鎌倉時代の作土で、比較的強く土壤化している。極細砂ブロックは層中に多く含む。

第2層は、北壁では2層に細分でき、上部が灰色極細～細砂混じり粘質シルト（⑧）、下部は同質ながら若干土壤化が弱く、色調が淡い（⑨）。層厚10～20cm。全体的に第1層に比べ土壤化の度合いは弱い。粘質であり第1層との分層は比較的容易であった。下部には細～中砂が混じる部分が見られる。なお、南に行くにつれ、混じる砂の粒度が粗くなる。

第3層は、灰色中～粗砂混じり砂質シルト（⑩）。層厚4～10cmで、若干粘質であるが、混じる砂は第4層の影響で粗く、第2層との分層は容易であった。

第4層は、灰色細～粗砂（⑪）、青灰色もしくは明黄褐色の粗～極粗砂（⑫）、青灰色粗～極粗砂（⑬）、青灰色粗～極粗砂（⑭）で構成される。層厚は20cm前後。層中には弱い土壤化層を含み、⑬は土壤化しており、⑪も南へゆくにつれ弱く土壤化する。これら洪水砂層中の土壤化層は、一部明瞭に土壤化している部分があるものの、トレンチ全体では良好に追いきれない層であり、各細分層の調査は行わなかった。

第5層は、灰色もしくは青灰色の細砂混じり粘質シルト（⑮）で、第5面調査区中央で検出された東西方向畦畔の北側にのみ存在する。層厚10cm前後で、明瞭な土壤化層である。上層が洪水砂で覆われており、第5面の遺構検出は容易であり、遺構の残存状況も良好であった。

第6層は、青灰色もしくは灰色の極細砂混じりシルト質粘土（⑯）。強く土壤化し、第5層より粘質である。色調は若干赤味がかっている。

第7層は、青灰色もしくは灰色の粘土（⑰）。層厚10～18cm。第6層と質は類似するが、混じる砂が殆どない点で相違する。

第8層は、灰色細砂混じりシルト（⑱）。層厚10cm弱。第7層よりもやや砂質であった。

第9層は、灰色極細砂混じりシルト（⑲）。層厚10～14cm。第9層下半から下層にかけて、炭酸鉄の沈着が多く見られる。

第10層は、暗オリーブ灰色極細砂混じりシルト（⑳）。層厚10cm前後。炭酸鉄の沈着が多く見られる。上層に比べ、土壤化の度合いが弱い。

第11層は、灰色極細砂混じりシルト（㉑）。層厚6～14cm。上層からの炭酸鉄の沈着が若干見られる。明瞭に土壤化している。

第12層は、灰色細砂混じりシルト（㉒）。層厚10～16cm。非土壤化層。

第13層は、灰色極細～細砂混じりシルト（㉓）。層厚8cm前後。土壤化層。

第14層は、2～3層に細分が可能であったが、いずれも非土壤化層である。上・中部が暗オリーブ灰色粗砂混じりシルト（㉔・㉕）で、上部のほうが色調が薄い。下部が灰色粗砂混じりシルトでラミナが見られる（㉖）。また、中部の最下部、下部との境界には明瞭に粗砂を挟む。層厚30cm強。

第15層は、灰色極細砂混じりシルト（㉗）。層厚10～14cm。土壤化層。茶色っぽい層であり、マンガ

ンが混じる。

第16層は、暗青灰色極細砂混じりシルト (㉔)。層厚 6～10cm。非土壌化層。

第17層は、オリーブ黒色細砂混じりシルト (㉕)。層厚 6 cm前後。土壌化層。

第18層は、灰色極細砂混じりシルト質粘土 (㉖)。層厚 6～10cm。非土壌化層。

第19層は、灰色極細砂混じりシルト質粘土 (㉗)。層厚 6～10cm。土壌化層。

第20層は、暗オリーブ灰色極細砂混じりシルト質粘土 (㉘)。層厚 6～10cm。第19層の影響を受けて特に上部は黒色を呈するが、上部から下部にかけて漸移的に色調が変化する。

第21層は、暗緑灰色極細砂混じりシルト質粘土 (㉙)。層厚20cm以上。上層からの影響を受け、腐食物が混じり、点状や線状の黒色部分が見られる。

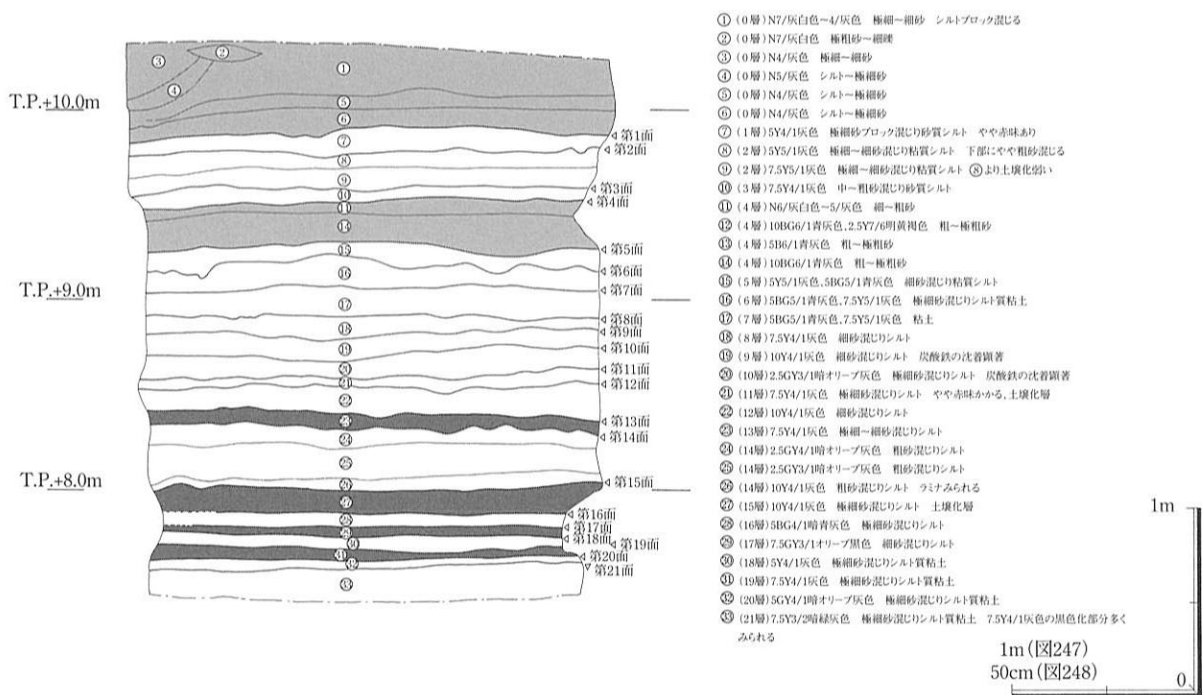


図247 6 A区北壁断面模式

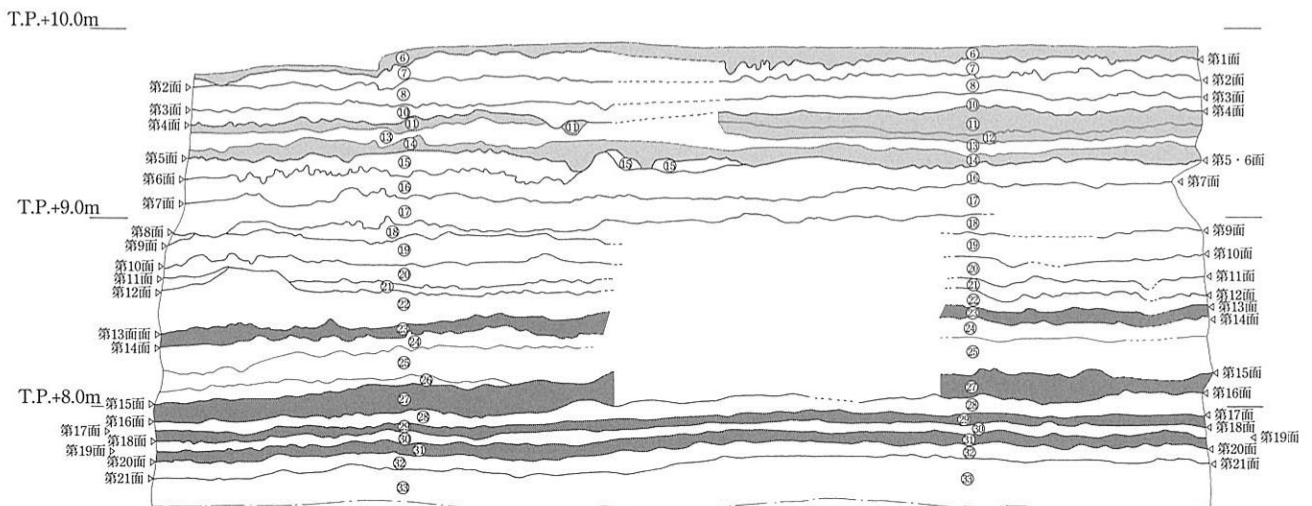


図248 6 A区東壁断面模式

第3章 遺構と遺物

前述したように、今回の調査では機械掘削停止面から第1面までの間の層を第0層としている。その第0層からは遺物は出土していない。以下、第1面から記述を始める。

第1面 (図249)

機械掘削終了面から洪水砂を丁寧に除去し検出されるのが、灰色の極細砂ブロック混じり砂質シルトを作土とする第1面である。従来の調査では鎌倉時代初頭前後の条里水田が良好に検出される面であり、6A区での調査でも良好に検出された。面の高さはT.P.+9.81~9.86mで全体的にほぼ平坦であるが、畦畔を挟んだ東側が若干高い。なお、第1面に伴う遺物は出土していない。

遺構

調査区中央で南北方向の畦畔1が検出された。なお、北端部分については、調査開始段階の機械掘削終了段階から湧水が著しかった部分で、若干掘りすぎてしまった結果、良好に遺構が検出されなかった部分である。畦畔は幅50cm強、高さは北側では5cm程度であるが、中央から南側にかけては15cmと良好に残存していた。なお、畦畔は座標北から若干東へ傾く。この傾向は近接する5区、6B区でも見られる。

なお、面上には微妙な凹凸が見られた。この凹凸は畦畔の両側で東西方向に部分的に見られた。レベル差が1~2cm程度であり、等間隔ではない。耕作痕跡といえるほど明瞭ではないため、ちょっとした地面の凹凸であろうか。また、洪水砂に覆われていることもあり、面上では足跡も確認されたが、歩行している状況などは確認できなかった。

時期は、遺物の出土はないものの、周辺調査区での成果から鎌倉時代前半頃に相当すると考えられる。

第1層出土遺物

第1層からの出土遺物はない。

第2面 (図249)

第1層の砂質シルトを除去し検出されるのが、灰色砂混じり粘質シルトを作土とする第2面である。第2面では第1面同様、南北方向の畦畔が検出された。面の高さは、T.P.+9.73~9.78mで、南が高く北が低い。また、畦畔を挟んでは東が若干高い。第2面に伴う遺物は出土していない。

遺構

第1面畦畔1の下で、畦畔2が検出された。第1面の畦畔の位置と比べ若干東にずれるので、第1面の擬似畦畔ではなく、第2面に伴う遺構であると考えられる。畦畔の幅は50cm強、高さは7cm以下で、北にいくにつれ不明瞭になる。

時期は、第1面や周辺調査区の成果から平安時代と考えられる。

第2層出土遺物

第2層中からは図化できないものの、若干の遺物が出土している。しかし、土師器の皿や甕の小片6点のみで時期が特定できるような資料はない。

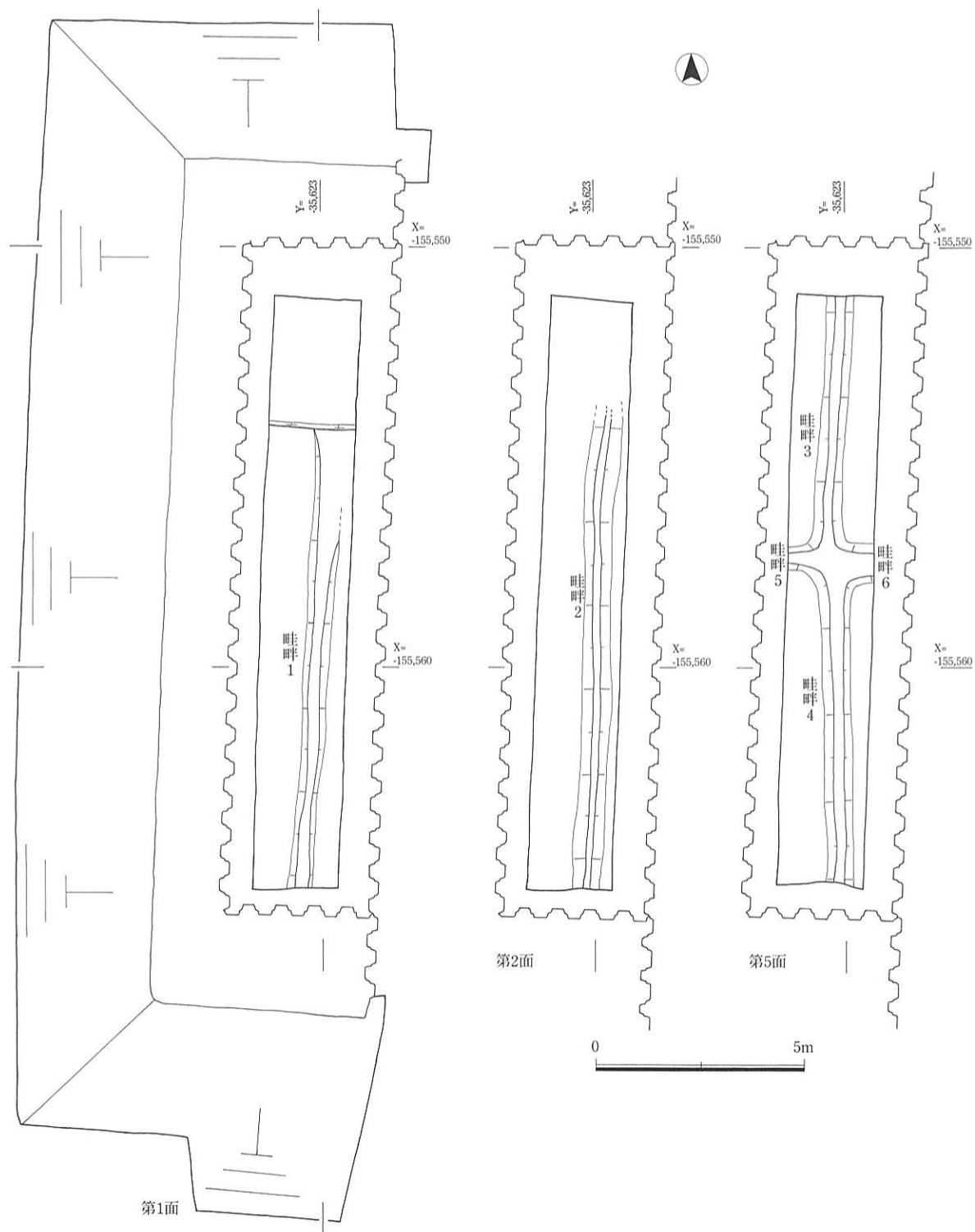


图249 6A区第1・2・5面

第3面

第2層の砂混じり粘質シルトを除去し検出されるのが、やや砂質で、土壌化の度合いが弱い灰色砂質シルトを作土とする第3面である。当面では顕著な遺構は検出されなかった。面の高さはT.P.+9.60～9.65mで、中央部に若干高い部分があるが、全体的にはほぼ平坦である。第3面に伴う遺物は出土していない。

時期は周辺調査区の成果から平安時代と考えられる。

第3層出土遺物

第3層中からは図化できないものの計20点の遺物が出土している。土師器の皿や甕と思われる破片、須恵器大甕などの小片が出土している他、製塩土器と思われる土器片も出土している。

第4面

第3層の砂混じり砂質シルトの作土層を除去し検出されるのが、ベース面である第4面である。第4層中には不安定な土壌化層を内包するが、基本的には土壌化していない細～極粗砂により構成される。当面では顕著な遺構は検出されなかった。面の高さは、T.P.+9.50～9.56mで、南が高く北が低い。第4面に伴う遺物は出土していない。

時期はこの面が第3面のベース面である性格から、第3面同様平安時代と考えられる。

第4層出土遺物

第4層中からは図化できないものの、外面に格子目タタキ痕を有する須恵器甕の小片、二次焼成を受けたものを含む土師器小片の計3点が出土しているのみである。

第5面（図249）

第4層の砂層を除去し検出されるのが、灰色もしくは青灰色の砂混じり粘質シルトやシルト質粘土を作土とする第5面である。当面では上層に洪水砂層が堆積していることもあり、極めて良好に条里制に伴う水田畦畔が検出された。面の高さはT.P.+9.26～9.33mで、南西がやや低い。なお、第5面に伴う遺物は出土していない。

遺構

南北方向の畦畔（畦畔3・4）、東西方向の畦畔（畦畔5・6）が検出された。畦畔3は、幅約70cm、高さ3～5cmで、第1面や第2面の畦畔同様、座標北から東へやや傾く。畦畔4は、幅約70cm、高さ4～8cmで、畦畔3とは異なりほぼ南北方向である。畦畔5は、幅約50cm、高さ5～8cm、畦畔6は、幅約80cm、高さ約5cmで、両者はほぼ東西方向である。ただし、畦畔5・6は調査区内で一部検出されたのみであり、調査区外では幅などが変化している可能性も考えられる。

時期は、遺物の出土が皆無であり時期比定は困難であるが、周辺調査区の成果から奈良時代に遡る可能性がある。

第5層出土遺物

第5層からの出土遺物はない。

第6面 (図250)

第5層は基本的に第5面検出畦畔5・6以北にのみ存在する層であり、一部この東西方向畦畔を越えて南側でも見られる。この第5層を除去し検出されるのが第6面であるが、南半については第5面と同一面である。南北・東西方向の畦畔が検出された。面の高さはT.P.+9.16～9.29mで、畦畔8を境に北側が低い。なお、その北側においても南から北側に向かって下がる。第6面に伴う遺物は出土していない。

遺構

第5面畦畔5・6下で、畦畔8が検出された。幅は、80～90cmで、高さは5～7cmである。この畦畔は上面の畦畔同様、ほぼ東西方向である。第5面畦畔4下では畦畔7が検出されたが、第5層の堆積は一部であり、堆積が見られないX=-155,561以南については第5面と同一面である。

時期は、遺物の出土はないものの、周辺調査区成果および第5面の推定時期から奈良時代の可能性が考えられる。

第6層出土遺物

第6層中からの遺物の出土はない。

第7面

第6層の砂混じりシルト質粘土を除去し検出されるのが、青灰色でわずかに砂が混じる粘土の土壤化層上面の第7面である。第6層との比較においてやや土壤化の度合いが低く、砂もあまり含まない。面の高さはT.P.+9.07～9.18mで、南が高く北が低い。顕著な遺構は確認されず、遺物も出土していない。

時期は遺物の出土はないものの、周辺調査区での成果から奈良時代もしくはそれ以前の可能性が考えられる。後述する第9面が条里型水田以前であることから、条里制施工前後であろう。

第7層出土遺物

第7層からの出土遺物はない。

第8面

第7層の砂混じり粘土を除去し検出されるのが、灰色砂混じりシルトで構成されるベース面である第8面である。面の高さはT.P.+8.91～9.03mで、南が高く北が低い。顕著な遺構は検出されなかった。

この層は、周辺調査区で明瞭な洪水砂層として認識されるが、当調査区では同層の側方変化と思われるシルト層であった。条里制施工以前と以後の境となる洪水堆積層に対応すると考えられる。なお、第8面に伴う遺物は出土していない。

時期は、第7面のベース面であることから、第7面の時期と同様であろう。

第8層出土遺物

第8層中からの遺物の出土はない。

第9面 (図250)

第8層の砂混じりシルトを除去し検出されるのが、炭酸鉄を多く含む灰色砂混じりシルト層を作土とす

る第9面である。第9面では条里制施工以前の地形に沿う水田畦畔が良好に検出された。面の高さはT.P.+8.90~8.98mで、南が高く北が低い。この面に伴う遺物は出土していない。

遺構

地形に沿う水田畦畔が3条検出された。北側で検出された畦畔は、北東-南西方向に約2mに亘り検出され、幅約60cm、高さ約4cm。中央で検出された畦畔は、北西-南東方向に約3mに亘り検出され、幅約50cm、高さ5~7cm。南側で検出された畦畔は、北東-南西方向に約1.5mに亘り検出され、幅約50cm、高さ約3cm。

時期は、遺物からは判断しかねるが、周辺調査区の成果から古墳時代であると考えられる。

第9層出土遺物

第9層中からは、図化し得ない、時期不明の土師器小片が1点出土しているのみである。

第10面（図250）

第9層の砂混じりシルトを除去し検出されるのが、暗オリーブ灰色の砂混じりシルト層で構成される第10面である。第9層同様炭酸鉄の沈着が顕著であるが、若干土壌化の度合いが弱い。畦畔が3条検出された。面の高さはT.P.+8.74~8.90mで、南が高く北が低い。第10面に伴う遺物は出土していない。

遺構

第9面で検出された3条の各畦畔の直下で同様の畦畔が検出された。これらの畦畔は第9面との関係において、殆ど直下であるので、擬似畦畔と考えられる。なお、各畦畔についてとりあえず記述しておく、北側の畦畔は幅約70cm、高さ約6cm、中央の畦畔は幅約55cm、高さ約3cm、南側の畦畔は幅約55cm、高さ2~5cmである。

なお、第10面検出時に畦畔上で2本の杭を検出した（図250●）。それぞれ残存長15cmと25cmである。ただし、第10面は第9面の擬似畦畔が検出されているのみであることから、これらの杭が当面に伴う可能性は低く、上面の第9面段階の畦畔に伴うものである可能性が高いと考えられる。

時期は、擬似畦畔面と考えられ旧地表面ではないかもしれないが、層位が不明瞭ながらも須恵器の出土が見られることや周辺の調査成果から、第10面は古墳時代の範疇に収まるものと考えられる。

第10層出土遺物

第10層中からは、図化不可能な弥生土器の甕の小片や外面を削る弥生土器もしくは土師器の小片2点、および自然木が出土しているのみである。なお、正確な層位は不明であるが、排水用の側溝を掘削した際、第10~14層の範囲内で須恵器が出土している。

第11面（図250）

第10層の砂混じりシルト層を除去し検出されるのが灰色砂混じりシルトを作土とする第11面である。第11層はやや赤味を呈する。面の高さはT.P.+8.60~8.68mで、南が高く北が低い。畦畔が1条検出された他、面の直上では木片の出土も見られた。

遺構と遺物

調査区北側で東北東~西南西方向の畦畔が検出された。幅約110cm、高さ5~7cmと幅広であることが

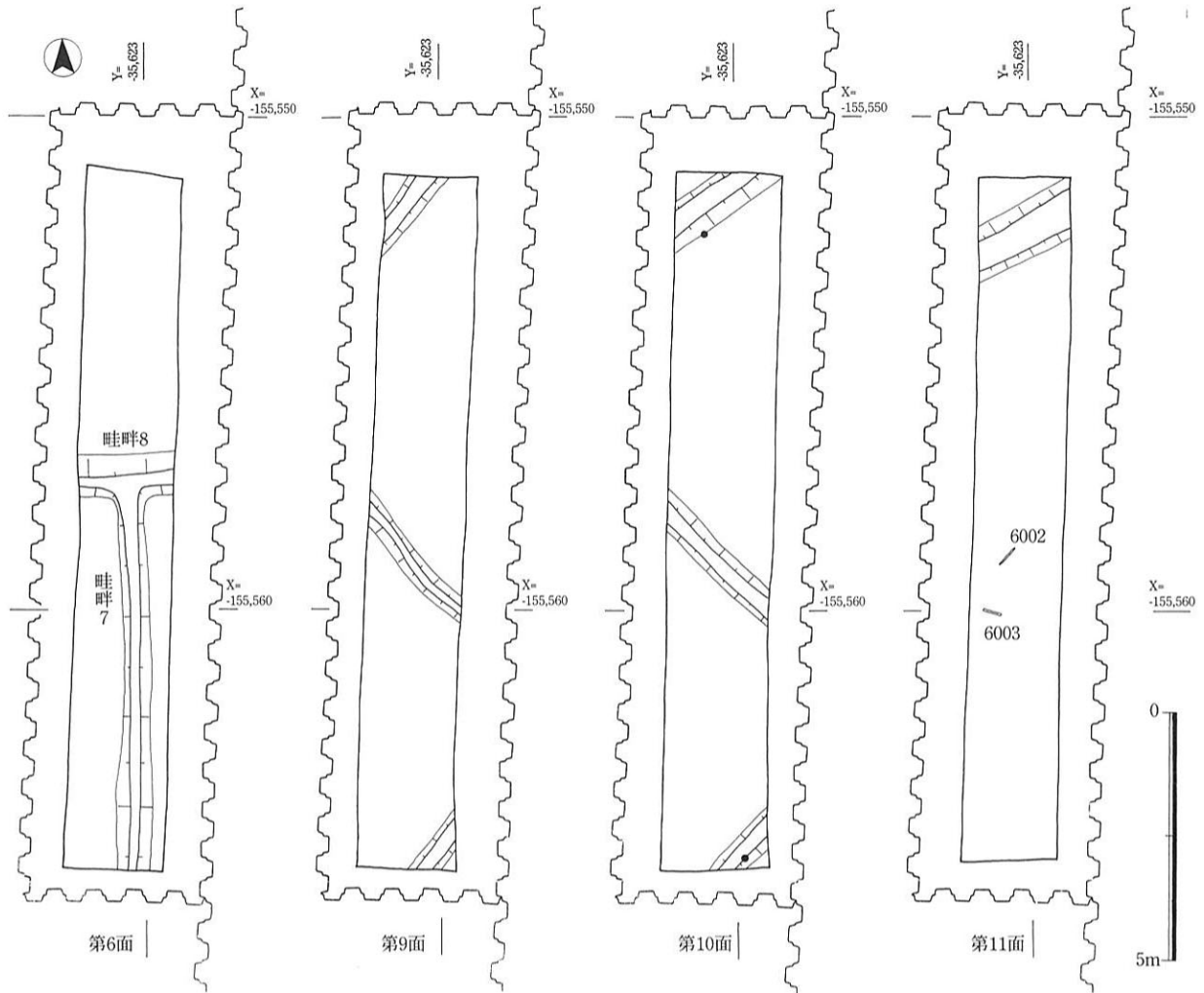


図250 6 A区第6・9・10・11面

ら大畦畔の可能性も考えられる。畦畔の位置は第9面や第10面で検出された北側畦畔の位置に類似するが、その傾きが異なる。また、第11層の赤みを帯びる層が見られるのが畦畔の肩部までであり、畦畔の最上部では見られない。このことから、畦畔の最上部は本来の高さではないと思われ、本来は現状よりも高かったと考えられる。このことから、この畦畔が大畦畔であったと推定する傍証となろう。

第11面上からは加工痕の見られる木製品が2点出土している（図251）。6002は、棒状であり、杭の可能性が考えられる。材質はアカガシ亜属。6003は、板状に加工されており、何らかの部材であろうか。材質はヒノキ。いずれについても明確な用途は不明である。

時期は、周辺調査区とのレベルから古墳時代に相当する可能性が高い。

第11層出土遺物

第11層からの遺物の出土はない。

第12面（図252）

第11層の砂混じりシルトの土壌化層を除去し検出されるのが、灰色細砂混じりシルト層で構成されるベース面の第12面である。面の高さは T.P. +8.54~8.61m で、南東が高く北西が低い。

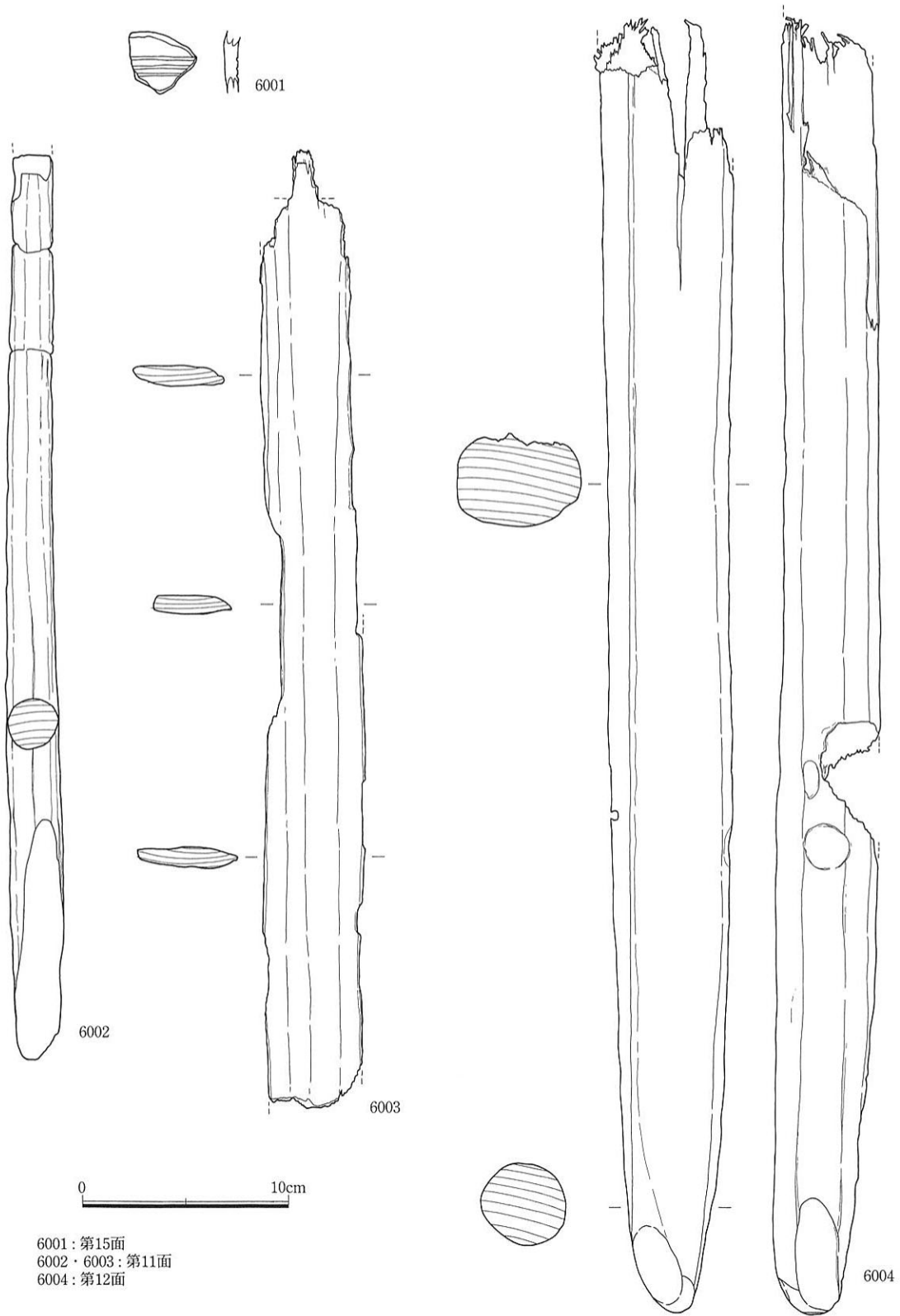


図251 6A区出土土器・木器

遺構

顕著な遺構は検出されていない。ただし、第11面で畦畔が検出された直下から棒状の木片が出土した。木片は長さ約150cmで、径は3cm程度であった。出土した時点で既にぼろぼろであり、加工痕の有無の詳細な観察はできず、取り上げもできなかった。現地で見ただけでは明瞭な加工痕は確認できなかった。この木片は畦畔の補強材、もしくは畦畔構築の際の目印などの可能性が考えられる。また、横倒しになった杭（図251・6004）が1本検出されたが、その打設の意図については、この杭に伴うような遺構の検出が見られないことから不明である。なお材質はスギである。これ以外にも2本の杭が検出された。

時期は、当面が第11面のベース面と考えられるので、時期も第11面と同じと考えられる。

第12層出土遺物

第12層からは図化できないものの、胎土がわりあい精良な土師器と考えられる小片が1点出土している。

第13面

ベース層である第12層の灰色細砂混じりシルトを除去し検出されるのが、灰色砂混じりシルト層で構成される土壌化層上面の第13面である。面の高さは、T.P.+8.39～8.51mで、南西が高く北東が低い。この面に伴う遺構の検出はないが、杭が1本検出されている。

時期は、第13層中からサヌカイト石核が出土していることから弥生時代の可能性が考えられる。

第13層出土遺物（図254）

第13層中からはサヌカイト石核（6005）が出土している。

第14面

土壌化層である第13層を除去して検出されるのが、粗砂混じりシルト層で構成されるベース層上面の第14面である。面の高さはT.P.+8.29～8.41mで、北が高く南が低い。顕著な遺構は検出されなかった。

この面に伴う遺物は出土していない。

時期は、第13・14層の遺物から考えると弥生時代の可能性が考えられる。

第14層出土遺物（図254）

弥生土器と思われる土器の細片が1片とサヌカイト剥片2点（6006・6007）が出土している。6007は側縁部に二次調整を施す。

第15面（図252）

第14層の洪水堆積層にバックされた非常に明瞭な黒色土壌化層の上面である。極細砂混じりシルトを土としている。この面で水田畦畔を検出した。T.P.+8.04～8.20m。北が低く南が高い。

遺構と遺物

調査区中央からやや南側で東西方向の畦畔を検出した。畦畔の幅は基底部分で約50cm、高さは5～7cm。この畦畔を境に北側の水田が低く南側の水田が高い。

第15面精査中に弥生土器の破片（6001）が1片出土した。甕の口縁部分と思われ、3条の沈線が巡る。

弥生時代前期。

時期については、面に伴う土器は弥生土器の破片1点のみの出土であり、時期決定の根拠としては脆弱だが、この1点を評価するならば弥生時代前期かと思われる。なお、強く黒色を呈する層の特徴から弥生時代であることは確かであろう。

第15層出土遺物

第15面精査中には上記の弥生土器の破片が出土した他に、第15層中からの遺物の出土はない。

第16面 (図252)

第15層の黒色土壌化層を除去して検出されるのが、黒色土壌化層のベースとなる第16面で、暗青灰色極細砂混じりシルト層で構成される。第16面ではピットが1基検出された。面の高さはT.P.+7.88~8.02mで、北が低く南が高い。この面に伴う遺物は出土していない。

遺構

調査区南西隅でピット9が検出された。直径約32cmの円形で、深さ10cm。第15層を除去していく過程でピットの輪郭が見えていたので、第15層のある段階からの掘り込みと理解できる、第15層下面遺構である。時期は、当面が第15面のベース面と考えられるので、第15面と同じ弥生時代(前期?)に掘削

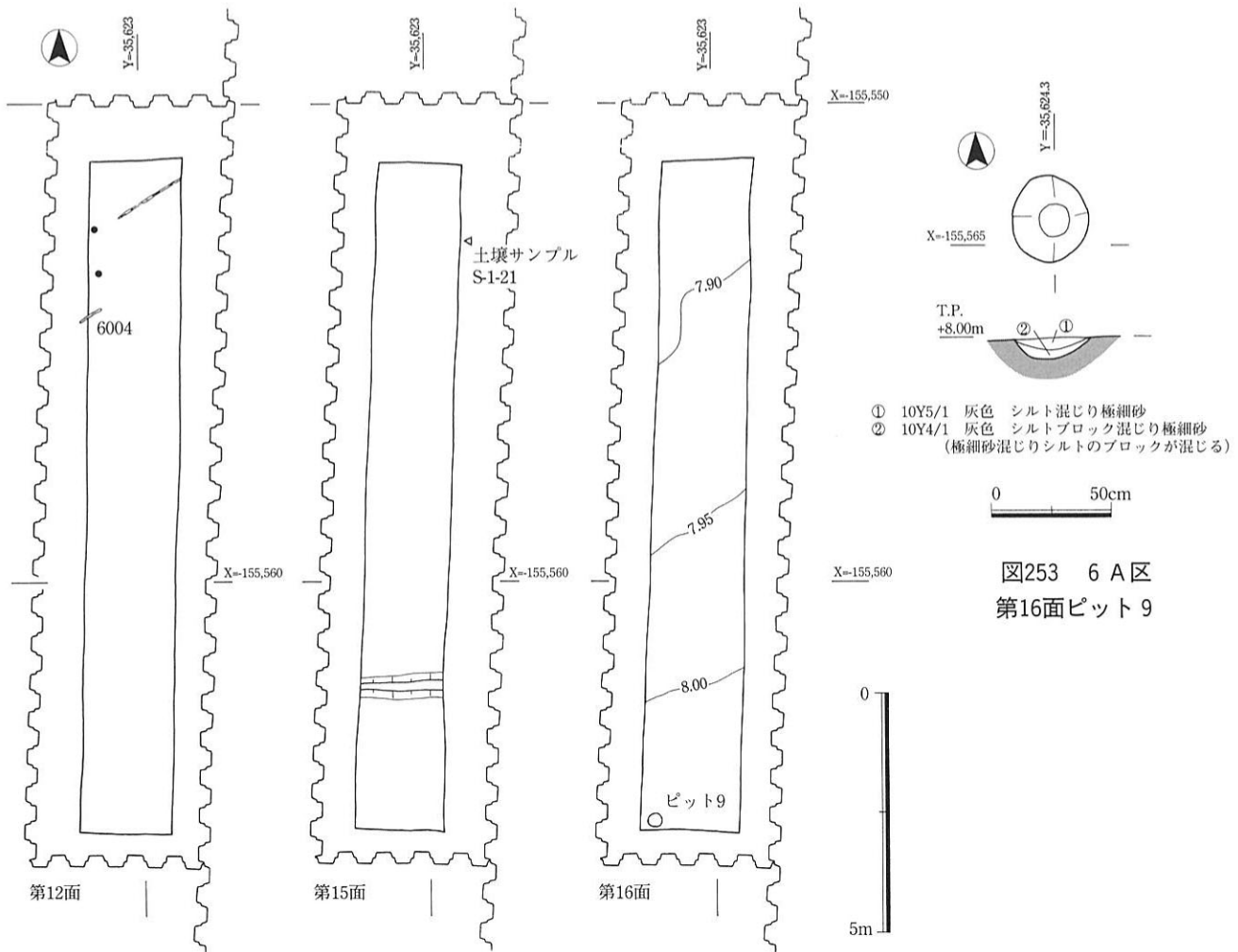


図252 6A区第12・15・16面

図253 6A区
第16面ピット9

された可能性が考えられる。

第16層出土遺物

第16層からの出土遺物はなし。

第17面

第16層の極細砂混じりシルトを除去し検出されるのが、明瞭な黒色土壌化層上面の第17面である。オリブ黒色砂混じりシルト層で構成される。面の高さはT.P.+7.81~7.94mで、北が低く南が高い。明瞭な遺構は確認されていない。また、この面に伴う遺物は出土していない。

時期については、遺物の出土が無く時期決定は困難だが、周辺の調査区での成果から、弥生時代前期頃に形成された黒色土壌化層である可能性が考えられる。

第17層出土遺物

第17層からの出土遺物はない。

第18面

第17層の黒色土壌化層を除去して検出されるのが、灰色極細砂混じりシルト質粘土層上面の第18面である。上層が水田作土であればそのベース層となるであろう層の上面である。面の高さはT.P.+7.76~

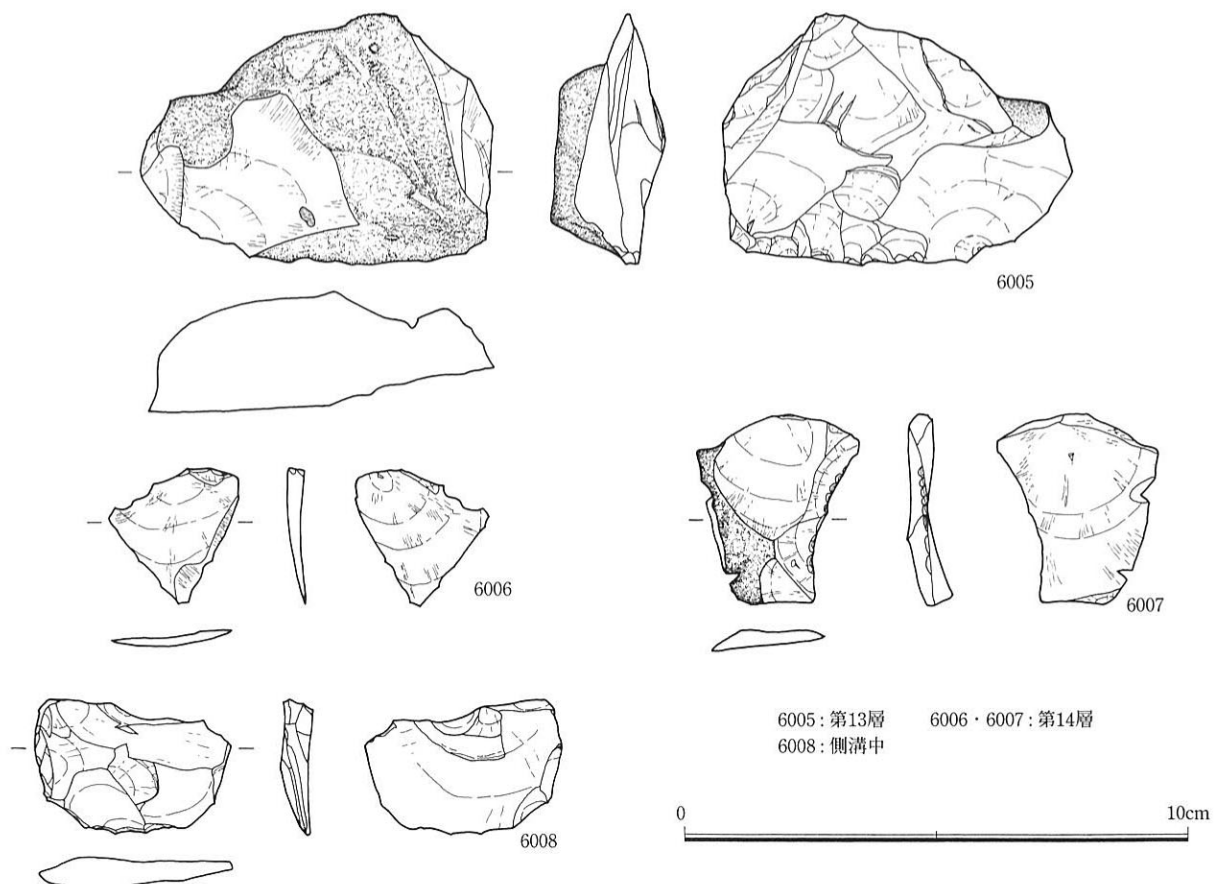


図254 6 A区出土石器

第5部 6A区の調査成果

7.90mで、北が低く南が高い。この面に伴う遺物は出土しておらず、遺構も検出されていない。

時期は上層の第17層同様、遺物の出土が無く時期決定は困難だが、第17面同様、弥生時代前期頃に堆積した層であると思われる。

第18層出土遺物

第18層からの出土遺物はない。

第19面

第18層の極細砂混じりシルト質粘土を除去して検出されるのが、明瞭な黒色土壌化層上面の第19面である。灰色砂混じりシルト質粘土層で構成される。面の高さはT.P.+7.70～7.83mで、北が低く南が高い。この面に伴う遺構・遺物ともに確認されていない。

時期は第17面同様であるが、周辺の調査成果から、縄文時代晩期～弥生時代前期に形成された土壌化層の可能性が考えられる。

第19層出土遺物

第19層からの出土遺物はない。

第20面

第19面の明瞭な黒色土壌化層を除去し検出されるのが、第19層よりも土壌化の度合いがやや鈍く黒色化した暗オリーブ灰色砂混じりシルト質粘土層上面の第20面である。第19層から第21層にかけては漸移的に土壌化がすすんでおり、土壌化の度合いによる分層である。結果、第20面は旧地表面ではない可能性も考えられる。面の高さはT.P.+7.64～7.81mで、北が低く南東がやや高い。この面に伴う遺物は出土していない。時期は第19面同様縄文時代晩期～弥生時代前期に形成された土壌化層、もしくはその一部の可能性が考えられる。

第20層出土遺物

第20層からの出土遺物はない。

第21面

第20層の極細砂混じりシルト質粘土を除去し検出されるのが、暗緑灰色シルト質粘土層上面の第21面である。面の至る所にやや黒色化した斑点や筋状の模様が見られた他、腐食した木も確認された。面の高さはT.P.+7.55～7.69mで、北が低く南が高い。

遺物の出土が無く時期決定が困難だが、周辺の調査区で上層の下面遺構という形でピットが検出されることがある縄文時代晩期とみられる面に対応すると思われる。

その他の遺物

前述した遺物以外に第6～8層の側溝中からサヌカイト剥片（図254・6008）が出土している。6008は調整剥片である。

第4章 志紀遺跡6A区第15層の花粉・植物珪酸体分析

辻本裕也・辻康男・田中義文・馬場健司

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

1. 調査目的

分析目的は、弥生時代前期の遺物が出土する6A区第15層の古環境に関する情報を得ることである。第15層は黒色の有機質に富む砂質シルトからなり、弥生時代前期の土器片やサヌカイト剥片が出土している。また、本層上面(第15面)では東西方向の畦畔が確認されており、水田の存在が確認されている。隣接する6B区や6C区でも本層に対比される層が確認されることから、志紀遺跡(その6)全体の弥生時代前期頃の古環境を捉える上で有効な堆積物と考えられている。ここでは、花粉分析と植物珪酸体分析を行い、古植生を中心に検討する。なお、志紀遺跡ではこれまでに多くの地点で発掘調査が行われ、古環境復元も多くの地点で実施されている(例えばパリノ・サーヴェイ, 1998)。これらの成果との比較検討および本遺跡の古環境変遷については、6B区・6C区の成果を含めて第8部の項で詳述する。

2. 試料

試料は、東西方向の畦畔から北へ約8mの地点の第15層から採取された1点である(サンプル1-21)。

3. 分析方法

(1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

(2) 植物珪酸体

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250KHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植

生や稲作について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の分布図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

4. 結果

(1) 花粉化石

結果を表41・図255に示す。花粉群集は草本花粉の割合が高い。木本花粉では、コナラ属アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属などが産出している。草本花粉は主にイネ科により占められており、そのほかにはカヤツリグサ科、ナデシコ科などが認められる。また、ミズアオイ属などの水生植物や、ゴキツル属などの水辺・低湿地に生育する種も認められる。

(2) 植物珪酸体

結果を表42、図256に示す。植物珪酸体の多くは保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。イネ属は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出され、その出現率はそれぞれ約4%と約18%である。また、タケ亜科とヨシ属の産出が目立つ。なお、タケ亜科は保存状態が悪いため、属レベルでの細分は困難である。他の種類ではウシクサ族(ススキ属・コブナグサ属を含む)やイチゴツナギ亜科などが検出される。樹木起源珪酸体第IIIグループ(近藤・ピアスン, 1981)や第IVグループ(近藤・ピアスン, 1981)もわずかに検出される。

5. 考察

第15層の花粉化石群集は草本花粉が卓越しており、その中ではイネ科が優占した。イネ科の種類については、植物珪酸体組成で検出されている、ヨシ属、コブナグサ属、ススキ属イネ属などが含まれていると判断される。

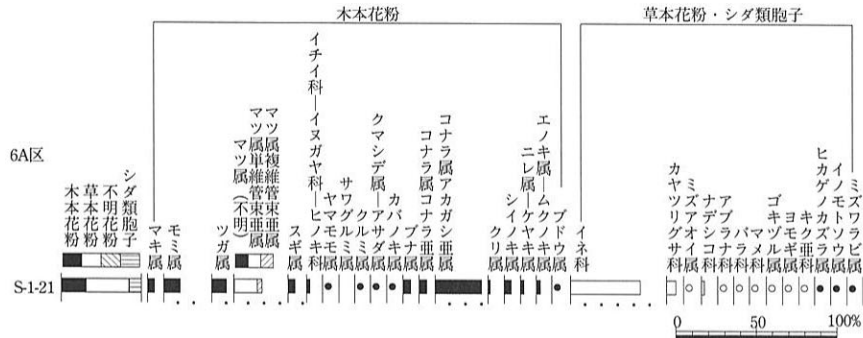
栽培種のイネ属植物珪酸体の出現率は比較的高かった。第15層上面で水田が確認されていることと調和的な結果である。植物珪酸体で検出されたウシクサ族コブナグサ属には、現在コブナグサが認められる。本種は水田の畦や野原に普通に認められる一年生草本である。ヨシ属や花粉化石で検出されたミズアオイ属・ミズワラビ属などは湿地や水深の浅い水域に分布する植物である。これらの種類は、本層の堆積期に分布していた種類の可能性があるが、水田雑草の種類でもあり、当時の水田域に分布していたものに由来する可能性もある。

表41 6A区の花分析結果

種類	試料番号	6A区 S-1 21
木本花粉		
マキ属		10
モミ属		24
ツガ属		21
マツ属単維管束亜属		1
マツ属複維管束亜属		33
マツ属(不明)		7
スギ属		10
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		5
ヤマモモ属		1
クルミ属		1
クマシデ属-アサダ属		2
カバノキ属		1
ハンノキ属		1
ブナ属		11
コナラ属コナラ亜属		11
コナラ属アカガシ亜属		67
クリ属		3
シノキ属		10
ニレ属-ケヤキ属		5
エノキ属-ムクノキ属		6
ブドウ属		1
草本花粉		
イネ科		312
カヤツリグサ科		40
ミズアオイ属		6
クワ科		1
ナデシコ科		13
アブラナ科		1
バラ科		3
マメ科		3
ゴキツル属		1
ヨモギ属		4
オナモミ属		1
キク亜科		1
不明花粉		6
シダ類胞子		
ヒカゲノカズラ属		2
イノモトソウ属		4
ミズワラビ属		3
他のシダ類胞子		99
合計		
木本花粉		231
草本花粉		386
不明花粉		6
シダ類胞子		108
総計(不明を除く)		725

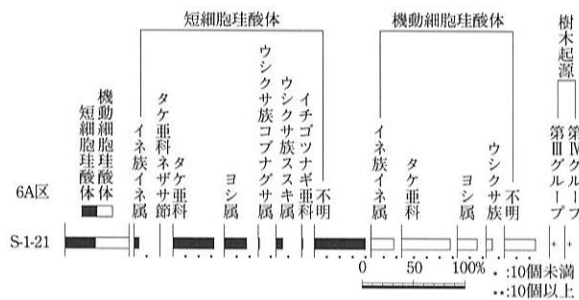
表42 6A区の植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	6A区 S-1 21
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ族イネ属		9
タケ亜科		73
ヨシ属		40
ウシクサ族コブナグサ属		2
ウシクサ族ススキ属		12
イチゴツナギ亜科		2
不明キビ型		48
不明ヒゲシバ型		23
不明ダンチク型		19
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
イネ族イネ属		45
タケ亜科		96
ヨシ属		39
ウシクサ族		12
不明		62
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体		228
イネ科葉身機動細胞珪酸体		254
総計		482
樹木起源		
第IIIグループ		2
第IVグループ		6



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

図255 主要花粉化石群集



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+は各珪酸体で100個未満の試料より検出された種類を示す。また、組織片や樹木起源珪酸体の産状を検出個数により+の記号で示す。

図256 植物珪酸体群集と組織片の産状

また、植物珪酸体で多産したタケ亜科は、後述する6B区の成果を見る限り氾濫堆積物において出現率が高くなる傾向があり、調査地点近辺に分布していたかは判断できない。おそらく後背地域から碎屑物とともに搬入されたものと考えられる。なお、ススキ属には、水湿地に生育するオギや高燥な場所に生育するススキが含まれる。

一方、木本花粉組成では、暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要素であるアカガシ亜属が多産した。モミ属・ツガ属・スギ属などの温帯性針葉樹要素も多産した。このほか、ニレ属ーケヤキ属・エノキ属ームクノキ属などの落葉広葉樹の種類も認められた。これらの樹種が、当時の植生を構成する要素であったとみられるが、少なくとも調査地点近辺には森林と呼べる林分は成立していなかったとみられる。

以上、花粉化石・植物珪酸体の産状、堆積物の状況からみて、当時の調査地点周辺はヨシ属などのイネ科植物が分布する、比較的安定した湿地であったと見られる。ただし、水深のある水域に生育する水生植物の種類が認められないことを考慮すると、常に冠水している場所ではなかった可能性が高い。このような環境下において、水田が構築されたことが発掘調査から明らかとなっており、栽培種のイネ属の多産は、そのことを裏づける結果といえる。

引用文献

パリオ・サーヴェイ株式会社 (1998) 志紀遺跡(その4)における土地利用状況に関する検討。「志紀遺跡(その4)一大阪府営志紀住宅建替え事業に伴う発掘調査報告書」, p.50-65, 財団法人 大阪府文化財調査研究センター。

第5章 小結

はじめに述べたように、6A区は今回の調査で、同時に行った6B区、6C区に先行する試掘的な意味で、できうる限りの遺構面を検出した。そのため、21面もの数多い遺構面を検出する事となった。しかし、6A区は調査面積が狭かったこともあり、遺物や遺構はあまり検出されなかった。面の時期を決定するにも、遺物が出土せず、周辺の調査区の調査成果をもとに考えざるを得なかった。

調査成果として、鎌倉時代から弥生時代にかけての生産跡である水田遺構をおもに検出した。以下に調査成果をまとめる。

条里型水田

条里制施工に伴う水田がいつ出現するかは、それぞれの遺跡によって異なるが、志紀遺跡ではおおむね9世紀頃からということが従前の調査で判明していた。ところが前年度の調査区5区で、その時期が奈良時代にまで遡る可能性が出てきたのである。本調査区では条里型の水田は第1面～第6面で検出された。それぞれの時期は、第1面が鎌倉時代初頭前後、第2面～第4面が平安時代、第5・6面が奈良時代である。第5・6面を奈良時代に比定してはいるが、遺物が出土していないため、近接する5区や6B区の調査成果をもとにその可能性を示したにすぎない。そのため、6A区では条里型水田の開始時期を明確に奈良時代ということは出来ないが、その可能性を指摘しておきたい。

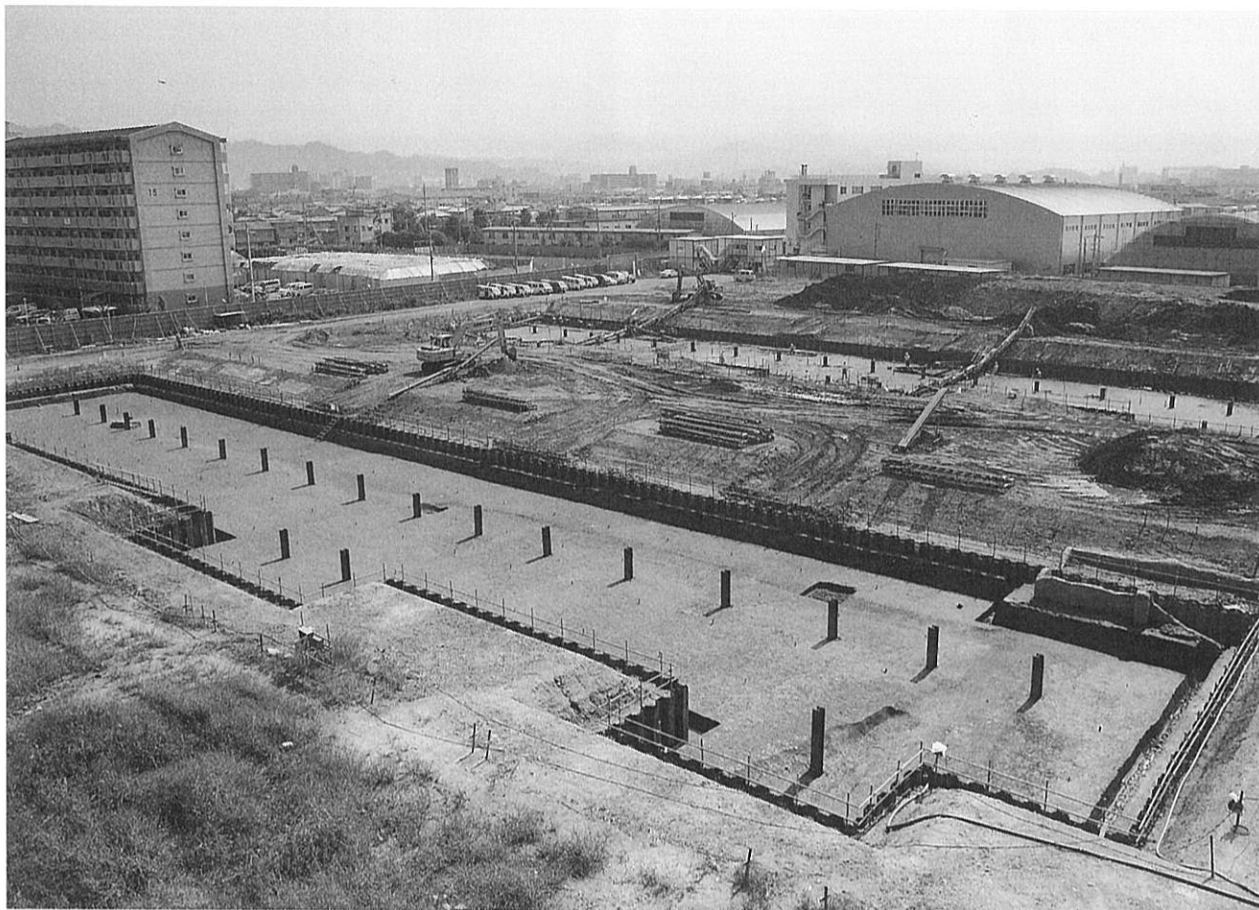
小区画水田

条里型水田が築かれる以前の小区画水田に伴う畦畔が第9面～第15面で検出された。第9面～第11面では、北東－南西方向を軸とする畦畔と北西－南東方向を軸とする畦畔が検出されている。特に第11面では、その規模からして大畦畔と考えられる畦畔が検出された。また、その直下から畦畔構築の際の目印と思われる木片が出土した。畦畔を作る際の作業の様子が窺える資料である。

第15面では、それまでの畦畔とは異なる方向を軸とする畦畔が検出された。時期は弥生時代前期。それまでの古墳時代の水田とは土地区画が異なることが分かる。しかし、弥生時代前期から古墳時代へどのような土地利用がなされていたかについては、不明である。また、古墳時代についても、検出された水田面が古墳時代のいつ頃なのかということとはよく分からない。

以上のように、6A区では各時代の水田面をおって検出することが出来た。また、畦畔が検出された面以外にも、黒色を呈する土壌化した面がいくつか検出された。それが果たして水田か否かということについてはわからないが、ある時期に地表であったことは間違いない。なんらかの人間による働きかけがあったことが想像される。

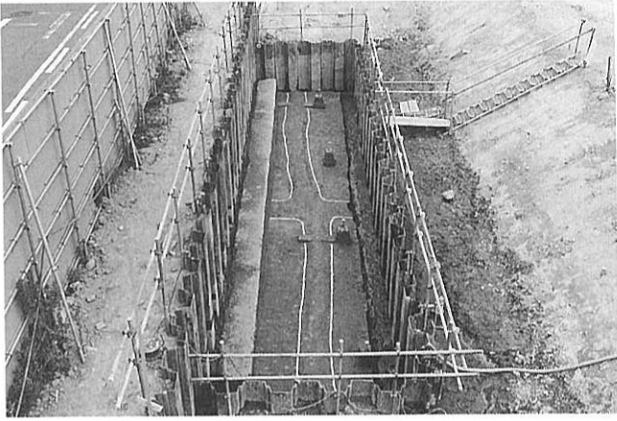
非常に狭い面積であるために、各面の詳細が判然としない面も数多くあるが、周辺の調査区と同様に、各時代の人間の営みに触れることができた。



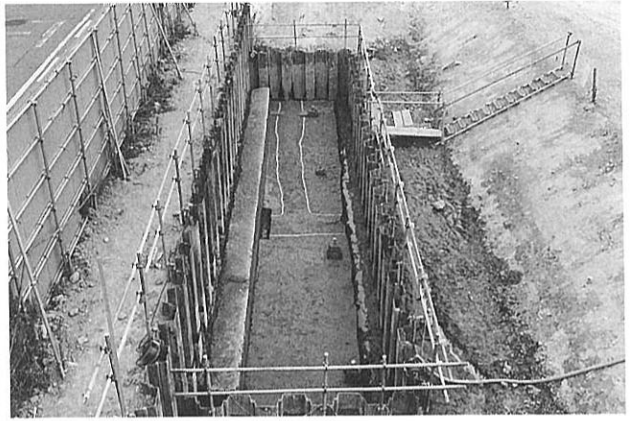
全景〔手前：6B区 第3面〕（北西から）



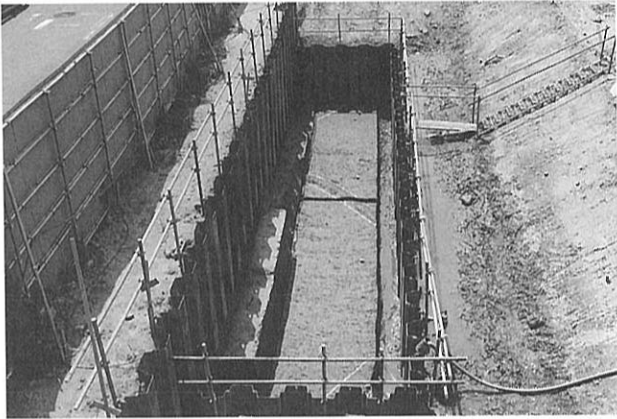
全景〔手前：6C区 第9面〕（南東から）



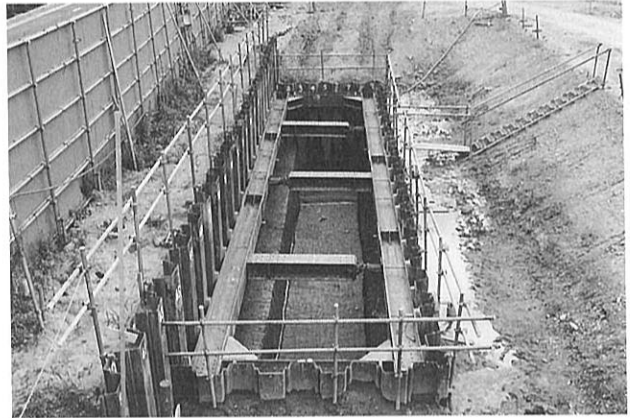
第5面 (北から)



第6面 (北から)



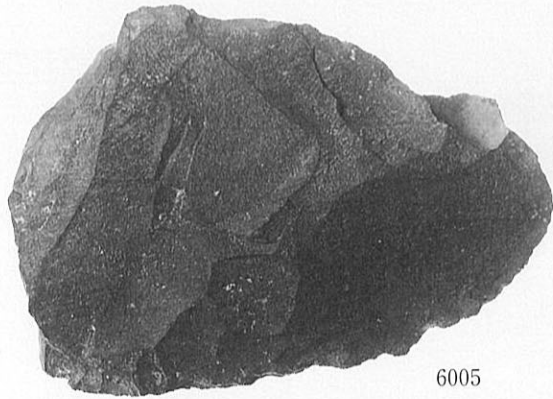
第9面 (北から)



第15面 (北から)



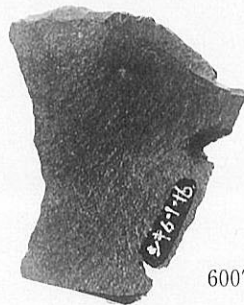
6001



6005



6006



6007

出土遺物

第6部 6B区の調査成果

第1章 調査の方法	385
第2章 層序	387
第3章 遺構と遺物	391
第4章 自然科学的分析	463
第5章 小結	473
写真図版	475

第6部 6B区の調査成果

第1章 調査の方法

基本的な調査の方法は第5部第1章と同様であるので、重複する部分については、本章では一部省略して記載する。

調査区内のグリッド

本節で記述する6B区は、第1部第3章で記した細分区画内で、北西端の「I03-SR」から南東端の「I04-YP」の範囲内である。

面と層の呼称法、遺物の取り上げ

第5部第1章の6A区と同じであるので省略する。

図面作成

面ごとの調査区全体図は、クレーン測量（第1・2・5・8・10・11・13・14面）、または地区杭を基準とした測量（第3・4・6・7・9・12面）で縮尺1/100図面を作成した。また、調査区断面図については、調査区の東側、南側、西側の3方向に矢板から約1mの幅で断面観察用のアゼを残し、1/20で作成した。他に、各種の遺構については、平面図、断面図、立面図等をその遺構に合わせて適宜1/10もしくは1/20で作成した。

遺構番号

各面で検出した遺構については、遺構の種類に関わらず、各面を通じて通し番号を付けている。遺構番号と面とはその番号において対応しないが、同一番号で別種類の遺構が存在するということはない。なお、番号を付した遺構は、坪境、条里畦畔、井戸、土坑、ピット、溝で、条里制施工以前の地形に沿う畦畔については番号を付してはいない。なお、それら畦畔の中でも大畦畔と考えられるものについては、その面の記述限りの記号を付している。基本的に、凸遺構から凹遺構の順で番号を付しているが、1面検出遺構のいくつかなど明らかに上層からの掘り込みであるものは、若い番号を付している。また、坪境は単独で坪境を形成しているものは坪境○と番号を付しているが、複数の遺構により坪境を形成して

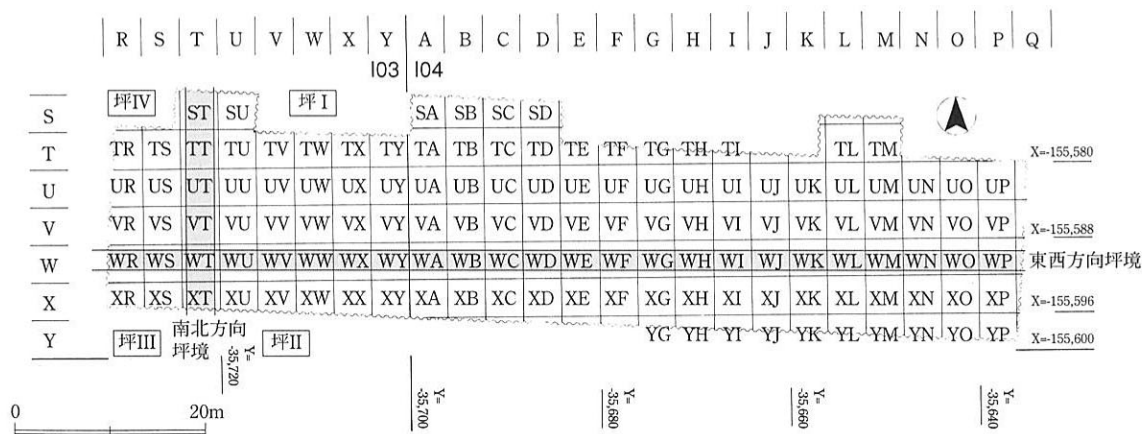


図257 6B区地区割り

いるものに関しては、それぞれの遺構に遺構番号を付し、それらをまとめて別の通し番号を付すことはしていない。その際には、上述の大畦畔同様、その面の記述限りの記号を坪境に付している。また、土坑や溝のいくつかには遺構番号を付していないものもある。

面に伴う形で出土したいくつかの遺物にも通し番号を付している。それらは、石及び骨であり、条里制施工以降の各面で出土したもののみ番号を付した。

各種分析

主要層の花粉・プラントオパール分析と、弥生時代前期以前の土壌化層の年代測定（AMS法）を行った他、第10面溝で確認された地滑り痕跡の地震考古学的分析を行った。

今回の調査が行われる前年度までに行われた周辺部の各調査によって、6B区において、まず条里の各面では、北側の5区で検出された南北方向坪境の延長、および東側の3B区南端で検出された推定東西方向坪境の延長がそれぞれ検出される可能性が考えられた。これらから、6B区ではそれら坪境およびその交差点が検出される可能性を考慮に入れ調査を行うこととした。なお、志紀遺跡一帯では宅地化が進み条里景観が残存しないが、周辺遺跡の調査では条里景観の復元が一部でなされている。ただし、本部中の条里遺構が検出された各面では各坪を通史的に呼称する際、坪境の交差点から見て、北東方向を「坪Ⅰ」、南東方向を「坪Ⅱ」、南西方向を「坪Ⅲ」、北西方向を「坪Ⅳ」と仮に呼ぶこととする（図257）。

また、弥生前期の面では北側の5区で検出された大溝の延長が検出される可能性が考えられた。これらの溝は、既に報告されているさらに北側の1区の調査成果で環濠の可能性が指摘されたもので、その延長方向、および異なる調査区で検出された各溝の繋がり、同一性が解明すべき課題としてあげられた。

他にも、東側の3区や4区で検出されている時代の面が、北側の5区では検出されない、もしくはその逆が周辺調査区成果として見られることから、当調査区の堆積環境や旧地表面のあり方が3・4区的であるのか、5区的であるのかも検討課題であった。また、現在志紀遺跡では3区でのみ検出されている、近畿地方でも最古級の水田である弥生時代前期新段階の水田の広がりはどうなのか、前期水田ほどの段階までさかのぼりうるのか等も課題となっていた。

このような大まかな調査方針のもと、以上のような調査方法で6B区の調査を行った。なお、発掘調査は、本間・市村・野口・鹿野があたりおもに市村・鹿野が担当した。また、整理作業は市村・鹿野が行ったが、遺構はおもに市村が、遺物はおもに鹿野が担当した。発掘調査および整理作業の過程では、調査補助員岩崎美紀子・松下知代・田中エミ子・辻田有美・辻田多江・奥村弥恵の協力を得た。

また現地撮影以外の写真関係業務は中部調査事務所主査片山彰一が担当し、調査補助員水取康人の協力を得た。出土遺物の保存処理等は同所主査山口誠治が担当した。

第2章 層序

6 B区の調査では、概ねT.P.+12.2~12.5mの現地表面からT.P.+10.2までの約2mを重機により掘削した。重機による掘削中、阪神大震災時仮設住宅、旧府営住宅時や旧日本陸軍施設による攪乱等が見られた。それらを除去する途中や除去した段階で、複数の土壌化層が確認できた。これらのうち最下部の層は、機械掘削段階で完全には除去していない。周辺の調査から、この層は江戸時代の作土層であると考えられる。そして、この層を除去すると、厚さ20~30cm程の洪水堆積層があらわれる。この洪水堆積層は調査区の東側ほど粗粒化する傾向がある。これらは、ほぼ同時期の複数回の洪水により堆積した砂やシルトであり、上方粗粒化の傾向も見られ、第1層との境には、シルト~極細砂が比較的安定して見られる。これが従来の調査で鎌倉時代の洪水砂層といわれているものである。この層の途中までが機械掘削で除去した層であり、以下T.P.+7.8mまで面的に人力により掘削した。図258・259に示した断面模式図はT.P.+10.2mからT.P.+7.8mまでの人力掘削による部分である。なお、T.P.+7.8mからT.P.+5.8mまで一部深掘りを行った部分があり、その層序に関しては、図334を参照されたい。

第1層は、鎌倉時代の作土層で、ややくすんだ感じの砂っぽい層であり、攪拌をよく受けている。層厚10~20cm。多くの部分は砂混じりの砂質シルト(⑤)であるが、東側では砂質度が高い部分もあり(⑥)、北東端では砂が母材となっている部分(⑦)もあり、第2層との境には粗砂~極細礫が薄く見られる。また、調査区西側では第1層が2層に細分できる部分があり、下層はやや粘質である(⑧)。なお、最下部の第2層との境には中~粗砂(⑨)やシルト~極細砂が部分的に見られ、層中にも巻きあがっていた。

第2層は、平安時代の作土層で、第1層と類似した粘質シルト~砂質シルトである(⑩)。層厚約10cm。第1層よりも粘質であるが、色調は淡い。第1層との境は凸凹している部分が多い。また、特に東壁では第3層との境や層中には極細砂が明瞭に見られた。

第3層は、平安時代の作土層で、第2層に極めて類似する粘質シルト~砂質シルトである(⑪)。層厚約10cm。東壁では第2層との分層が比較的容易であったが、調査区西側ほど第2層と類似する部分が多く、分層が困難であった。全体的には第2層に比べ土壌化の度合いが弱い。炭酸鉄をわずかに含み、第4層を巻き上げ砂質な部分も見られ、第3層の下部ほど砂質度が顕著である。なお、第3層と第2層は堆積状況が類似することから、近接した時期の類似した環境下の堆積であることが考えられる。

第4層は、平安時代の作土層で、砂混じり粘質シルトである(⑫)。層厚10~20cm。東側では全体的によく攪拌されており、砂を多く含み第3層との質の差が比較的明瞭であるが、西に向かい分層は困難になった。ただし、全体的に第3層より土壌化の度合いが強く、炭酸鉄を多く含む。東壁の坪境以北では第5層との境に細砂~粗砂が見られた(⑬)。この層も、東壁で南側ほど粒度が細かくなり全体的に土壌化が見られるようになり、坪境以南ではほとんど見られない。なお、第4層から第8層までの各層は、南側断面の西半分が調査途中で大きく崩落したため実測図を作成し得ていない。

第5層は、奈良時代~平安時代と思われる作土層で、調査区東半の東西方向坪境以北にのみ存在する。層厚は10~15cmで、砂混じり砂質シルト(⑭)。北東方向に近接する6 A区の第4層中で見られた土壌化層に対応すると思われる。第6層との境には極細~粗砂が見られ(⑮)、南側に向かい粒度が細くなる。層厚は全体的に薄いですが、基本的に上方粗粒化の傾向が見られ、第6面直上に見られる層は、極細

砂混じりのシルトである。

第6層は、奈良時代～平安時代と思われる作土層で、砂質シルトである(20)。層厚10～40cm。層中には炭酸鉄を多く含む。第6層は、東壁で層厚が40cm程あり、層中には非土壌化層の砂質シルト層(21)、さらに下層の土壌化層で第6層上半より土壌化の度合いが強い砂質シルト層(22)が見られた。南壁東半では、第6層中の非土壌化層である21は見られないものの、第6層が20と22の2層に細分できた部分が見られた。これらの層の境はひじょうに凸凹していた。ただし、西側に行くほど20・22両層の分層は困難で、質はさほど異ならず、色調がやや異なる程度であった。このことから、本来第6層は複数の地表面を含む層と思われるが、調査区全域的な分層が困難であったため断面の観察のみに留めた。また、第6層堆積段階から第4層堆積段階までは特に東壁で顕著に見られるように、比較的粒度の粗い砂が堆積するような洪水が頻発した時期と思われる。洪水は、調査区全域を覆うレベルではないが、常に東方向から供給され、第6層から第4層に向かい、徐々に堆積物が粗粒化して行く傾向が窺えた。

第7層は、第6層のベース層で、粘質シルト層である(23～25)。層厚10～20cm。これらの各層は、若干色調が異なる程度で、基本的に同質の層である。当初、この層が従来の調査で検出されている古墳時代後期の洪水堆積層であると考えていた。しかし、この層の上面(第7面)で条里に沿わない溝が検出されていることから、第6層中には古墳時代後期～飛鳥時代の遺構面をも含む可能性が考えられる。結果、第7層は4区で確認された古墳時代5世紀後半頃の洪水堆積層に対応する可能性も考えられる。しかし、志紀遺跡全体で見られる洪水の規模からは第7層が従来の古墳時代後期の洪水砂層に対応する可能性が高い。そうであれば、第7面で検出された溝は古墳時代以降条里以前の掘削となり、志紀遺跡における条里制施工時期の問題にも重要な位置を占める。詳しくは、本文中で述べることとする。

第8層は、古墳時代の作土層で、基本的に砂質シルトであるが粗砂や極粗砂を含む部分も見られる(27)。層厚10～30cm。全体的に強く土壌化し、攪拌をよく受けているが、第8層中に含む砂については6B区内各調査地点の下層第9層の層相の差による。なお、一部では上部にやや土壌化の弱い層も見られた(26)。

第9層は、第8層のベース層で、大きく3層に細分された。層厚10～40cm。上層は粘質シルト(31)で、中層は粗砂～極粗砂混じり砂質シルト・粘質シルトで弱く土壌化している(32)。下層は、基本的に上方粗粒化するシルト～極粗砂(33～39)である。下層でも最下部の第10層との境にほぼ調査区全域に見られる各層(34・36～39)は、粒度が細かいシルト～極細砂である。この層の堆積後さほど時間をおかず、第10面を一部挟りながら、粒度の粗い各層(33・35)が堆積している。この上部の土壌化した部分が中層(32)で、一部で弥生時代中期後半の遺構が検出されている。さらにその後粒度の細かい上層(31)が堆積している。ただし、部分的には上層が存在せずに中層が第8層の母材となっている部分があり、その部分は第8層に砂を多く含む砂質である。

第10層は、弥生時代前期後半～中期初頭の作土層で、2層に細分可能である。層厚10～20cm。上層は、第10面の廃絶段階には埋没しているものの、その途中段階に存在した溝を埋めた、下層各層のブロックが入る層で、溝がある付近にのみ存在するシルト～粘土ブロック混じり砂質シルト(40)。下層は、砂質シルト(73)でこの層上面が溝が機能していた段階の地表面である。その他、一部では土壌化の弱い部分も見られた(74)。なお、68～72の各層は、東壁のみで確認された溝の埋土であり、最上部は、第10面の最終的景観時においては地表面であった。この溝は断面でのみ確認でき、調査区では検出されなかった溝である。他の溝も含め、詳しくは第10面の項で述べるが、各溝では地震による地滑り痕跡が確

認された。

第11層は、弥生時代前期の作土層で、砂質シルトである(75)。層厚5～15cm。第10層より土壌化の度合いがやや強く、砂質である。全体的に炭化物を含み、第10層よりも強く黒色を呈する。

第12層は、第11層のベース層で、2層に細分された。層厚10cm前後。上層は、上方粗粒化するシルト～極細砂(76)で、下層は極細砂混じり粘土質シルト(77)であるが、質に顕著な差はなく、基本的にはほぼ同一時期の堆積であろう。ただし、下層(77)は若干ではあるが、土壌化している。

第13層は、弥生時代前期の土壌化層の粘質シルト(78)で、層厚10～20cm。第14層との境にはやや色調の薄い同質の層が薄く存在した(79)。なお、第13層以下の各層は人為的な攪拌がほとんど見られない自然堆積層と思われ、その中の微妙な質の違いや色調の違いで分層しているものである。

第14層は、弥生時代前期の土壌化層の粘質シルト層(80)。下部はやや色調が薄い部分があり、そのまま母材である第15層に漸移的に変化する。第13層に比べ土壌化の度合いが強く、より黒色を呈する。自然堆積層の中では比較的長期間安定していたのであろう。なお、第13層と第14層は中間に見られた土壌化の弱い層により細分したが、両者の層中にも部分的に土壌化の弱い部分が他にも見られた。このことから本来は両黒色層中には複数の旧地表面を内包するものと思われる。

第15層は、第14層のベース層で、第15層以下の各細分層を総括的に名付けた層であり、深掘り部分を除いて大きく3層に細分できた。上層は極細砂混じりシルト質粘土(81)で弱く土壌化している。中層は硬質の粘土層(82)、下層は砂層(83)である。下層の砂層は、上方細粒化の傾向があり、一部ではこの砂が上層へ吹きあがる液状化現象が確認できた。その原因となった地震は上述の第10・11面間で掘削された溝で検出された地滑りを起こした地震である可能性もある。なお、この砂層は周辺の調査区で確認されている縄文時代晩期頃の洪水砂層に対応すると考えられる。中層の粘土層は、下層の砂層が徐々に上方細粒化した層、上層も同様な堆積環境にあったと考えられるが、第14層との境が不明瞭な部分があり、第14面段階の影響をわりあい受けている部分であろう。第15層中層から第11層までの各層は、類似した堆積環境にあり、基本的に粒度の細かい堆積物により各層が構成されている。この間、洪水による堆積→地表面化による安定を繰り返し、最終的にこの地での初めての積極的な大地への働きかけである第11面の弥生時代前期水田が営まれることになるのであろう。なお、深掘り掘削した部分の各層については、後述する。

以上が、6B区の基本層序である。以上の基本層序は、北接する5区の基本層序に類似する。大まかに整理すると、以下のような変遷がたどれる。縄文時代晩期頃の粒度の粗い洪水堆積物(第15層下層)が堆積した後、弥生時代前期水田(第11面)が開削されるまで粒度の粗い堆積物は見られないが、水田以前に積極的な人間の活動痕跡は見られない。この後、弥生時代中期初頭まではそれまで同様に粒度の粗い堆積物は見られず、水田が営まれる。中期のある段階に、比較的粒度の粗い堆積物が堆積する(第9層)が、その後は、古墳時代中期もしくは後期以降(第7層)まで粒度の粗い堆積物が堆積することなく、安定した土地のようである(第8面)。条里制段階になり第5面までは小規模ながら粒度の粗い堆積物が堆積する環境にあり、その後第2面まで再び粒度の細かい堆積物が堆積する環境、そして第1面段階に粒度の粗い堆積物が堆積する環境になり、鎌倉時代頃の洪水がこの地を襲う。この洪水の後、再び安定期に入るようである。

なお、志紀遺跡全体の周辺調査区との層位対応関係の想定については図405・407を参照されたい。

第3章 遺構と遺物

第0層出土遺物 (図260)

機械掘削停止面から第1面までが第0層である。第0層は、現代攪乱からの出土遺物も含むが、それらを除き出土した遺物は、弥生土器から磁器まで多様である。中でも各時代の土師器が最も多く、約半数を占める。他に陶器、瓦、瓦質土器、瓦器、須恵器が出土し、実測可能であったものを極力図化した。

6101は口禿の白磁皿で、横田・森田分類のIX-1類に対応すると思われる。13世紀中頃～14世紀初頭。6102は和泉型瓦器椀で内面の暗文は破片内で1条しか確認できない。IV-3期の所産で13世紀末。6103は大型の土師器皿で、口径11.1cm、器高2.7cm。6104～6106は小型の土師器皿で、口径8cm前後、器高1.3cm程でほぼ同形である。そのうち6104・6106は褐色系の胎土だが、6105は白色を呈する。6107は土師質土器の把手である。6108は瓦質土器の獣足。6109は平瓦で凸面には縄目タタキが、凹面は布目痕をほぼナデ消している様子が窺える。6110は加工痕のある木片である。材質はヒノキ。これらの遺物は、概ね13世紀後半～14世紀初頭を下限としており、第1面の廃絶時期を示す資料と言える。

なお、面的な調査の対象にはなっていないが、第1章で記載したように、機械掘削の際に一部残存した土壌化層が第1面上層約30cmに存在した。この土壌化層は、先行して調査を行った6A区では良好に見られなかったが、6B区では比較的良好に残存していた。その為、機械掘削当初段階では鎌倉時代の作土層に対応する可能性も考えたが、側溝を掘削したところ、さらに下層で連続する土壌化層が確認されたので、この層が鎌倉時代の作土層ではないとわかった。なお、機械掘削終了時点で、この土壌化層が一部残存していた同一レベルでは、東西方向坪境部分に砂が露出していた。この砂は、この土壌化層段階の東西坪境畦畔状高まりの芯が露出していたものと考えられる。この土壌化層の時期は遺物の出土がなく不明であるが、大阪府教育委員会による第2次・第5次調査で鎌倉時代前期の遺物包含層の上層約20cmで江戸時代の遺物包含層が確認されているので、これに該当する可能性が考えられる。

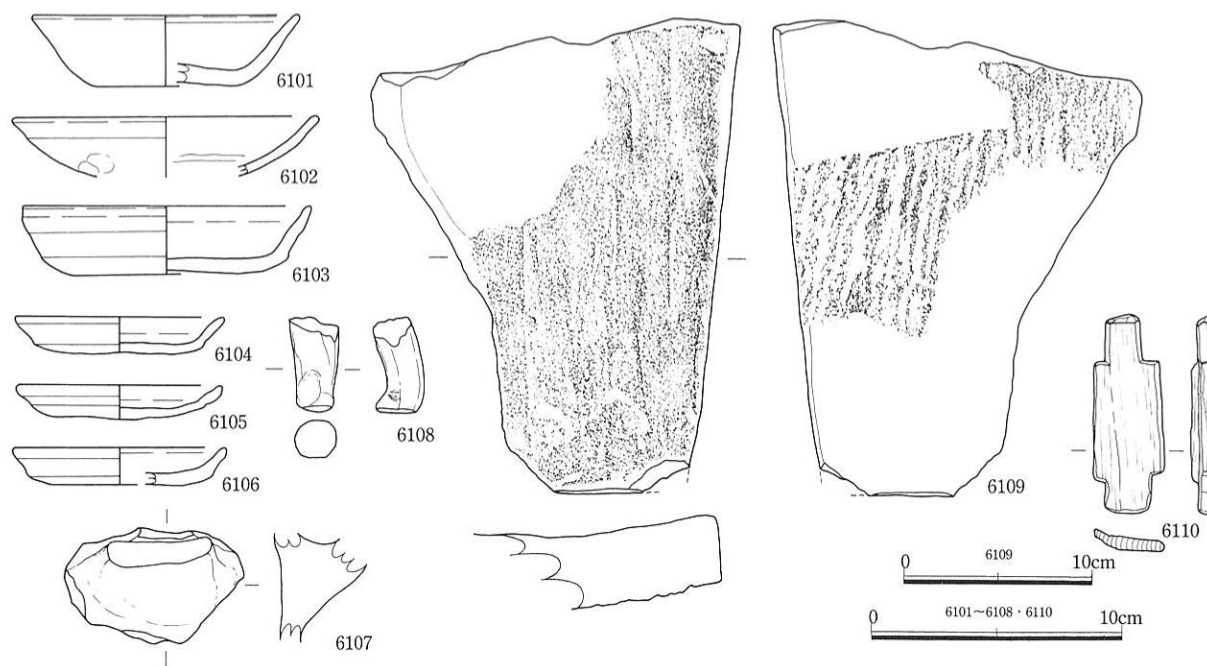


図260 6B区第0層出土遺物

第1面 (図261)

概要

機械掘削が終了した段階で、トレンチの西半には前述した土壌化層が、東半では洪水砂層が露出していた。そして、機械掘削段階で残存した前述の土壌化層や洪水堆積層を除去し検出されるのが、第1面である。面の高さは、T.P.+9.63~10.04mで、東側が高く、西側が低い。この東高西低の地形傾斜は第5面まで維持される。トレンチ東西方向の中央部 (X=-155,590ライン付近) は、洪水により抉られており、この洪水による攪乱は第4面まで及んでいた。遺構は、条里に伴う南北畦畔を14条、東西方向の畦畔を1条、坪境の段の他、前述の上層から掘り込まれた井戸、方形木枠遺構等が検出された。

第1面直上からの遺物の出土はない。

遺構

調査区西部で検出された「段」が従来の調査成果から坪境 (坪境3) と考えられる。この段は、坪境畦畔の東側の肩と考えられるが、北側では東側の段のみで、西側については南側で一部検出されているにすぎない。また、トレンチ南西端で確認されている西へのびる畦畔状の高まりであるが、これの北の境になりそうな段差も北東にゆくにつれ消滅する。また、南の境になる部分は、調査の際に掘りすぎた部分ではあるが、断面観察では直上を極細砂で覆われた南西方向への落ち込みが確認されている。なお、南側断面では坪境3の高まり部分で第1・2層間に洪水砂層が残存する。このことから坪境3の高まりのうち、少なくともその南端、つまり東西方向坪境との交差点以南が、第1・2層間の洪水砂を芯にして構築された可能性が考えられる。

東西方向中央部は洪水による攪乱が存在するが、攪乱以东では痕跡ではあるものの、坪境4が存在す

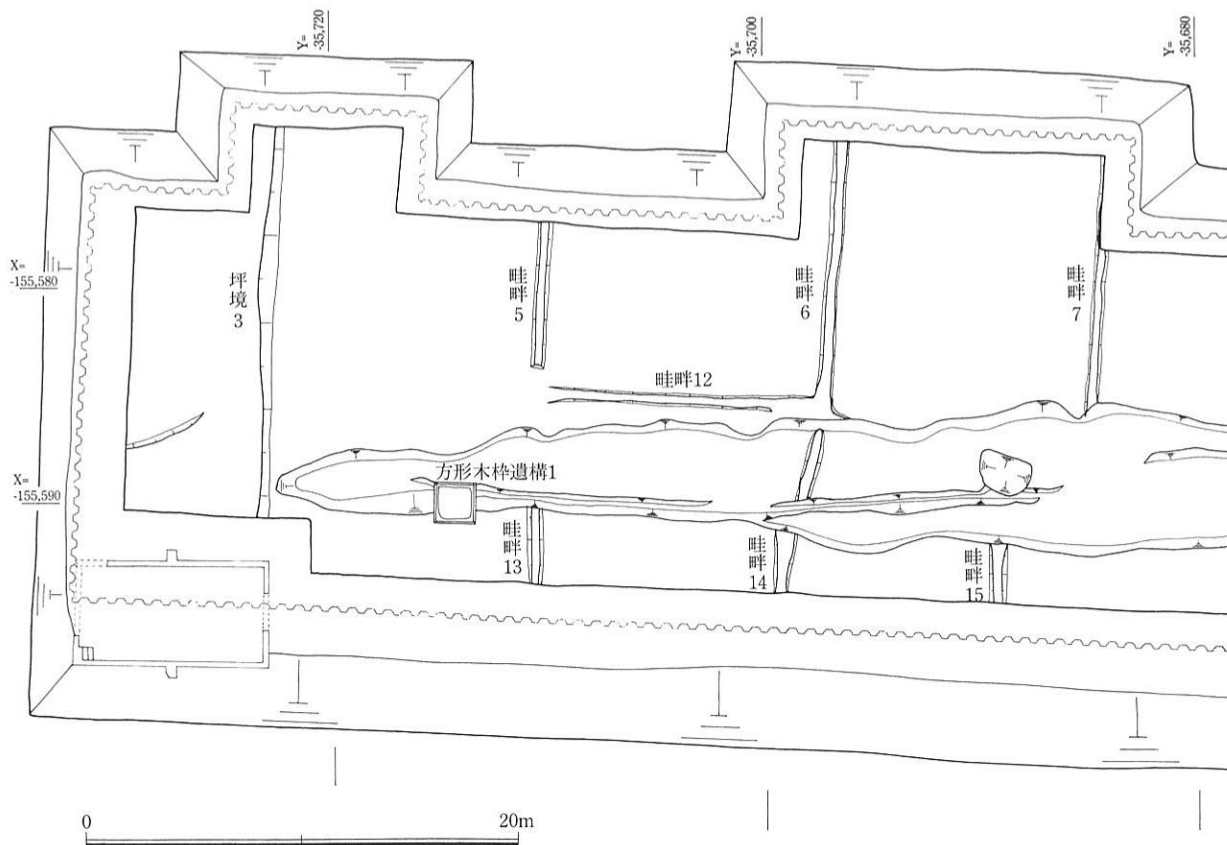
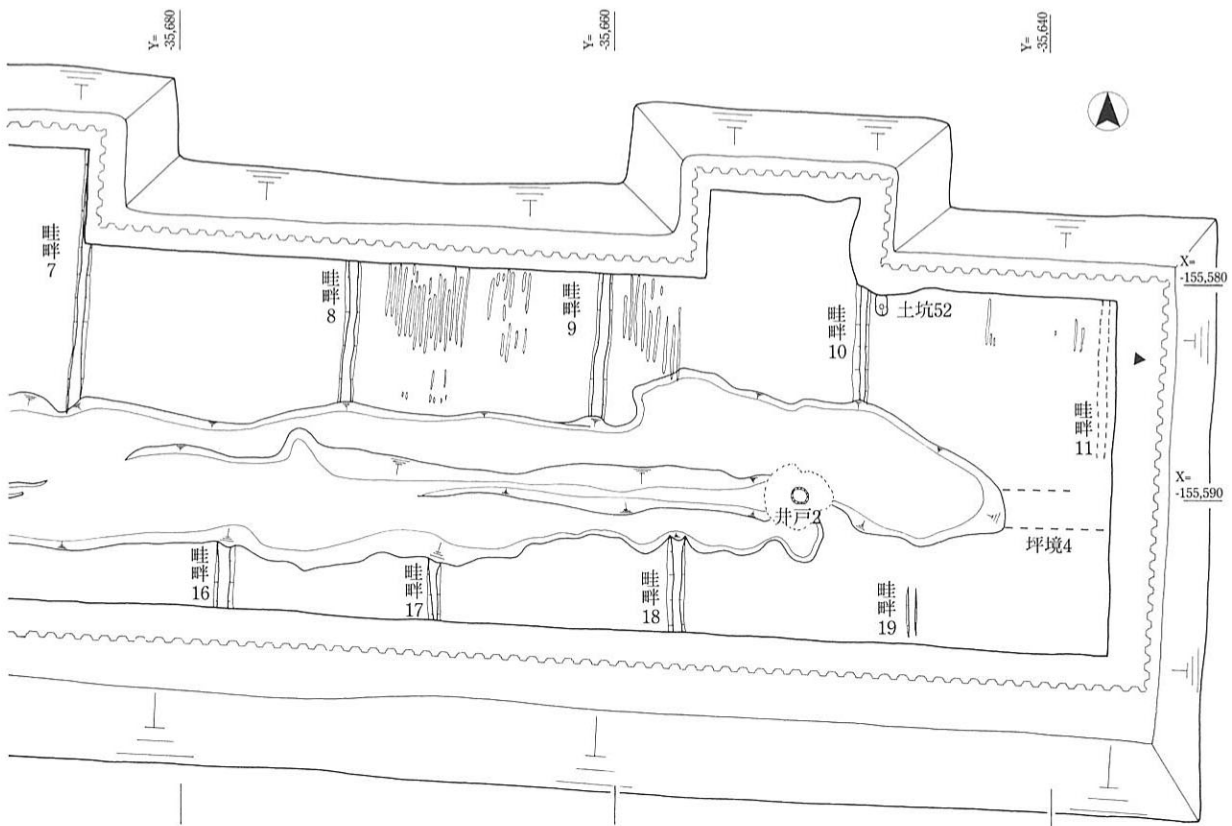


図261

る。この坪境4は第2面直上に堆積した洪水砂を芯にして構築された畦畔であることが東側断面の検討の結果わかった。洪水による破壊のために坪境4の西への延長は検出されていないが、5区や6C区の同一面とレベルを比較してみると、この坪境4にむかって落ち込んできている。これらのことから、坪境4は畦畔10以西で畦畔から溝もしくは畝畝に変わる可能性も考えられる。そして、この洪水は調査区南東端から北西方向の畦畔10に向けて襲った後、東西方向に向きを変えている。洪水の一部はそのまま北西方向の畦畔9方向に抜けているが、洪水の挟りが最も深い部分は東西方向である。この挟りは、きれいに東西方向であることからこの場所は洪水が襲った当時、相対的に低くなっていた、もしくは溝があった可能性が高いと考えられる。しかしながら、ここに溝があったとしても、坪境3東側には溝と考えられる遺構は確認されておらず、この水の抜け先が無いことになる。溝の有無がどうであれ、この坪境4もしくは坪境4付近の各水田に、北と南からの水が集まることは前述のとおり、周辺調査区のレベルの比較から確実である。水の行き場として、まず、この坪境4もしくは各水田の水が地形の傾斜により東から西に流れ、坪境3に至った後、北側に流れる可能性は低いと思われる。それは、上述したとおり坪境3の北西側では肩が検出されておらず、坪境3を境に北西側の「坪Ⅳ」が全面的に高いレベルの「坪」であった可能性も考えられるからである。そうであれば、水がやや北側に至り調査区外の北側で坪境が途切れ西側に水を回そうとしても不可能であり、どちらかといえば、水回りは逆で、坪Ⅳから坪Ⅰへ流れていたと思われる。そこで、ここでは、この水の抜け先として、あくまでも推定にしかすぎないが、坪境3の高まりが6B区のすぐ南側で終わり、今回検出した範囲内で坪境3周辺のもっとも低い「坪」である南西側の「坪Ⅲ」へ水を流していたと考えたい(図262)。

各畦畔の規模、および坪境3東側下端からそれぞれの畦畔の中心どうしの距離については、表43を参



6B区第1面

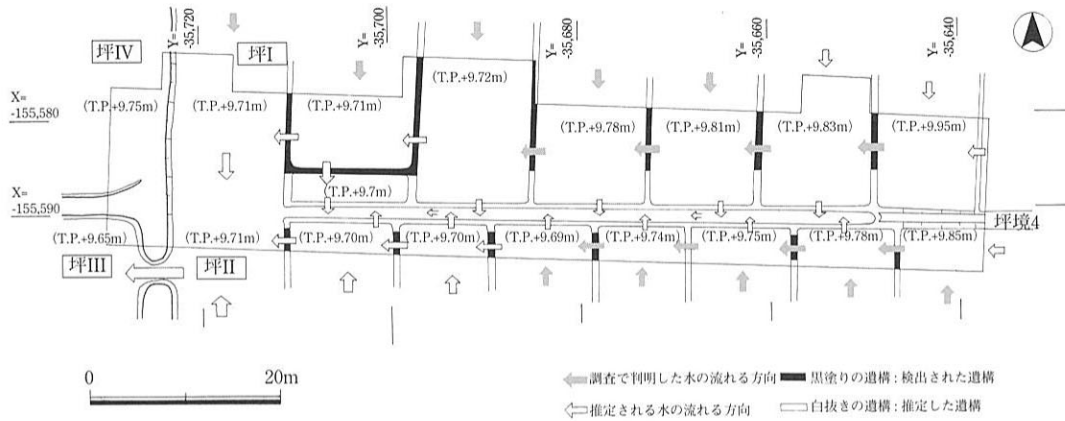


図262 6B区第1面遺構推定図

照されたい。なおこれによると、南北方向の各畦畔は、坪境4の延長である中央部東西方向の攪乱部分を挟み、坪境3からの距離が異なることがわかる。平均では攪乱北側が12.17m、南側が10.93mである。また、坪境4以北の各畦畔は5区とのつながりで見ると座標北より3度から6度ほど東へ振っている。一方、同以南の各畦畔は6C区とのつながりで見ると若干ではあるものの座標北より1度から2度ほど西へ振っている。(図263)

このように、各畦畔は坪境4および推定延長部分を境に畦畔の軸方向や畦畔間の距離が異なる。このような土地の区分状況からも、未検出であるが洪水による東西方向攪乱部分に坪境があった可能性は高く、さらにこの坪境が土地経営においても大きな区画となる坪境であった可能性が高いと考えられる。

各水田の面積は6B区内で完結する水田が皆無であるため不明であるが、形状は長地型の水田であることが周辺の調査成果からも推定される。以下において、各水田区画内で検出されている遺構について東側から詳述する。

まず、坪境4以東畦畔5・13間で北東から南西方向の、畦畔6以東畦畔10までの各区画内で、北西方向から東側方向と、やや東に振る南北方向の溝状の痕跡が計6条確認された。ほぼ垂直に掘り込んでおり、掘削深度は深いものでは第3面までおよぶ。埋土は攪拌された第0層から第3層までの各層である。遺構最下面には平面形態三角形や半円の掘り込みが2～3列見られた。これらの溝は、第1面の畦畔を破壊し、条里の方位も無視していることや、埋土の特徴から第1面以降の掘削によるものと考えられ、掘削は行わず面の掘削を進めていく中で埋土の確認等を行った。掘削時期の可能性としては、機械掘削の際確認された、第1面以前の土壌化層(江戸時代?)中からの掘削もあり得る。やや規模が異なるものの、同様の溝は1区や4区でも検出されている。

次に、坪境4以東の各区画で一部を除き南北方向の小溝およびその痕跡が確認されている。これらのうち特に明瞭に残存するのが畦畔8以東の区画である。小溝群は、埋土が中～粗砂の粗いものとシルト～極細砂の細かいものとに分かれる。第1面の直上はシルト～極細砂に覆われる部分が多く、それがある一定堆積した後に中～粗砂等の粗い砂が、場所によってはシルト～極細砂を挟んで堆積しているようである。このうち後者の粗い砂が堆積した部分は明瞭に小溝群が検出されたが、前者の場合、やや不明瞭であり、空撮写真で再確認できたものが多い。これらの溝は埋土がすべて第0層であり、第1面に伴う遺構である考えられる。これらの小溝群は約20cm間隔で掘削され、深さは5cm程度である。

なお、畦畔10・11間では、ほぼ同規模の東西方向小溝の痕跡が確認されている。この小溝の東側延長



図263 5区・6区遺構合成図 (鎌倉時代)

やや南側の東壁断面では畦畔とも考えられる若干の盛り上がりを確認している（図259・261▲印参照）。この盛り上がりは北側を攪乱で破壊されており、畦畔との断定はできないが、畦畔10・11間でもこの小溝に区画の意味合いを持たせたのかもしれない。なお、この東西小溝以北の方が小溝の残存度はよい。

また、畦畔10・11間は6B区内でもっともレベルが高く、もっとも第1層が砂質である。第1層と第2層間に見られる洪水砂は、極細砂から細砂を基本とする粒度の細かい砂で、この上層に堆積したシルト等が第1層を構成する母材となっていると考えられ、これに粒度の粗い砂が混じる。この混在する砂は第1面が機能している段階にこの地を襲った洪水砂を攪拌したものと考えられる。またこの洪水砂は、東から襲ったものと考えられ、西側では粒度が細かいということは、基本層序で述べたとおりである。この洪水砂が比較的厚く堆積した東側でそれまでの第1層をも攪拌し地上げた部分が、畦畔10・11間、さらには東側断面で確認できるように畦畔11以東の区画なのであろう。また、坪境4の畦畔状の高まりもこの段階にさらに盛り上げられた可能性も考えられる。そして、この高まりの土地利用形態であるが、第2面で検出された小溝群から畠の可能性を示唆しておく。この小溝群については、第2面で後述する（図269）。

また、畦畔10の東側、北端部分では土坑52が検出されている。土坑の規模は北側が側溝中であり不明なので北へ延びる溝の可能性も考えられる。深さは約60cm。埋土は、ラミナが見られる極細砂から中砂ブロックである。この遺構は第1面上に堆積した第0層の砂層のブロックであり、第1面以降の遺構である。洪水後土壌を得るために掘削された土坑の可能性が考えられるが、他に類似する遺構は調査区内では見られず、性格の断定はできない。なお、遺物の出土はない。

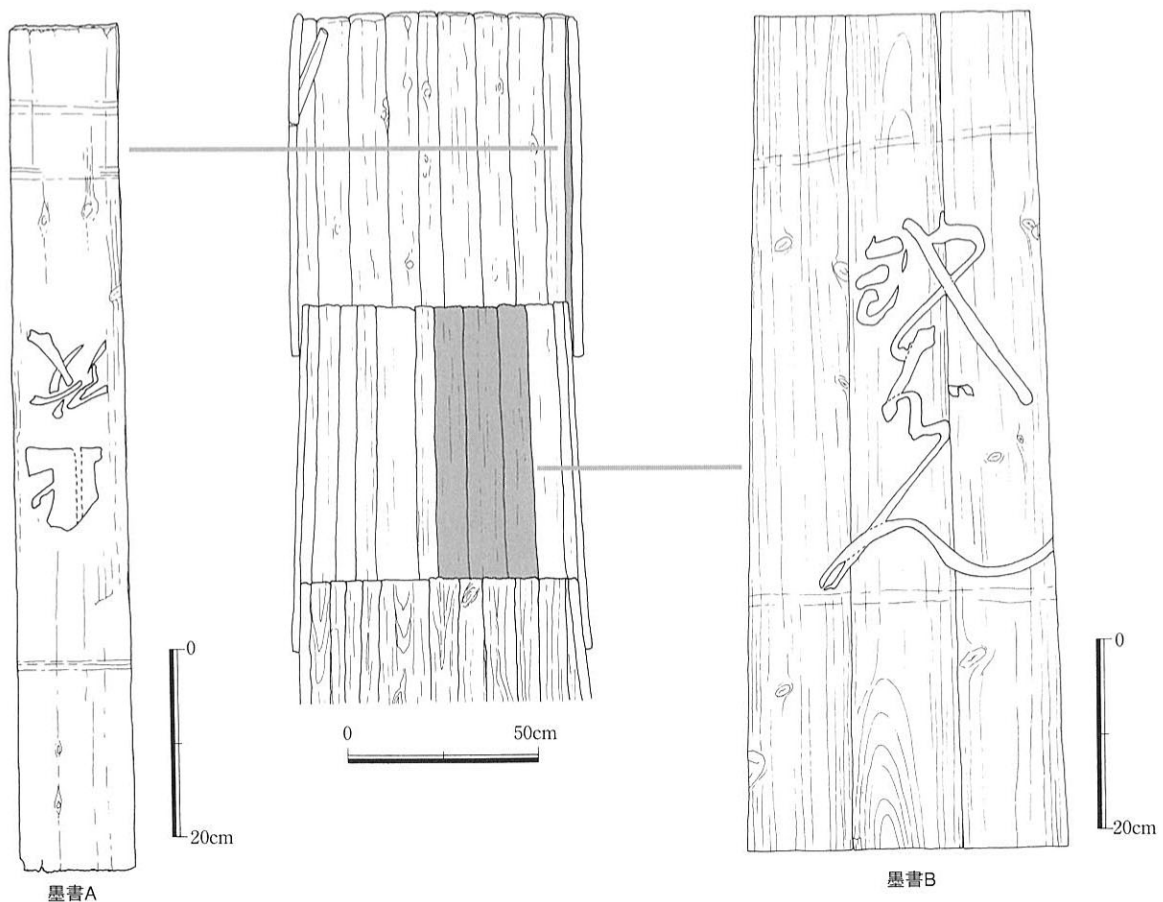


図264 6B区井戸2 墨書井戸枠

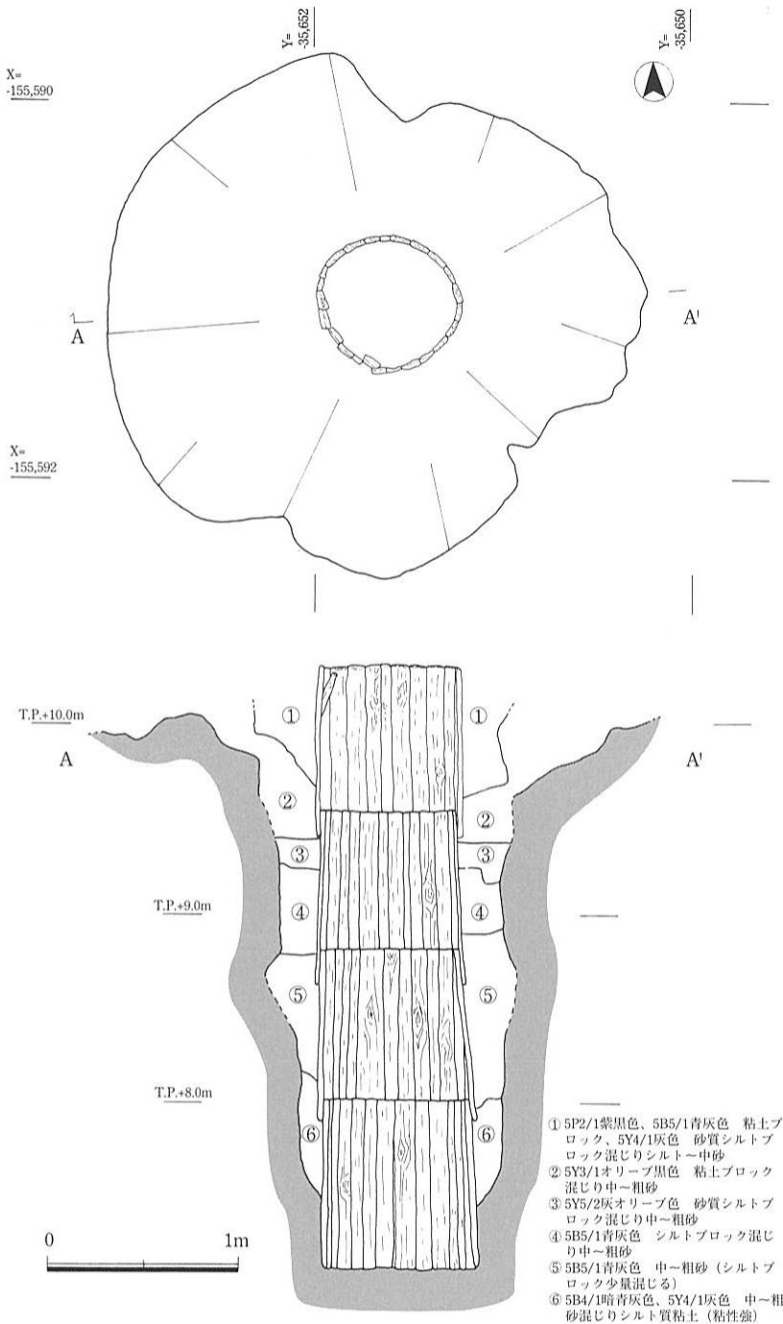


図265 6 B区井戸 2

同じく第1面以降の遺構ではあるが、機械掘削中に井戸2が検出された(図265)。桶4段で、第15層最下部の砂層まで掘削しており、同層を湧水層としたのだろう。1段目は24枚、2段目は23枚、3段目は23枚、4段目は24枚の板材をそれぞれ使用し、そのうち5枚には外側に墨書が見られた(図264)。墨書が見られたのは1段目に1枚(墨書A)、2段目に3枚で、後者については3枚にわたり文字を書いている(墨書B)。墨書Aは、上下逆さに書かれており「○改」で、1文字目は「上」の可能性や間違えたため塗りつぶした等の可能性が考えられる。墨書Bは「忒ばん」で、ちょうど2段目の桶枠であることからこれを意識して書かれた可能性が考えられる。両者とも、桶の上下に巻かれた箍の間に書かれている。なお、機械掘削中の検出であったため、掘形が正確には検出できなかったが、第0層中では比較的大きい掘形が見られた。顕著な遺物は出土しておらず、最下層からもトタンなどが出土する状況であった。掘形からの遺物の出土がなく、井戸掘削の時期は不明であるが、井戸枠最上部のレベルと機械掘削の際一部残存した土壤化層

のレベルとがほぼ一致するので、この土壤化層に伴う可能性が考えられよう。そうであれば、井戸2の掘削時期として江戸時代の可能性が考えられる。

同じく第1面以降の遺構であるが、方形木枠遺構1が検出された。この遺構は、基底部分がコンクリートであり、その上に約35cm程土を盛った後、長さ約2mの柱状の材を南と北、西と東の順で組み合わせ、組み合わせ部分に釘を打ち作られたものである。なお、西側の材の中央部分には「長拾三尺」と墨書があった。1尺は約30.3cmであるので、約393.9cmを意味することになる。この数値はこの材の長さとは一致しないので転用材であろう。遺物の出土はない。時期は現代である。

時期

第0層、第1層の出土遺物、および周辺調査区の成果から第1面の時期は12世紀後半から13世紀前半と考えられる。

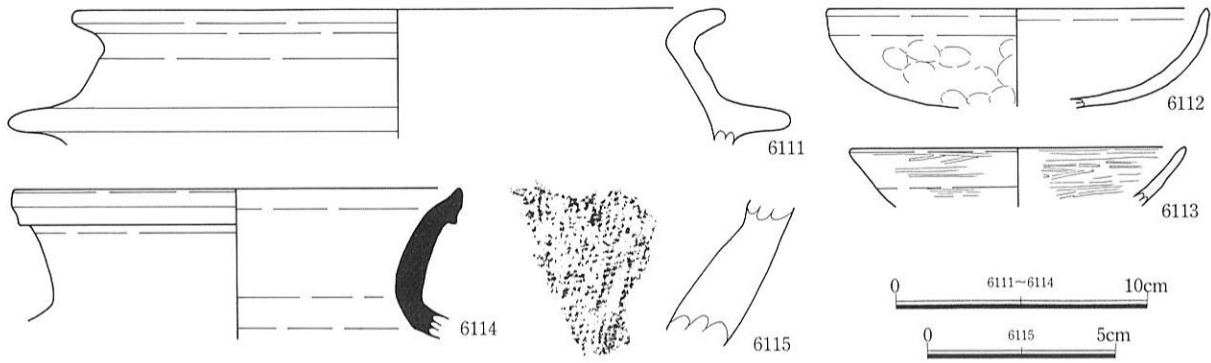


図266 6B区第1層出土土器

第1層出土遺物（図266）

第1層からは、瓦器、須恵器、土師器等の破片が、全部で26点出土しているのみである。このうち、図化できたのは以下の5点である。6111は土師質土器の羽釜である。6112は律令土師器杯、6114は須恵器甕で混入と考えられる。6113は、第1層から出土した唯一の瓦器で、外面のミガキが口縁部に見られる程度でありII-3期、おおよそ12世紀後半に位置づけられる。6115は、製塩土器で内面に布目痕が残存する。

表43 第1面畦畔計測表

畦畔番号	残存長(m)	最大幅(m)	畦畔間距離(m)	畦畔番号	残存長(m)	最大幅(m)	畦畔間距離(m)
畦畔5	6.9	0.7	13.3	畦畔13	3.5	0.7	11.3
畦畔6	13.0	0.8		畦畔14	2.9	1.0	
畦畔7	12.3	0.6	12.2	畦畔15	2.8	0.8	10.0
畦畔8	5.6	0.7	12.5	畦畔16	2.9	0.9	10.2
畦畔9	6.7	0.7	11.6	畦畔17	2.8	0.6	9.8
畦畔10	5.3	0.7	12.1	畦畔18	4.6	0.8	11.1
畦畔11	(7.7)	(0.4)	(11.2)	畦畔19	2.2	0.4	10.8

第2面（図267）

概要

灰色粘質シルト等で構成される第1層を掘削し検出されるのが、灰色粘質シルト～砂質シルトで構成される第2面である。面の高さは、T.P.+9.37～9.88mで、第1面同様東側が高く、西側が低い。基本的な地形の傾斜は周辺部も含めて第1面に踏襲される。遺構は、条里に伴う坪境の溝、畦畔の他、南北方向畦畔を12条、段、小溝を検出した。第2面上からの遺物の出土はない。

遺構

第1面で坪境3があった下層で坪境20の溝が検出された。幅は4.5～7.5mで、深さは最も深い部分で40cm程である。溝の東肩は5区同様北北東から南南西に傾きを持つ。溝掘削中に杭列が検出されたが、この溝が機能していた段階に打ち込まれた堰等の構築物ではない。杭列は、おおむねY=-35,722～723の範囲内で南北方向に列状に検出された。この部分は、ちょうど第1面坪境3の東肩部分にあたり、溝埋没後に坪境補強の為に打ち込まれた杭の可能性が考えられる。溝の埋土は第1層で、部分的に他所でも第1・2層間に見られる、第2面段階の洪水堆積層が見られた。坪境20南側については、調査区の南端

にあたり、遺構の形状など状況が不明確ではあるが、6C区で検出された溝底部のレベルがT.P.+9.69m、6B区南端の溝底部レベルがT.P.+9.52mであることから、坪境の交差点までは南から北への流れであったと思われる。6B区内の状況については、溝の北側がT.P.+9.37m、中央部がT.P.+9.24mで、中央部に水が溜まりそうである。ミクロ的に見ると確かにそうであるが、ややマクロ的に見ると、5区の同一面と考えられる第2面検出の溝23底部レベルはT.P.+9.7mであり、北から南に水が流れているようである。また、5区で検出された溝23は、南側が狭く6B区のように幅広ではない。これらから、6B区坪境20北側は、北から流れてきた水を貯水しておくために池状になっており、そのために坪境20の北側が幅広になっていると推定したい。また、ある一定量以上の水が溜まれば、水田面に水が溢れることなく、坪境交差点の南側方向へと流れることも可能である。さらに、調査区南西端では西へ向かう溝も検出されている。溝底のレベルは坪境交差点よりやや浅いかほぼ同じであり、坪境交差点から西へも水は流れていたようである。これらからこの溝が、北から溢れてきた水と南から流れて来た水を西側へ回す機能を持っていたと考えられる。なお、東からについては、後述するが、西流する溝が東からの溝の延長やや南側に位置することや、坪境交差点付近の攪乱を除いた部分の等高線を見ると東からの水は基本的には北に流れていたようである(図268)。また、坪境20北側のやや掘りすぎた部分より骨が2点出土している(図267□印)が、出土レベルなどから本来は第5面の溝に伴う可能性を示しておきたい。

坪境20の西側へ向かう溝の北側に低まりがある。この低まりの埋土は、第1層下部のシルトブロック混じり細～粗砂で、攪拌を受けている。このため、単に第1面段階の掘削がこの部

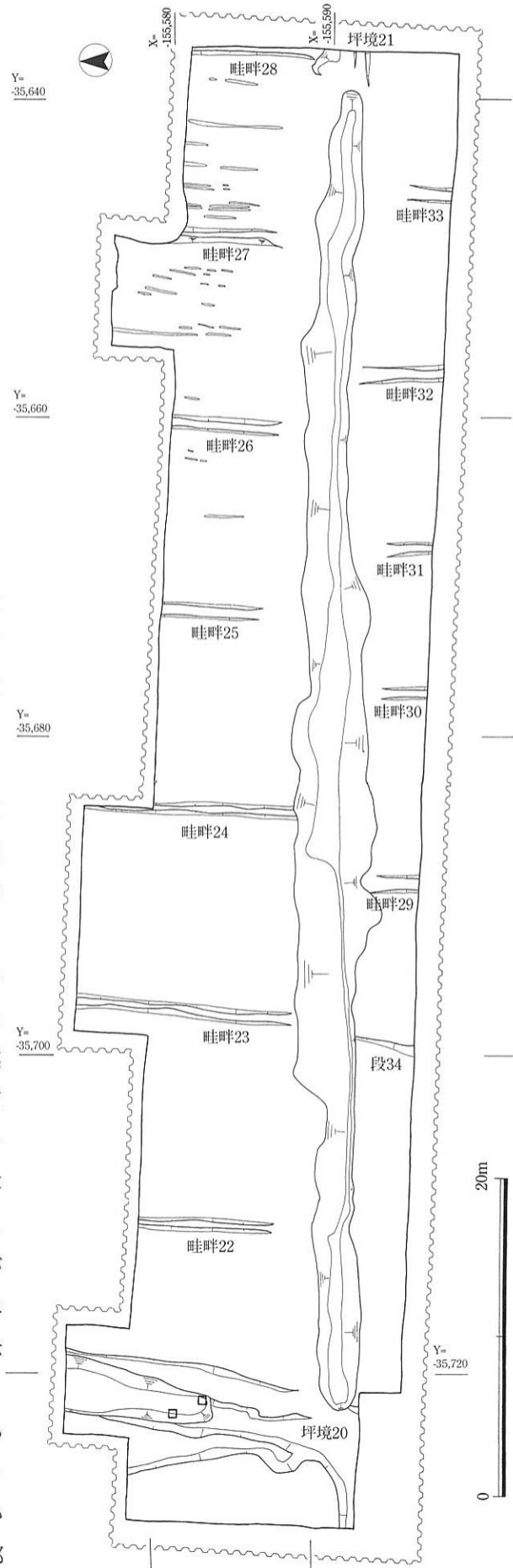


図267 6B区第2面

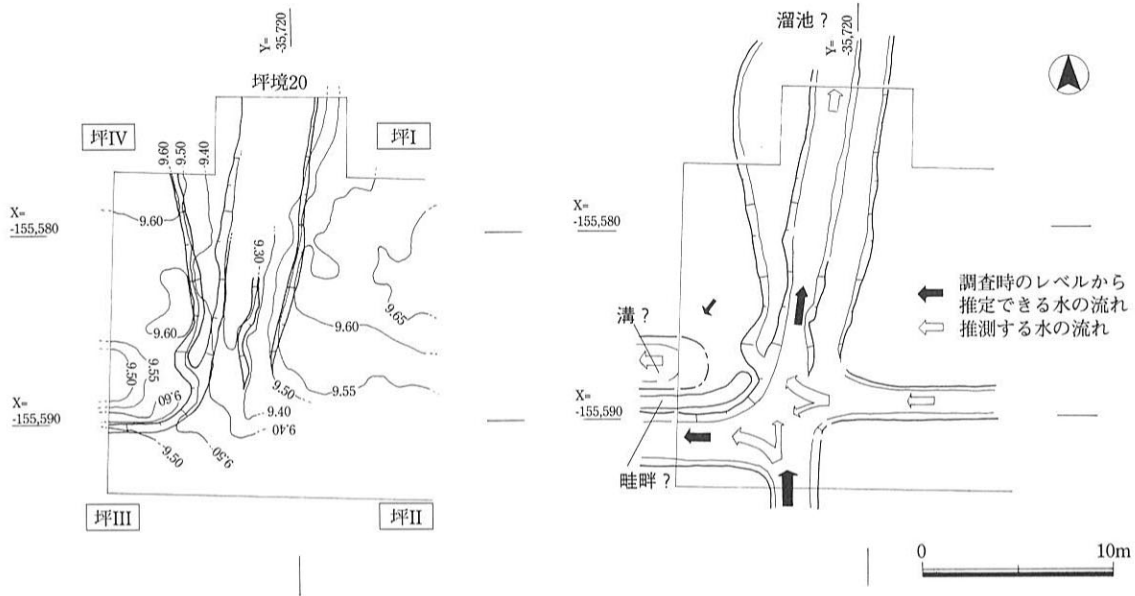


図268 6B区第2面坪境20部分調査状況（左）と推定模式図

分だけ深く及んだ下面遺構とも考えられる。しかし、この低まり部分に接続するように、坪境20の形状が突出していることから第2面に伴う遺構の可能性を示唆しておきたい。この低まりに坪境20から水を流すのは不可能である。ただし、坪境20北側に推定した溜池内の水が南側そして西側に溢れるよりも多い水量が流れた際に、水を流すための低まりであったと推定したい。また、この低まりに坪境20北西方向の「坪IV」から水を排水していた可能性も考えられる。この低まりの南北両側が畦畔状に高くなっている状況は確認できなかったが、今回検出できた低まりの範囲は調査区の都合上わずかであり、低まりの東端は面とのレベル差がわずかしかなく、西側へむかってさらに低くなることから、西側調査区外では畦畔等の施設が存在した可能性も考えられる。そして、西側調査区外では溝状になって行く可能性も考えられる。

第1面で坪境4があった直下で坪境21の畦畔状の高まりが検出された。畦畔21の直上の一部にはラミナの見られる砂が存在することが東側断面で確認でき、確実に第2面に伴う遺構である。しかし、西にゆくにつれ痕跡化し、攪乱による破壊でおよそ畦畔26以西の状況は不明であるが、基本的な地形の傾斜は第1面同様であり、この部分に溝状の施設があった可能性も考えられる。

次に第2面検出の各畦畔の規模及び、第1面畦畔との位置関係であるが、規模は表44のとおりである。なお、位置関係についてであるが、畦畔22は畦畔5直下より微妙ながらも西にややずれる。畦畔23は畦畔6のほぼ直下に当たる。畦畔24は畦畔7のほぼ直下に当たる。畦畔25は盛り上がりじたいが不明瞭であり、畦畔8の直下に当たる。畦畔26は畦畔9直下より微妙ながらもやや東にずれる。畦畔27は、明らかに1面の畦畔から西側にずれており、第1面段階の掘削により、西側の肩部が攪乱を受けている。畦畔28は西肩のみの検出であり、南側の坪境21との交点付近は掘りすぎている。洪水堆積物にパックされており検出が容易であったこともあるのだが、畦畔28は非常に明瞭に検出された。畦畔11直下より東にややずれる。この畦畔が本来接続すると考えられる坪境21とレベルを比較すると、レベル差はあまりない。畦畔29は畦畔15の直下にあたり、盛り上がりじたいも不明瞭である。畦畔30は畦畔29同様不明瞭で、畦畔16の直下にあたる。畦畔31、畦畔32、畦畔33は、すべて第1面検出各畦畔の直下にあたり、畦畔の盛り上がりじたいも非常に不明瞭ではある。ただし、各畦畔を境に各水田にレベル差は見られ

る。

また、畦畔14の下層では段34が検出された。6 B区では弱い段でしか検出されなかったものの、南側の6 C区の延長推定部分では畦畔（畦畔17）として検出されていることから、本来は段ではなく畦畔であったと考えられる。なお、第1面畦畔13の下層では第2面段階で畦畔等の遺構は検出されていない。また、この部分を境にレベルが大きく異なるということもなく、南側の6 C区でも畦畔等の遺構は検出されていない。このことから、埋没段階にはこの部分に畦畔等があった可能性は低いと考えられる。

以上のように、第2面で検出された畦畔等の多くは、擬似畦畔のイメージに近いものが多い。もし、これらが擬似畦畔であれば、第2面が旧地表面ではない可能性も考えられる。しかし、断面観察の結果、第2面直上には洪水砂層の残存が部分的に確認された。また、畦畔のいくつかは第1面段階の畦畔とややずれて存在することも確認されている。これらから、第2面はベース面ではなく、旧地表面であることと判断できる。

次に、各畦畔間の遺構であるが、畦畔25以東には小溝群が見られる（図269）。畦畔25～27までの間で見られる小溝群は第1面段階同様の規模・間隔を持つものである。ただし、多くの小溝が畦畔にほぼ平行であるのに対し、畦畔26・27間で確認できる小溝群の一部はそれらの小溝群から2度ほど東に振る。この東に振る小溝群はわずかしか確認できず、両者の時期差については、埋土に明瞭な差が見られないことから不明である。これらは、すべて第1層を埋土としており、本来の帰属面は第1面である。また、畦畔27・28間では、上述の小溝群と同様な規模の小溝群が畦畔27すぐ東側で確認されている一方、やや規模・間隔の異なる小溝群も確認されている。この小溝群は、やや幅広で、間隔も約1.2mと広い。埋土は1層であり、本来の帰属面は1面である。この幅広の小溝群は、畝作に伴う溝の可能性が考えられ、第1面にこの箇所では畝作が行われていたことの傍証のひとつとなろう。

時期

第1層、及び後述する第2層の出土遺物から、12世紀中頃以前と思われる。

第2層出土遺物（図270）

第2層からは、瓦、瓦器、須恵器、土師器が出土している。いずれも破片であるが、図化できたものについて以下に述べる。

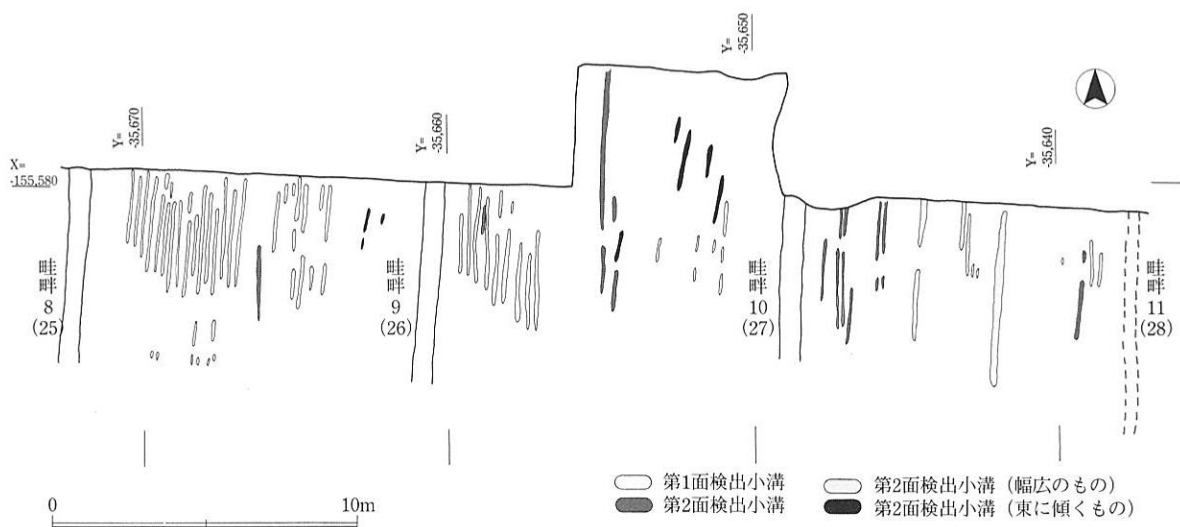


図269 6 B区第1面・第2面小溝合成図

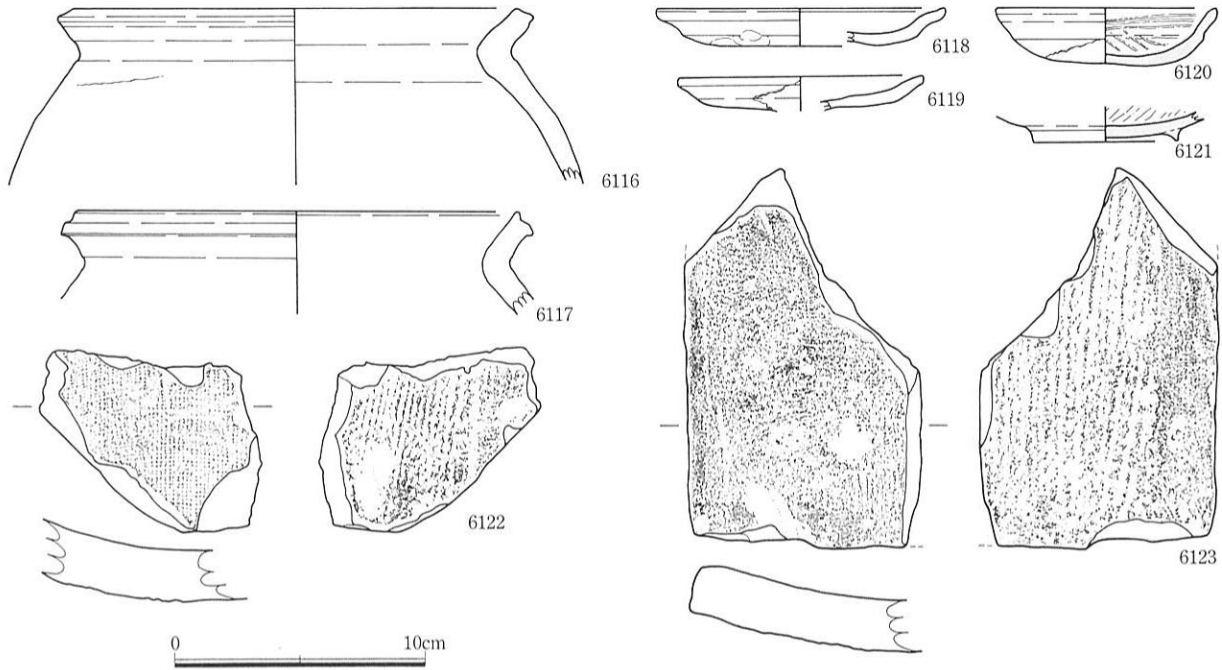


図270 6B区第2層出土遺物

6116～6119は土師器である。6116・6117は甕。11世紀初頭頃の所産と思われる。6118・6119は皿。6118はいわゆる「て」字状口縁皿で胎土が乳白色、器壁は4mmと厚い。復原口径11.2cm。時期は11世紀末頃。6119は切り込み円板技法により作られている。

6120、6121は瓦器である。6120は小皿で12世紀前半～中頃の所産であろうか。ほぼ完形で口径は9.5cm。外面に一段のヨコナデをし、口縁はわずかに外反する。見込み部分は平行線状のミガキで、幅1～2mmと非常に細い。6121は椀で高台が断面三角形状。見込み部分は平行線状のミガキで、3～4mm幅と太い。II-2もしくは3期で、12世紀中頃。6122・6123は瓦。いずれも平瓦で、凸面に縄目タタキが、凹面に布目が残存する。

表44 第2面畦畔計測表

畦畔番号	残存長(m)	最大幅(m)	畦畔間距離(m)	畦畔番号	残存長(m)	最大幅(m)	畦畔間距離(m)
畦畔22	8.5	0.9	13.3	畦畔29	3.0	1.0	11.8
畦畔23	13.5	0.9		畦畔30	2.8	0.6	
畦畔24	13.2	0.8	12.5	畦畔31	2.9	0.8	9.3
畦畔25	6.1	0.8	12.4	畦畔32	5.2	1.0	10.8
畦畔26	6.7	0.9	11.7	畦畔33	2.7	0.9	11.2
畦畔27	7.0	1.0	11.8				
畦畔28	7.6	0.6	11.7				

第3面 (図271)

概要

第2層の灰色粘質シルト～砂質シルトを除去し、検出されるのが第3面である。面の高さは、T.P.+9.33～9.71mで、上面同様東側が高く、西側が低い。遺構は、条里に伴う段、畦畔等が検出された。なお、この面を検出する段階から、坪境付近で骨や石が見られるようになる。第3面上からの遺物の出土は石や骨がある。

遺構

第2面で坪境20の溝が検出された下層は同溝による攪乱で第3面の坪境は検出されなかった。ただし、5区で同一面と考えられる面では、溝が検出されていることから少なくとも東西方向坪境以北（坪I・IV間）に関しては、溝の可能性が考えられる。

第2面で坪境21が確認された下層ではほぼ直下で坪境35が確認された。東壁断面では微妙な盛り上がりが確認されたが、面的には良好に検出されなかった。そのため、検出されたのは痕跡にすぎないが、その痕跡はおおよそ東端から Y=-35,692付近まで見られた。痕跡部分には、第3面各地で見られるような足跡が見られないことから、本来この部分に何らかの凸状遺構があった可能性が高い。

また、痕跡上およびその周辺では石や杭・骨が出土している。まず、石は小さい物も含めて全部で9点出土した（●印）。石1は、第3面にめり込んだ形で出土した上下方向に長い石である。石の下端は第4面からは3cm程浮く。この部分は、第1面畦畔13東肩下部にあたるが、第2面や第4面では遺構の検出はない。南北坪境からの距離は約12mである。石2と石3は、1m程離れるが近接して出土した。両者とも面にめり込んで出土し、第4面からは10cm以上浮いている。上下の各面直上部分ではこの石に関わるような形で南北方向の遺構は検出されていないが、第1・2面では東西坪境を挟んだ北側の畦畔（第1面畦畔7、第2面畦畔24）の延長部分にあたる。石1からの距離は約23.2mである。なお、石1と石2の中間部分、すなわち石1から約11.2m付近では、後述する段37西肩下端で瓦片が出土している（図271■印）。石4は、ほぼ第3面上で出土した。上下の各面直上では南北方向の顕著な遺構は検出されていないが、坪境の痕跡上にあたる。石3からの距離は約10.2mである。なお、

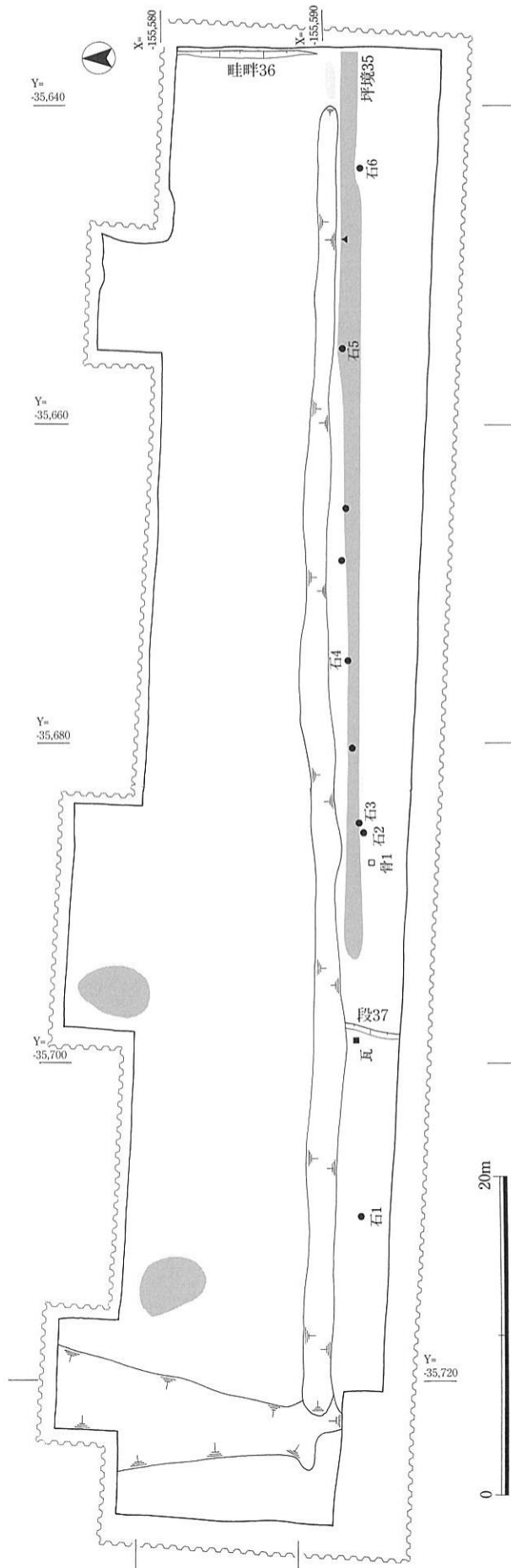


図271 6B区第3面

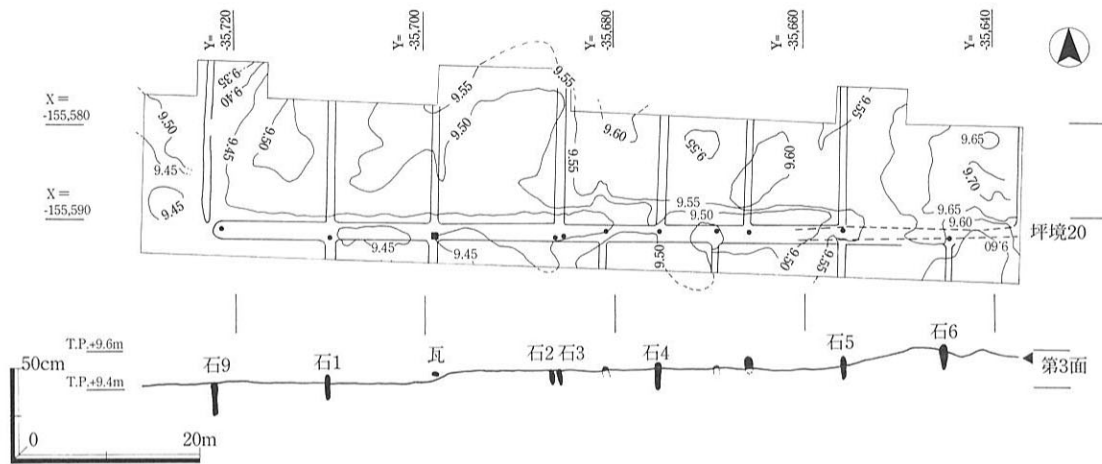


図272 6B区第3面遺構推定図

石3と4の間、石3から約4.6m部分では番号を振っている石より小さめの石が出土している。これについても上下の各面で南北方向の遺構は検出されていない。石5は、第3面から約4cm浮いて出土した。上下の各面ではこの部分に南北方向の遺構は存在しない。石4からの距離は約19.6mである。なお、石3・4間同様、石4・5間でも小さめの石が2点出土している。これらの石は、石4からそれぞれ約6mと約9.6mである。これらの石についても、上下の各面で南北方向の遺構は検出されていない。石6は、第3面から約4cm浮いて出土した。上下の各面ではこの部分に南北方向の遺構は存在しない。石5からの距離は約10.2mである。これらの石は面から浮くものがあるものの、坪境の痕跡上に位置するものについては、本来盛土が存在したと推定できるので、第3面調査段階で出土した各石は第3面に伴う可能性が高いと考えられる。

また以上のことから、これらの石はある程度一定の距離間にあることがわかる。石1から石2・3までは、およそ2段分に相当するが、その中間の1段目部分に瓦片があり、これが石の代わりを果たしていたとも考えられる。石2・3はほぼ同一の意味を持つものと考えられるが、なぜこだけ他所と異なり2点の石があるのかは判然としない。しかし、この2つの石は比較的小降りの石であり、目立たせるため2個配置し、2個で1個分の役割を果たしていたのであろうか。石2・3から石4間は約1段分である。石4・5間は約2段分であるが、小ぶりの石がその中間部分にあり、これが1段分の境に相当する可能性が考えられる。つまり、石の多くは南北方向畦畔と、東西方向坪境を構築する際の目印であった可能性が高いということである。また、石のいくつかには等間隔にのらないものがあるものの、坪境35部分であり、坪境部分としての目印の役割は果たしていると思われる。また、石が第3面段階からみられ、以降の各面では見られないことから、第3面以降の各面がこの面を基本として畦畔等を構築していた可能性が考えられる。すなわち、東西坪境を挟んで、畦畔の位置が一致しない状況もこの段階にはあった可能性が考えられる。石のうち一定の間隔にのらないものも、その東西坪境を挟んで南北で一致しない畦畔の構築のために設置されたものの可能性も考えられる。その可能性も含めて第3面の畦畔を推定したのが図272である。なお、石は下面検出段階でも出土しており、それらすべてを含めた石の評価については後述する(図291)。

次に骨であるが、1点出土している(□印)。残存状況はきわめて悪い小片である。この骨1の出土した北東約2m付近には、石2・3が出土しており、これらと何らかの関係がある可能性も考えられる。

杭は、坪境35の痕跡上で確認した（▲印）。第3面以下の条里面では多くの杭が確認されているが、この面で確認できたのは1本のみである。本来の帰属面は、上面と考えられる。

また、調査区東端の坪境35北側一部では溝の痕跡が東西1m、南北50cm程度の範囲で確認されているが、この西への延長については、ちょうど第1面で検出された攪乱部分にあたり不明である。この遺構は東壁の断面では確認されていない。また、平面的にも畦畔36を切る位置にあり、埋土は第3面直上の一部で見られる砂と第2層であり、下面遺構と解釈でき、本来は第2面に伴う遺構と考えられる。

第2面で畦畔28が検出された部分の直下では畦畔36が検出された。また、第2面で段34が検出された部分の直下では段37が検出された。両者とも検出位置が上面の各遺構のほぼ直下であり、擬似の可能性が高い。

また、調査区の数カ所では足跡がわりあい良好に確認できた部分がある（図271円形のトーン部分）。足跡は上面でも確認されているがそれらはランダムであり、第3面の場合、南北方向の足跡が多く見られ、人間や、偶蹄目の動物の足跡が見られた。

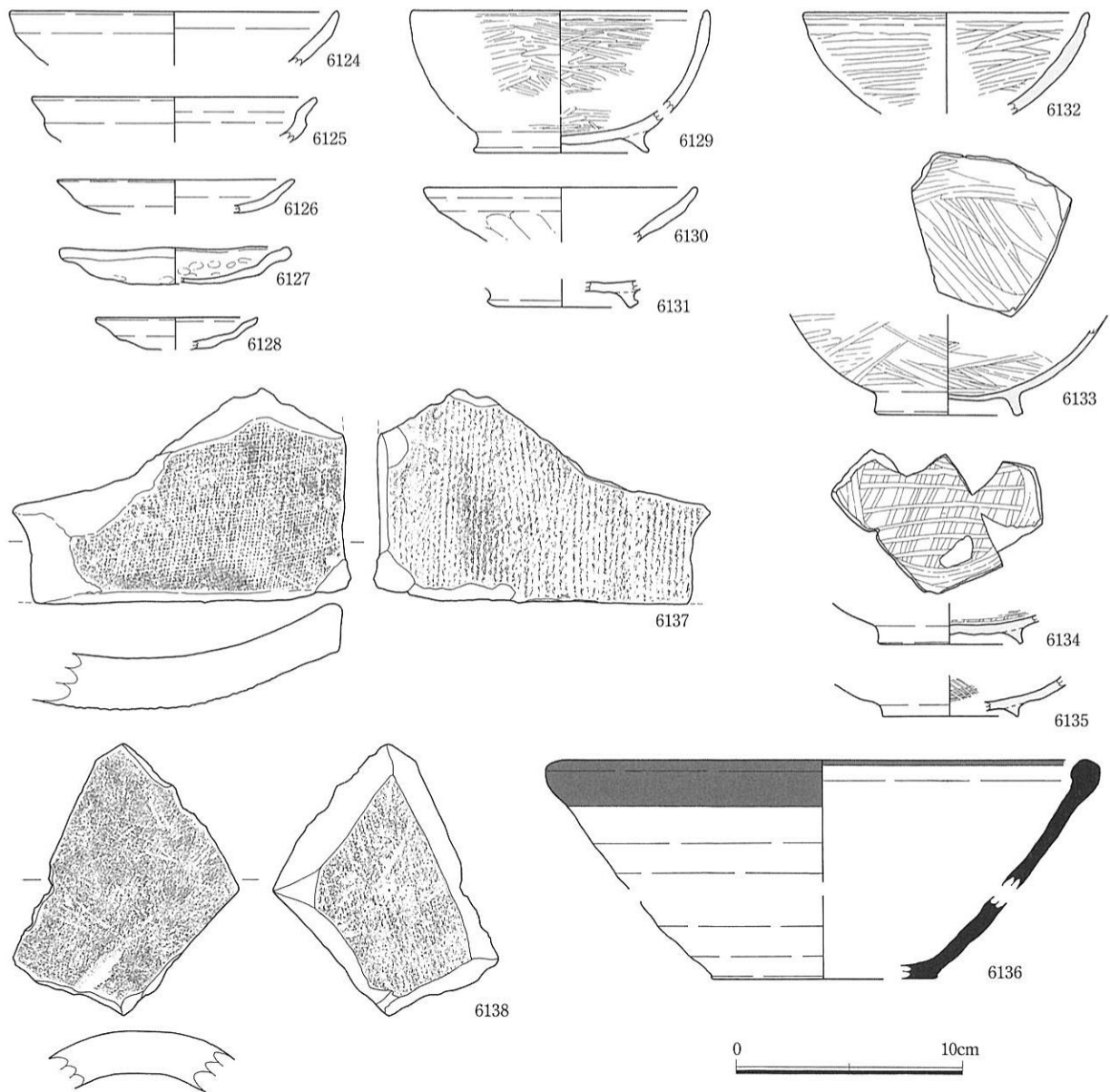


図273 6B区第3層出土遺物

このように、第3面で検出された各遺構は下面遺構や擬似畦畔など当面に確実に伴う遺構は少なく、断面観察でも第2層と第3層の区分は難しかった部分が多い。しかし、部分的ではあるが、第2・3層間に極細砂が見られる部分があり、畦畔の検出はなかったものの石の分布から第2面とは異なる南北方向畦畔が構築されていた可能性が高く、第3面が旧地表面であると考えたい。これらから、第3面の景観は、第2面以降とやや異なるものであると言え、石を基準とした第3面遺構想定図を図272に示しておく。なお、この想定図中の石には、第4面検出段階出土の石も一部含む。これは、第3面、第4面のレベルと出土した石のレベルとを比較、検討して推定したものである。詳しくは、第4面の記述にて再度記すこととする。

時期

第2層、第3層の出土遺物及び、第2面の時期が12世紀中頃と考えられることから、11世紀から12世紀前半と考えられる。

第3層出土遺物 (図273)

第3層からは瓦、瓦器、黒色土器、須恵器、土師器、弥生土器、石が出土している。

6124～6128は土師器である。6124・6125は杯。6126～6128は皿。6127は「て」字状口縁皿で、復原口径10.0cm。6129～6131は黒色土器。6129は、内黒の椀である。外面は分割ヘラミガキを施し、内面には密にヘラミガキを施す。復原口径12.8cm。11世紀後半に位置づけられると思われる。

6132～6135は瓦器である。6132は椀。口縁部外面にやや鈍い沈線状のへこみが見られる。内外面ともに3mm前後のミガキが密に施される。復原口径12.4cm。II-1期か。6133は椀。「ハ」字状に開くしっかりとした高台を持つ。外面は分割ヘラミガキが密に施されており、内面にも密なミガキが施される。見込み部分は不定方向のミガキが密である。I-2期か。6134は椀である。見込み部分に幅3mm前後のミガキが格子状に施される。I-3～II-1期か。12世紀前半。6135は椀である。断面三角形の高台がつき、見込み部分に格子状暗文がみられる。II-2～II-3期。12世紀半ば。なお6135は時期的に第2層からの混入と思われる。瓦器が出土するのは、第3層までである。また、黒色土器が出土し始めるのも第3層である。

6136は東播系の須恵器の鉢である。口縁部のみ黒色化している。重ね焼きしたときに空気に触れていたところが黒色化したと考えられる。6137は平瓦、6138は丸瓦である。

第4面 (図274)

概要

第3層の灰色粘質シルト～砂質シルトを除去し検出されるのが、第4面である。面の高さはT.P.+9.31～9.54mである。遺構は、両坪境の畦畔およびその痕跡の他、平面長楕円形の土坑群、溝状の痕跡等を確認した。なお、第4面上の遺物の出土は、第3面同様、石や骨がある。

遺構

南北坪境部分では、畦畔状の高まりであり、非常に砂質な坪境38が検出された。この坪境は第2面段階の溝(坪境20)で北半部分の多くに攪乱を受けている。高まりの規模は、残存部分で幅2～2.5m、高さ10cm程度である。坪境38の調査区内南端部分では骨(□印)や杭(▲印)、石(●印)が集中している。北半は前述の通り第2面段階の溝による攪乱を受けているため一概に比較できないが、第2面掘削時

に骨や石が集中的に出土してはいないので、調査区南端部分への骨や石の集中は何らかの意味があると推測できる。上下の各面の調査成果から、この部分は坪境の交差点にあたる可能性が高く、行為の根本的意義等は不明であるものの、その交差点を意識し石や骨が置かれたものと思われる。なお、これらの遺物は第3層掘削段階に出土したものであるので、本来は第3面に伴う遺物も含むと思われる。

坪境38部分より出土した石は3点である(石7~9)。石7・8は面にめり込んだ形で出土しており、第4面に伴う可能性が高いが、石9は面から浮いて出土しており、本来の帰属面は第3面の可能性が考えられる。これらの位置関係、配置については、特別な意図が感じられないが、上下の各層においてもこの部分では多くの石が出土しており(図291)、やや面的に見てこの4~5㎡一帯が坪境の交差点付近として意識的に石を集中させた可能性が考えられる。

次に骨であるが、約5点出土している(骨2~6)。いずれも小片で、第4面にややめり込んで出土している。骨2が坪境38の西肩下より出土している以外は、全て西肩より出土し、検出はされていないものの「坪Ⅲ」と「坪Ⅳ」の坪境と坪境38との交差点付近に集中しているように思われる。

東西坪境部分では、畦畔状の高まりである坪境39が検出された。上面の坪境同様、西側では痕跡となるが、その痕跡は坪境38との交差点付近まで比較的明瞭に確認できた。痕跡上からは、坪境38同様、骨(□)や杭、石(●)が出土しているが、それらの密度は坪境38南端部分ほど密ではない。

石10は、坪境38の中心から約25.5m部分で、面にめり込んで出土した。面から10cm程顔を出すものの、本来この部分には坪境39の盛土があったと推定され、この石は第4面に伴う

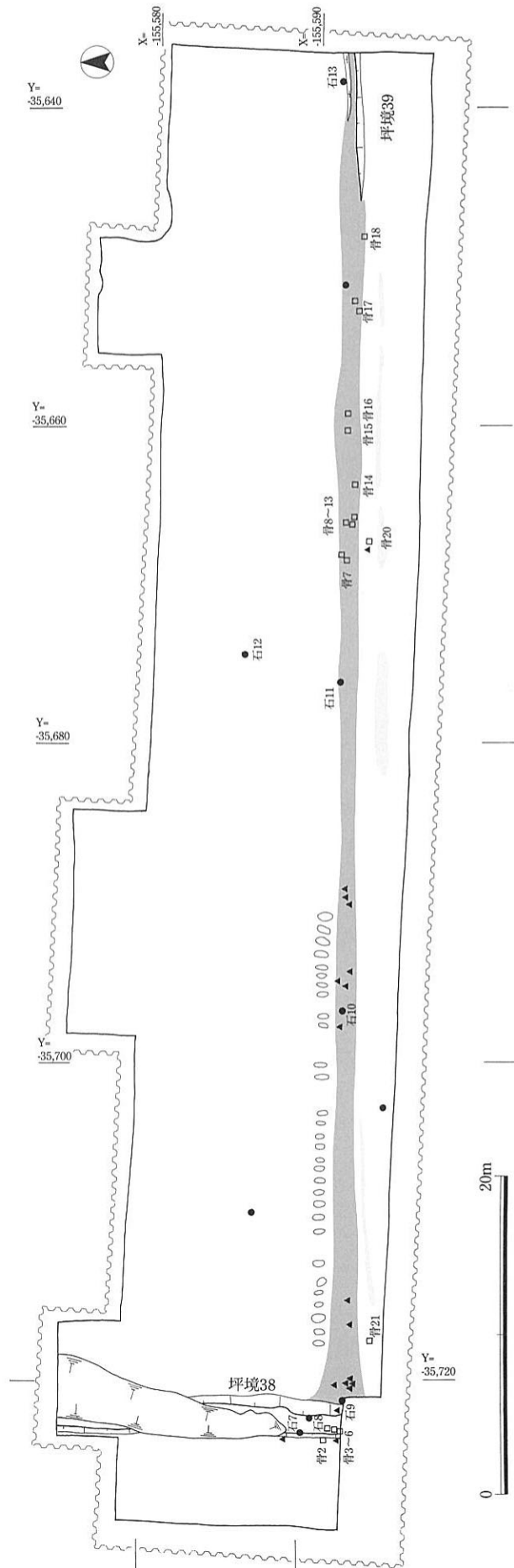


図274 6B区第4面

ものである。またこの部分は、第3面で段37が検出され、坪境の目印に使用されたと推定される石の代替品と考えられる瓦が出土した箇所から東へ約2m程の地点である。なお、坪境38と石10の間の約19.5m付近、坪境39から南へ約1.5mでは、小石が出土している。この小石が条里に伴うか不明確であるが、石10は上面との関係から坪境から派生する南北方向の条里畦畔に伴う可能性が考えられる。また、石10は6B区の調査で出土したすべての石の中で最も重い12500gであり、この箇所に特殊な意味合いがあった可能性も考えられる。ちなみに、第1面ではこの地点以东において東西方向坪境を挟んだ南北で畦畔の位置が一致せず、第3面でもそのように推定している(図272)。このことから、第4面では畦畔の検出はないものの、上面の調査成果から東西方向坪境を挟んだ南北で、畦畔の位置が異なるのはこの段階からの可能性も考えられる。石11は、石10から東へ20.6mの部分で面にめり込んで、石12は石11から東へ1.5m、北へ6m程離れた部分で面から浮いて出土した。石11は石10と同様の出土状況であり、第4面に伴うと考えられるが、石12はレベル等の検討から本来は第3面に伴うものであると考えられる。また、石11から見て石12は東へ約9度振っているが、第3面坪境35部分出土石4のほぼ真北に当たる。このことから、石12は石11よりも石4との関係性が強いと考えられ、石12の本来の帰属面は第3面であると考えたい。石11は石10からおよそ2段分にあたり、坪境から派生する南北方向の条里畦畔に伴う可能性が考えられる。石13は石11から東へ約37mの位置にある。なお、その間の約24.6m部分にも小石がある。この小石と石13との間が12.4mであり、これを基本単位とすると、この小石と石11間はその2倍弱の24.6m、坪境38と石10の間が2倍強の25.5mとなる。ただし、石10・11間はこの基本単位には一致せず10.3mを基本とするようである。なお、これらの石は坪境39の痕跡上からの出土であるので、本来は坪境39の高まり中にあったものと考えられ、高まりを形成する前に置かれた第4面に伴う遺物である可能性が高いと考えられる。

次に骨であるが、約15点出土しており(骨7~21)、調査区の東側に集中する傾向が窺える。骨の一部は群単位で取り上げており、出土点数も小片化しているものが多く明確な骨の点数は出せない。これらの骨で、坪境38南端部分同様の集中を見せるのは骨8~13部分であり、2m四方の範囲に小片ばかりながら骨が集中する。ここは坪境交差点から東へ約57mの位置にあたり、石11から東へ約10mの位置にあたる。骨7、骨19はこの集中地点から西へ2~3m、坪境38から約54mの位置にあたり、いずれも小片である。骨20は集中地点と骨7・19のちょうど中間、坪境39から南へ1mほどの位置にあり、馬の上手骨もしくは中足骨である。骨14は集中地点から東へ約2m、坪境38から59mの位置にあり、馬の長骨片と思われる。骨15は骨14から約3m、坪境から約62mの位置で、馬の長骨片である。骨16は骨15から約1m、坪境から約63mの位置で、馬の長骨片である。これらの、骨7から16までの範囲は一定間隔ではないものの、骨が集中する部分である。骨16から東へ6.5~7m部分には小片であるが骨17がある。坪境からの距離は約70mである。骨17から東へ4mの地点、坪境38から約74mには小片の骨18がある。なお、骨21は上述の骨とは出土位置がやや異なり、坪境39痕跡の西延長やや南、坪境38から東へ約4m付近より出土している。

なお、杭については、調査進行の都合上、第4面から第6面までで検出した杭をまとめて図面を作成したため、本来の帰属面の想定も含めて、後述することとする。

坪境38北側には、Y=-35,690以西Y=-35,718以东において南北約80cm、東西約50cm、深さ約5cmの長楕円形土坑群が計30基検出された。この土坑群は第1面を襲った洪水による抉れ部分の直下にあたり、第2面段階や第3面段階でもこの土坑群は攪乱の最下部に若干確認できていたが、その段階では、さ

らに南北方向に広がる畝溝状の遺構ではないかと推定していたものの、第4面検出段階で土坑であると判明したものである。土坑が検出された範囲であるが、範囲内においても東に行くにつれ不明瞭になり、さらに第1面で検出された洪水による攪乱の最下部にもあたることもあり、本来の東側の分布範囲は不明確である。しかし、西への広がりについては、比較的明瞭である。土坑は西側程明瞭に検出されるようになるが、Y=-35,718以西は確実に見られなくなる。このことから、この土坑の分布の西限はこの部分であると考えられる。この土坑の埋土は、攪拌された洪水砂を含む層である。断面の詳細な検討を怠ったのだが、第3層下面遺構の可能性と、坪境39との関係から第4面に伴う遺構の可能性が考えられる。この遺構の性格については不明であるが、類似する遺構は、同様の水田遺跡である池島・福万寺遺跡でも検出されている他、道路状遺構で検出されることが多い。

また、坪境38南側では、部分的に東西方向の砂の帯が確認された。溝の痕跡と考えられる。この砂の帯は第3層を除去している段階で確認できたものであるが、第4層面上ではこの部分以外に砂が明瞭に見られる部分はなく、断面においても同様に、第3層と第4層の間に砂を明瞭に挟まない。また、深さもほとんどなく、この面に伴うにしては浅すぎるように思える。このことから、認識できなかったものの、第3面の最終的な景観にはみられない、第3面段階のある段階の溝がこの部分にあり、その最下部に堆積した砂である可能性が考えられる。

時期

第4層でおおむね8世紀中頃から後半にかけての遺物が出土している。ただし第3層から出土する土器は11世紀後半から12世紀前半にかけての資料を含む。また、南側の6C区では6B区第4面に対応

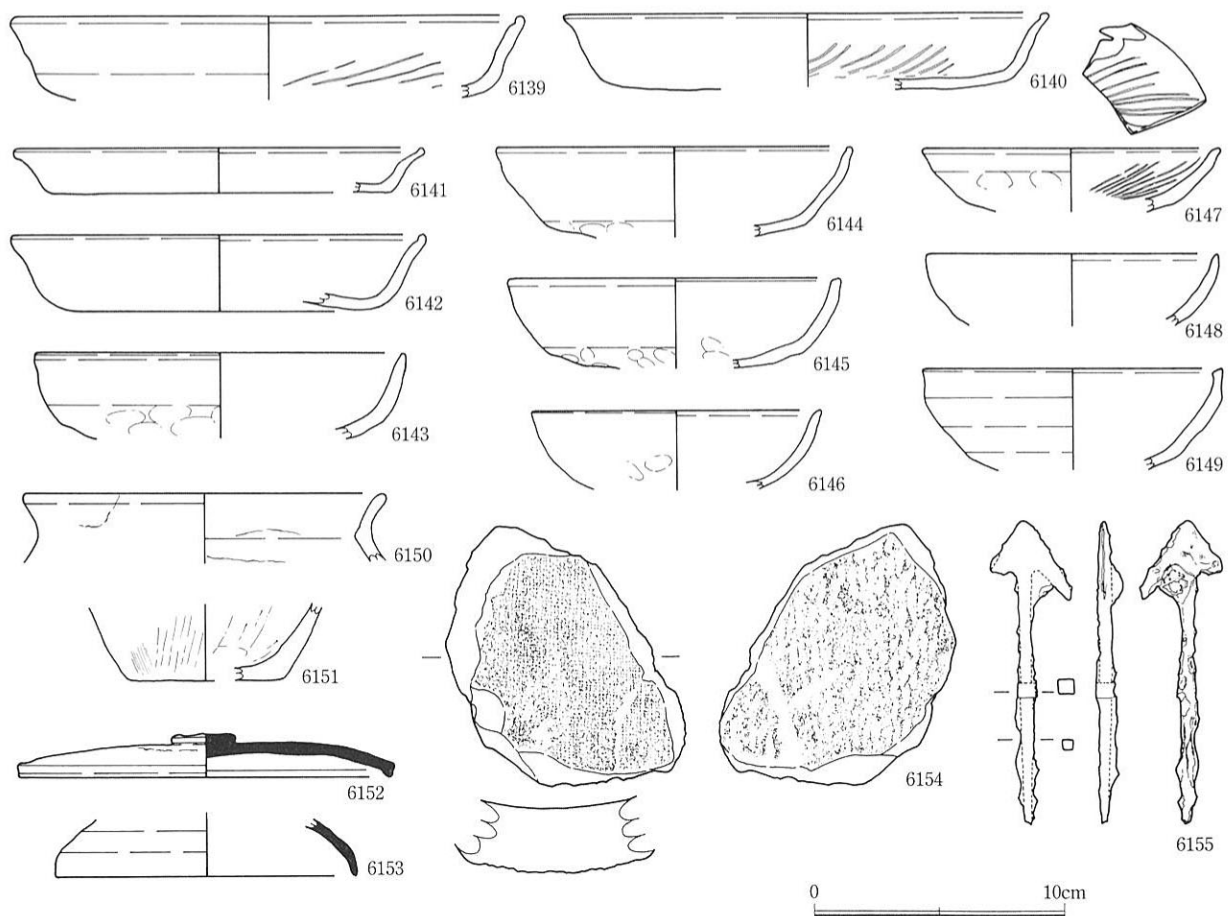


図275 6B区第4層出土遺物

すると思われる遺構面（6C区第4面）で検出した溝から平安時代中頃（10世紀頃）の資料が出土している。長期間に亘り地表面であった可能性が考えられるが、これらを鑑み、当調査区でのデータからは幅を持たせて奈良時代～平安時代の面であったと時期を推定しておく。

第4層出土遺物（図275）

第4層からは瓦、黒色土器、須恵器、土師器、弥生土器、鉄鏃、モモ核が出土している。

6139～6151は土師器で、器種は皿、杯、椀が中心である。6139～6141は皿。いずれも口縁端部が内側にやや肥厚する。6139・6140は内面に、間隔が広く、短い斜放射状の暗文を持つ。平城宮Ⅲ。6142～6148は杯。口縁端部を肥厚させるものと内傾する面を持つものが出土している。底部にユビオサエの跡が残る。6147は内面に斜放射状暗文を持つ。6149は椀C。口縁部上端を強くなで、口縁端面はやや内傾する。6150は甕の口縁部である。6151は甕もしくは壺の底部。外面にハケメが残る。

6152・6153は須恵器。6152は杯B蓋。口縁端部は断面三角形を呈し、扁平なつまみがつく。6153は杯H蓋。口径14.4cm。飛鳥Ⅱ。6154は平瓦。凹面は非常に細かい布目痕、凸面は縄目タタキ痕をもち、色調は赤褐色を呈する。6155は鉄鏃。

第5面（図276）

概要

第4層の灰色砂混じり粘質シルトを除去し検出されるのが第5面である。なお、ここでいう第5面は第4層除去面であり、第5層上面では必ずしもない。第5面は、第5層上面部分と第6層上面部分とがある。面の高さは、おおむねT.P.+9.08～9.35mである。上面同様、北東部が高く、西側が低いが、Y=-35,680以西は以東に比べ傾斜が緩やかである。遺構は、南北方向の畦畔が2条、東西方向の畦畔が1条、南北方向の溝が1条、坪境に伴う畦畔、溝、落ち込み、土坑、ピットが検出された。第5面上からの遺物の出土は、第3・4面同様、骨、石等がある。

遺構

第4面で坪境38の畦畔が検出された南北方向坪境部分では、畦畔40、溝47、畦畔41が検出された。これらで、「坪Ⅰ」と「坪Ⅳ」との坪境を形成する。畦畔40・畦畔41は、それぞれ幅約1m、高さ約5cm、溝47は、幅約1m、畦畔最高部からの深さが約20cmで、若干北側に低まる。畦畔40は、北側では明瞭な高まりとして検出できなかった。また、南側については、畦畔が西側に向かう直前部分でそれまでの部分より3cm程低まり、水口状を呈する。なお、この水口部分では、骨が1点（骨22）、歯が2点（歯1・2）出土した。畦畔41は、畦畔40とほぼ相似形であり、北側では明瞭な高まりとして検出されおらず、南端部分の畦畔44との交点付近には水口がある。この水口に伴う形で東側に、落ち込み51が検出された。この落ち込みは、南北幅3m、東西幅4m、深さ5cm程の浅い落ち込みである。畦畔40・41間の溝47は、上層が細～粗砂、下層がシルト～細砂ブロック混じり砂質シルトを埋土とする。上層の一部には後世の攪拌を受け、第4層のブロックを含む部分もある。第4面の坪境38はこの砂層を芯として構築されているため、砂質である。この溝は、当面に対応すると考えられる北側の5区第6面溝68の延長に相当すると思われる。また、南側の6C区第5面溝32が当調査区の坪境交差点に接続するものと考えられる。ただし、6C区溝32と6B区溝47・5区溝68はまっすぐに接続するのではなく、やや互い違いになっているようである。他にも5区や6C区とのつながりから、本来は検出されるべき畦畔が

あったのかもしれないが検出されなかった。また、6A区で検出されている東西方向の畦畔（第5面畦畔5・6）や5区の東西方向畦畔からこの段階の景観が南北方向の細長い地割を東西方向に細かく区切っていた可能性が考えられる（図283）。

なお、溝47の平面プランを検出した段階で、埋土上面では第4層を埋土とする下面遺構の土坑列が検出された。土坑の形状は、第4面検出の長楕円形土坑に類似する。前述したように、この種の遺構は道路状遺構で検出されることが多い。今回の土坑は、道路とまではいかないものの、幅広の凸状遺構を構築する際に同様の工法を用いて作られた痕跡である可能性も考えられる。なお、第5面検出時には他の部分でも同様の土坑が検出されており、これらの土坑については後述する。

溝47からは、律令期の土器が出土したほか、石（石14・15）や骨（骨23～29）、歯（歯3・4）なども多く出土した。それらの多くは、南側に集中する傾向が見られる。坪境の交差点部分は現代の攪乱により不明であるが、交差点やや北、畦畔40・41でそれぞれ水口が検出された部分以南では集中して出土している。特に、畦畔41水口部分の溝肩部からは、第5面直上で、骨が5点列状に出土した（骨25～29）。これらはいずれも残存状況が良好である。一方の畦畔40側では、水口やや北側よりやはり第5面直上で骨24が出土した。同じく畦畔40の水口南側では、石15と歯3が出土した。これら2点は、溝底からそれぞれ20cmほど浮いて出土している。石15は、7740gとかなり大型の礫であり、溝に伴うものではなく、溝埋没後に第4面の坪境を構築する際の目印とした石の可能性が高い。歯3は、溝埋没最終段階の遺物であろう。溝中央部からは、石14、歯4、骨23が列状に出土している。骨23は溝底から若干浮くが、石14と歯4は、溝底直上からの出土で

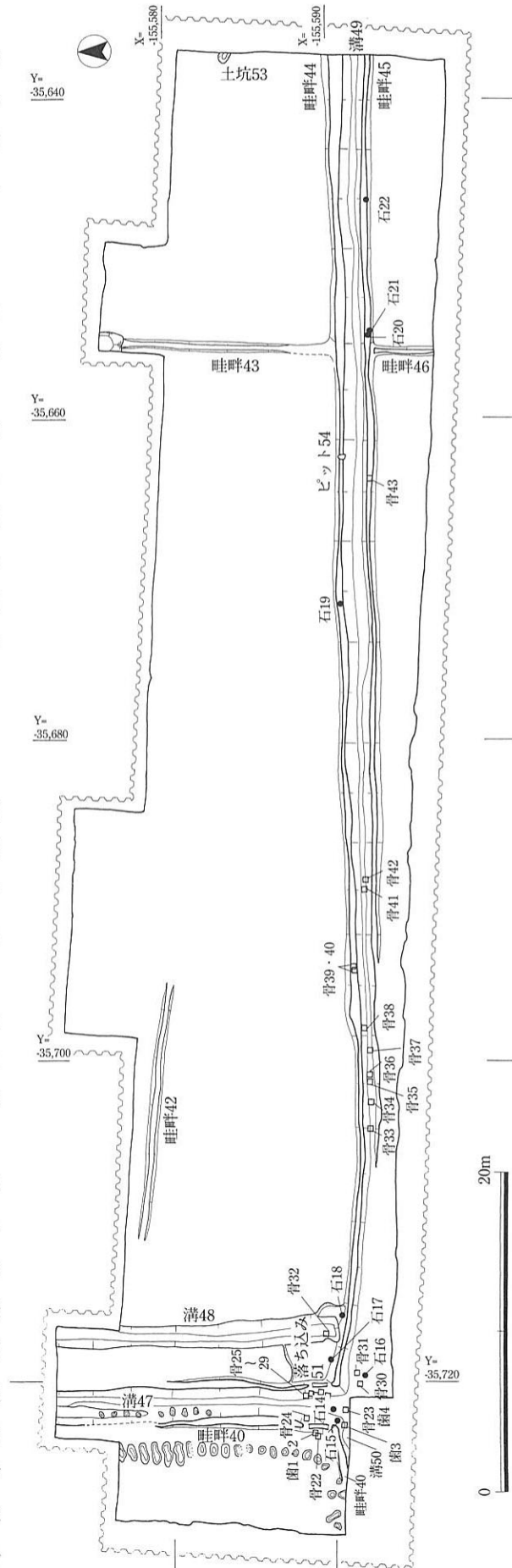


図276 6B区第5面

ある。このことから、石14はこの溝が機能している段階におかれた可能性が考えられる。溝47の下層は、さほど水流があった堆積状況ではなく、石じたいの重さも1883gとわりあい大振りである。また、石の位置も畦畔40・41の水口を結んだ部分にあたり、この水口を意識した配置であった可能性も考えられる。なお、溝掘削中には、上記の骨以外にも獣骨の肋骨と思える小片化した骨が出土したが、取り上げは不可能であった。

溝47出土遺物 (図277 6156~6163) 溝47からは須恵器、土師器、弥生土器、動物骨、歯、コナラ属堅果、クルミ属核が出土している。

6156~6162は土師器。6156~6158は皿。口縁端部を内側に肥厚させるものとそうでないものがある。平城宮Ⅲ。6159・6160・6162は杯。6159は口縁端部を丸く内側に肥厚させる。内面には斜放射状暗文を施す。平城宮Ⅲ。6161は椀。6162は底部外面に墨書が見られるが、判読は不可能である。6163は須恵器の杯蓋。

第4面で坪境39が検出された東西方向坪境では、畦畔44、溝49、畦畔45が検出された。これらで、「坪Ⅰ」と「坪Ⅱ」の坪境を形成している。畦畔44、45はそれぞれ幅1m前後で、溝49は幅1m前後、深さ20cm程である。畦畔44は、東側は幅広だが、西側ではやや狭まる。畦畔上からは、石(石17~19)、骨(骨39・40)が出土している。石17・18は、いずれも落ち込み51に落ち込む肩部からの、第5面直上の出土である。石17は、畦畔41と畦畔44の接点付近からの出土で、1381gとわりあい大振りの礫である。このことから、接点を意識した配置であった可能性が考えられる。石18は、坪境から約6m、石19は、坪境から約50mの距離にある。骨39・40は、近接して出土しており、坪境から約27mの距離にある。石18・19、骨39・40は、いずれも畦畔の上部から面にはりつく形で出土している。いずれも、上面から15cm程の深さにあり、それらの遺物に伴うピット等の遺構も検出されていないことから、第4面に伴うものとは考えがたい。それでも、骨は後世の土壌化、攪拌等により検出されなかった遺構に伴う遺物の可能性もあるが、石は、埋めることなく地面に設置するものと思われる。畦畔44は、やや強めに検出したこともあるので、これらの遺物は、第5面に伴う遺物である可能性が高いと考えたい。畦畔45は、西側に向かうにつれ高まりが不明瞭になり、Y=-35,695以西は畦畔が見られない。畦畔上からは、骨(骨43)、石(石20~22)が出土している。骨43は、畦畔45北肩から出土した小片で、第4面で骨14の出土した直下にあたる。しかし、骨14と出土レベルに20cm程差があり、遺構も検出されていないことから骨14と一連の遺物とは考えがたい。次に石であるが、石20・21は、近接し畦畔45の南側から面にはりついて出土している。石の西側1m弱の部分では畦畔46が検出されており、この畦畔に伴う石の可能性が考えられる。石22は、石21から東へ約8.4m地点で、面から7cm頭を出して出土している。石は、1680gとやや大ぶりであり、畦畔45構築の際の目印になった可能性が考えられる。ただし、この部分では石を意識したかのような南北方向への畦畔などは確認できず、石の位置の意味は不明であるが、坪境から約76mの地点であることがやや気にはなる。畦畔44・45間の溝49は、堆積状況が溝47に似るが、溝47で上層に見られた砂層が溝49では不明瞭であり、砂混じり砂質シルトを埋土とする。溝底のレベルは、東から西へ低まる。溝49からは、律令期の土器の他、骨(骨30・31・33~38・41・42)、石(石16)が出土している。骨30・31と石16は溝47との交点付近(やや東側)から出土している。いずれも溝埋土の最上部からの出土で、出土状況は、溝48出土の歯3に似る。骨33~38は、東西約6mの範囲でわりあいまとまって出土している。骨37が溝底から20cm程浮いて出土している以外は、いずれも溝底からの出土である。この集中地点から東へ約8m付近にも、骨41・42が1mの範囲で溝底より出土している

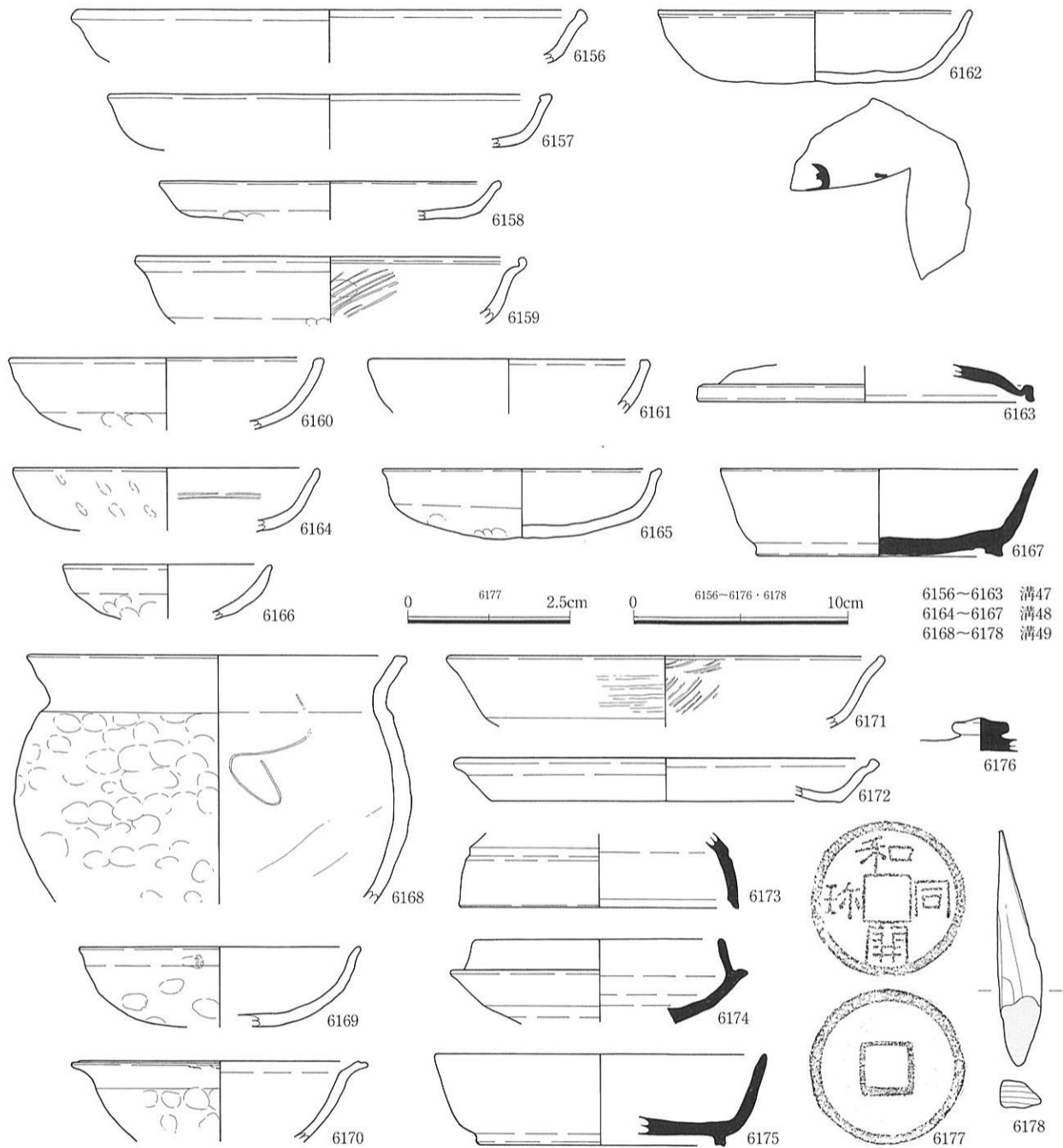


図277 6 B区第5面溝47・48・49出土遺物

る。

溝49出土遺物（図277 6168～6178） 溝49からは須恵器、土師器、銅銭、木製品が出土した。

6168～6172は土師器。6168は甕。いわゆる南河内型の甕であり、内面にはへら記号が見られる。6169は杯。口縁端部に内傾する面を持つ。6170は鉢。古墳時代。6171、6172は皿。6171は口縁部内面に2段の放射状暗文をもつ。平城宮IIの時期に比定できる。

6173～6176は須恵器。6173は杯蓋である。体部と口縁部とを分ける稜は鈍く、内傾する口縁端部をもつ。TK10型式か。6174は杯身。たちあがりはやや内傾し、端部は丸くおさめる。TK10型式。6175は杯B。6176は杯B蓋のつまみで、中央部分がやや盛り上がる。6177は和同開珎。6178は火をうけた痕跡のある木製品である。

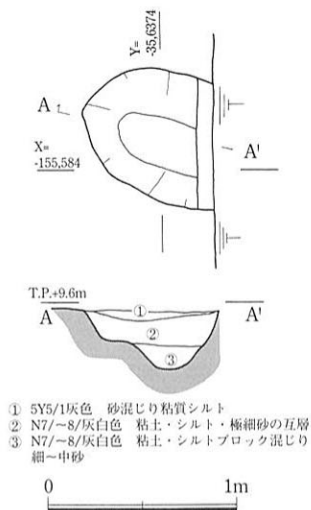


図278 6B区土坑53

図278 6B区土坑53 検出範囲幅も類似することから、この面に伴う畦畔の可能性も考えられる。なお、この畦畔は検出が難しかった畦畔である。

調査区東側では南北方向の畦畔が2条検出されている。坪境以北の畦畔43は、幅60cm、高さ4cmで、ほぼ南北方向を志向する。坪境の畦畔44付近では良好に検出されなかったが、畦畔44も畦畔43を境に規模が異なることから、この部分に畦畔43が接続していたことは確実であろう。坪境以南では、畦畔46が検出された。幅60cm、高さ5cmを計る。第3面や第4面の畦畔の様相が不明なのではあるが、第2面とは異なり、畦畔の位置が坪境を挟んで対称の位置にある。6C区の畦畔35の北延長であると考えられる。なお、6C区では畦畔35以外にもその東西で畦畔が検出されているが、当調査区ではそれらの北延長は検出されなかった。

溝47の東では溝48が検出された。幅約1.5m、深さ約20cmを計る。埋土の観察から、埋土が第4層であることや第6層を切り込んで掘削していることから第4層下面遺構であると考えられる。なお、この溝と畦畔44の関係であるが、畦畔44上では溝埋土と同様な第4層系の土の掘りこみは確認されなかった。このことから、溝48が畦畔44以南にまで及ぶことなく、北側で止まっていることがわかった。なお、第7面で後述するが、第7面ではちょうどこの位置で、溝の痕跡が確認された(溝64)。溝48は、溝64埋没後にほぼ同じ所に掘削した溝であることから、第6層のある段階に掘削された溝64から第4層のある段階に掘削された溝48まであまり時期差がない可能性が考えられる。なお、溝48からは、律令期の土器の他、落ち込み51と重なる部分から骨32が出土している。骨32は、溝底からの出土で、落ち込み51ではなく、溝48に伴う遺物と考えられる。(なお、動物骨の同定については第8部・表58を参照されたい。)

溝48出土遺物(図277 6164~6167) 溝48からは須恵器、土師器、動物骨が出土している。

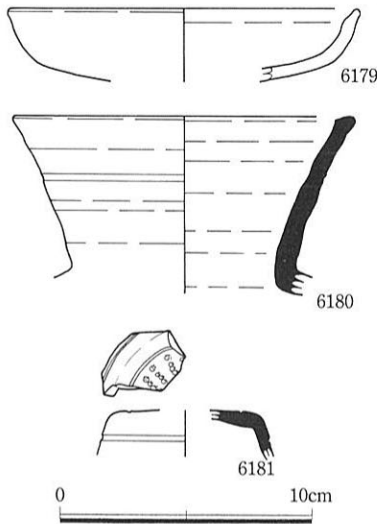
6164~6166は土師器の杯である。6165は口縁端部に明瞭な面を持つ。6167は須恵器の杯B。いずれも破片で出土している。

調査区東端では土坑53が検出された(図278)。土坑の西側のみの検出であり、東側については側溝中に収まり東壁断面まで至らない。長軸は推定1~1.2m、短軸は60cm、深さは26cmである。埋土は最上部に第4層の粘質シルトが見られるが、その下層はラミナの見られる砂層である。

坪境の溝47の西側2~4mで、長楕円形土坑列が検出された。長軸は80cm~140cm、短軸は40cm前

なお、「坪II」と「坪III」の坪境は調査区域外となり検出されていないものの、前述の通り、6C区では溝32が検出されており、坪境は溝であったと考えられる。「坪III」と「坪IV」の坪境では、北側の畦畔40と溝50がわずかに検出されているのみで、南側にあると推定される畦畔は現代の攪乱により検出されなかった。溝50の規模は一部分のみの検出であり不明である。また、畦畔40も西に向かうにつれ不明瞭となる。

次に畦畔であるが、まず東西方向の畦畔42が調査区西側の東西方向坪境から北へ12~14m付近で検出された。幅60cm、高さ4cm。この畦畔は第5面で検出されている他の畦畔とは軸方向が大きく異なり、傾き方は第1面や第2面で検出された畦畔に似る。このことから、畦畔42は、第5面に伴う遺構ではなく、上面のいずれの面かの影響を受けた擬似畦畔の可能性が考えられるが、北側5区の第6面検出畦畔79・80も類似した傾きであり、畦畔の東西



後で、埋土から、これらは4層下面遺構である。この土坑列が検出された部分は畦畔40の最上部を検出した段階では第4層が溝状に見えていたため、当初は溝と考えていた。しかし、この第4層を薄く除去したところ、土坑列が検出され、この遺構が第4層のある段階に布掘りをした後におおむね1m間隔で土坑を掘削した痕跡であることがわかった。なお、この土坑列は、畦畔40にほぼ平行するものの、一部畦畔40を攪拌しているため、確実に第5面の遺構よりも新しい時期の掘削であることがわかる。第4面ではこの箇所には顕著な遺構は存在しないし、坪境の高まりは東側にある。また、単に溝を掘るだけであれば、このような土坑を列状に掘削する必要もない。また、この土坑列は、畦畔40の平面形に一致するように、南北方向から連続して東西方向へとつながっていく。第4

図279 6B区第5層出土土器

面でも述べたように、これらの土坑列は道路状遺構でしばしば見られるものである。これらの土坑が道路を構築する際に何らかの役割を担っていたことを考えると、同じ凸遺構である畦畔にもそれらの構築技術が利用されていた可能性も考えられる。このことから、第4層中の検出されなかったある時期にこの場所に凸状遺構があったと考えられる。

時期

第5面の各溝から出土した遺物はほとんどが平城宮IIIを前後する時期のものであり、第5層出土遺物も同様である。このことから、おおむね8世紀半ばまでには収まるものと考えられる。

第5層出土遺物 (図279)

第5層からは須恵器と土師器が出土している。

6179は土師器杯C。口縁端部に内傾する面を持つ。6180、6181は須恵器。6180は平瓶の口頸部である。頸部やや中央よりに一条の沈線が巡る。復原口径13.4cm。6181は壺の蓋か。体部に一条の沈線を巡らし、天井部には沈線で区画された内側に連続する刺突文を施す。

第6面 (図280)

概要

第2章の層序や第5面の概要で述べたとおり、第5層は調査区東半の東西方向坪境以北で確認されたのみであり、この砂混じり砂質シルトの第5層を除去し検出されるのが第6面である。局地的な洪水により面の更新がなされたと考えられ、西半については第5面と同じ面とした。面の高さは、T.P.+9.11~9.35m。遺構は、東西方向坪境と、南北方向の条

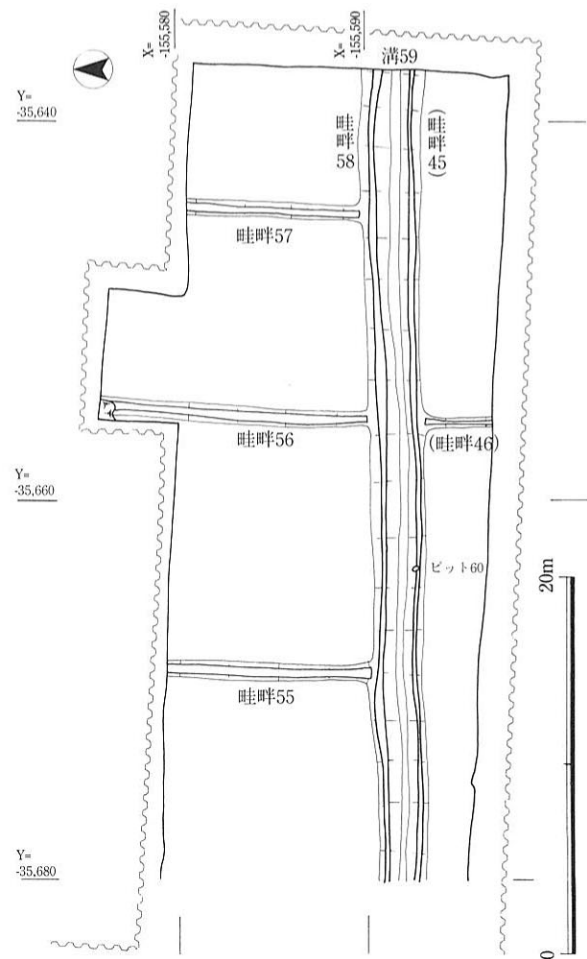


図280 6B区第6面

里哇畔が確認された。その他にも、下面遺構としてピットが検出された。

遺構

第5面で検出された東西方向坪境の畝畝のうち、南側の哇畔は第5面と同じ(哇畔45)であるが、第5面溝49南側の肩部以北、Y=-35,675以東で、第6面の遺構が検出されている。哇畔58は、第5面哇畔44の直下に位置し、同様の規模である。溝49直下に位置するのが、溝59である。第5面段階溝49より若干深い程度で、幅に大きな違いはなく、西に向かい溝49にすりつく。これらで、東西方向坪境を形成している。

溝59出土土器(図281) 木製品及び土師器が出土した。6182は木製品で曲物の底板であろうか。6183は、杯もしくは皿の底部。残存部で2重の螺旋状暗文を施す。6184は、杯A。底部外面は丁寧に削られており、口縁部はヨコナデ。内面には、斜放射状暗文と底部に螺旋状暗文を施す。底部外面に非常に細かいヘラ記号を持つ。平城宮II。

次にこの面で検出された遺構について西側から記述する。哇畔55は、第5面南北方向坪境から東へ約52mの位置で検出された。ほぼ南北を指向する。規模は幅90cm、高さ3cm。5区第6面哇畔75の延長であると考えられる。この哇畔から東へ約14mの地点では哇畔56が検出された。この哇畔は、第5面検出哇畔43の直下に当たるが、哇畔43よりやや東にふる。規模は幅90cm、高さ4cm。さらにこの哇畔から東へ約11mの地点では哇畔57が検出された。この哇畔もやや東にふる。規模は幅80cm、高さ3cm。本来は、第6面検出範囲以東でも5区に延長接続するように、良好に哇畔が検出されるのであろうが、第5面段階の攪拌等により面自体が不明瞭になり、遺構が良好に検出されなかったものと考えられる。

なお、6B区第4～6面間と6A区第4～5面間とは、類似した堆積が見られる。6A区の第4面と6B区の第4面とがまず、同一面と考えられ、6A区第4～5面間に見られる洪水堆積層(図247 第4層⑫)が、6B区第5面を覆う洪水砂層に対応し、6A区第5面上の洪水堆積層(図247 第4層⑬)が、第6面直上の洪水堆積層に対応すると考えられる。なお、全体的に各層の粒度は6A区の方が粗く、洪水の供給源に近かったものと考えられる。

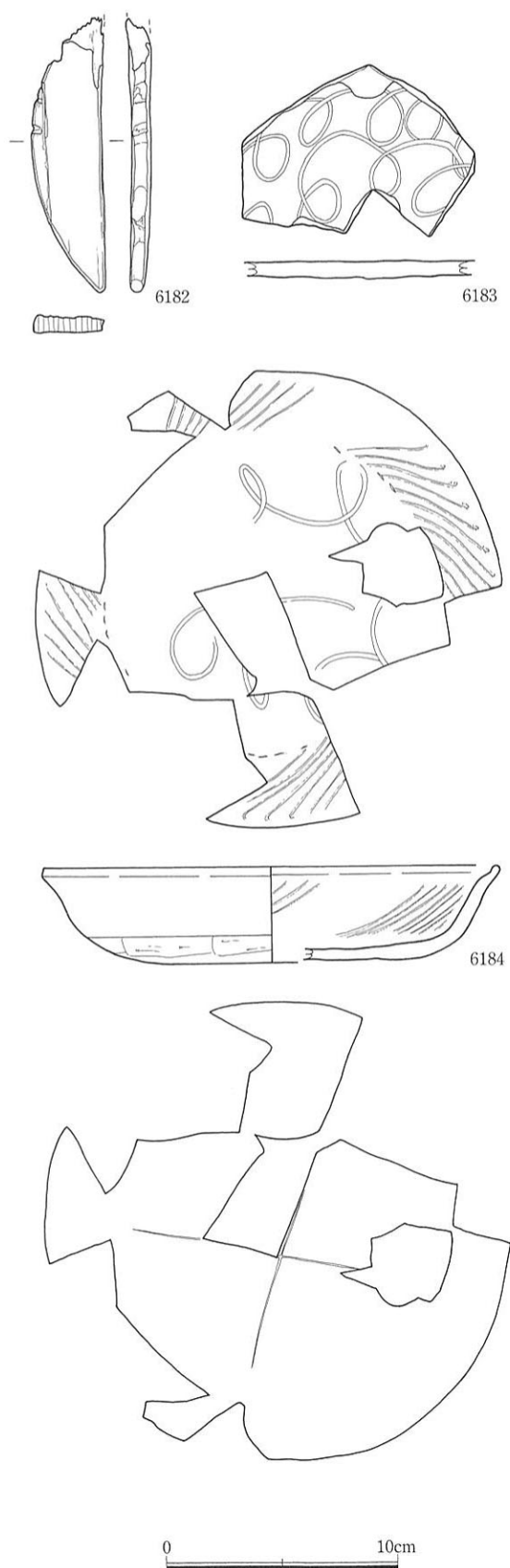


図281 6B区第6面溝59出土遺物

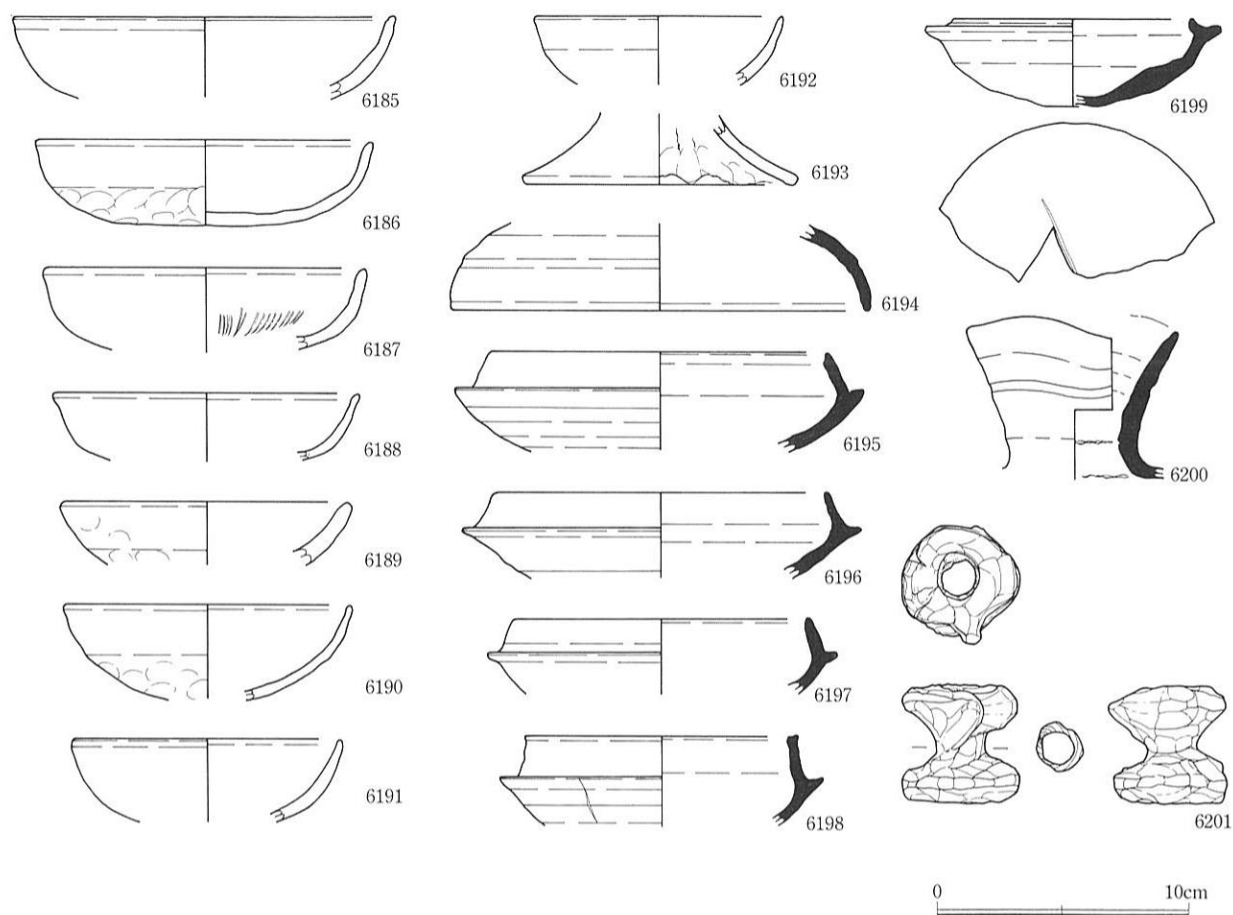


図282 6 B区第6層出土土器・木器

時期

第5面検出溝49と、直下に位置する第6面溝59出土遺物に大きな時期差は無く、遺構も連続していることから、大きな時期差は無いものと考えられる。このことから、第6面の時期は第5面同様、8世紀半ばと考えられる。

第6層出土遺物（図282）

第6層からは須恵器、土師器、弥生土器、木製品、馬の歯が出土した。

6185～6193は土師器。土師器は主に杯と碗が出土している。6185～6188は杯。いずれも口縁部端面が内傾する。6186は底部に明瞭なユビオサエの痕跡を残す。6187は内面に短い正放射状の暗文を施す。6189～6192は碗である。6189、6190は底部にユビオサエの跡が残る。6189は他のものよりも器壁がやや厚めである。6193は高坏の脚部。内面に絞り目が見られる。

6194～6200は須恵器。6194は杯蓋である。天井部と口縁部との境には鈍い沈線が巡る。口縁部内側にはわずかに沈線が巡る。MT85。6195～6199は杯身である。6195は口縁部内側に内傾する面を持ち、受け部に近いところまでケズリが見られる。6196、6197は内傾するたちあがりで、口縁部を丸くおさめる。MT85。6198は口縁部内側にわずかに内傾する面を持ちほぼ水平の受け部を持つ。体部外面にヘラ記号が見える。TK23。6199は杯H。底部外面にヘラ記号を持つ。飛鳥II。6200は平瓶の口頸部。頸部中央に一条の沈線が巡る。焼け歪みが激しい。6201は木製品。糸車であろうか。材質はスギ。



図283 5区・6区遺構合成図 (奈良時代)

第7面 (図284)

概要

第5層および第6層の土壌化層を除去し検出されるのがベース面である第7面である。面の高さはT.P.+8.75~9.05m。第5・6層の各上面では、条里制に伴う遺構が検出されているが、それらのベース面である第7面では溝61・62・63のような東西・南北方向を志向しない遺構も検出されている。他にも条里に伴う溝64・65や下面の遺構を反映していると考えられる北西-南東方向の綠色帯2条も確認された(図284トーン部分)。

遺構

まず、条里に伴う下面遺構として溝64と65が挙げられ、いずれも痕跡で検出された。溝64は第5面溝48の直下にあたり正確な形状は不明であるが、痕跡は、溝65との交差点付近で第5層が落ち込んでいる状況で確認できた。残存部分で最大幅約1.4m。溝65は第5面畦畔44、第6面畦畔58の直下で確認された。痕跡は約42mにわたり確認されたが、痕跡の南側は第5面溝49・第6面溝59により攪乱を受けている。溝65が東西方向坪境の直下にあたり、溝64と連続していることから、これらの2条の溝は坪境に伴う溝の可能性が考えられる。ただし、溝64が上面の坪境の位置と異なることから、条里制施工初期段階の可能性も含めて、より古い段階の溝であると考えられる。北側の5区でも同様な溝の痕跡が検出されている。一方の溝65は、上面の坪境の位置とほぼ同様であるが、上面では畎畝として検出されることが多い。この面の成果や杭列の打設状況を考えれば、各上面で検出されている畎畝が全体として坪境を形成しながらも、北側の畦畔が坪境としてより意識されていた可能性が考えられる。なお、これらの遺構をとりあえず「仮称6-2面」段階の遺構群としておく。

次に、条里制以前の遺構として溝61・62・63

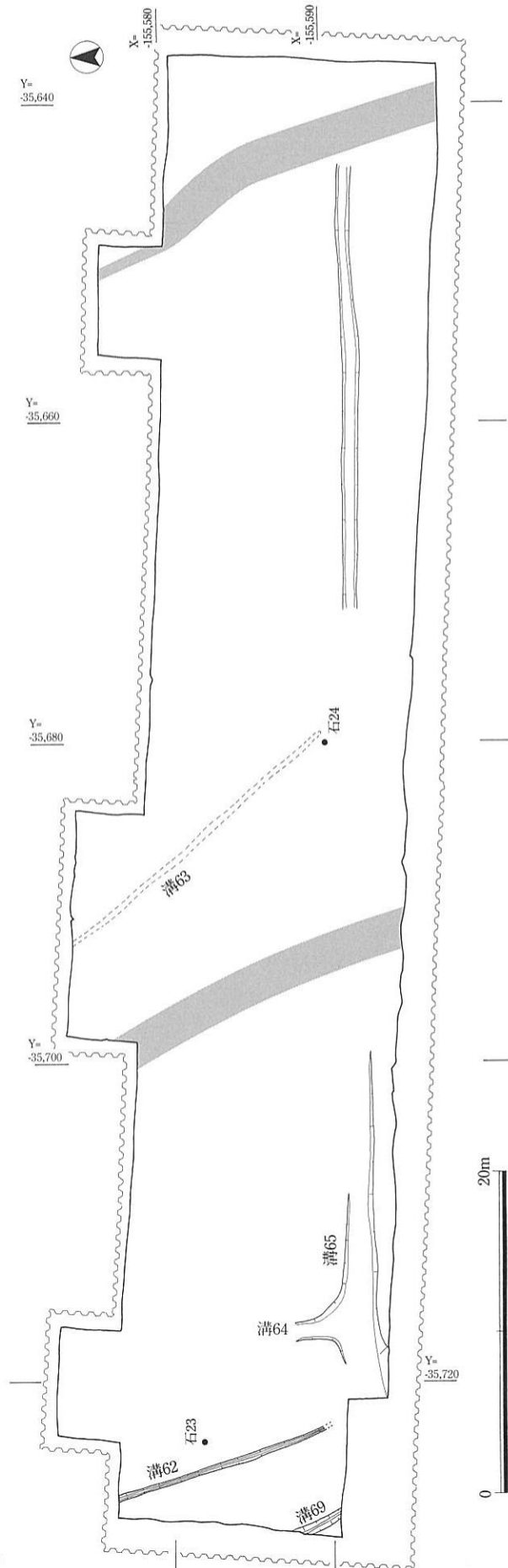


図284 6B区第7面

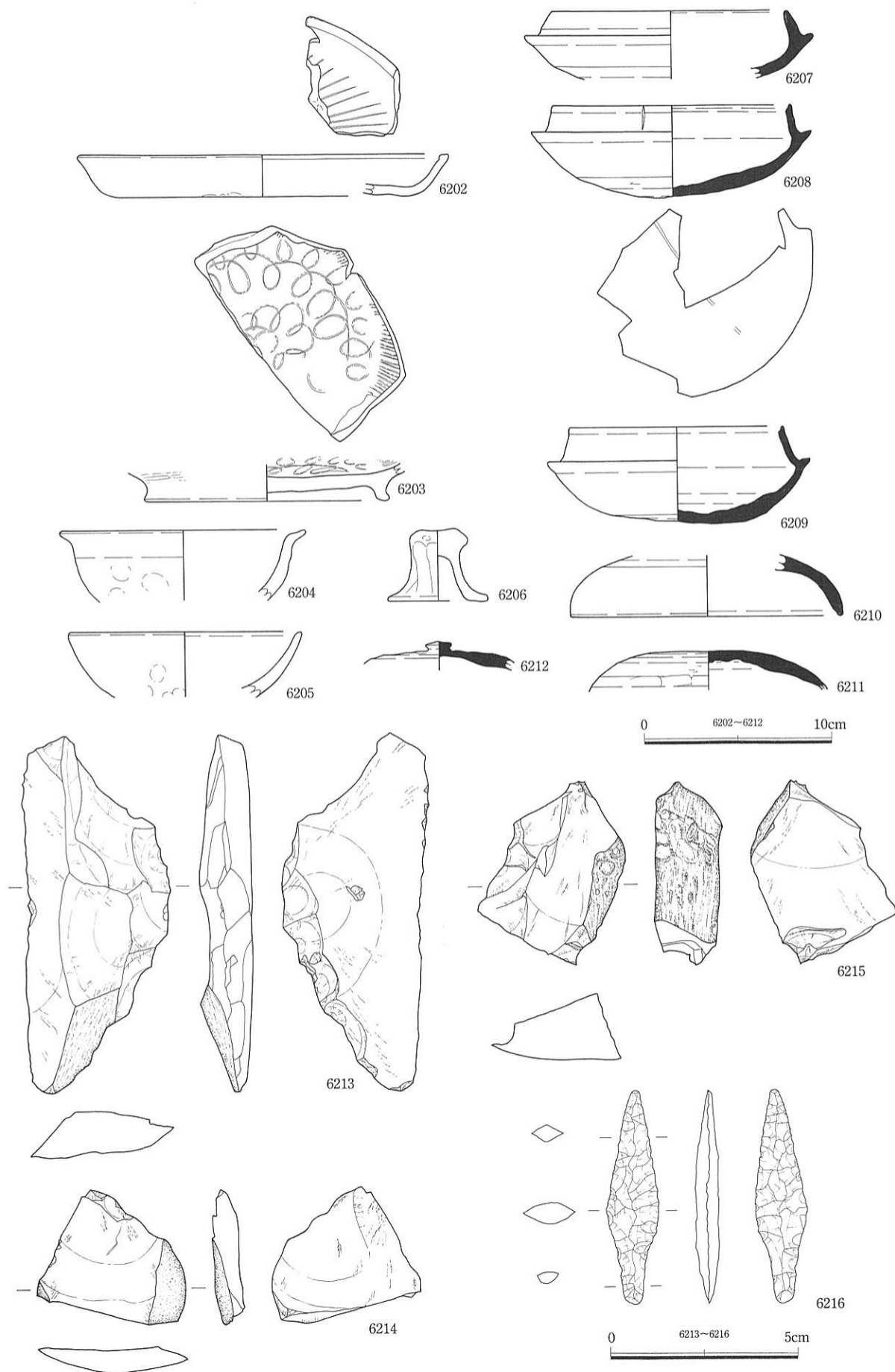


図285 6B区第7層出土土器・石器

が挙げられる。いずれの溝もおおむね北西—南東方向の掘削である。この方向の溝は下層検出の各面で検出される方向である。溝61は幅70cm、深さ14cmと当面で検出された溝では比較的しっかりした溝である。なお直下の第8面でも溝66が検出されており、この場所が水利上重要な箇所であった可能性が考えられる。溝62は幅40cm、深さ3cm。南東端は上面打設の杭列により不明である。溝63は幅40cm弱で、ブロック状に上層を含み、痕跡で検出されたのみである。溝62・63は、小規模であることから耕作痕跡や季節的な排水用溝等の可能性が考えられる。これらの遺構をとりあえず「仮称6－3面」段階の遺構群としておく。

以上、遺構の検出状況から大雑把に、第6面を含めて3段階を想定してみたが、このことから第6層中には認識できなかった条里制施工以前の旧地表面が含まれている可能性が示唆できる。条里制以降でも方位に沿わない溝62・63のような溝が季節的な排水等で掘削された可能性はある。しかし、溝61のようなしっかりした溝が第6層中から掘削され、溝62・63もそれに概ね平行することからも、第6層が条里制以前段階を含む土壌化層である可能性は高い。

従来の調査では条里制施工以前と以後の境には志紀遺跡の各地で明瞭な洪水砂層が確認され、奈良期洪水砂などと呼称されてきていた。しかし、3区ではこの洪水砂層の上面で飛鳥時代の旧地表面が検出された（3区第4面）。結果、洪水砂層の時期は奈良時代ではなく、古墳時代後期以降飛鳥時代と時期がやや古くなった。6B区の調査ではこの洪水砂が明瞭には確認できず、後述する下面の第8面水田が古墳時代の中期的なのか後期的なのか単純には決め難い。しかしながら周辺との対応関係からとりあえず第8面を古墳時代後期とし、今回「仮称6－3面」とした面は条里施工以前の飛鳥時代と推定しておく。

時期

第5・6面のベース面であるという性格上、奈良時代半ばと言う時期が与えられるが、この第7層自体の形成時期、堆積時期は「仮称6－3面」の飛鳥時代を含む、古墳時代後期以降であると推定しておく。なお、この層は周辺の調査区で検出されている古墳時代後期頃に複数回あった洪水層に対応する可能性が考えられる。

第7層出土遺物（図285）

第7層からは須恵器、土師器、弥生土器、石製品、モモ核が出土している。

6202～6206は土師器。6202は皿である。見込み部分に斜放射状の暗文を施す。底部にはユビオサエの跡が残る。6203は杯Bの高台部分である。内面には斜放射状の暗文、見込み部分には4重の螺旋状暗文が施されている。外面にはわずかではあるがヘラミガキがなされているのが観察できる。6204は鉢。体部にユビオサエの跡が見られる。6205は椀。6206は高坏の脚部である。

6207～6212は須恵器。6207～6209は杯身。6208、6209は口縁端部に内傾する面を持ち、ケズリの範囲も非常に狭い。MT15型式。6208は底部にヘラ記号をもち、口縁部にヘラでつけたような線がみられる。6210、6211は杯蓋。6210は口縁部と体部とを分ける稜が見られない。口縁端部内面にはわずかな沈線が巡る。6211は天井部を丁寧にケズる。6212は壺の蓋か。

6213～6215はサヌカイト剝片（表45参照）。いずれも調整剝片と思われるが、6213に関しては打面側に二次調整が見られる。6216はサヌカイト製石鏃である。長さ5.65cm、重さ3.7g。

杭列について ここで、杭列について一部上述した部分を除き、まとめて記しておく。杭列は、第3

面～第6面が多く検出され、その多くが坪境部分からの検出である。その分布状況、打設深度は図286に模式図として記したとおりである。この図を見ると、東西方向坪境については、東側が深く、西側が浅いという傾向が見られる。およその深さの目安として、T.P.+8.8m前後までの打設、T.P.+8.5m前後までの打設の2つを挙げておく。すると、前者は西側に多く、打設箇所が第4面の一致する部分が多く、後者は東側に多く、打設箇所が第5面に一致する部分が多いことがわかる。このことから、前者は第4面坪境畦畔に、後者は第5面（もしくは第6面）坪境北側畦畔に、それぞれ伴う打設の可能性が高いと考えられる。なお、これらは畦畔の補強もしくは構築の際の目印等の可能性が考えられる。

一部ではさらに深いT.P.+8.0mにまで及ぶ打設も見られる。西側のそれは、第7面で検出された土坑に伴うものであり、「仮称第6-2面」とした面の杭である。また、第7面検出溝64から約31mの位置に見られる一本のみの杭も同面に伴う可能性が考えられる。この段階の坪境は溝であり、前者は、灌漑施設に伴うものの可能性が、後者は目印の可能性が、それぞれ考えられる。

また、南北方向坪境であるが、坪境交差点以北については、第5面坪境と位置的に一致することから、第5面坪境畦畔に伴うものであろう。一方の坪境交差点付近の杭列（図287）であるが、これらの杭列の性格として、以下の可能性を示唆しておく。まず、杭列の打設深度からこの杭列が第5面に伴うとして、この箇所は両側の坪境畦畔が低まっている位置にあたる。このことから、この場所に堰を作って水を両側に引き込んだ可能性がまず考えられる。水自体は北から流れてきておりこの場所に杭を打設することにより上記の成果は達成できそうだが、この地点は東から徐々に低まってきており、水を東に回すのは困難な可能性が考えられる。次のこの杭列が上面に伴うとすると、溝廃絶後の第4面坪境畦畔の補強材の可能性も考えられる。杭列が深く打設された理由として、前段階にこの部分が溝であり、深く打設する必要があったとも考えられる。図287に見られるように、溝部分の杭列の分布が比較的粗であり、列状を明瞭に成さないことから、後者の可能性が高いと思える。

なお、杭列の中には横木をかませるものもあった。これらは、いずれも第5面（もしくは第6面）に

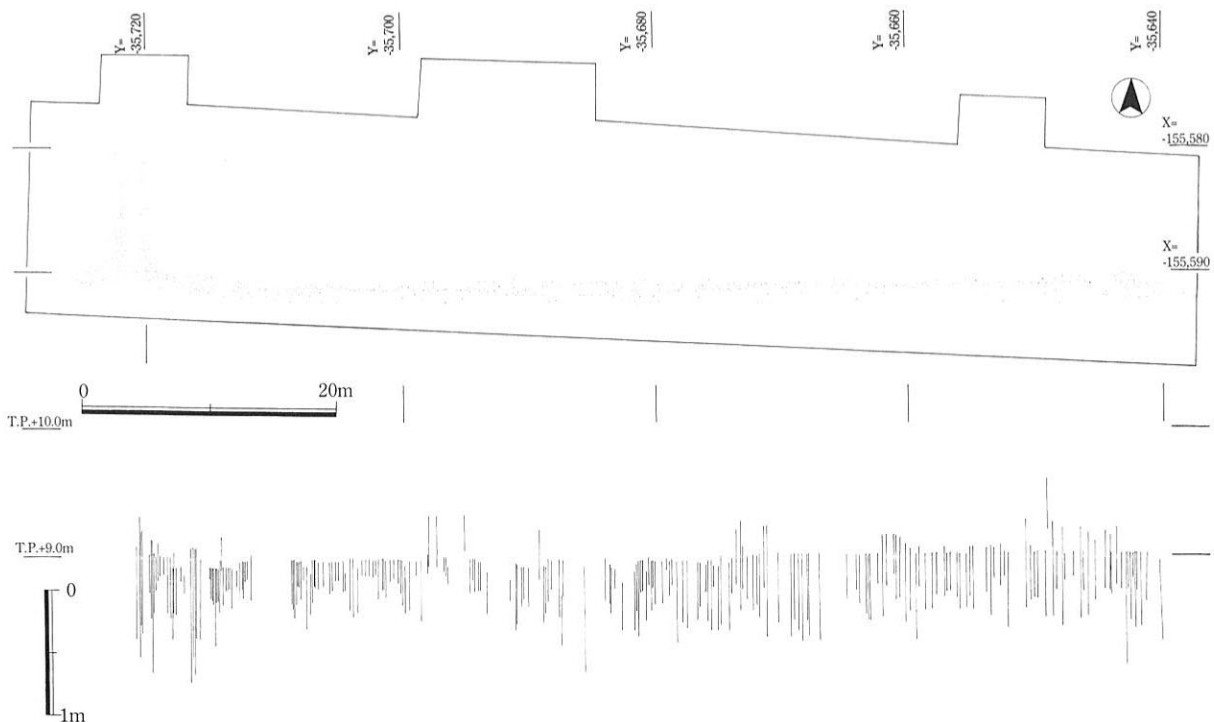


図286 6B区杭分布状況と打ち込み深度模式図



図287 6 B区第6面時坪境交差点の杭列（第5面畦畔合成）

伴うものであり、坪境の畦畔を構築する際に用いられた工法であるとも考えられる。ただし、多くの横木は検出した段階でもろくなっており、明確に確認、図化できた以外にも存在していた可能性が考えられる。

次に杭列に使用されていた木材について述べる。杭には図289の6217～6220のような丸杭が主に使

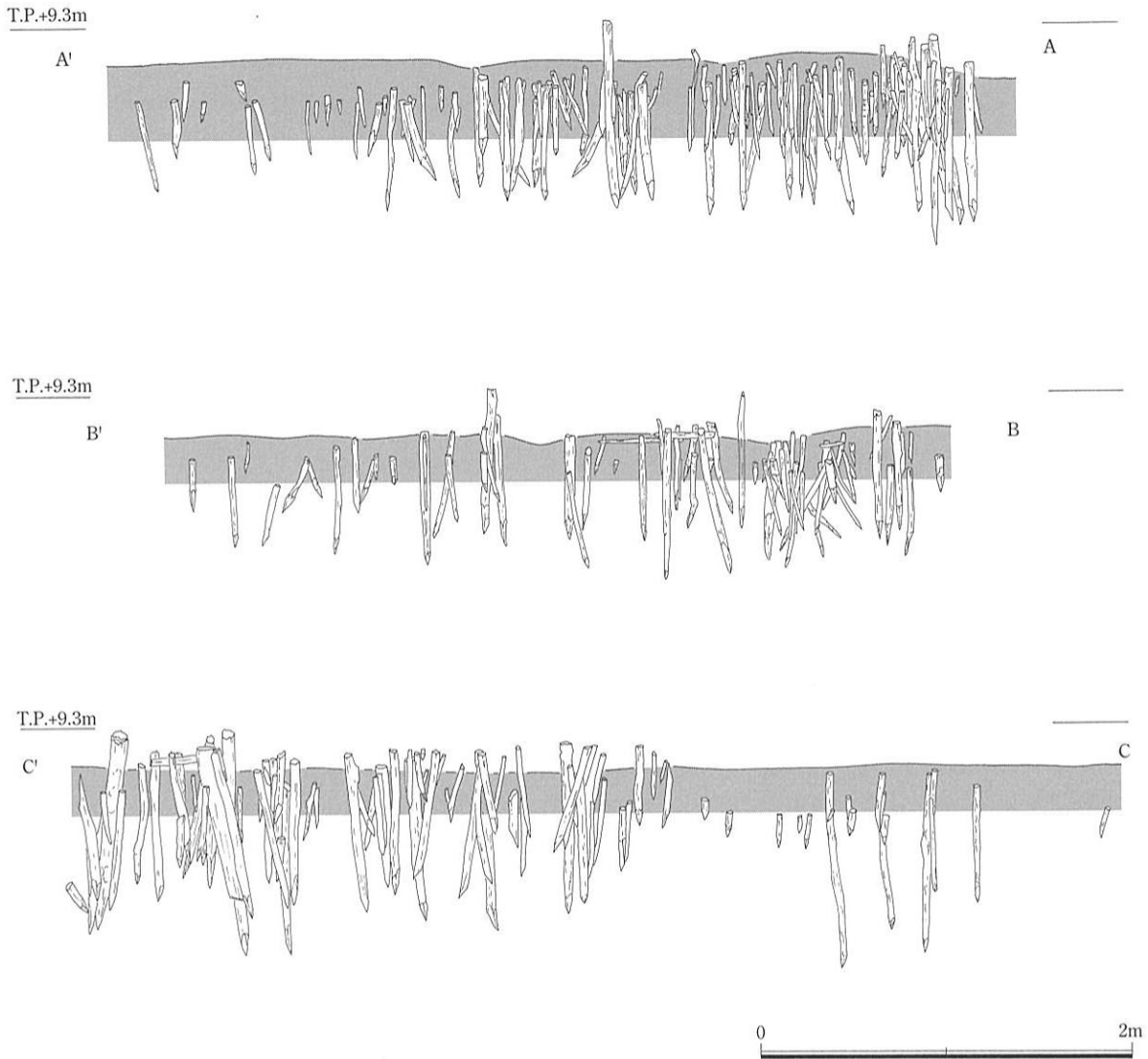


図288 6B区図287杭群

用されており、太さもまちまちであった。丸杭はほとんどのものが外皮を残しており、小枝を打ち落としただけで木の枝をそのまま使用していた様子が窺える。先端部分については、加工の仕方が3種類ほどある。一つは先端を片面切り落としたもの、一つは先端を両面切り落としたもの、そして先端を鉛筆のように多面的に切り落とし尖らせたもの、である。量的には圧倒的に多面的に切り落とし尖らせたものが多い。丸杭に使用されていた樹種はマツ科、サカキ、ヒノキ、コナラ亜属、スギ、ヤブツバキ、アカガシ亜属であった。

丸杭以外にも若干加工木、焼木が見られた。それらを図289、290に掲載した。6222は焼けた（アミ部分）杭である。カツラ。6223～6229は何らかの部材の転用か。アカガシ亜属、コナラ亜属。6230は第2面で検出された竹の杭である。

石について 次に、各面で出土した石についてであるが、3～7面検出段階に出土し、特に3面から5面段階で多く出土し、位置的には坪境部分からの出土が多い（図291）。各石は必ずしも現位置を保っているとは考えがたい為、各面の記述では距離的、出土層位的な考慮を加え、どの面に伴うかを推定した。総体的にこれらは、坪境の交差点を意識しその構築の際に目印としたもの、坪境の畦畔を構築する際に目印としたもの、坪境から派生する畦畔を構築する際の目印としたもの等の可能性が示唆できた。

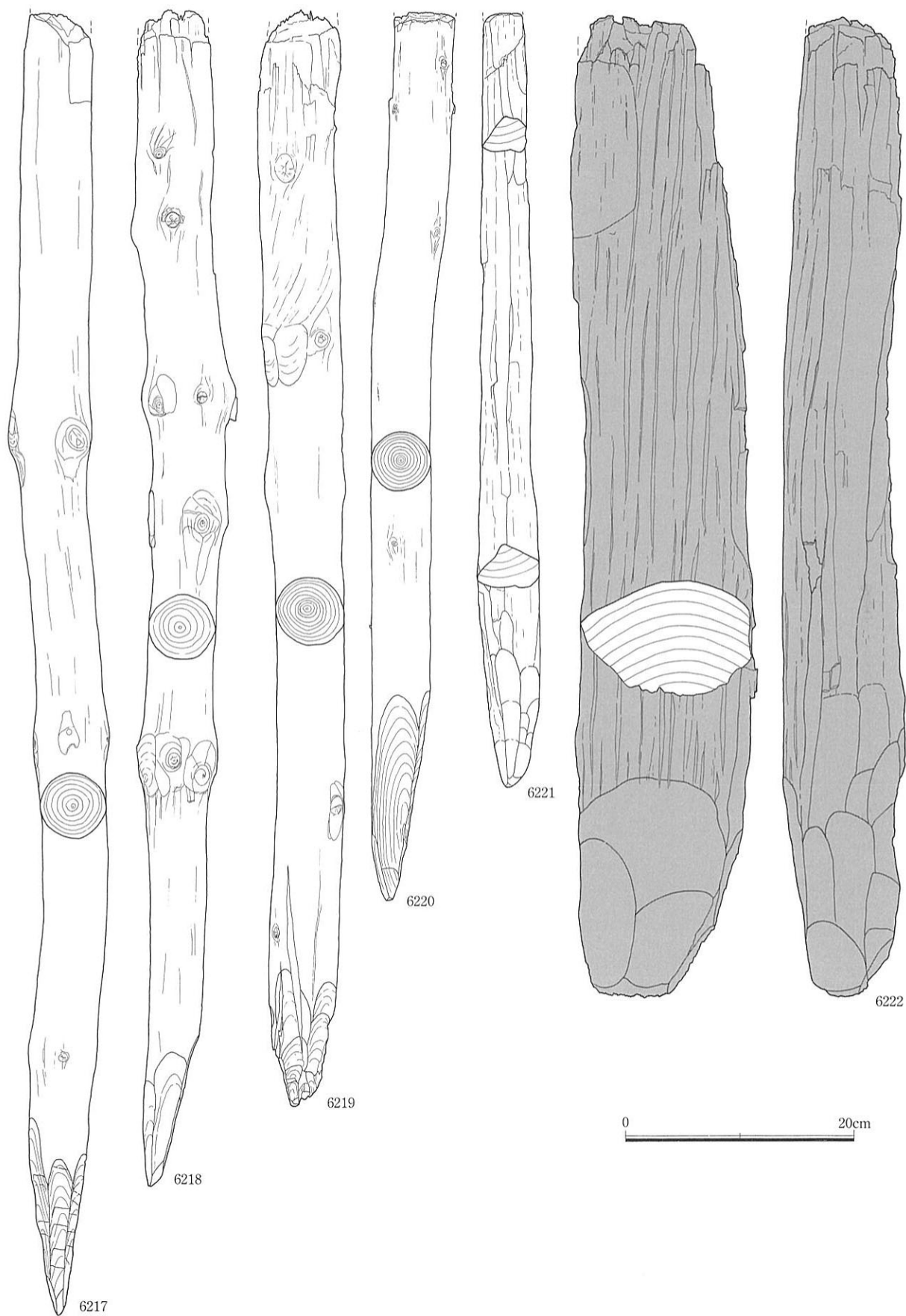


図289 6 B区杭群出土杭(1)

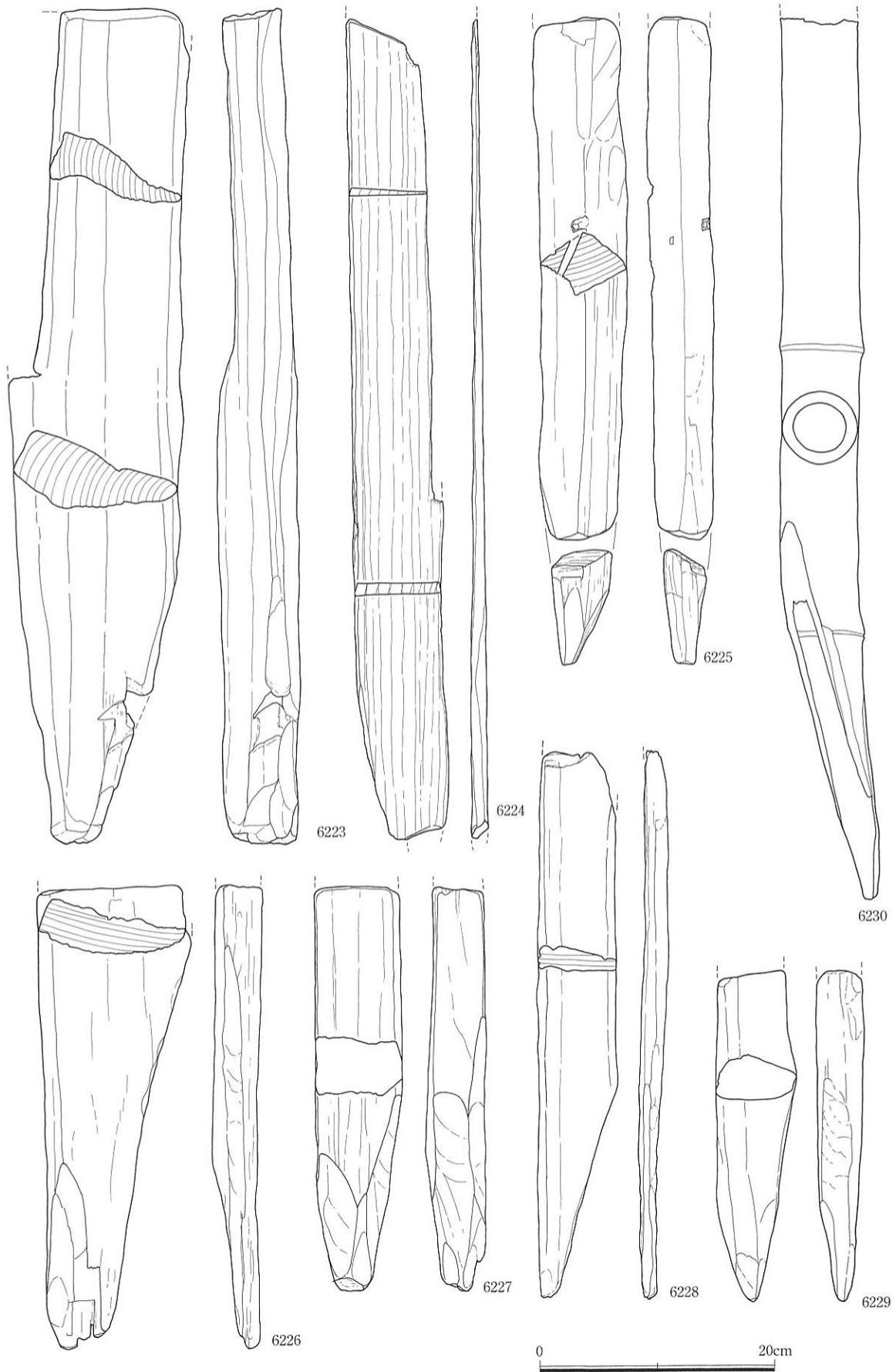


図290 6B区杭群出土杭(2)

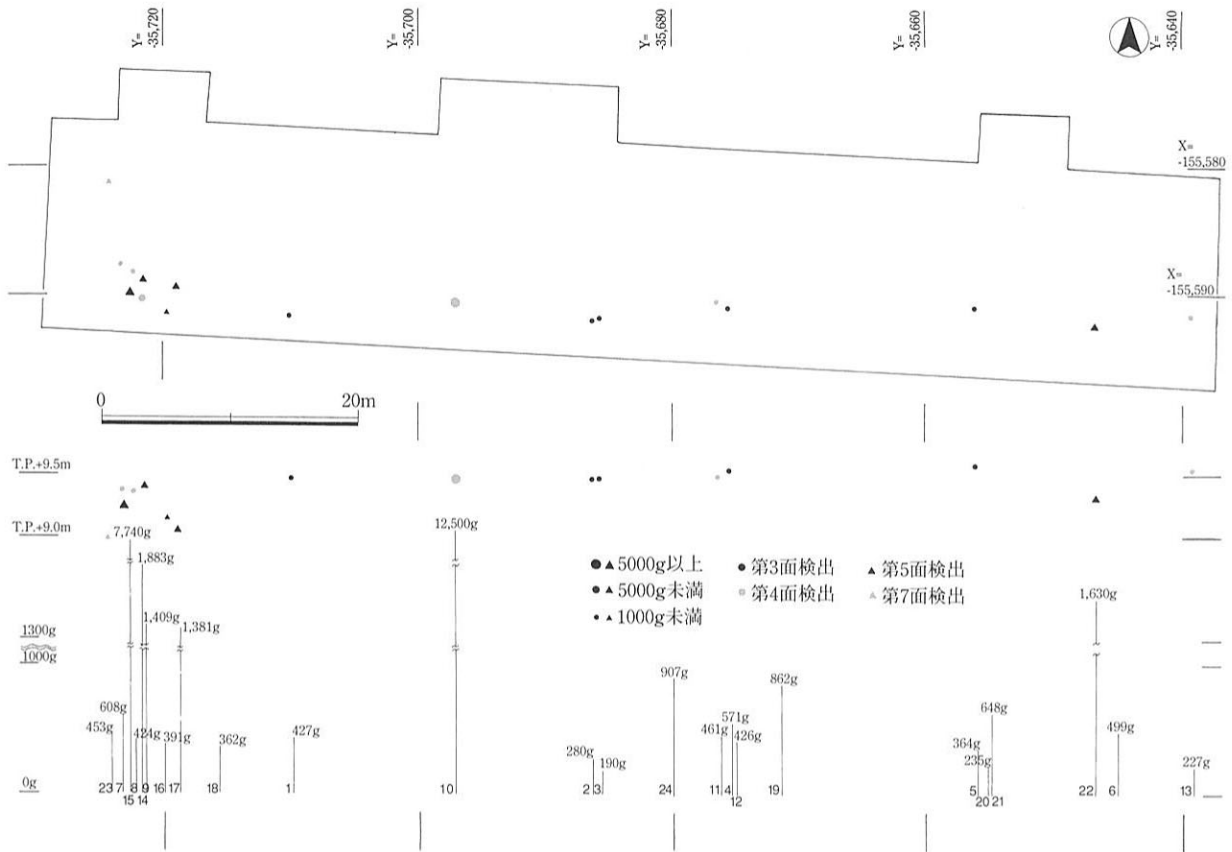


図291 6 B区石出土状況と重さ模式図

第8面 (図292)

概要

第7層の粘質シルト層を除去し検出されるのが第8面である。面の高さは、T.P.+8.64~8.95mで、基本的な地形の傾斜は南西が高く、北西が低い。遺構は地形に沿う大畦畔、畦畔、溝、高まりが検出されたが、一部の畦畔は痕跡で確認できた程度である。なお、当面に限った呼称として、後述する第8面検出大畦畔を西から大畦畔A・B・Cとそれぞれ呼称する。

遺構

調査区内では大畦畔が数条検出されている。まず西側で検出された大畦畔Aであるが、幅1~1.5m、高さ3cm前後である。幅は通常の畦畔よりも広いものの、高さはあまりない。しかし、周辺の畦畔も高さがあまり無く、この大畦畔Aを境に東西で水田の区画が異なることから大畦畔と認定してよいものと考えられる。大畦畔Aの西側の水田域、トレンチ南西端では溝66が検出されている(図293)。幅1.2m、深さ28cm。大畦畔A西側水田域で高い箇所への掘削であり、検出箇所では水田域への水口は検出されていないが、この水田域や北西方向水田域への用水路であったと考えられる。各水田は基本的に溝66が検出された南西が高く、北西に向かい低くなる。また、大畦畔A東側の各水田も、後述する大畦畔Bに向かい低くなる同様な傾斜を持つ。調査区中央部では大畦畔Bが検出された。幅0.7~0.8m、高さ9cm前後。北側の5区で検出された西側の大畦畔の延長と考えられる。また、大畦畔Bが調査区南側で南北方向に屈曲することから6C区大畦畔55の延長である可能性が考えられる(図295)。また、6C区大畦畔西側で検出されている溝57の北西部分は低まっており、この部分で水田が検出されていることから、6B区の大畦畔B以西がこの低まりの延長であると考えられる。さらにこの低まりと西側の高まりの縁辺

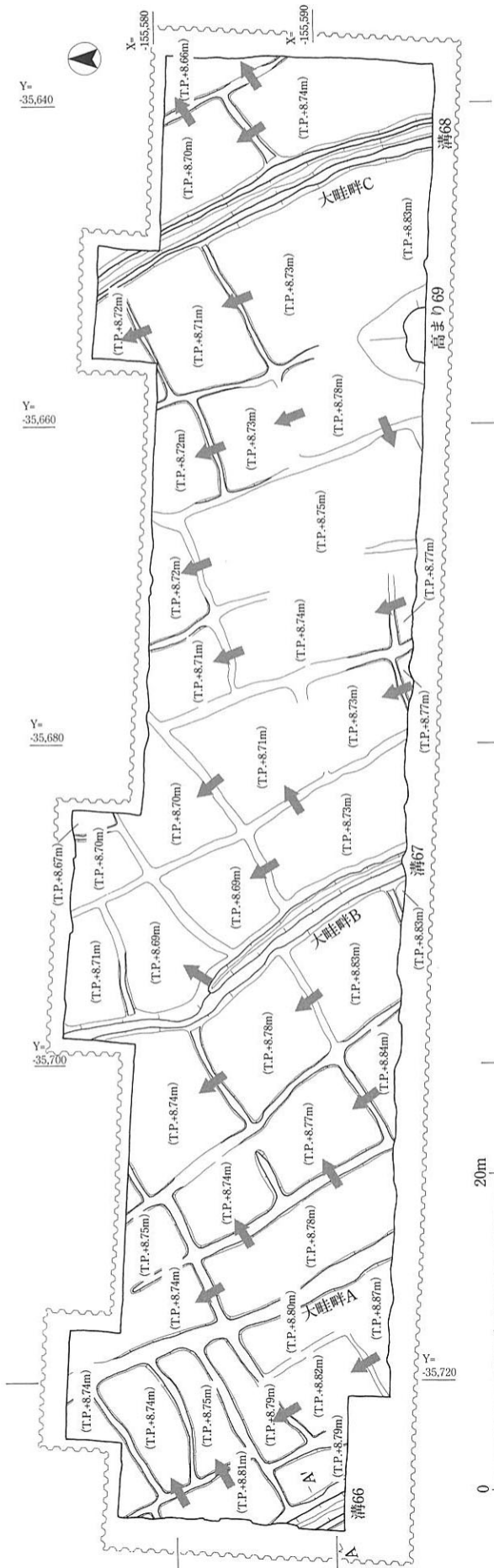


図292 6B区第8面

もしくは削平された高まり上に6B・6C区間以西で築かれたのが溝66であり、調査区外北西方向の水田域への用水路だったのだろう。大畦畔Bの東側では溝67が、またすぐ東では大畦畔と溝に平行し、途中で大畦畔に接続する畦畔が検出された。溝67は、幅0.7~0.9m、深さ20~30cmで、南から北へ低くなる。溝は途中で大畦畔と畦畔にぶつかり、この部分から東側の区画に水を流し込んだものと考えられる。なお、大畦畔Bを境にして西側が平均約8cmほど高く、両水田域には比較的明瞭なレベル差がある。また、大畦畔B以東の区画は単純に一定方向に地形が下っているのではなく、高まり69を境に東側と西側への傾斜が見られる。高まり69は、第9層堆積段階に形成された砂の高まりを契機としている。高まりは調査区外南~南南東方向に伸びるものと推定できるが、南側の6C区では高まりの延長は検出されておらず全体の形状は不明である。この高まり69周辺の水田は周辺に比べレベルが高いが、この高まりが調査区外ですぐに収束するような、島状の小さいものであれば、後述する溝68から水を回すことは可能であると思われる。なお、大畦畔B東側では畦畔が痕跡でしか検出されなかった箇所があるものの、痕跡で検出された各水田にはレベル差があり、水回しは概ね復元できる(図292矢印)。また、痕跡でしか検出されていないが、高まり69から派生する畦畔も検出されている。調査区東側では溝68と両側に畦畔が見られる畝畝が検出された。これらを総括して大畦畔Cと称しておく。5区東側の大畦畔の延長と考えられる。5区ではその南端部分で畝畝状になっており、今回検出された溝68の北端がそれに相当すると思われる。大畦畔Cを挟んだ東西の各区画のレベルは高まり付近を除き大きな差はないが、大畦畔東側の区画は北東の水田が低くなっており、6A区第11面も同様なレベルとなっている。溝68から東への水口状施設は確認

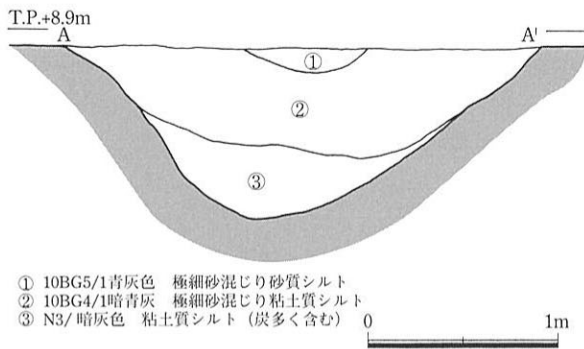


図293 6 B区溝66断面

されていないが、調査区外南側で東側へ取水し、北東方向へ水を回していたものと考えられる。なお、溝68は幅1m、深さ10cm前後。その両側の畦畔はやや太めで、幅0.3~0.5m、高さ4cm前後。

時期

第7層からは、古墳時代後期~律令期の土器が出土している。しかしながら、第8層から出土する土器は、後述するように弥生土器がほとんどであり、わずかに古式土師器の破片と混入の律令土師器が見られるのみ

であり、時期的にやや乖離が見られる。第8面直上から出土した遺物はなく、第8面の廃絶時期を特定する遺物には恵まれなかったため、大雑把な時期比定にならざるを得ない。出土遺物や周辺の調査区との対応関係から古墳時代として、後期の可能性を示唆しておく。

第8層出土遺物 (図294)

第8層からは、須恵器、土師器、弥生土器、石製品が出土している。

6231・6232は弥生時代中期の甕である。6233は高杯の脚部。6234はサヌカイト製石器である。91.8g。片側縁部を加工している。なお、図化し得なかったが、古式土師器の破片が5点と、混入と思われる律令土師器が出土している。

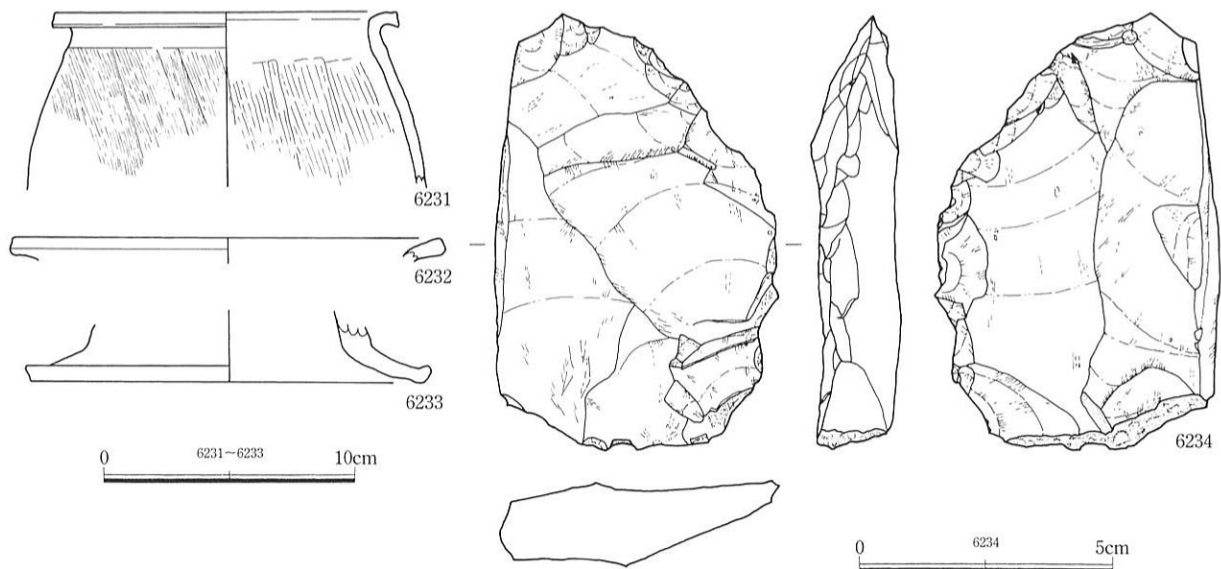


図294 6 B区第8層出土土器・石器

第9面 (図296)

概要

第8層の土壤化層を除去し、検出される面である。面の高さはT.P. +8.62~8.75m。遺構は、溝と落ち込みが検出され、いずれも第8層の下面遺構である。第8面で溝68が検出された直下部分は、濃い緑色を呈していた。また、第8面で高まり69が検出された直下及びその北東側では第9層の中間で見られる砂が広範囲に露出していた。第9層の堆積の中間段階にこの地に供給された砂によって形成された高

第6部 6B区の調査成果



図295 5区・6区遺構合成図（古墳時代）

まりを第8面段階で高まりとして利用していたのであろう。他にも、砂が露出している部分はあったが、若干にとどまる。

遺構

調査区西南端では溝70が検出された。溝の一部を検出したのみであるが、北西-南東方向で地形に沿う溝である。幅1m、深さ30cm。埋土は上層が粘質シルト、下層が極細～細砂。第8面では溝70の直上で溝66が検出されており、第8面の初源の段階からこの場所で溝が掘削されていたと考えられる。調査区中央部では溝71・72・73・74が検出されている。溝71は北西-南東方向に掘削されているきわめて浅い溝である。幅0.5m、深さ10cm前後。第8層下部に見られる炭を含み、黒色を呈する層を埋土とする。北側に向かい浅くなり溝も検出されなくなるが、可能性として後述する溝72にとりついていた可能性も考えられる。溝72は北西-南東方向に掘削されている溝で、途中で方向を変える。幅0.7m前後、深さ30cm。南側は第8面溝67の直下にあたり、北側の方向を変えた部分からは第8面大畦畔の直下にあたる。中央部分がU字状を呈する以外はV字状の底面を持つ。埋土は、上部に第8層下部の炭を多く含む層が落ち込んでおり、その下層に青色を呈する層、最下部にやや黒色を呈する層が見られる。溝73はほぼ南北方向に掘削されている浅い溝で、第8層の炭を多く含む層を埋土とする。この溝のみ、第9面で検出された溝の中で掘削方向が異なるが、埋土は他の溝と明瞭な差は見られなかった。幅30～40cm、深さ3cm。溝74は北西-南東方向に掘削されている浅い溝で、第8層の炭を多く含む層を埋土とする。落ち込み75は、調査区の南東隅で検出された不定形な落ち込みである。他の溝同様、第8層を埋土とする。深さは20cm前後。

時期

第9層から出土した土器は弥生土器が殆んどで、土師器は1点出土しているのみである。ま

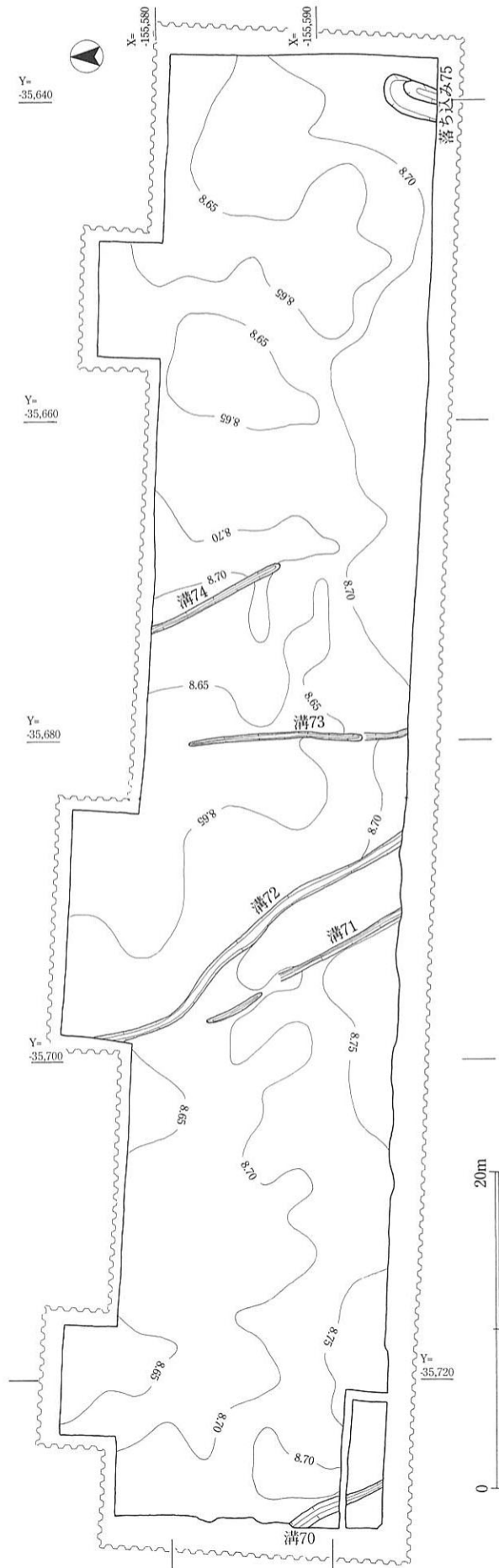


図296 6B区第9面

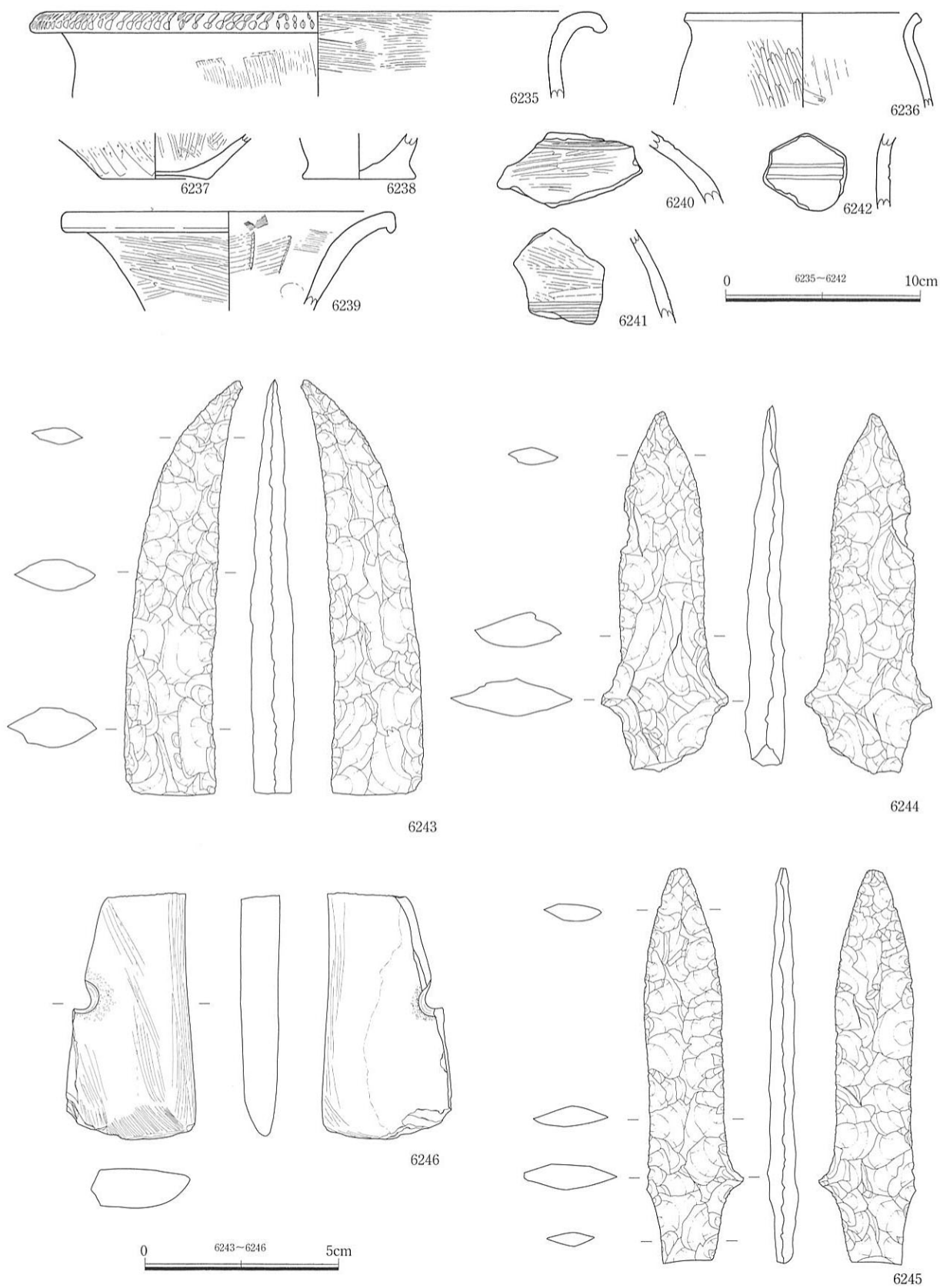


図297 6B区第9層出土土器・石器(1)

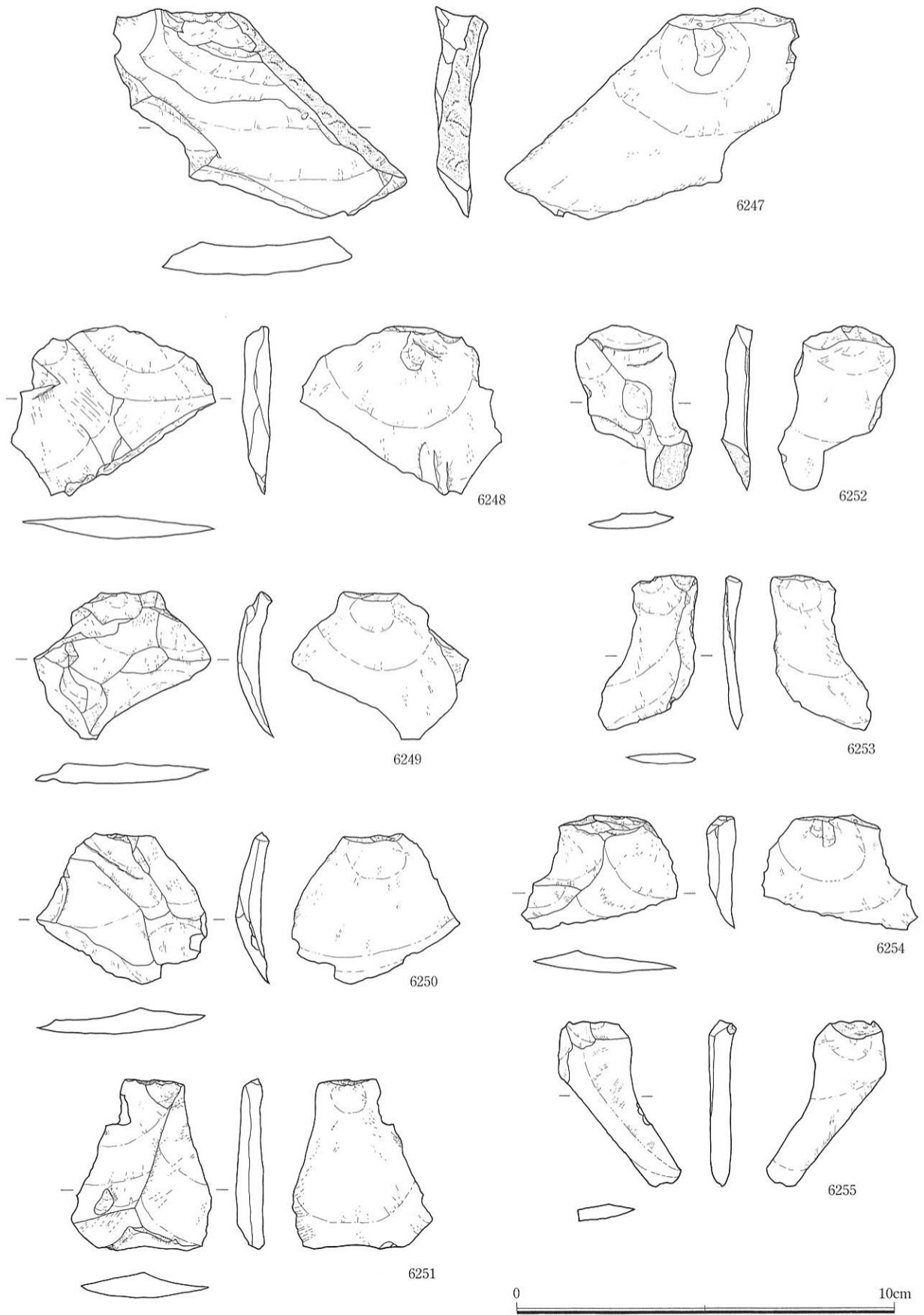


図298 6 B区第9層出土石器(2)

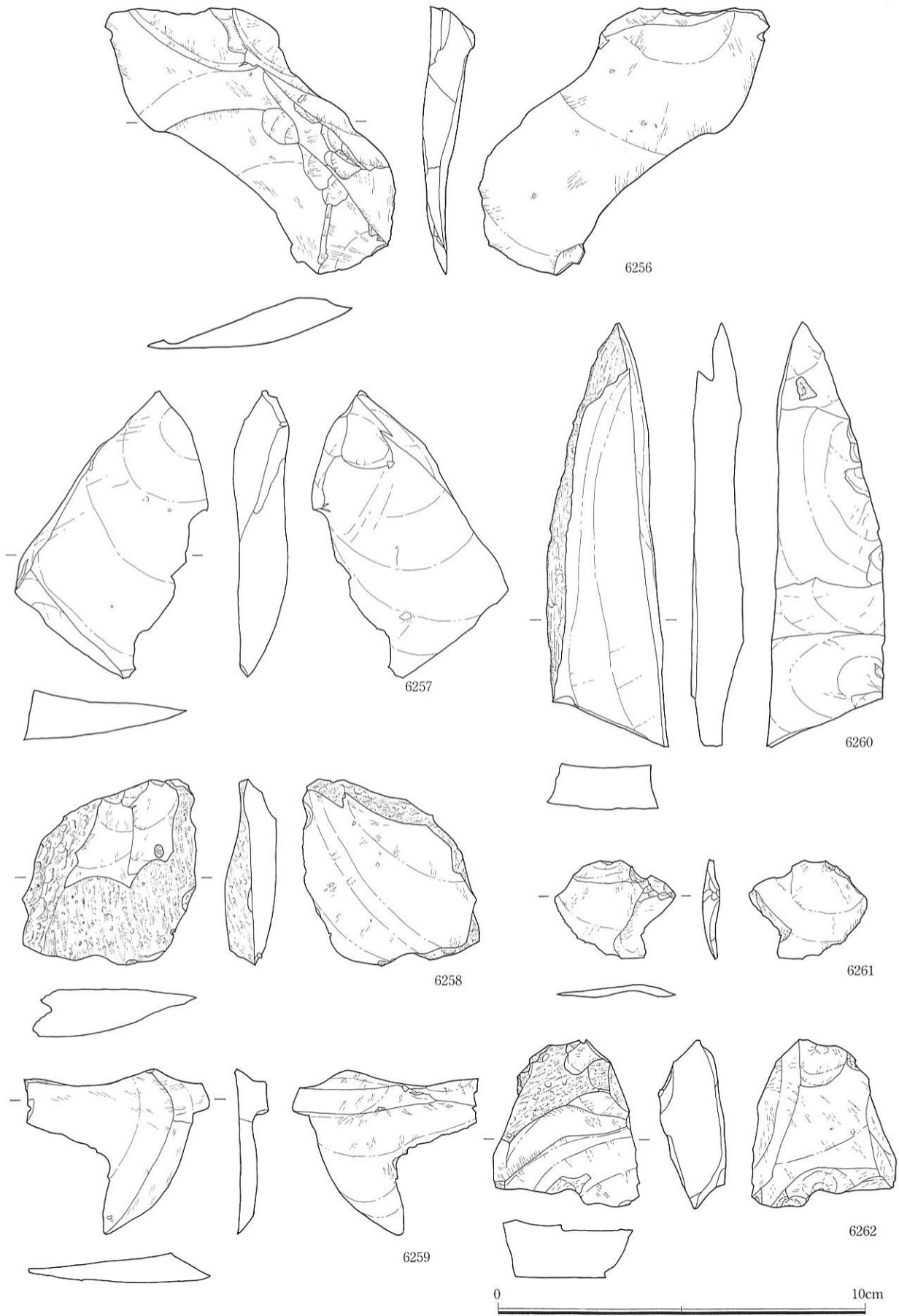


図299 6B区第9層出土石器(3)

た、前述のとおり第8層から出土した土器は弥生土器を中心に古式土師器までである。第10面は後述するが、弥生時代前期末～中期初頭の面である。このことから、第9層の堆積は弥生時代～古墳時代（前期?）であり、その上層が作土である第8層で、その上面が古墳時代の旧地表面であったと考えられる。

第9層出土遺物（図297～299）

第9層からは主に弥生土器が出土した。6235～6242は弥生土器である。6235～6238は甕。6235は口縁端部に刻み目をもつ。外面をタテハケ、口縁内側をヨコハケする。山城系。6237は外面を縦方向に削っており、内面はタテハケを施す。また、底部外面も丁寧に削っている。6239は壺。外面は丁寧にミガキ、内面は荒いヨコハケを施す。6240・6241は壺の肩部か。6242は甕の口縁部と思われる。

6243～6245はサヌカイト製石器である。6243はいわゆる石小刀か。基部には自然面を残す。長さ10.6cm。重さ26.6g。6244・6245は尖頭器。下半には両側縁に突起を持つ。基部は折れてしまっている。全長9.2cm。重さ21.8g。6245は6244に比べるとやや細身で薄型であるが基本的な形態は類似する。下半に突起をもつ。片方の突起は欠損している。また、先端部分も欠損している。長さ10.1cm、重さ16.1g。6246は石包丁を転用した石斧である。石材は雲母石英片岩。

6247～6262はサヌカイト剥片である。6247～6255は打点、打面が明瞭にわかるものである。6254、6255は自然面を打面としている。いずれも調整剥片である。なお、各々の計測値については表45を参照されたい。

第10面（図300）

概要

第9層を除去し検出される面である。なお、第9層は第2章で記したように、上層の粘質シルト、中層の砂混じり砂質シルト、下層のシルト～極粗砂の3層に大きく区分される。面の高さはT.P.+8.22～8.54m。第10面は黒色を呈する層の上面で、志紀遺跡一帯で前期末～中期初頭の遺構面が検出されている。今回の調査でも水田が良好に検出された他、溝、上層掘削の土坑等が検出された。

遺構と遺物

前述のとおり、第10面では第9層の下面遺構をはじめ、第10層の一部で見られるブロックを多く含む層（以下ブロック土）を除去し検出される溝など面の時期ごとの景観がやや複雑であるので、大まかな時期ごとに遺構・遺物をまとめて記述することにする。なお、溝の一部では地震の痕跡が確認できる。

第9層下面遺構 第9面の調査を終了した後、第9層を掘削中に土坑85・86が検出された。当初、同一の不定形の土坑として平面プランを確認したが、掘削を進めた結果、接した2つの土坑であることが判明した。いずれも、基本的に粗粒の砂が混じる層を埋土とすることから、第9層の中層段階に掘削された土坑であると考えられる。土坑85は長径2.2m、短径1.1mの長楕円形の土坑で、深さは30cm前後である。弥生時代中期後半の土器片が出土した。土坑86は径1.8mのほぼ円形の土坑で、深さは70cm（図302）。弥生時代中期後半の高杯の坏部のほか、同時期の土器片が出土した。両者の埋土は、遺物が含まれていた最上部の堆積が同一で、土坑86はさらに下層に有機物を含む粘質シルトが埋土として見られた。

この他に、土坑84、ピット87～100、溝78～83も下面遺構である。

土坑85・86出土土器（図301） 6263は土坑86から6264～6266は土坑85からの出土である。6263は

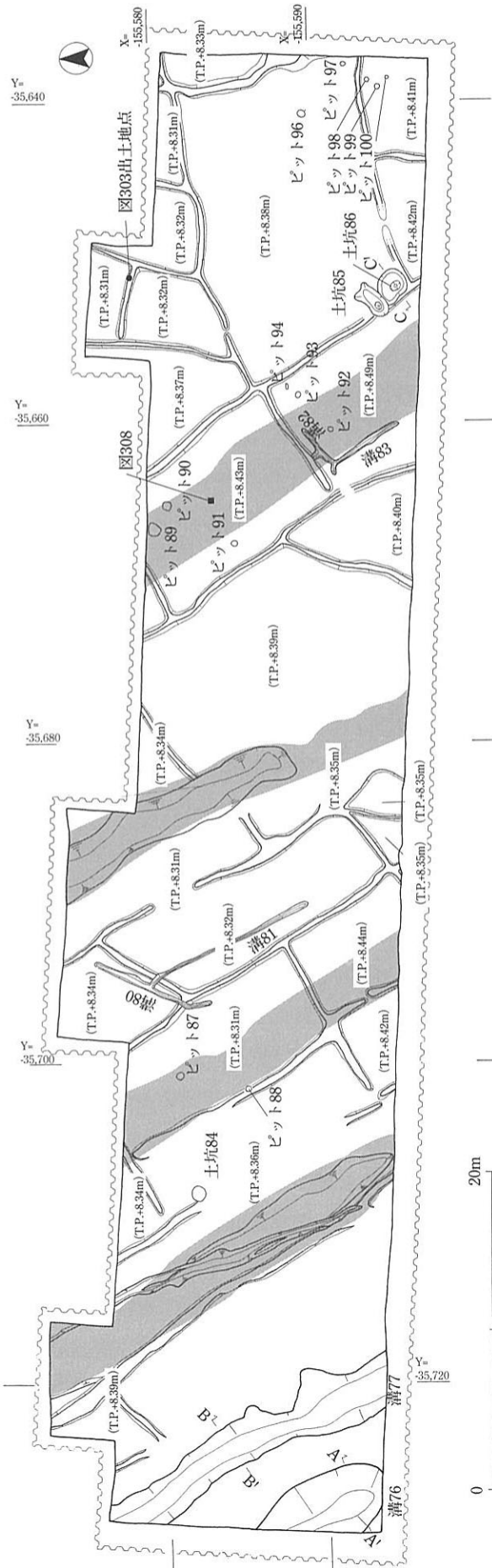


図300 6B区第10面

水平口縁を持つ高坏である。端部は垂下するが全体的にシャープさはみられない。内面には板ナデのあとがみられる。IV-3 様式か。6264は鉢か高坏。口縁直下に凹線が巡る。6265は鉢である。外面には横方向のミガキが、内面には放射状にハケが施される。胴部にはわずかだが籐状文が見られる。IV-3 様式。6266は水差し形土器の把手部分である。2重の刺突を施す。

第10面最終景観段階の遺構 第9層を除去した第10面最終景観段階には、各調査区で検出され、後述するような溝は検出されなかった。いずれの溝も埋没した状態であるのが第10面の最終景観であり、ブロック土により最終的に埋没し、溝はほぼ畦畔間に収まるように掘削されている（図300トーン部分）。

第10面廃絶段階に伴う遺構としては畦畔と溝が挙げられる。各畦畔は上面と同様の北西-南東方向を幹線としているが、調査区北東ではやや軸が異なる畦畔も検出されている。畦畔の検出状況は、東側が良く、西側が悪い。調査区西側ではやや太めの畦畔は検出されたが、遺構の残りが悪い箇所であり、大畦畔であるとは断定しがたく、当面では大畦畔といえるような畦畔は検出されていない。調査区中央部は第9層途中に供給された洪水砂により抉られ、良好に遺構は検出されなかった。検出された水田面では水田Aが最も高く平均T.P.+8.49mを計る。基本的に南東が高く、北西が低い。なお、調査区東隅の畦畔はその途中から太くなる畦畔であり、この太くなった部分から数点の石器が出土している。このように、途中で太くなる畦畔は同様に水田遺構が検出されている池島・福万寺遺跡95-1調査区10a面でも検出されている。10面畦畔中（●）からサヌカイト製の石小刀が出土している（図303・6267）。残存長6.9cm、重さ11g。

調査区西端では溝が2条検出された。溝76（図304）は、ちょうど調査区の南で収束する溝

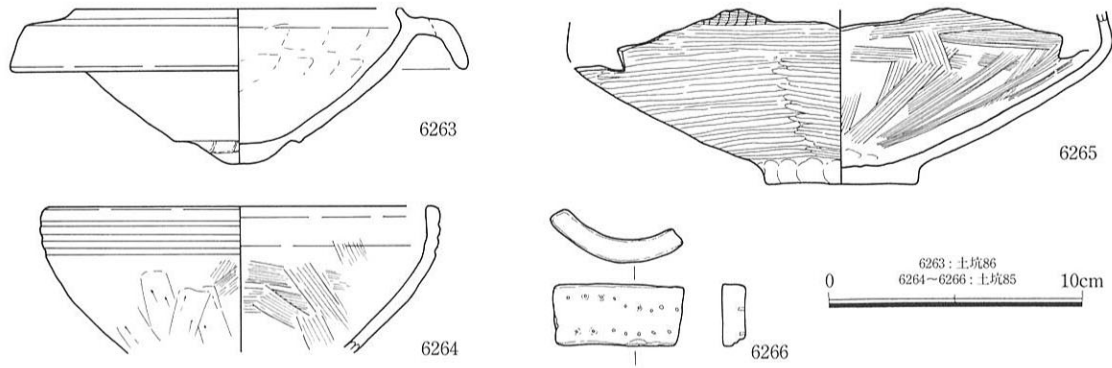


図301 6 B区第9層下面土坑86・87出土土器

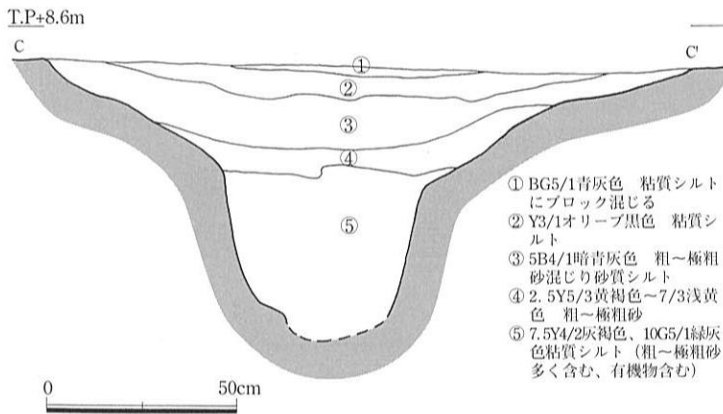


図302 6 B区土坑86断面

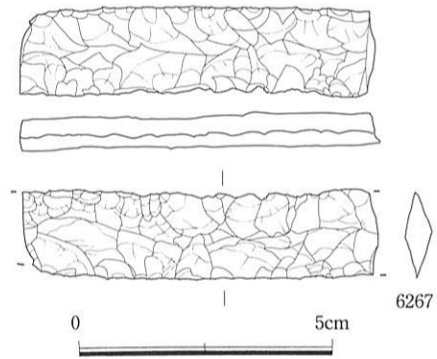


図303 6 B区第10面出土石器

で、幅4.5m、深さ70cm。溝下層には人為的な埋め戻しと考えられるブロックを含む層(⑫～⑮)がみられ、埋土下部は波状を呈し、地震の影響と考えられる。その上層にはラミナの見られる自然堆積層(⑦～⑩)が見られる。それらの層は基本的に上方細粒化の傾向が見られる。溝が直接河川などに接続していないと思われるにもかかわらずこのような堆積がみられることから、意図せざる洪水によりこの溝が埋没した可能性が考えられる。なお、これらの砂層には地震による変形は見られず、地震以後の堆積であろう。さらに上層には細かいブロックが混じる砂質シルト層(⑥)が見られたが、後述する溝101～103の最上部で見られるようなブロック混じりの層とは様相が異なる。溝に残したセクション(図304下)では、分層時に地震痕跡の認識がなかったこともあり確認されなかったが、西側の断面観察用アゼ(図304上)では地震による地滑りが明瞭に確認された。地すべりは、北側で第10層以下の各層がずり落ちており、その肩部には地震後の肩部の補修と思われる層が見られる。南側では幅約2.6mにわたり層がずれている。この部分は調査中の断面観察用アゼの崩落等により何層からずれているのかは確認できなかったが、南側の▼を境に層がずれ落ちた各層が北側の第14層に圧力をかけ第14層が上層に向かい変形しているのがわかる。なお、この溝からの遺物の出土はない。なお①～③は第9面溝70埋土、④は第9層下層である。

溝77は、溝76の東側で検出された溝で、最大幅4.5m、最小幅1.6m、深さ60cm前後(図305)。埋没状況は溝76に似るが、地震が起きたときの状況が若干異なるようであり、溝76ではブロック土→地震→肩部の補修→自然堆積であるのに対し、ブロック土と地震の間に自然堆積層(⑤)が見られる。この層は、地震による変形を受けている層であり、ラミナが乱れ、波状に変形を受けている。さらに上層にも自然堆積層が見られ、基本的に上方細粒化の傾向が見られる(②～④)。また、最上部には再掘削と思われる掘り込みも見られるが、部分的な土坑の可能性も考えられる(①)。なお、この溝からの遺物の

第6部 6B区の調査成果

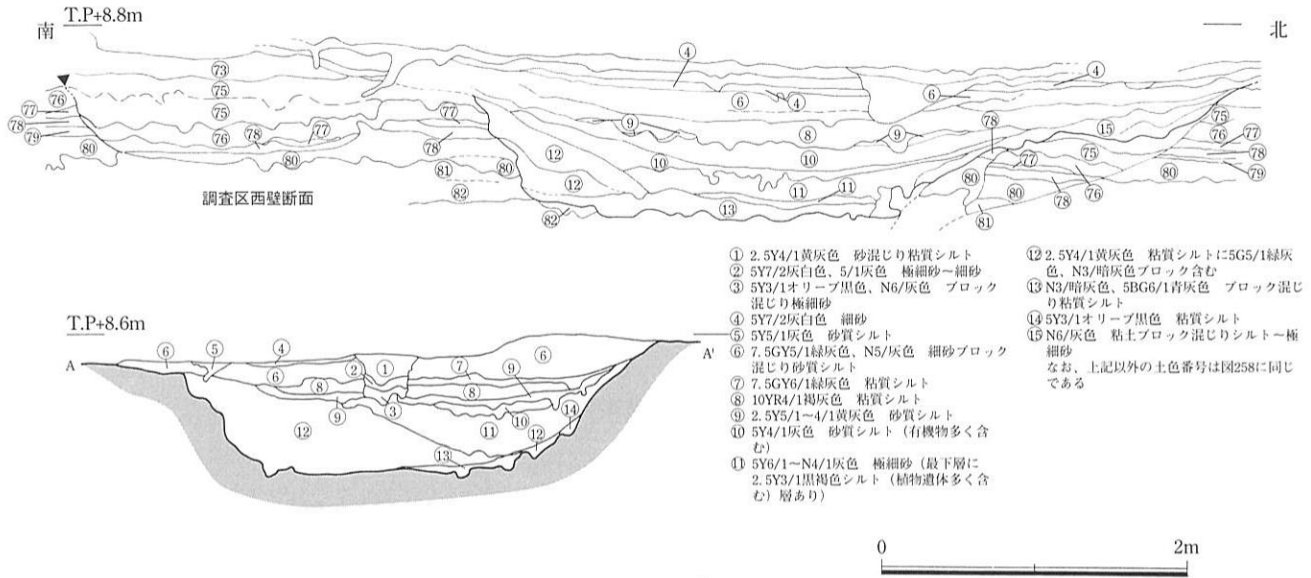


図304 6B区溝76断面

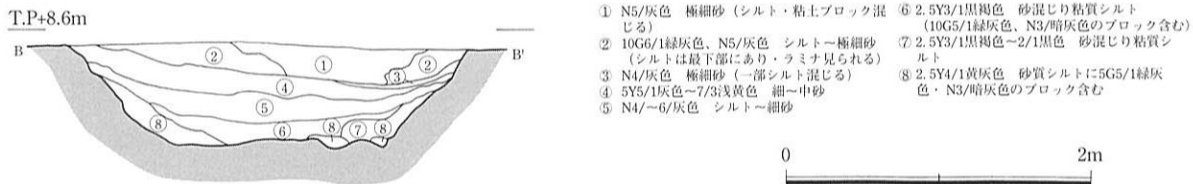


図305 6B区溝77断面

出土はない。

後述する溝101~104のうち104を除く各溝には地震による変形が見られる。溝76・77はそれらの溝と異なり、第10面段階にも機能していたものと考えられるが、その当初の掘削時期は溝104を除き、各溝ともあまり時期差はないものと考えられる。

各溝埋土最上部および、その周辺には前述のブロック土が見られた。以下で、このブロック土を除去し検出される遺構の記述をする前に、このブロック土中から出土した遺物について記しておく。

第10層ブロック土出土遺物 (図306~310)

第10層ブロック土からはサヌカイトの成品とサヌカイト剥片の集石とが出土している。サヌカイトの成品は尖頭器 (6268~6270) と石小刀 (6271~6277) の2種に大きく分けられる。6268は今回出土した尖頭器のなかでは最も大きく全長16.7cmを計る。先端部分はわずかに欠損しているが、基部は自然面を残しておりほぼ完形と思われる。刃部の中央部分が最も幅広く薄い。表面も裏面も向かって右側縁の剥離が非常にきれいになされている。重さ50.5g。6269はやや小ぶりであるが非常に丁寧な作りである。両端とも欠損。刃部は0.5~1mm前後の非常に細かい鋸歯縁である。両側縁とも裏面からの押圧剥離と考えられる。全長5.4cm、重さ5.4g。突起を境にして鋸歯縁を持つ側と持たない側に分けられる。このことから刃部とそれ以外との明確な意識の差というものが窺える。突起はその境界線の役割を担っているといえるだろう。6270は先端部分が欠損。全体の雰囲気は6268と非常によく似ているがやや小ぶりである。基部も折れているのだが、裏面から表面に向かってリングが見られる。折れたのか、意識的に折ったのかは判断しづらい。しかし、6268の石器を考える材料にすると、6268は基部の端部が自然面で

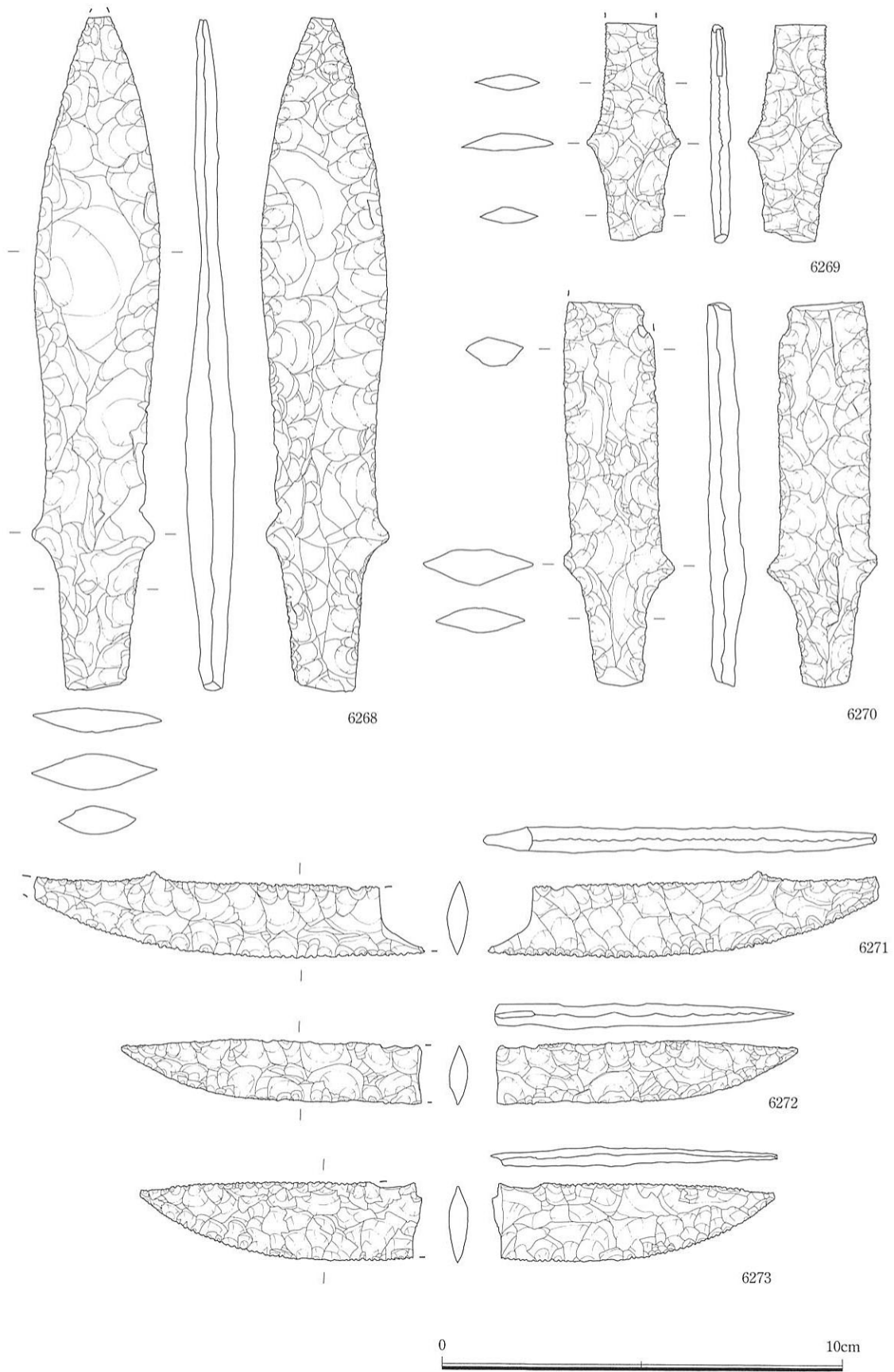


図306 6 B区第10層ブロック土出土石器 (1)

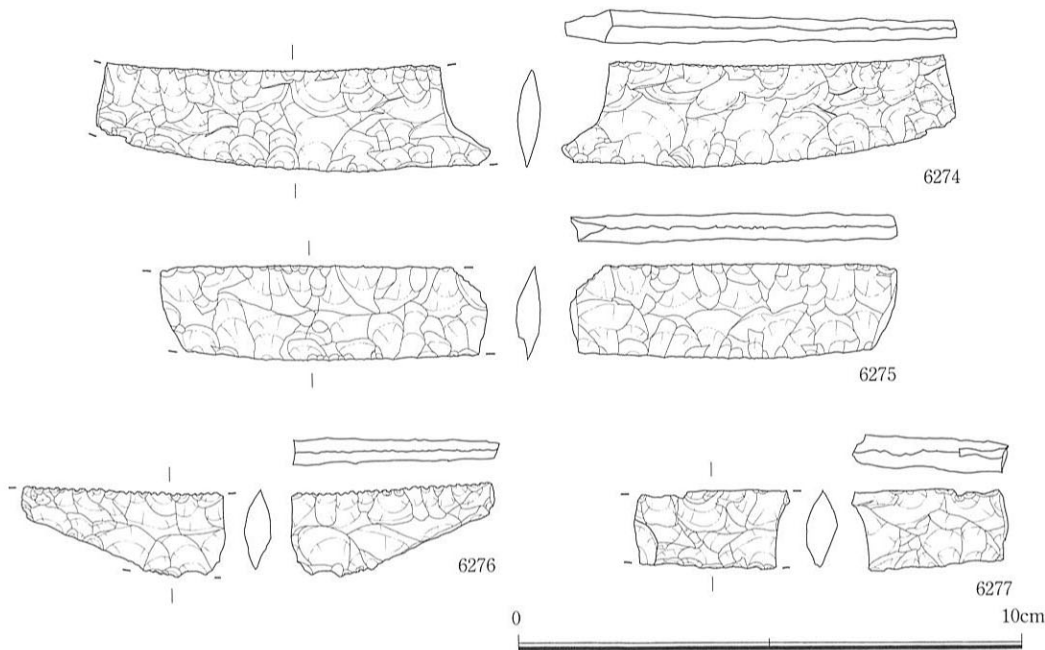


図307 6B区第10層ブロック土出土石器（2）

あるので本来の姿を残していると考えてよい。これを突起を持つタイプの尖頭器の一つの典型とし、その基部の長さ及び全長に占める割合を考えれば、この基部が折れたものなのか折り取られたものなのかの一つの根拠となり得るだろう。全長9.5cm、重さ23.1g。6271は内湾する側に突起を持つ。両側縁とも鋸歯縁である。先端に近い方は1mmピッチ、中央付近は2mmピッチで剥離している。先端、基部は欠損。残存長9.7cm、重さ11.7g。6272は内刃がほぼ直線。切先はきれいに残っている。残存長7.5cm、重さ6.9g。6273も内刃がほぼ直線。6272よりも幅広である。両側縁とも鋸歯縁である。おおむね2mmピッチで剥離している。切っ先はわずかに欠けている。残存長7.0cm、重さ6.8g。6274～6277は基部、切っ先ともに欠損しているが、石小刀である。6276は両側縁に鋸歯状の加工を施す。

また、図300の■ではサヌカイトの剥片が集中して出土した（図308）。

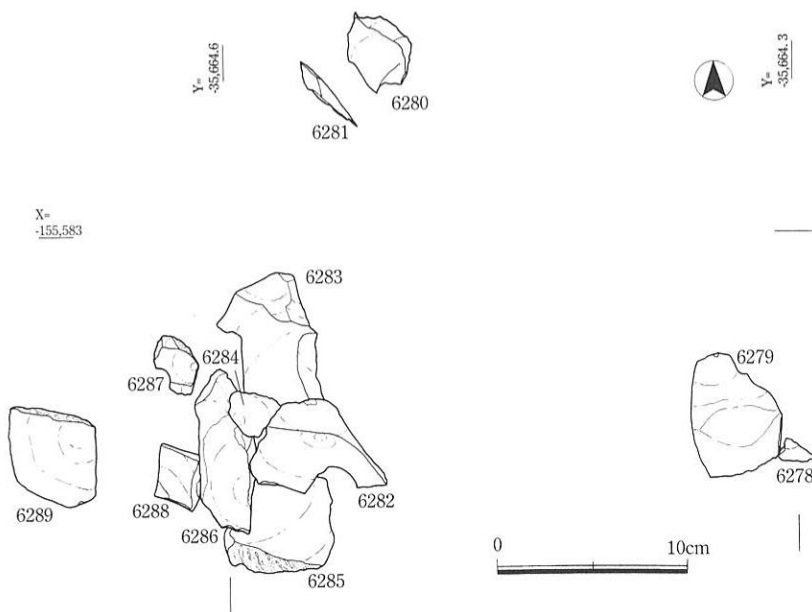


図308 6B区第10層ブロック土出土サヌカイト剥片集石状況

集石サヌカイト 6278～6289
は図308のサヌカイトである。各々の番号は対応する。6278はもともと6279と同一個体であったのだが取り上げ時に折れたものの。いずれも打点、打面がよく残っている調整剥片である。

第10面のある段階の遺構
前述のように、第10層は大きく2層に細分でき、以下で述べる各遺構は、その上層のブロック土を除去し検出された溝である。本来は、第10層上層としたブロック土を除去した段階で、

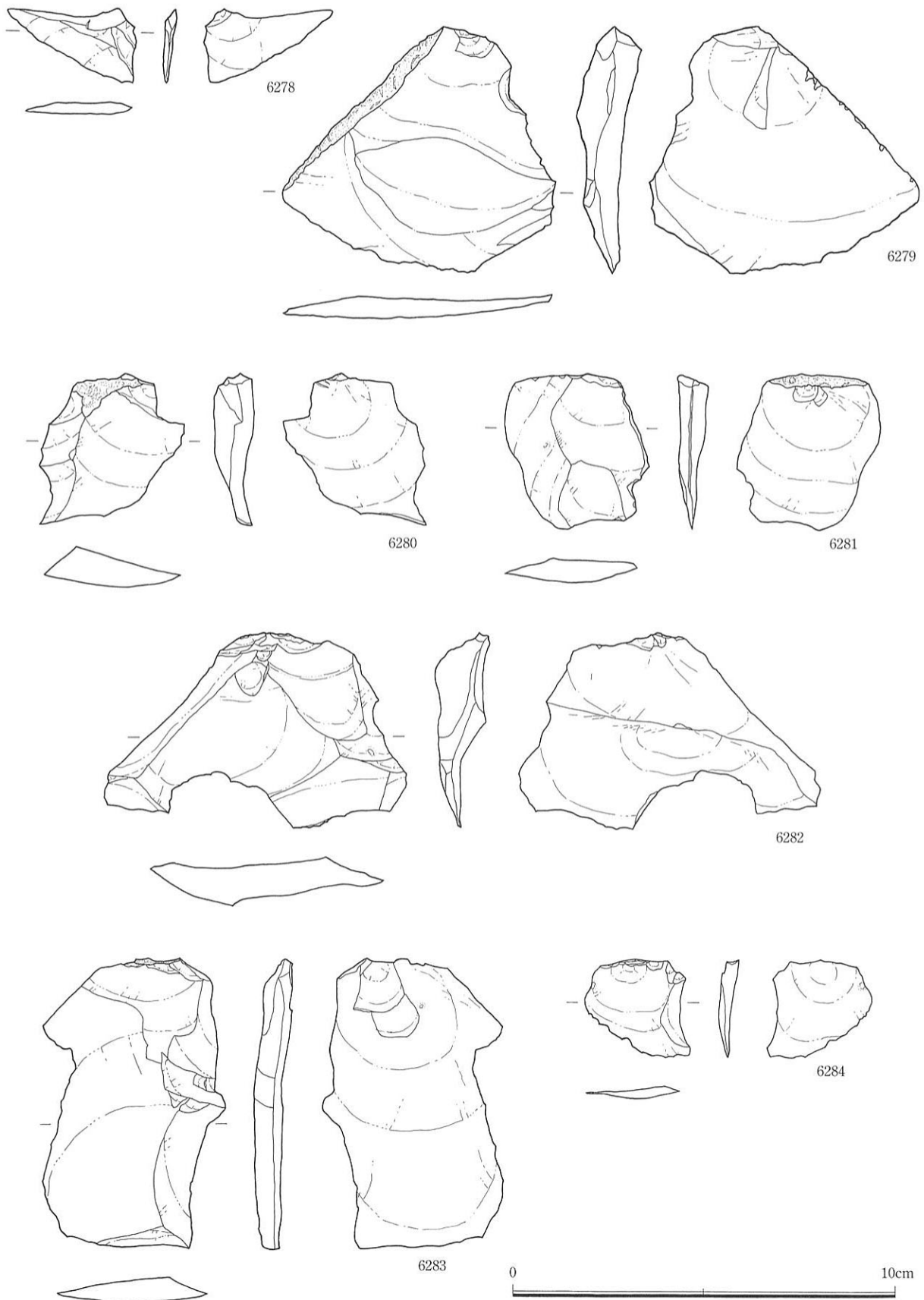


図309 6 B区第10層ブロック土出土集石サヌカイト剥片 (1)

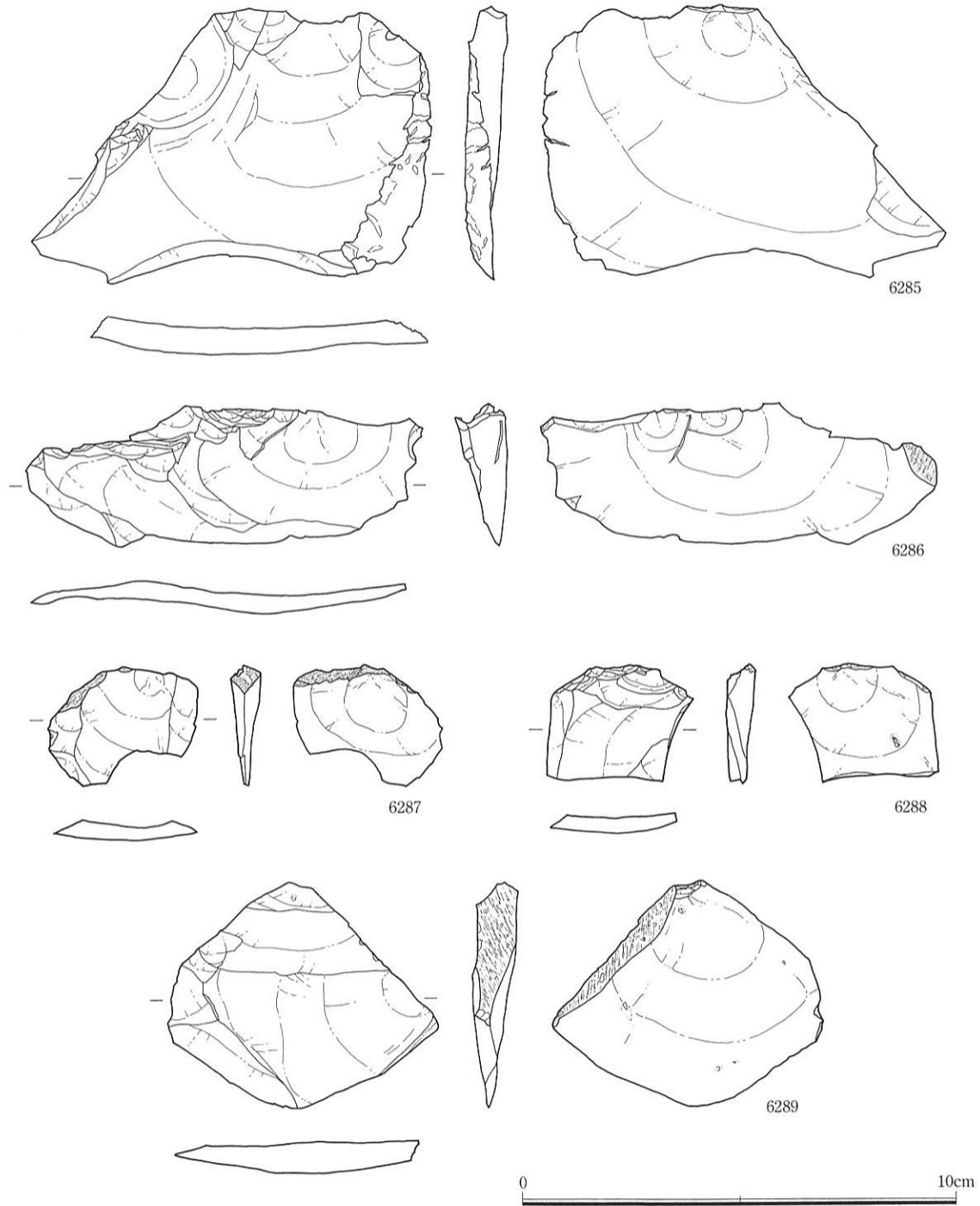


図310 6B区第10層ブロック土出土集石サヌカイト剥片(2)

第10面の全体を再度調査すべきではあったが、ブロック土の分布範囲が限定されることと工期の都合から、溝の平面形は下層の第11面調査でおさえることとしたために、これらの溝は第11面の測量ではじめて記録に残されることとなった。この為、以下で記述する遺構の平面図は図324を参照されたい。また、溝の調査を行っている段階では地震に関する認識が無かったため、溝によって起こされた断層部分も埋土として掘削を行ってしまった。結果として、掘削した結果の幅は、溝が掘削されたときの幅より広めということになる。ただし、各断面からおおよその復元は可能であり、各溝のデータもそれらを検討した以後のものとなっている。なお、各溝からはわずかながら遺物が出土しており、これから溝の時期を判断しているが、その時期比定の妥当性については後述する。

溝101は調査区西側で検出された溝で、幅3.3～4.4m、深さ60～90cm（図311・324）。溝最下部には溝掘削後に側面から崩れたと思われる層の堆積が見られる（⑥）。この層の最下部は地震による変形で波状を呈する。その上層には中央セクションでのみ分厚い堆積が見られる（⑥'）が、ブロックを含み人為的な埋め戻しの可能性が考えられる。なお、この層の下部も変形しており、地震によるものと考えられる。その上層には自然堆積層（③～⑤）が見られるがラミナが大きく変形を受ける。地震は、この層の堆積後に起きたものと考えられる。なお、地震による地すべりは中央セクションで良好に観察でき、第12層以下が埋土⑥'層に入り込んでいる様子や地すべりが溝底より下の、第15層の砂層にまで影響を及ぼしている様子が観察できた。その後再び自然堆積層が見られ（②）、最上部には他の溝同様のブロックを含む層が見られ（①）、人為的な埋め戻しと考えられる。ただし、南セクションのみではあるが、①層中に極細砂層が薄く観察され、埋め戻しの間にある程度の時間幅があった可能性が考えられる。なお、この溝からの遺物の出土はない。この溝に接続するように、土坑105が検出されている。長軸3.5m、短軸1.1m、深さ20cm前後の浅い落ち込みみである。溝同様ブロック土を埋土とする。また、南側の土坑106は、一辺2m、深さ15cmの方形の土坑で、同様にブロック土を埋土とする。

溝102は調査区西側で検出された溝で、幅3.5～4.2m、深さ0.9～1m（図312・324）。溝最下部には溝掘削後に側面から崩れたと思われる層の堆積がみられる（⑥）。その上層には機能時の流水堆積が見られ（④・⑤）、さらに人為的な埋め戻しと思われる各層（③・⑨・⑫）が堆積している。地震は④、⑤の堆積後起きたものと考えられ、各セクションで肩部の地すべりが確認された。③、⑨、⑫の各層でも変形は確認されたが、地震段階の変形ではなく、地震後と思われる。そして最終的には人為的な埋め戻しと考えられるブロック土（①・⑧）で埋没している。ただし、地震後即溝が埋められたとは断定できない。南セクションでは西肩で薄いものではあるが、ラミナの見られる層（④）が溝最上部まで至る状況が確認された。このことから、地震後ブロック土で一時溝が埋没し、再掘削された後、再びブロック土により埋められたと考えられる。なお、肩部地滑りの分層は図430・431を参照されたい。

溝102出土遺物（図316） 溝102からは弥生土器、縄文土器、サヌカイトが出土している。

6290～6292は弥生土器である。6290は壺。頸部に2条の沈線が巡る。外面は横方向に密なミガキを施す。内面は口縁部を縦方向の荒いミガキで、頸部を横方向に磨く。I-2様式か。6291は底部。6292はへら描き状の多条沈線を持つ壺の破片と思われる。6293はサヌカイト剥片である。

時期

I-2様式の壺や図化できなかった細片などからは、I-2様式と思われるが、へら描き多条沈線の破片を含むことから前期新段階まで下るかと思われる。

溝103は、調査区中央東側で検出され、幅2.7～3.7m、深さ60～90cm（図313・324）。埋土は、まず最下部に溝機能時と思われる、溝側面から崩れた各層を含む堆積層が見られる（⑥・⑦・⑨）。この上層に人為的な埋没と思われるブロックを多く含む層が堆積する（③）。さらに上層にも同様なブロックを含む層が堆積する（②）が、南セクションではこの間に③を掘り込むような②の堆積が見られる部分もあり、③の堆積後最掘削が行われた可能性がある。地震は③の堆積後に地震が起きているようである。②の一部にも変形は見られるが、直接地すべりを起こした層を切っておらず、地震直後段階ではないと考えられる。変形は主に③層以下に見られ、第10層以下の各層が地滑りを起こしている。地震後に①が堆積しているようで、①は地震後に変形した層を切っており、地震後の堆積であることは確実であろう。なお、溝102同様肩部地滑りの分層については図432・433を参照されたい。

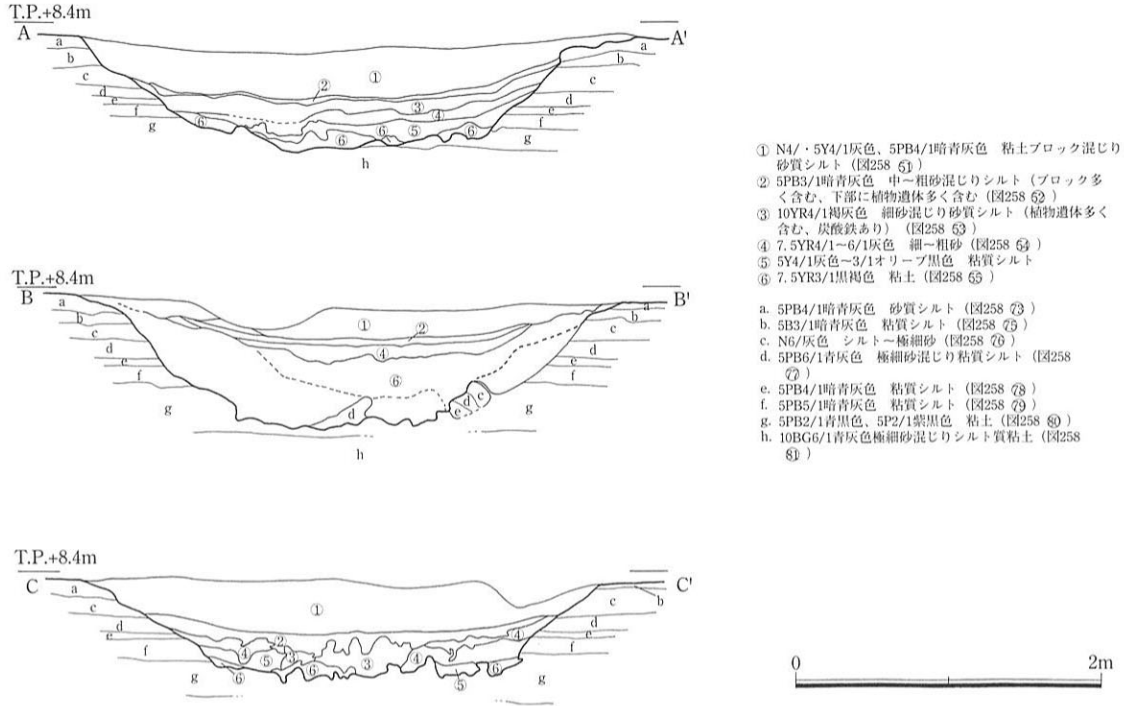


図311 6B区溝101断面

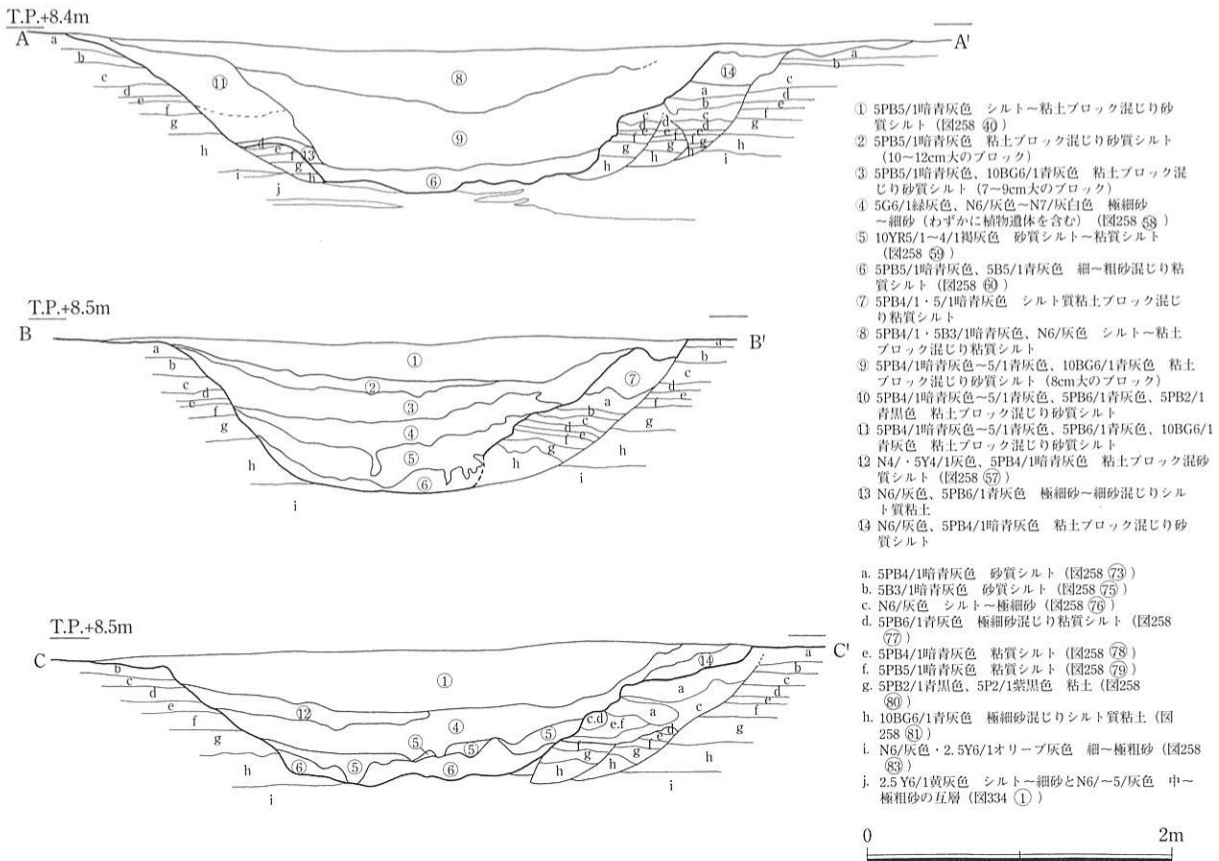


図312 6B区溝102断面

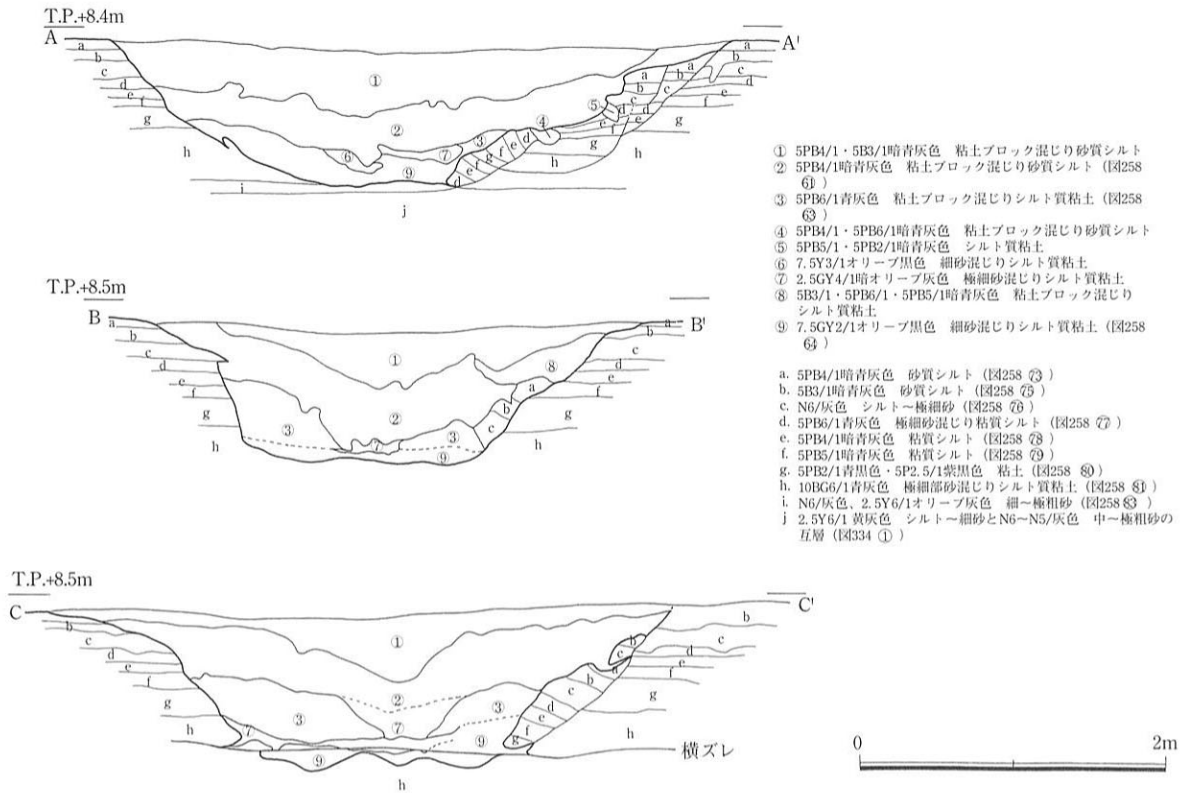


図313 6 B区溝103断面

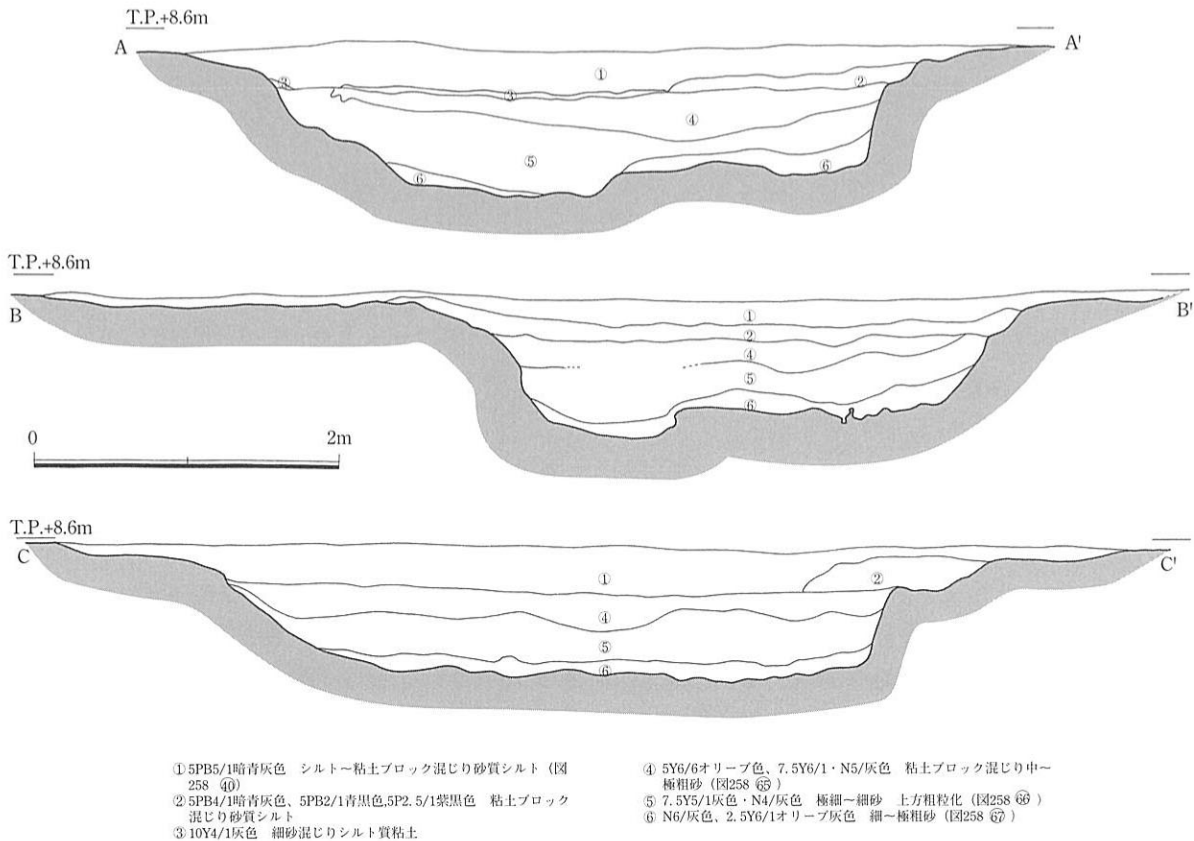


図314 6 B区溝104断面

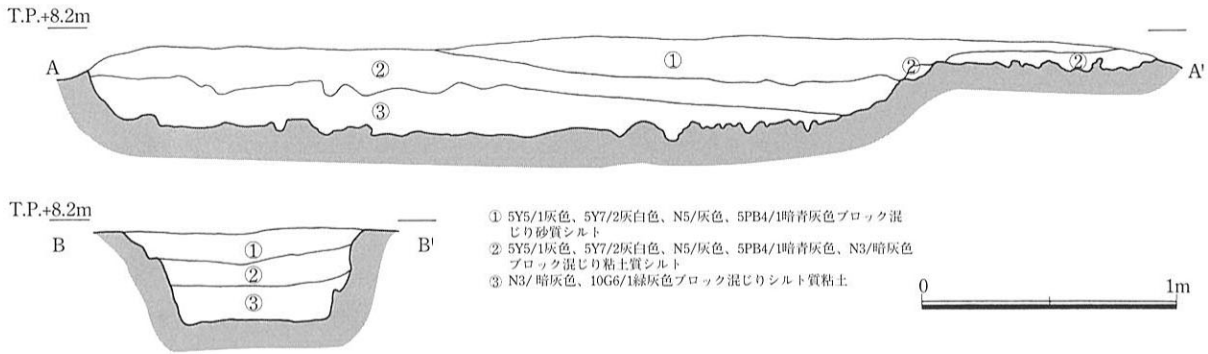


図315 6B区土坑107断面

なお、溝103中央部ではこの溝に接続するように土坑107が検出された（図315）。溝との接続部分は幅1.1m、深さ20cmと、浅く細いが、南西に向かい長軸6.6m、短軸1.8m、深さ70cmと、広く、深くなる。土坑の埋土はいずれも類似したブロックを含む層で、埋土の上層は溝103の最上部に見られる①と同じ層である。この土坑には地震の痕跡が見られないことから地震後の掘削と考えられる。埋土中には流水堆積が見られないが、溝に接続していることから溝との関連性が当然うかがえ、溝から溢れた水を一時的にためておく溜め井的な機能を有していたと推定しておく。遺物の出土はない。

溝103出土遺物（図317） 6294は弥生土器の壺。6295は突帯文土器の深鉢。突帯には小さな刻み目を施す。突帯を境にゆるやかに「く」の字状に屈曲する。6296は木製品。全体を加工してこの細さを作り出している。片方の先端は尖らせている。漁労具のヤスと思われる。材質はイヌガヤ。6297～6302はサヌカイト剥片である（表45）。6297・6298は表面の風化の具合から縄文時代もしくは旧石器時代のものと考えられる。6303は石包丁。緑泥石石英片岩。

時期

弥生時代前期の土器と縄文時代晩期長原式の土器が共伴していることから、I-2様式の可能性が考えられる。

溝104は調査区東側で検出され、幅4m、深さ60～90cm（図314）。埋土は、最下部に黒色シルト質粘土や緑灰色粘土のブロックが見られる層が薄く堆積している。これは、溝機能時の第14層や第15層の溝肩部からの崩落を含む堆積層であろう。その上層には平均約60cmの砂層が堆積していた（⑤・⑥）。上方粗粒化の傾向が見られる。最上部には他の溝同様10層以下のブロックを含む土で埋没している（①～④）。この溝のみ地震による痕跡が見られず地震後の掘削であろう。

溝104出土遺物（図318）すべてサヌカイト剥片である。いずれも調整剥片である（表45）。

時期 図化し得なかった生駒西麓産の土器片が1片出土しているが、時期は不明。この溝のみ地震による変形を受けていないことから、遺物の時期差が判明することが期待されたが、有効なデータは得られなかった。

また、平面では検出していないが第2章で記したように東壁断面でも同様の埋没状況の溝が確認されている（図259）。最下層ではラミナの見られるシルトが堆積しているが、上層はいずれもブロック土である。

溝について 各溝はブロック土で埋められるという類似した特徴を持つ。さらに、いずれの溝からも遺物の出土がきわめて少ない。このことから、これらの溝は集落の周囲を巡る溝というよりも、農業水

路的な性格を有していたと考えられる。溝76は調査区内で収束するものの、1区では溝間を繋ぐような浅い溝の検出もあり、各溝は部分部分で完結しながらも、溝どうしで関係を持ちながら機能していたものと考えられる。また、収束しているところから考えると、各溝は同時に溜め井的な性格も有していた可能性が考えられる。また、各溝では複数回の人為的な埋め戻しと考えられる埋没が見られ、一部では最掘削と考えられるような掘り込みも見られたことや、他調査区で溝が検出される面であるのにもかかわらず6B区では溝が埋没している状態であることから、限られた時期に掘削しては埋め戻されるような溝であったとも考えられる。

また、溝から出土した土器からはいずれもI-2様式頃であるが、これは後述する第11面大畦畔から出土した土器の時期に該当する。また、これらの溝が当然第11面を掘り込んで掘削されていることからこれらの遺物は本来第11面に伴う遺物の混入であるとも考えられる。また、前述したように、これらの溝調査当初の掘削段階には地震痕跡の認識が無かったことから第11層以下の各層の遺物が混入した可能性は捨てきれない。これらのことから、溝出土遺物を積極的にこの溝の時期を決める資料として採用することは控えることにしたい。

また、周辺調査区で検出されている溝との対応関係であるが、ここでは5区と6C区との対応関係を想定しておく(図323)。図323の5区は、溝の掘削が第10面よりも上層であるとのことから、畦畔を消している。6B区は正確ではないが第10面の平面図に溝をはめ込んでいる。この図は、溝を際出させるための図であり、同一時期の景観とはいえないことをあらかじめ断っておく。

まず、5区検出の溝92は底部をのぞき大部分がブロック土で埋没する。この傾向は6B区で検出された溝101~103の埋没状況と類似するが、溝の角度から6B区の溝103に対応する溝と考えられる。5区溝93であるが、大部分が砂で埋没し、最上部にブロック土が見られる。この様相は、6B区の溝104と同様であり、両者が対応すると考えられる。

次に、6C区検出の各溝との対応関係であるが、第8面の大畦畔の対応関係で述べたのと同様、6B区と6C区では溝の平面形で、座標北から西への傾きが異なる。6B区は西へ約30度であるのに対し、6C区は西側では6B区同様30度程度であるのに対し、東側では40~50度であり、地形が大きく変化していると考えられ、単純に溝を延長させただけでは対応させにくい。また、埋没状況においても6C区の各溝(溝72・77・78・79)は大部分がラミナの見られるシルト~砂で埋没しており、大部分がブロッ

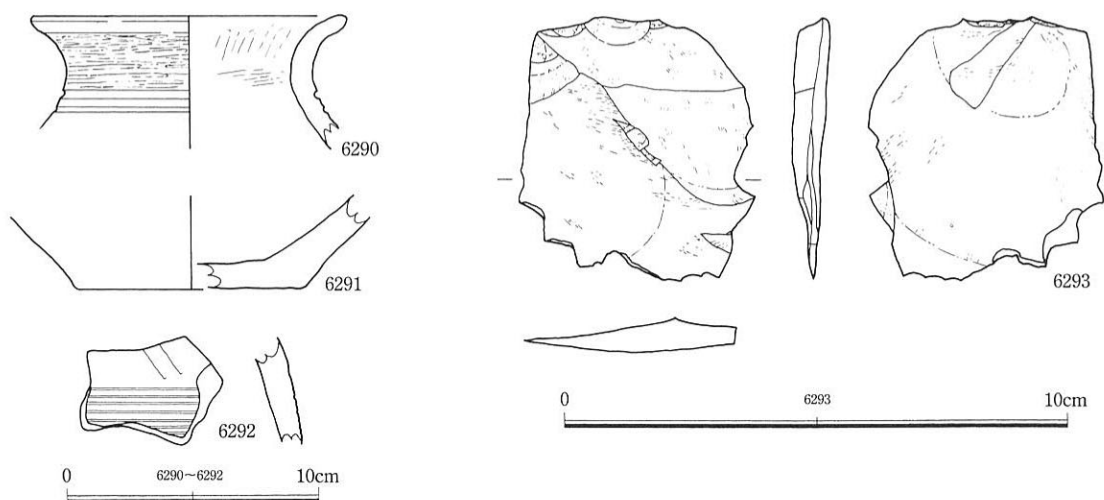


図316 6B区溝102出土土器・石器

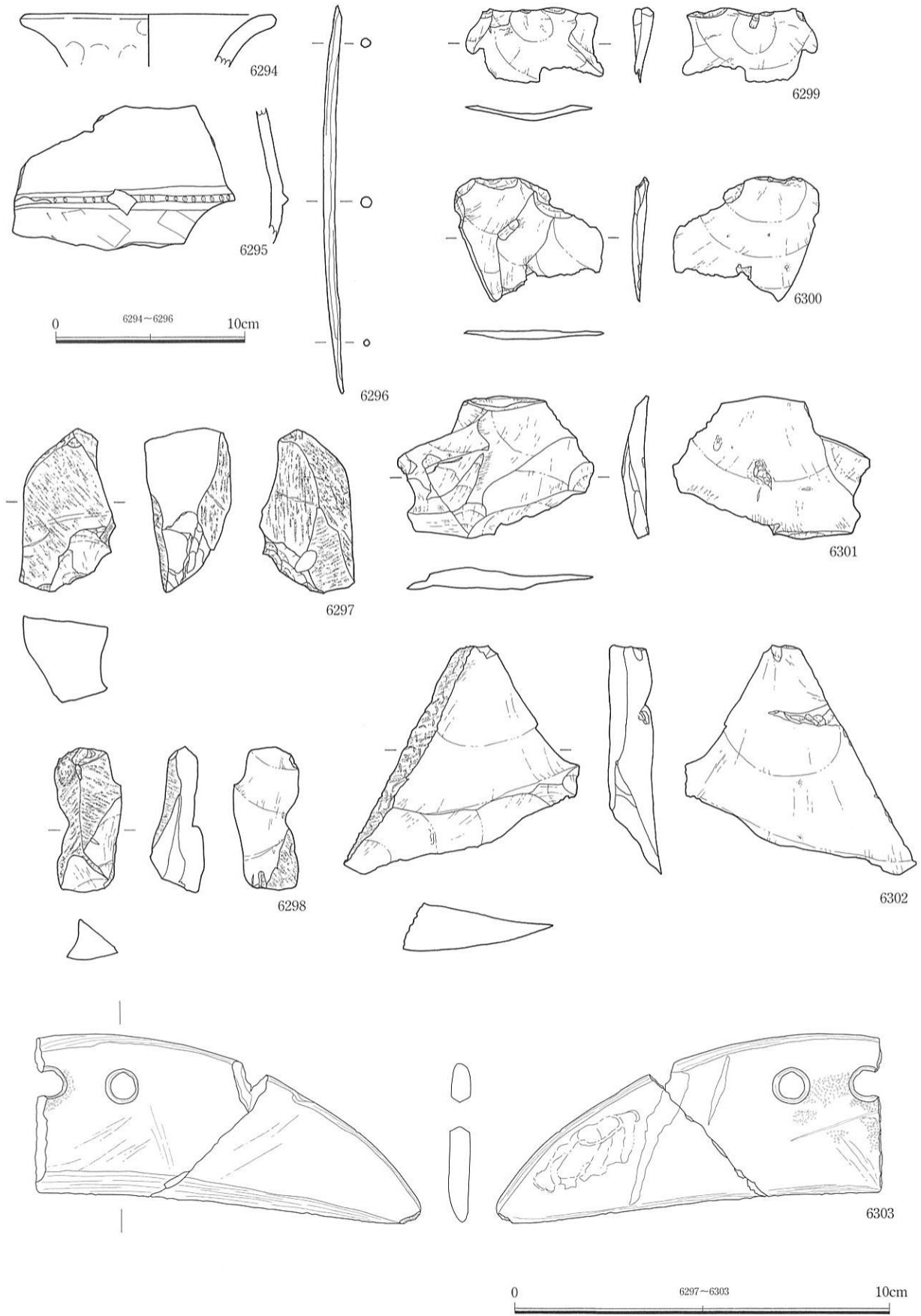


図317 6B区溝103出土土器・石器・木器

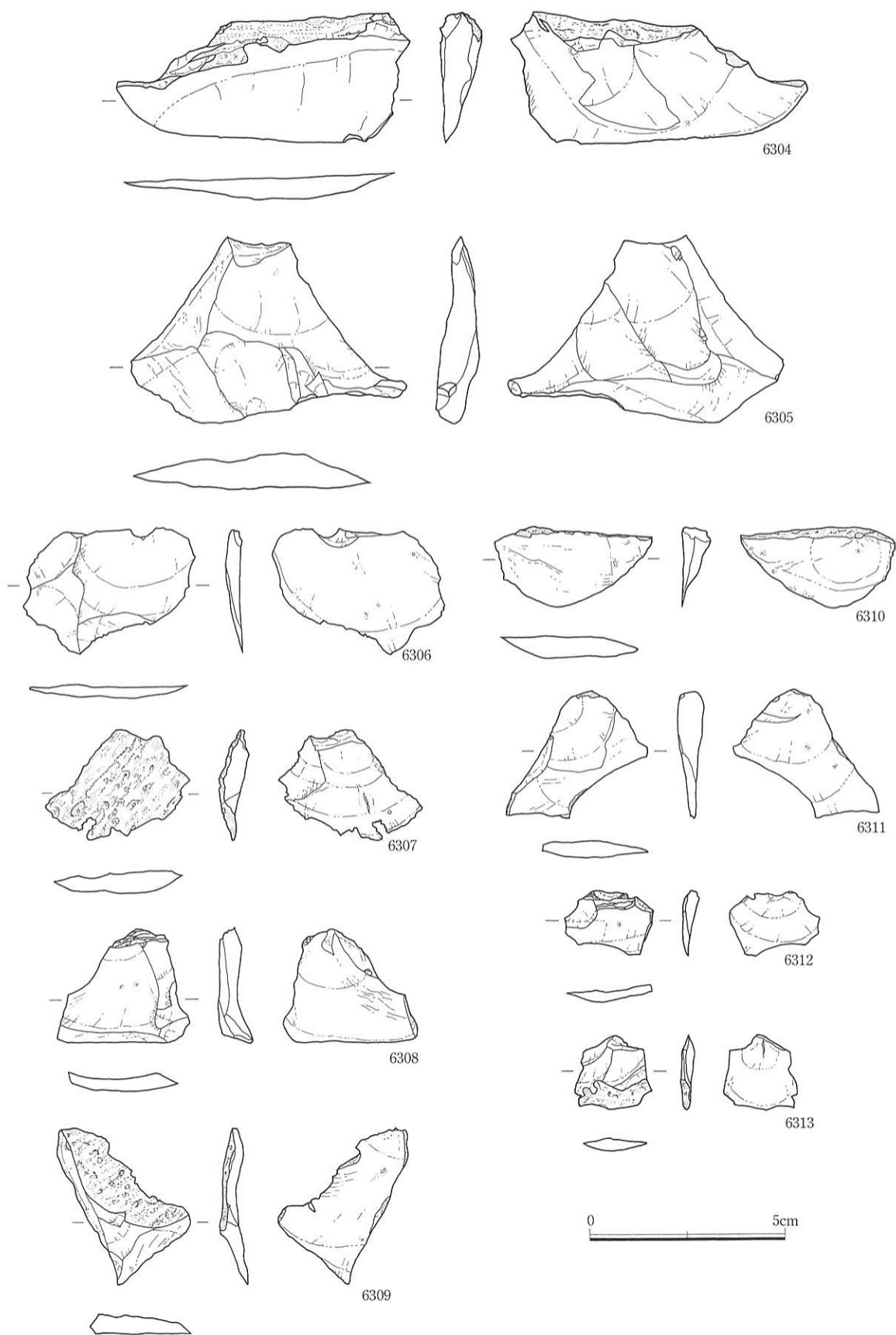


图318 6 B区溝104出土石器

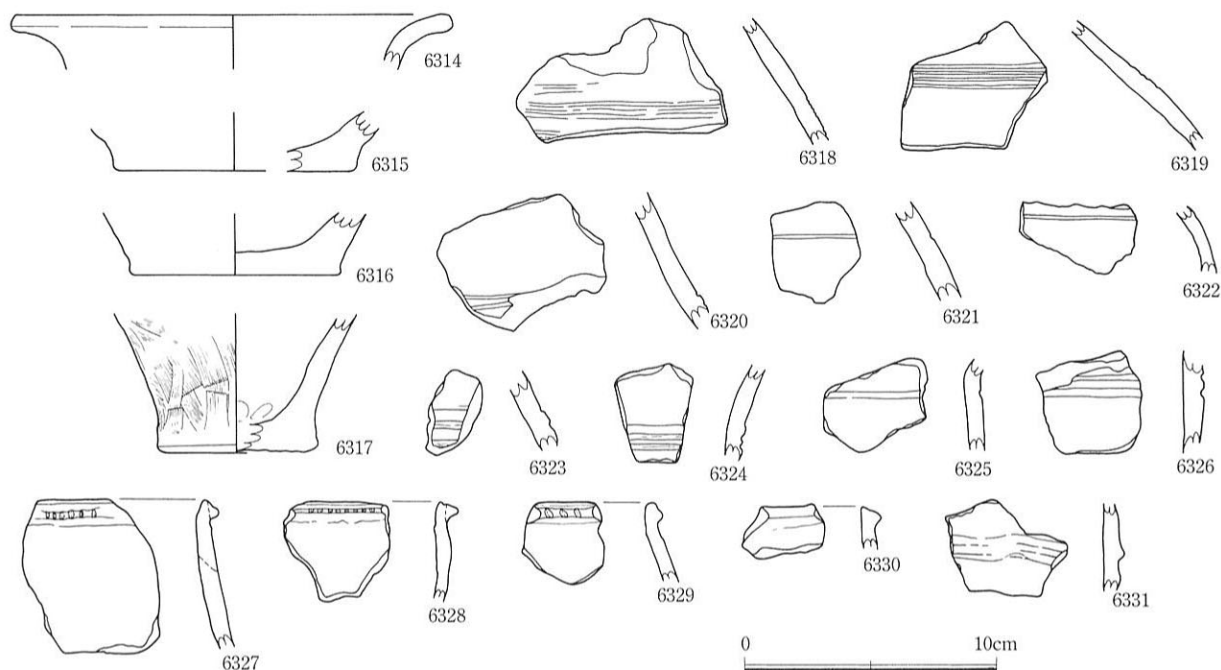


図319 6B区第10層出土土器

ク土で埋まる6B区とは状況が異なる。類似する堆積が見られるのは6B区でも第10面段階で溝が開口していた溝76・77であるが、溝76は調査区南端で収束しており対応はおえない。可能性として、6C区溝72がその角度や比較的類似する埋没状況から、6B区溝77に対応すると推定しておく。それ以外の各溝については、あくまでも推定にしか過ぎないのだが、6B区の溝76同様6B・C区間内で収束していたと考えたい。その景観は1区西区第5面のようなものであったのだろう。

時期

第10面廃絶段階の遺構（溝76・77）から出土した土器はないが、第9層から出土した土器は、いずれも弥生土器であり、第9層中の遺構からは中期後半の遺物が出土している。第10面はこの遺構が掘削される以前の堆積層に覆われており、その堆積層の時期は中期前半の可能性が考えられるが、第9層を細分して掘削しなかったため、その正確な時期はわからない。しかしながら、第10面の最終的な廃絶時期は大きくは、中期後半以前ということになる。

また、第10面のある段階の溝から出土した土器からは、遺物の出土層位の帰属性の問題はあるものの、前期の範疇で収まるものと考えられる。また、後述する第11面からは前期の土器が出土しており、周辺調査区との対応関係から、第10面の時期を前期末頃としておく。

第10層出土遺物（図319～322）

第10層からは、弥生土器、縄文土器、石製品、モモ核が出土している。

6314～6326は弥生土器。残りのよいものがほとんどなく、いずれも細片であるが図化し得るものを極力した。6317は外面にタテハケがよく残る。甕の底部か。6318は櫛描文をもつ。6319～6322・6325・6326はヘラ描き沈線をもつ。6323・6324は削り出し突帯をもつ。6327～6331は突帯文土器である。突帯に刻み目を施すものと、施さないものとがある。刻み目を施すものは非常に細かい刻み目で、いずれも口縁部が残存している。生駒西麓産胎土。6332は石包丁。研磨痕が明瞭に残る。凝灰岩質。6333～6363はサヌカイトである。6333～6337は石鏃。全長はおおむね2～3cm。6338は石小刀の未成品か。55.5

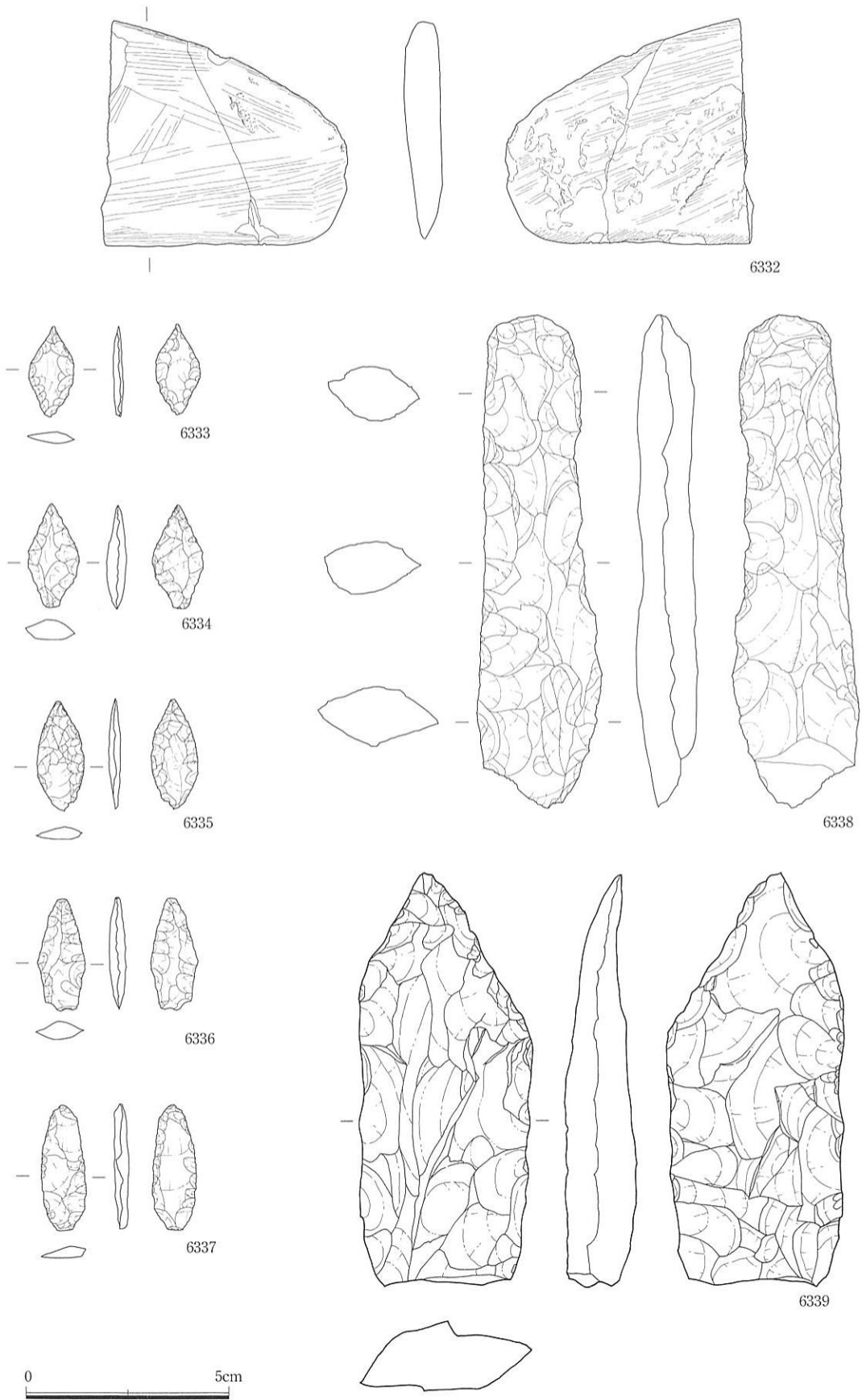


図320 6 B区第10層出土石器(1)

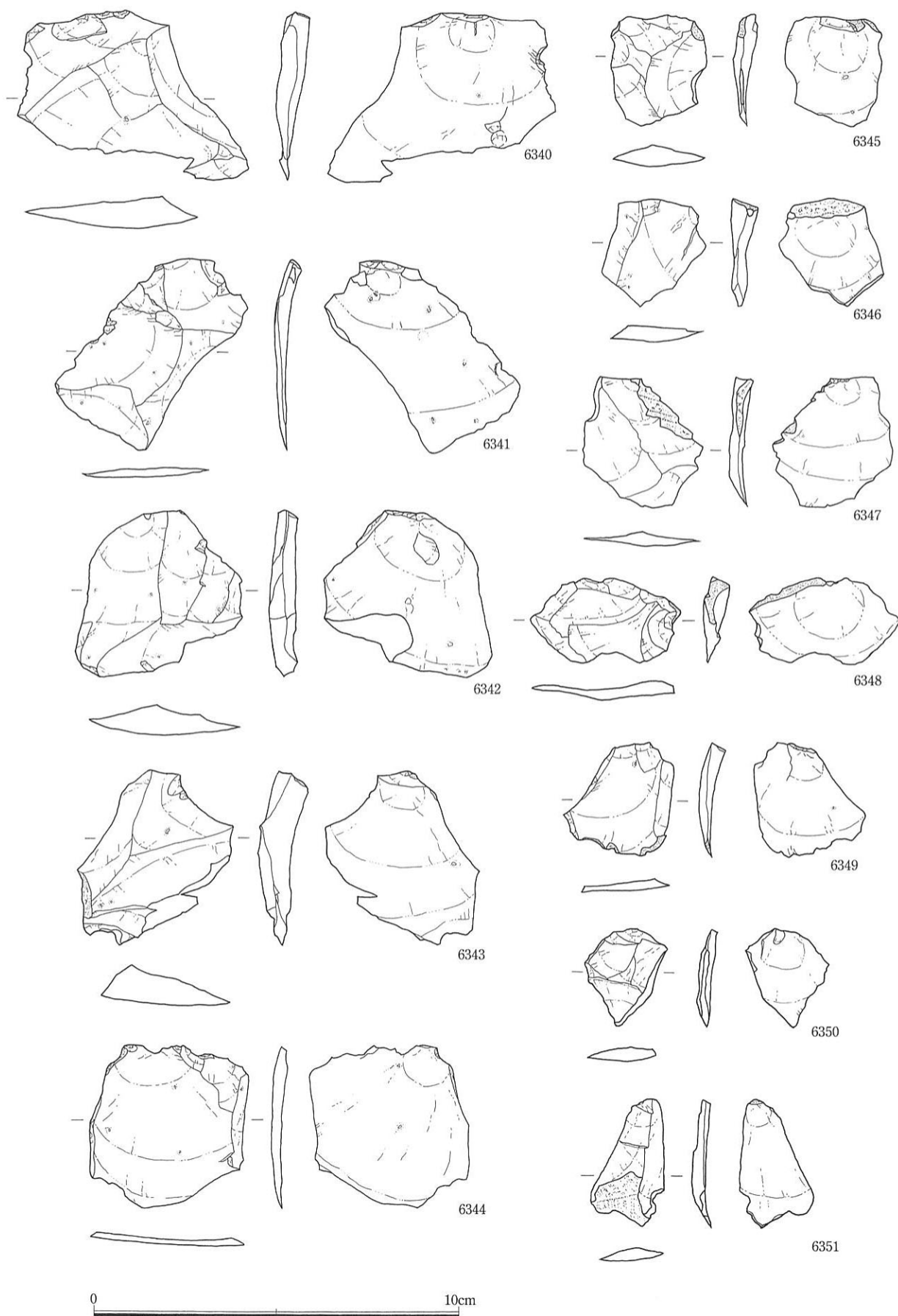


図321 6B区第10層出土石器(2)

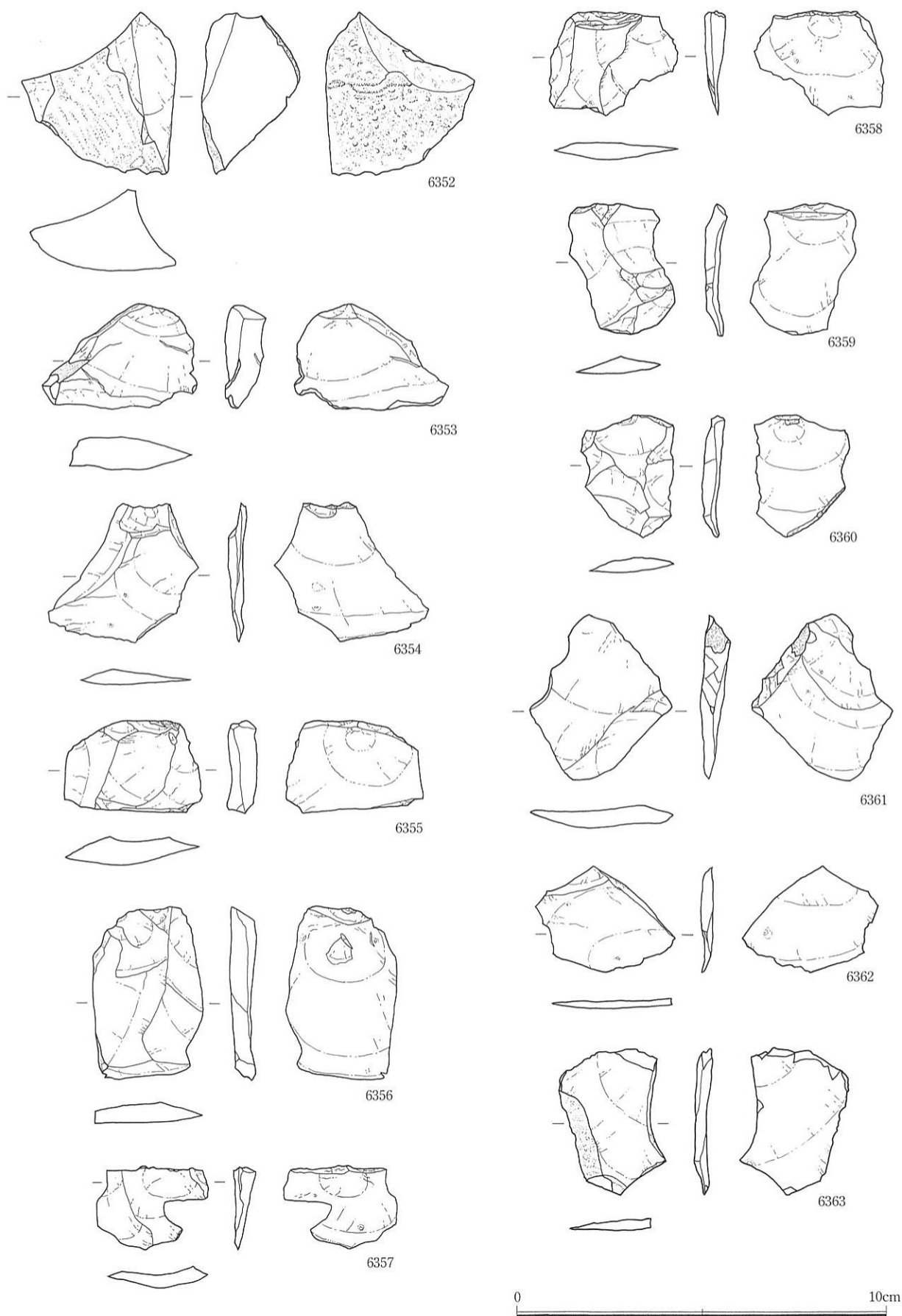


図322 6 B区第10層出土石器(3)

第6部 6B区の調査成果

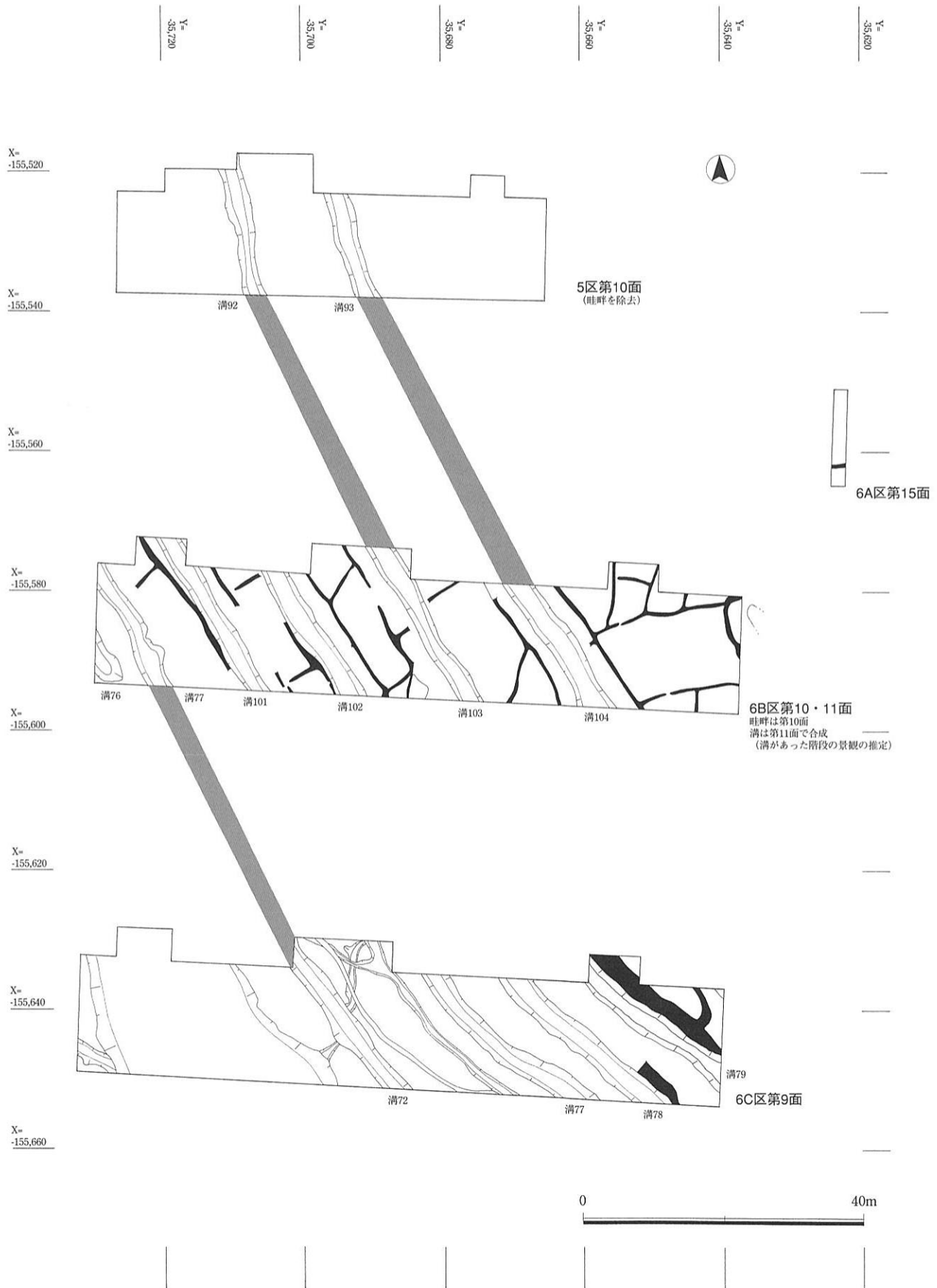


図323 5区・6区遺構合成図 (弥生時代)

g. 6339は尖頭器の未成品か。刃部を作り出している。74.9g。6340～6363はいずれも調整剥片である。6340～6360は打面、打点ともによく残る。6352は風化の具合から見て縄文時代か旧石器時代のものを打ち割ったと思われる。この層で見つかった剥片はどれも似かよった大きさである（表45）。

第11面（図324）

概要

第10層の黒色土壌化層を除去した第11層上面である。面の高さはT.P.+8.18～8.35m。第11層は、第10層よりも黒色を呈する層であるが、第10面段階の耕作により遺構面の残存状況はさほどよくない。それでも、東側では比較的良好に水田畦畔が検出され、調査区中央部では大畦畔も検出されたが、西側での検出状況は不良であった。なお、下層でも、同様な黒色粘土層は確認されたが、水田畦畔が確認できるのは第11面までである。他に下面遺構が検出された。

遺構

第11面の畦畔は第10面までとはその基幹畦畔の軸を異にするのが特徴である。上面までの地形に沿った畦畔は北西—南東を基幹としていたのに対し、当面では北東—南西を基幹とする。

調査区中央部では大畦畔が検出され、大畦畔盛土中（図324▼）からは、弥生前期の壺が出土している（図325・6364）。この土器は破片で出土し、近接するグリッドと接合できたほか、約25m離れたグリッド（I03-VT）とも1片接合できたことから、意図的に割られたものと考えられる。土器は肩の張った胴部で、削りだしの突帯に2条の沈線を持つ。また、胴部外面には横方向のミガキがみられ、頸部には板状工具の痕跡が残る。内面には器体を接合した際の接合痕が残る。I-2様式。なお、この大畦畔は北側の5区第10面で検出されている大畦畔に繋がるものと考えられる。

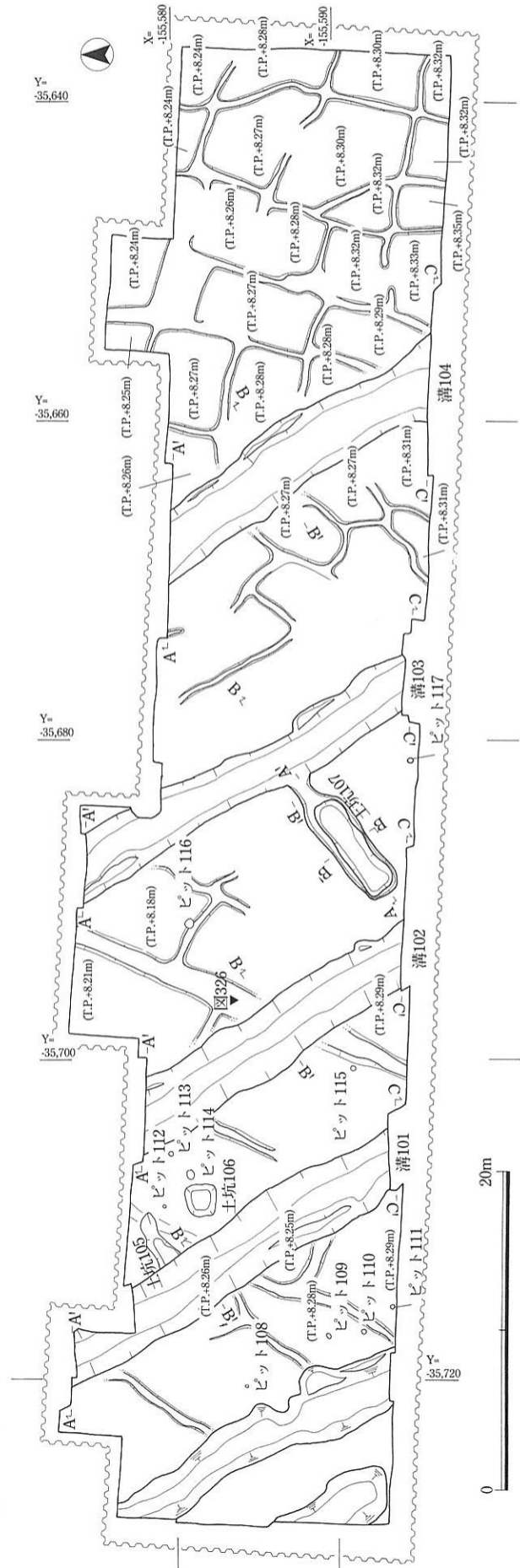


図324 6区第11面

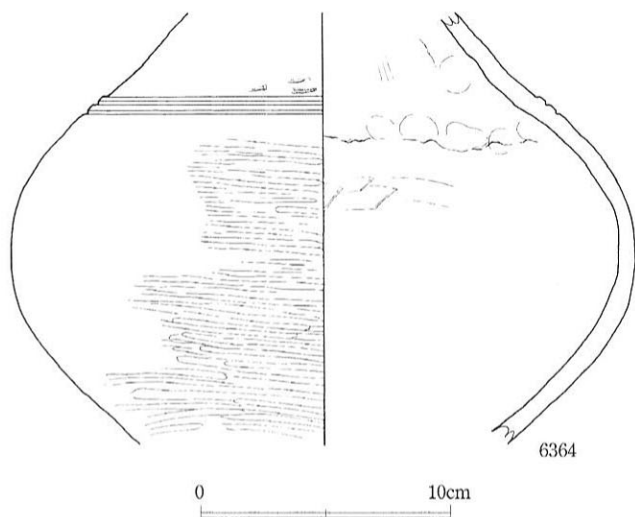


図325 6B区第11面出土土器

そのほか、第10面の溝104より西側で検出された各畦畔は残存度が極めて悪く、高さもほとんどない畦畔だった。大畦畔周辺では検出状況は悪いものの、検出された畦畔から復元できる水田の形状は、やや細長いものであると考えられる。さらに西側の畦畔や、東側の溝104西側の畦畔は水田の形状が不定形であり、畦畔の検出を誤った可能性も考えられる。なお、比較的良好に畦畔が検出された西側でも、一部の畦畔は第10面の擬似畦畔Bの可能性も考えられる。第10面、第11面とも畦畔が比較的良好に検出された西側の区画についてではあるが、基幹畦畔の方向は異なるものの、基本的な地形の傾斜は南西から北東に下降する点で一致する。

ほかにも、第10層下面遺構のピット（ピット108～117）が西半で検出されている。埋土はいずれも第10層で浅い掘り込みである。

なお、簡単に5区と6A・B・C区との黒色土壌化層の対応関係を6B区を中心に記しておく。5区ではこの段階に相当すると考えられる黒色土壌化層が2層（第10・11層）確認されている。5区第10面は畦畔の方向などから6B区第11面に対応すると考えられるが、5区では6B区の第10面に対応する面は検出されていない。しかしながら、5区第11面に対応する面は6B区では検出されていない。6A区では15面が、6C区は第9面が対応するが、6B区のように2面は確認されていない。両区とも6B区の第10面に対応すると考えられる。

時期

大畦畔の盛土中から出土した土器から当面の時期の定点としてI-2様式という時期を与えられる。

第11層出土遺物（図327・328）

第11層からは弥生土器、縄文土器、サヌカイトが出土した。

6365、6366は突帯文土器。生駒西麓産。6367は弥生時代前期の甕の底部。6368は浅鉢。口縁部と体部との境には凹線が巡る。体部は横方向のケズリを施す。滋賀里III。6369も浅鉢。口縁端部を外側に折り曲げ作り出している。外面は口縁直下まで削る。6370はサヌカイト石核。6371～6376はサヌカイト剥片。自然面の残るものが多い。（表45参照）

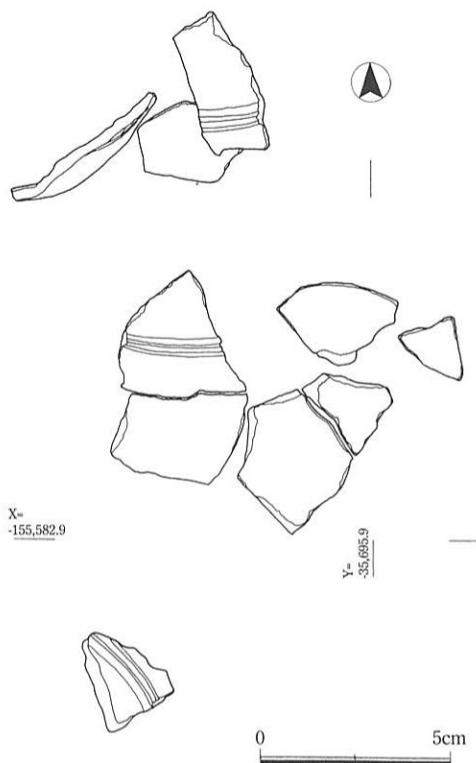


図326 6B区大畦畔出土弥生土器出土状況

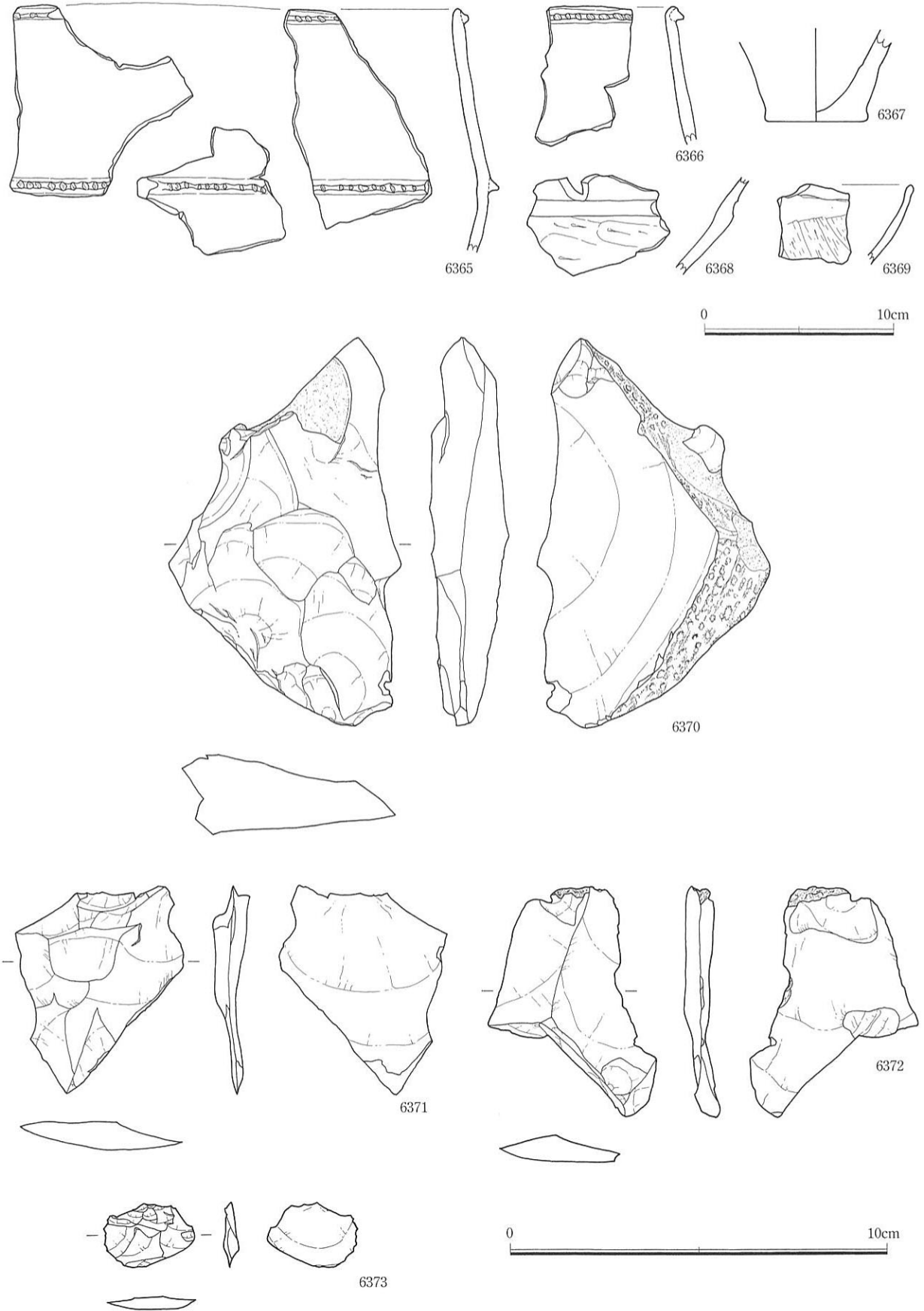


图327 6 B区第11層出土土器・石器

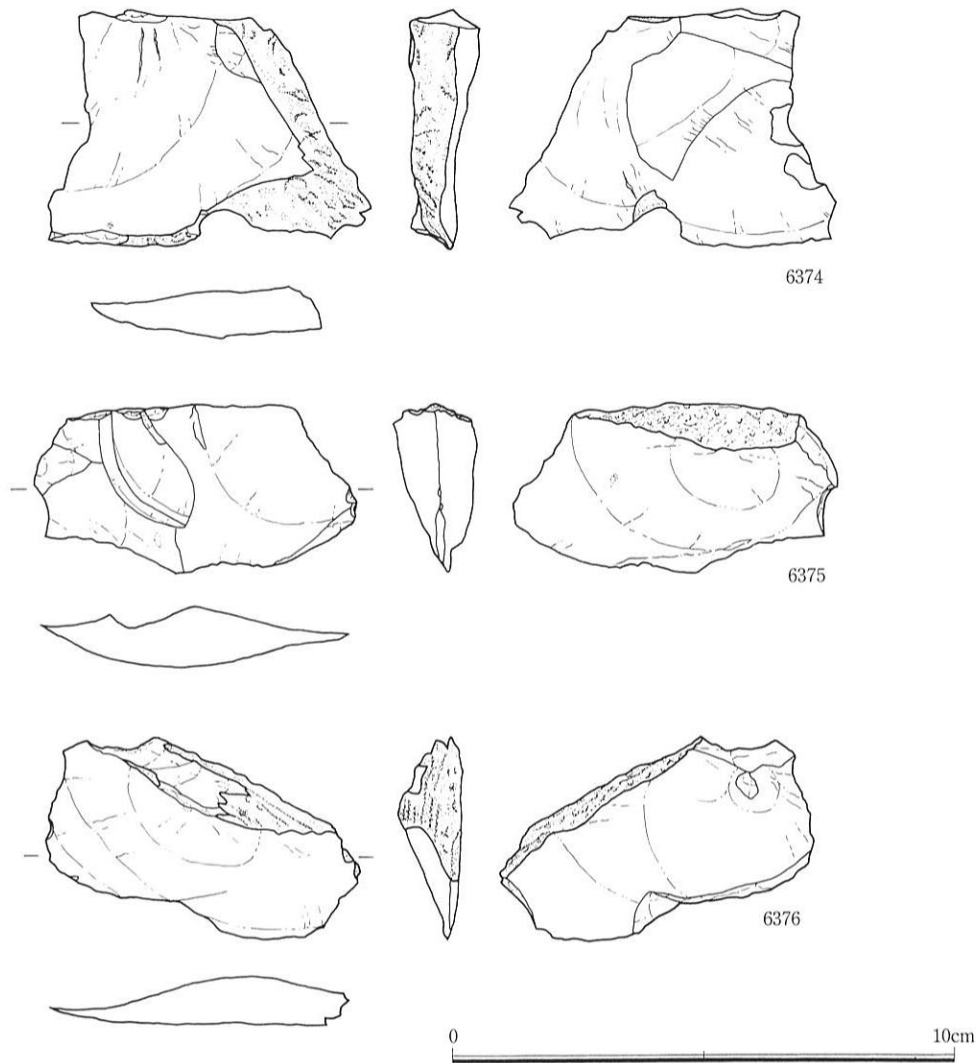


図328 6B区第11層出土石器

第12面 (図329)

概要

第11層の黒色土壌化層を除去し、検出されるのがベース面である第12面である。面の高さはT.P. +8.09~8.26m。検出された遺構は土坑とピットで、すべて上層の下面遺構である。

遺構

調査区西側では第10面の溝77中央部で、土坑118が検出された。溝に接続するようにみられるが、溝とは無関係の遺構であると考えられる。第11層を埋土とする。調査区中央部、第11面で大畦畔が検出された箇所では溝2条が検出された。溝119は幅0.6m、深さ9cm前後。第10層と第11層を埋土とする。この溝を検出した段階で、石(図329●)が出土した。この石は大畦畔構築に伴うものであると考えられる。この溝に切られているのが溝120である。幅0.7~1.8m、深さ5~14cm。第11層と第12層を埋土とする(図330)。

他に、調査区西半を中心に多くのピットが検出された。ピットは第10層を埋土とするものと、第11層を埋土とするもの、第10層と第11層を埋土とするものがそれぞれ見られ、上面で検出すべきものを多く含む。第11面検出分も含めてピットは、ほとんどが西側で検出された。第10面や第11面段階で特にこの箇所が微高地状であったということはないが、北東から南西に向かい幅約10mの範囲に特に密集

して見られる。

時期

遺物の出土が皆無であるが、第11面のベース面ということから、第11層の堆積は弥生時代前期と考えられる。

第12層出土遺物

第12層からの出土遺物はない。

第13面 (図331)

概要

第12層の非土壌化層を除去し検出されるのが、黒色土壌化層上面の第13面である。面の高さはT.P.+7.95~8.19m。遺構はわずかにピットが検出された程度である。

遺構

ピット (ピット159~163) が検出された。いずれも上層からの掘り込みで、当面に伴う遺構ではない。なお、当面に伴う遺構はない。

時期

出土遺物は縄文土器であるが、周辺調査区との対応関係から、弥生時代前期の可能性も考えられ、縄文時代晩期~弥生時代前期と幅をまたせておく。

第13層出土遺物

縄文時代晩期と思われる土器小片が4点出土したのみで、図化できる資料はない。

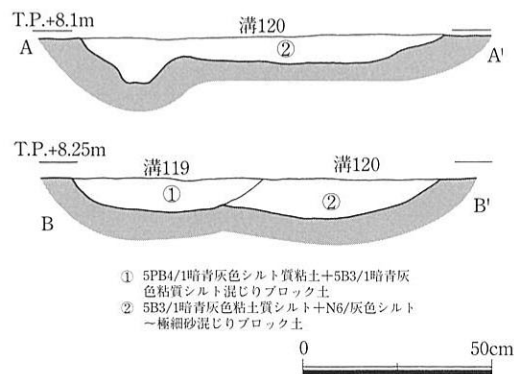


図330 6 B区溝119・120断面

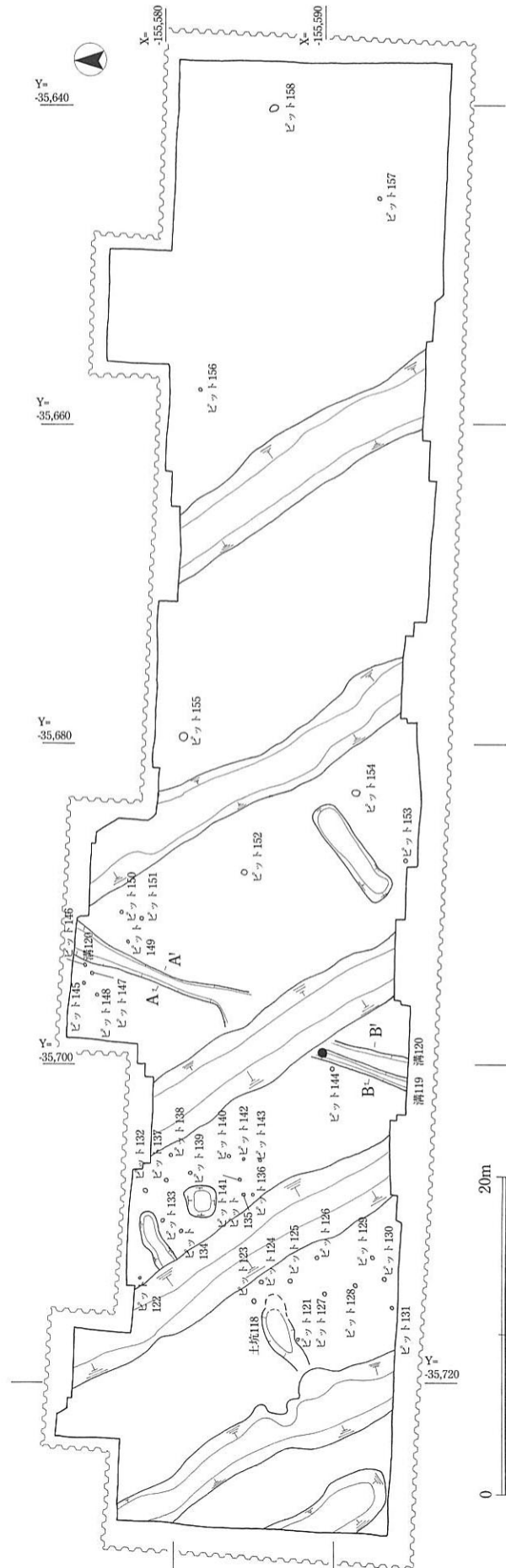


図329 6 B区第12面

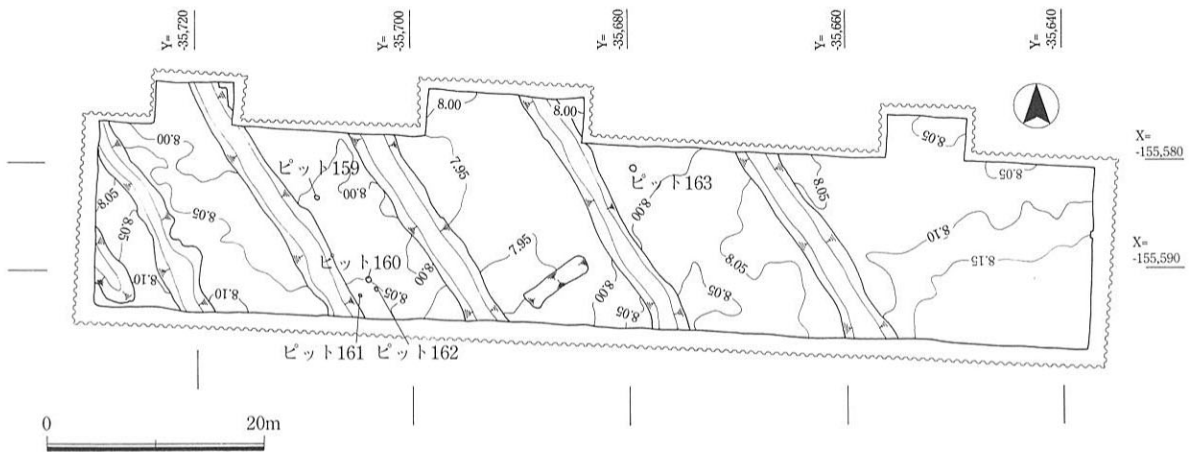


図331 6B区第13面

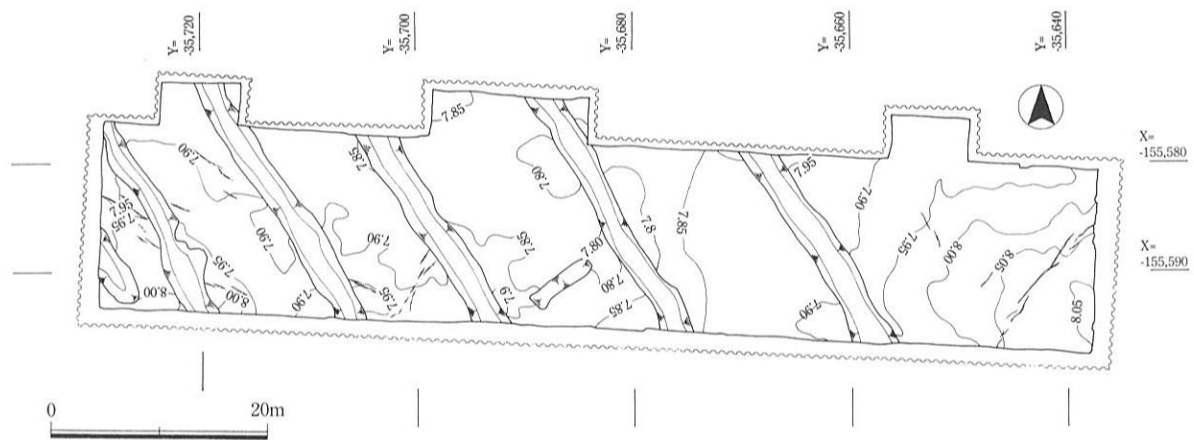


図332 6B区第14面

第14面 (図332)

概要

第13層の黒色土壌化層および、その最下部にある土壌化の弱い層を除去し、検出されるのが、同じく黒色土壌化層上面の第14面である。面の高さは T.P.+7.81~8.08m。遺構は検出されなかった。

遺構

当面に伴う遺構は検出されていないが、当面では第10面段階の溝に地すべりを起こした地震に伴う噴砂の跡が上面段階よりも明瞭に確認されたので、ここで報告しておく。噴砂は北東—南西方向と北西—南東方向の二者に大きく分けられ、東側で確認された噴砂を除き、溝付近で確認されている。なお、東側で確認された噴砂についても、溝104と東壁断面で確認された溝との間で確認されているものである。

時期

上面同様、縄文時代晩期～弥生時代前期と幅をもたせておく。

第14層出土遺物

縄文時代晩期と思われる土器小片が3点出土したのみで、図化できる資料はない。

床付面 (図333)

第14面の調査終了後、部分的に第15面として、黒色土壌化層を除去し、ベース面の遺構を確認した

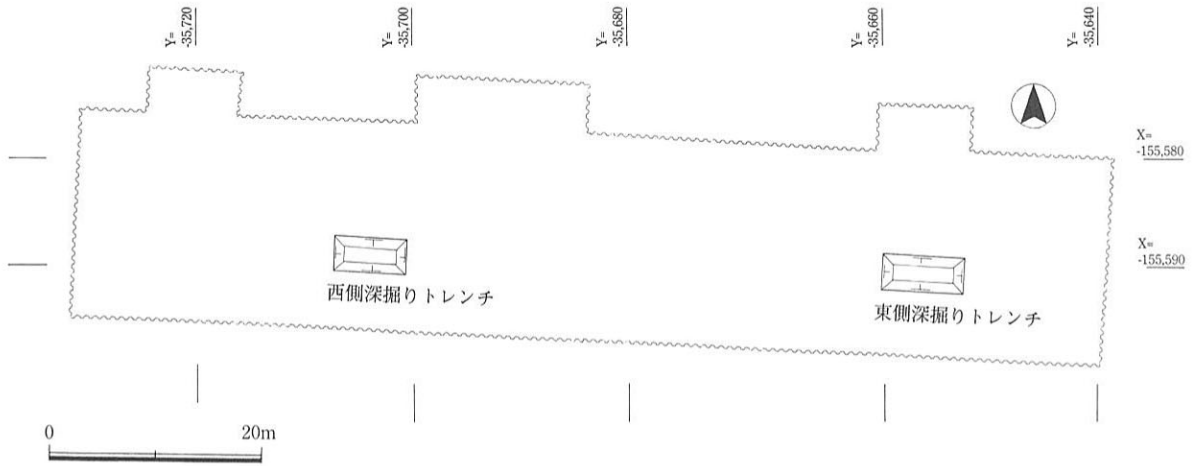
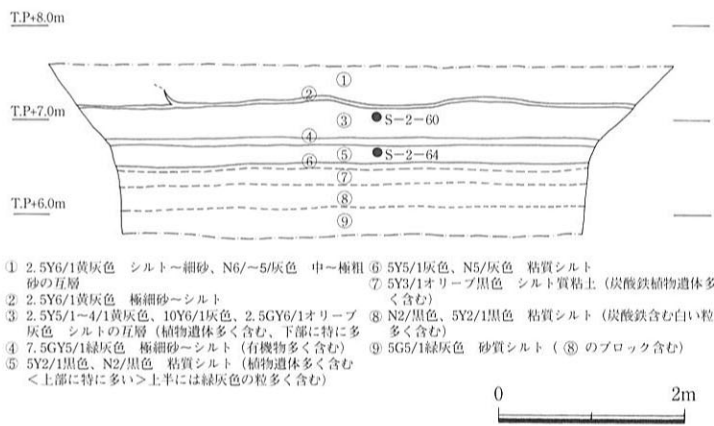


図333 6 B区床付面深掘り部分



- ① 2.5Y6/1黄灰色 シルト～細砂、N6/～5/灰色 中～極粗砂の互層
- ② 2.5Y6/1黄灰色 極細砂～シルト
- ③ 2.5Y5/1～4/1黄灰色、10Y6/1灰色、2.5GY6/1オリーブ灰色 シルトの互層 (植物遺体多く含む、下部に特に多)
- ④ 7.5GY5/1緑灰色 極細砂～シルト (有機物多く含む)
- ⑤ 5Y2/1黒色、N2/黒色 粘質シルト (植物遺体多く含む <上部に特に多い>上半には緑灰色の粒多く含む)
- ⑥ 5Y5/1灰色、N5/灰色 粘質シルト
- ⑦ 5Y3/1オリーブ黒色 シルト質粘土 (炭酸鉄植物遺体多く含む)
- ⑧ N2/黒色、5Y2/1黒色 粘質シルト (炭酸鉄含む白い粒多く含む)
- ⑨ 5G5/1緑灰色 砂質シルト (⑧のブロック含む)

図334 6 B区西側深掘り部分土層断面

下層は黒色の粘質シルト層 (⑤～⑧) である。上層は、周辺の調査区でも確認されている縄文時代晩期の砂層に、下層の黒色土壌化層が縄文時代後期～晩期に、それぞれ対応する可能性が考えられる。

なお、③層と⑧層については、¹⁴C年代測定法を実施している。

が、遺構は確認されなかった。また、床付面まで掘削した後、2箇所深掘りトレンチを設定して、掘削を行い、断面を観察した (図334)。東側の1箇所については、湧水が著しく断面調査は行えなかった。床付面以下の各層を概説しておくとして以下のである。上層は砂層 (①・②) であり、中層には砂層堆積以前の湿地状を呈していた段階のラミナの見られる極細砂～粘土層 (③・④) が堆積し、

表45 6B区出土サヌカイト剣片計測表

報告書 掲載NO.	出土層位	地区名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
6213	第7層	I04-XL	9.5	3.9	1.3	40.3
6214	第7層	I04-XL	3.6	3.9	0.6	8.4
6215	第7層	I04-YL	4.9	3.8	1.7	27.5
6247	第9層	I04-XF	5.5	7.7	0.9	30.9
6248	第9層	I04-XF	4.5	5.3	0.6	11.6
6249	第9層	I04-UB	3.9	4.6	0.6	9.1
6250	第9層	I04-UB	4.0	4.4	0.7	8.0
6251	第9層	I04-VJ	4.5	3.7	0.7	8.7
6252	第9層	I04-TB	4.3	3.1	0.4	5.5
6253	第9層	I04-XI	4.1	2.6	0.3	2.3
6254	第9層	I04-VF	3.0	4.1	0.6	5.6
6255	第9層	I04-TB	4.4	3.2	0.3	3.6
6256	第9層	I04-VJ	7.2	7.8	1.1	33.9
6257	第9層	I04-VP	7.9	4.6	1.3	37.5
6258	第9層	I03-WU	5.1	4.7	1.3	29.2
6259	第9層	I04-VD	4.5	5.0	0.8	7.7
6260	第9層	I04-UP	11.6	3.1	1.2	50.4
6261	第9層	I04-UJ	2.7	3.2	0.3	2.1
6262	第9層	I04-XL	4.6	3.9	1.6	29.6
6293	溝102	I04-XB	5.2	4.7	0.6	14.0
6297	溝103	I04-UD	4.3	2.4	2.5	24.7
6298	溝103	I04-UD	3.8	1.7	1.4	6.5
6299	溝103	I04-VD	2.0	3.6	0.2	1.5
6300	溝103	I04-VD	3.3	3.9	0.3	2.6
6301	溝103	I04-VD	3.7	5.1	0.6	9.1
6302	溝103	I04-XF	6.1	6.1	1.2	28.0
6304	溝104	I04-WK	3.4	7.5	1.0	17.8
6305	溝104	I04-XJ	4.8	7.0	0.8	19.6
6306	溝104	I04-UJ	3.2	4.4	0.3	3.8
6307	溝104	I04-UH	2.8	3.7	0.6	3.1
6308	溝104	I04-UJ	2.9	3.3	0.6	4.8
6309	溝104	I04-VI	4.0	3.3	0.6	3.9
6310	溝104	I04-VI	4.0	2.1	0.7	3.8
6311	溝104	I04-UJ	3.2	3.2	0.4	3.4
6312	溝104	I04-UJ	1.7	2.3	0.3	0.9
6313	溝104	I04-VI	1.9	2.0	0.3	0.9
6340	第10層	I04-XJ	4.6	6.2	0.8	16.0
6341	第10層	I04-UJ	5.2	5.2	0.4	7.1
6342	第10層	I04-VM	4.5	4.6	0.8	13.0
6343	第10層	I04-UK	4.8	4.2	0.9	11.8
6344	第10層	I04-XL	4.4	4.3	0.3	5.0
6345	第10層	I04-UF	3.1	2.6	0.6	3.6
6347	第10層	I04-UJ	3.6	3.2	0.4	3.7
6348	第10層	I03-VV	2.3	4.1	0.5	4.0
6349	第10層	I04-UJ	2.9	2.8	0.8	3.9
6349	第10層	I04-UJ	3.1	3.0	0.3	2.2
6350	第10層	I04-UL	2.7	2.3	0.4	1.8
6351	第10層	I04-XL	3.5	2.0	0.3	1.8
6352	第10層	I04-TC	4.4	4.1	2.6	28.3
6353	第10層	I04-VO	3.8	4.1	1.1	9.2
6354	第10層	I04-VN	3.7	4.1	0.5	4.5
6355	第10層	I04-TC	2.5	3.7	0.8	8.2
6356	第10層	I04-VM	4.7	2.9	0.7	9.8
6357	第10層	I04-UF	2.3	3.0	0.5	1.6
6358	第10層	I04-UK	2.8	3.5	0.5	3.6
6359	第10層	I04-VL	3.6	2.8	0.5	4.1
6360	第10層	I04-UJ	3.3	2.5	0.5	3.5
6361	第10層	I04-XX	4.5	3.8	0.7	7.2
6362	第10層	I04-WK	2.9	3.8	0.4	2.2
6363	第10層	I04-WK	4.0	2.8	0.3	3.5
6278	第10層ブロック土	I04-UI	2.0	3.4	0.4	1.3
6279	第10層ブロック土	I04-UI	6.5	7.1	1.1	37.5
6280	第10層ブロック土	I04-UI	4.0	3.8	1.1	11.0
6281	第10層ブロック土	I04-UI	4.1	3.8	0.8	8.5
6282	第10層ブロック土	I04-UI	5.2	7.9	1.4	28.6
6283	第10層ブロック土	I04-UI	7.6	4.8	0.7	26.6
6284	第10層ブロック土	I04-UI	2.6	2.7	0.3	1.9
6285	第10層ブロック土	I04-UI	6.3	9.2	0.8	43.5
6286	第10層ブロック土	I04-UI	3.3	9.1	0.7	14.0
6287	第10層ブロック土	I04-UI	2.8	3.5	0.5	3.8
6288	第10層ブロック土	I04-UI	2.7	3.3	0.6	5.3
6289	第10層ブロック土	I04-UI	5.3	6.2	0.9	21.5
6370	第11層	I04-TD	10.3	6.1	2.0	94.5
6371	第11層	I04-VI	5.5	4.4	0.9	12.6
6372	第11層	I04-UB	6.1	4.5	0.7	11.4
6373	第11層	I03-UV	1.7	2.4	0.4	1.2
6374	第11層	I04-UB	4.7	6.4	1.3	28.3
6375	第11層	I04-UB	3.4	6.3	1.6	23.7
6376	第11層	I04-UB	4.0	6.2	1.2	20.4

第4章 自然科学的分析

第1節 志紀遺跡6B区の花粉分析・植物珪酸体分析

辻本裕也・辻康男・田中義文・馬場健司
(パリノ・サーヴェイ株式会社)

1. 目的

調査目的は、6B区の縄文時代後期～晩期から鎌倉時代にかけての調査区周辺の植生および古環境に関する情報を得ることにある。調査方法として花粉・植物珪酸体分析を実施する。なお、本調査区を含めたその6各調査区全体、および過去の志紀遺跡・田井中遺跡の分析結果の総合検討については第8部に詳述することにし、ここでは本地点の結果を中心に述べる。

2. 調査地点の概要

分析試料については、すべて本文中の記載に準じている。基本層序については図258、深掘り部分については図334に断面図および土色などが示されている。深掘り⑤層、③層および基本層序の㉗(第13層)、㉘(第14層)、㉙(第11層)は、縄文時代後晩期～弥生時代前期までに形成された堆積層と推定される。深掘り⑤層は、有機質に富む塊状をなす粘土質シルトである。深掘り③層および基本層序の第13、14層は、粘土質砂質シルトで構成される。㉙(第11層)は、シルト質砂～極細粒砂からなる。第11層上面では、弥生時代前期に比定される水田跡が検出されている。砂質シルトの㉚(第10層)は、弥生時代前期に形成されたと推定される。第10層においても、弥生時代前期に比定される水田跡が検出されている。第10層直上には、6C区において検出された溝を埋積する堆積物の最上部付近に対比される砂質シルトからなる㉛(第10層)が載っている。

砂質シルトからなる㉜(第8層)および粗粒砂混じりのシルト砂の㉝(第9層)は、弥生時代中期～古墳時代後期かけて形成された堆積層である。第8層上面では、古墳時代後期頃の水田跡が良好な状態で検出されている。㉞(第5層)、㉟および㊱(第6層)は、奈良時代に形成された堆積層である。第5層は極細粒砂～細粒砂、第6層は砂質シルトで構成されている。第5層および6層上面では、奈良時代の水田跡が検出されている。㊲(第2層)、㊳(第3層)、㊴(第4層)は、平安時代に形成された堆積層である。第2、4層は極細粒砂～細粒砂、第3層は砂質シルトで構成されている。第2層上面では、平安時代の水田跡が検出されている。比較的淘汰の良い中粒砂によって構成される㊵(第1層)は、平安時代～鎌倉時代に形成された堆積層である。第1層上面では、鎌倉時代の水田跡が検出されている。ただし、サンプリング地点は、周囲より相対的に高所に位置しており、粒径も非常に砂質である特徴から、畠地であった可能性が示唆されている。

3. 方法

花粉分析・植物珪酸体分析の手法は、6A区で実施した分析方法と同様である。

4. 結果

(1) 花粉化石

結果を表46・図335に示す。花粉群集は、大きく3区分できる。すなわち、試料番号60・試料番号21～10・試料番号8～4である。3区分の最下位にあたる試料番号60では、木本花粉の割合が高く、アカガシ亜属が多産している。そのほかにはスギ属、イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科、ツガ属などが認め

表46 6B区の花粉分析結果

種類	試料番号	S-2															
		4	5	6	7	8	10	14	16	18	32	21	23	26	28	60	64
木本花粉																	
マキ属		-	-	-	-	2	1	-	3	-	3	12	1	-	-	-	-
モミ属		7	16	22	42	22	39	14	16	-	19	55	-	-	-	9	3
ツガ属		37	15	26	32	44	26	21	18	2	28	54	-	-	1	15	-
トウヒ属		-	1	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属単維管束亜属		-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属		46	74	117	83	66	51	33	30	2	6	16	-	2	-	-	-
マツ属(不明)		31	57	100	74	36	30	13	11	-	11	13	-	-	-	5	1
コウヤマキ属		4	2	2	-	4	5	1	2	-	6	4	-	-	-	-	-
スギ属		22	8	8	8	10	9	11	11	-	16	15	1	-	-	28	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		4	3	-	-	4	3	5	3	-	1	2	-	-	-	17	-
ヤナギ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-
ヤマモモ属		1	2	2	1	-	-	2	-	-	2	-	-	-	-	2	-
サワグルミ属		2	2	1	-	1	-	2	1	-	1	2	-	-	-	1	-
クルミ属		-	1	-	-	-	1	-	2	-	1	-	-	-	-	1	-
クマシデ属-アサダ属		5	1	4	4	3	14	9	6	-	11	1	-	-	-	11	-
ハシバミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
カバノキ属		4	2	1	1	1	5	1	1	-	3	1	-	-	-	2	-
ハンノキ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-
ブナ属		2	3	2	4	3	4	-	5	-	4	4	-	-	1	8	-
コナラ属コナラ亜属		1	3	7	3	3	8	7	12	-	11	8	-	-	-	9	-
コナラ属アカガシ亜属		25	14	20	20	12	39	107	53	1	39	30	1	-	-	94	2
クリ属		1	1	2	-	1	-	1	2	-	-	-	-	-	-	3	-
シイノキ属		3	1	1	1	2	5	18	9	-	1	2	-	-	-	7	3
ニレ属-ケヤキ属		3	4	6	4	2	3	8	5	1	-	6	-	-	-	11	1
エノキ属-ムクノキ属		6	1	2	1	4	1	1	7	-	4	1	-	-	-	6	-
キハダ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
アカメガシワ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
モチノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
カエデ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
トチノキ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	-
ツバキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
アオキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ツツジ科		-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-
カキ属		-	1	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
エゴノキ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-
イボタノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
トネリコ属		7	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
スイカズラ属		-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉																	
ガマ属		-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	1	-
ミクリ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属		-	-	1	-	1	4	5	1	-	1	1	-	-	-	-	-
イネ科		401	182	269	136	333	390	252	300	11	132	277	10	-	4	13	1
カヤツリグサ科		29	5	10	7	19	27	36	18	-	24	25	12	-	1	6	3
ミスアオイ属		3	7	10	1	6	8	16	12	-	1	8	-	-	-	-	-
クワ科		3	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-
ギシギシ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	11	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節		3	1	4	5	5	8	2	1	-	-	3	-	-	-	1	1
タデ属		-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-
ソバ属		-	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科		5	-	1	-	1	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科		1	-	-	-	1	-	3	2	-	11	12	1	-	-	-	-
カラマツソウ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キンボウゲ科		-	1	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科		2	-	-	-	-	2	-	2	-	2	1	1	-	-	-	-
ワレモコウ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
バラ科		-	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-	-	-	-	15	-
マメ科		-	1	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属		-	-	6	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒシ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属		-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科		3	1	-	1	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オオバコ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属		14	5	2	2	6	4	11	8	1	3	-	3	-	4	1	-
オナモミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
キク亜科		2	-	-	1	-	-	4	2	-	-	-	1	1	1	-	-
タンポポ亜科		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
不明花粉		3	4	4	-	1	5	6	7	1	6	5	1	1	-	7	2
シダ類孢子																	
ヒカゲノカズラ属		-	-	3	-	-	1	-	8	-	11	2	1	3	2	1	-
イノモトソウ属		3	3	3	-	11	4	4	50	1	45	8	11	15	15	4	4
ミズワラビ属		1	1	2	11	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
サンショウモ		-	9	3	15	6	10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
アカウキクサ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のシダ類孢子		57	50	74	35	34	38	30	224	7	196	79	77	51	50	44	98
合計																	
木本花粉		211	212	326	278	225	245	256	202	6	167	229	3	3	2	252	12
草本花粉		469	208	305	156	377	448	336	347	12	191	330	28	1	10	39	5
不明花粉		3	4	4	0	1	5	6	7	1	6	5	1	1	0	7	2
シダ類孢子		61	63	85	62	51	53	34	282	8	252	90	90	69	67	49	105
総計(不明を除く)		741	483	716	496	653	746	626	831	26	610	649	121	73	79	340	122

られる。草本花粉は少なく、イネ科、バラ科などが認められる。その上位の区分にあたる試料番号21～10では、下位と同様アカガシ亜属が多産するが、モミ属、ツガ属、マツ属の産出量が増加する。花粉群集は草本花粉の割合が高くなり、主にイネ科により占められている。そのほかにはカヤツリグサ科などが産出し、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属、ヒシ属、ゴキヅル属なども認められる。最上位の区分にあたる試料番号8～5では、木本花粉はマツ属により占められており、モミ属、ツガ属、スギ属、アカガシ亜属などが認められる。草本花粉はイネ科により占められ、カヤツリグサ科、ヨモギ属や、ガマ属、ミクリ属、オモダカ属、ミズアオイ属、アリノトウグサ属、サンショウモなどの水生植物、水生シダ類も認められる。また、栽培植物であるソバ属も検出されている。

(2) 植物珪酸体

結果を表47、図336に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、多くは保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。試料番号60～28では、イネ属は、全く検出されない。短細胞、機動細胞ともにヨシ属とタケ亜科の産出が目立ち、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科、樹木起源珪酸体第IVグループ(近藤・ピアスン, 1981)もわずかに検出される。その中でも試料番号60では保存状態の悪いタケ亜科の産出が顕著であり、他の2試料ではヨシ属の産出が顕著である。

試料番号26～5はほぼ類似した組成を示す。短細胞・機動細胞共にイネ属のが連続して検出されるようになり、上位ほど高くなる傾向にある。特に短細胞では試料番号5・6、機動細胞では試料番号10・14で割合が高くなっている。また試料番号14よりも上位では、イネ属の組織片(珪酸体が組織内で複数個配列した状態で検出されるもの)が多産している。これとは反対にヨシ属の珪酸体は、短細胞、機動細胞共に減少する傾向にある。タケ亜科やウシクサ族は試料によって多少の増減はあるが、変化の傾向は認められない。また樹木起源の珪酸体は、すべての試料から検出される。

表47 6B区の植物珪酸体分析結果

種 類	S-2																
	試料番号	4	5	6	7	8	10	14	16	18	32	21	23	26	28	60	64
イネ科葉部短細胞珪酸体																	
イネ族イネ属		3	20	30	11	8	20	7	2	1	1	7	4	2	-	-	-
タケ亜科ネザサ節		-	-	2	-	2	-	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-
タケ亜科		1	64	99	59	42	84	66	24	28	54	53	38	61	22	71	11
ヨシ属		-	15	11	20	9	30	51	32	24	24	40	19	30	70	15	86
ウシクサ族コブナグサ属		1	1	3	2	1	2	5	23	14	1	10	3	-	3	-	2
ウシクサ族スキ属		-	3	7	9	3	10	15	12	2	9	15	11	8	21	2	29
イチゴツナギ亜科		-	5	12	3	7	12	11	3	1	1	8	6	-	1	1	-
不明キビ型		-	25	35	14	26	45	36	25	15	15	36	38	41	51	8	44
不明ヒゲシバ型		-	15	17	11	26	41	26	17	15	6	24	10	19	22	3	30
不明ダンチク型		-	17	11	11	6	12	8	7	3	2	18	18	9	15	6	30
イネ科葉身機動細胞珪酸体																	
イネ族イネ属		1	32	44	39	27	108	183	38	19	21	74	28	2	-	-	-
タケ亜科ネザサ節		-	3	-	1	1	1	1	-	-	-	-	-	1	2	-	-
タケ亜科		5	35	66	55	43	63	68	30	39	63	61	99	78	69	76	22
ヨシ属		-	2	2	1	10	9	16	15	10	14	11	32	28	87	6	75
ウシクサ族		-	5	7	10	5	12	11	12	11	21	8	11	5	15	3	21
シバ属		1	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明		2	30	19	19	16	43	26	26	25	34	62	48	42	78	19	52
合 計																	
イネ科葉部短細胞珪酸体		5	165	227	140	130	256	226	145	103	113	211	147	171	206	106	232
イネ科葉身機動細胞珪酸体		9	109	140	125	102	236	305	121	104	153	216	218	156	251	104	170
総 計		14	274	367	265	232	492	531	266	207	266	427	365	327	457	210	402
組 織 片																	
イネ属類珪酸体		-	4	3	1	3	2	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
イネ属短細胞列		1	6	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
樹木起源 第IVグループ		-	3	4	1	3	11	5	2	4	1	2	6	4	2	2	1

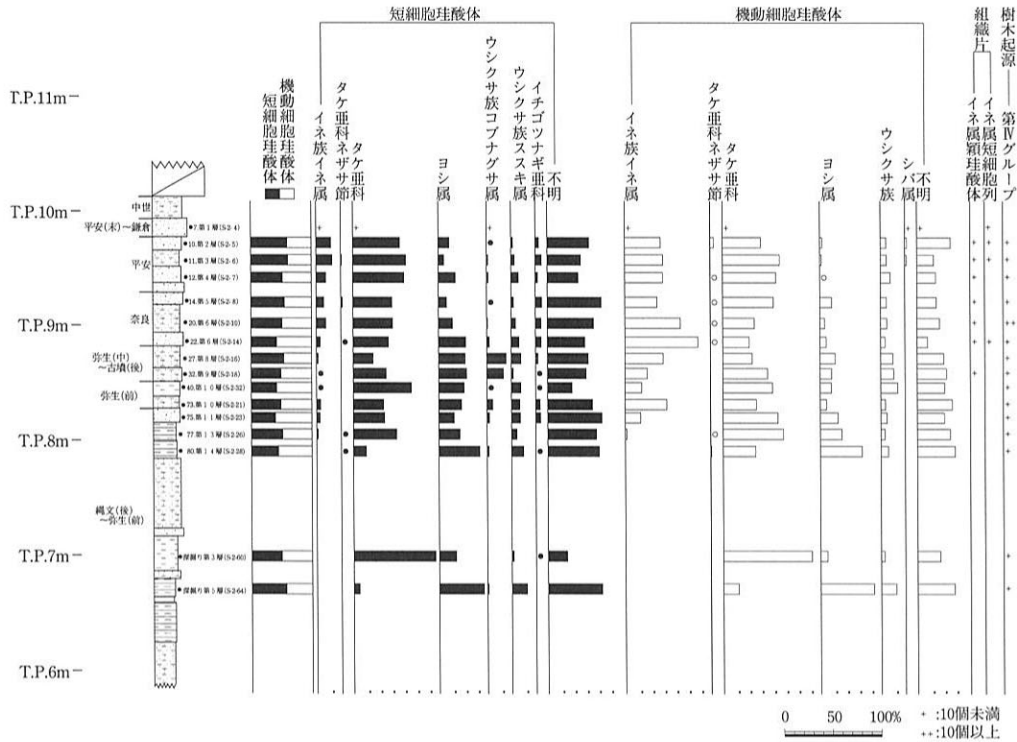


図336 植物珪酸体群集と組織片の産状

出現率はイネ科葉部短細胞珪酸体、葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+は各珪酸体で、100個未満の試料より検出された種類を示す。組織片や樹木起源珪酸体の産状を検出個数により+の記号で示す。

試料番号4は、保存状態が非常に悪く、イネ属やタケ亜科などがわずかに認められるに過ぎない。

5. 考察

縄文時代後期～弥生時代前期の堆積物では、深掘り第3層以外の試料では花粉化石の保存状態が悪く、化石数も少なかった。この原因としては、同一試料における植物珪酸体が良好に産出していること、僅かに検出された花粉・胞子化石が風化に対する抵抗性が強い種類が多いことから、堆積後の風化作用による分解が考えられる。深掘り第3層の花粉化石群集は木本花粉の占める割合が高く、常緑広葉樹のアカガシ亜属が優占することが特徴である。このほかスギ属・モミ属・ツガ属といった温帯性針葉樹のほか、トチノキ属・エノキ属・ムクノキ属・カエデ属・ニレ属・ケヤキ属といった落葉広葉樹の種類も認められる。これらの要素が、後背の丘陵や扇状地の植生を構成する要素であったとみられる。調査地点周辺にはガマ属・ヨシ属が繁茂する湿地が広がっていたとみられる。なお、13層からはイネ属の植物珪酸体が微量検出されるが、上位層からの落ち込みの可能性がある。

弥生時代前期の第10層では花粉化石群集が変化し、モミ属、スギ属、ツガ属などの中間温帯林要素の増加、マツ属の漸増、イネ科を中心とした草本類の増加で特徴づけられる。このような組成は本層に対比される6A区15層や6C区9層でも類似している。本時期には調査区周辺にミズアオイ属・オモダカ属などの抽水植物やイネ科植物が生育する草地が広がった可能性がある。植物珪酸体の結果をみると、イネ属植物珪酸体が増加する。現水田の調査による、水田土壌中の植物珪酸体の調査によれば、機動細胞珪酸体中のイネ属の割合は9%、稲藁を堆肥として与えている水田で16%という結果が得られている(近藤, 1988)。第10層の出現率は、この値を越えている。第10層上面では水田遺構が良好な状態で検出されていることから、ここでの微化石の産状の変化は、水田開発などによる草地の拡大に由来してい

と思われる。一方、周辺森林植生は温帯針葉樹が分布域を拡げた可能性がある。また、マツ属の出現率も高くなり、トチノキ属などの落葉広葉樹の種類が減少することから、森林植生は縄文時代後期のものとは多少異なっていた可能性がある。この点については、第8部で詳述する。

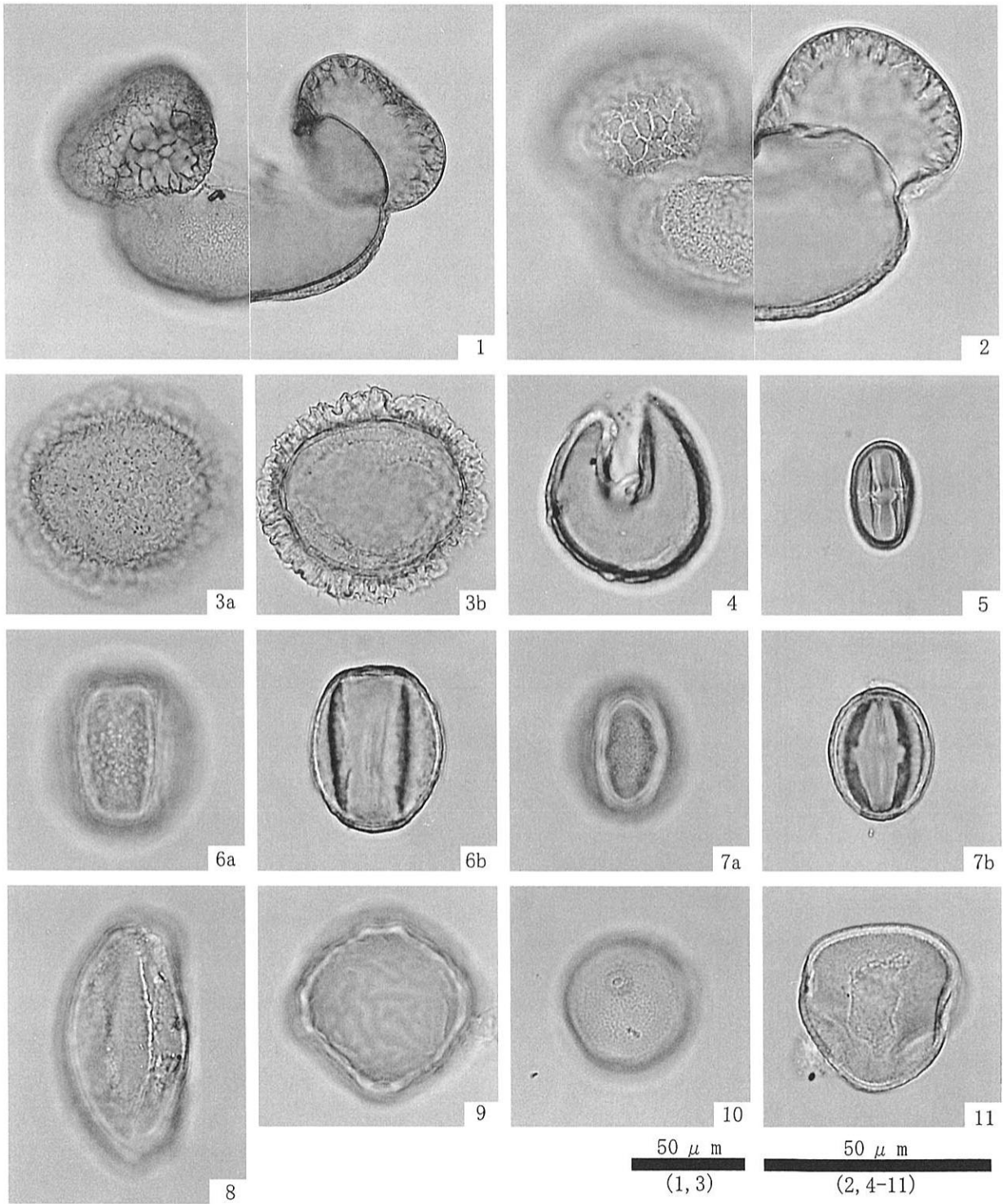
弥生時代中期～古墳時代後期の第8層と第9層である。第9層からは花粉化石がほとんど検出されなかった。第9層が砂質でやや土壌化が進んだ層であることから、先に述べたように土壌化による花粉化石の消失が考えられる。8層の花粉化石群集は、弥生時代前期と大きな変化はなく、引き続き同様な植生であったことが推定される。植物珪酸体分析結果をみると、イネ属機動細胞珪酸体の割合は、弥生時代前期と同様20%以上を占めている。第8層上面では発掘調査により水田遺構が確認されており、今回の結果は調和的な結果といえる。なお、両層準ではコブナグサ属の短細胞植物珪酸体が増加する特徴を示す。コブナグサ属は、現在日本に分布する種としてコブナグサがある。本種は水田の畦上や野原などに分布する一年生の草本である。本種は小型の植物であることから、植物珪酸体の生産量は大型の植物であるヨシ属やタケ亜科などと比較して少ないと考えられる。そのような種類が特徴的に多産することは、本種が当時の調査区においてかなりの密度ないし期間にわたって分布していたことを示唆する。

奈良時代の第6層・第5層では、木本花粉化石の組成を見ると、マツ属が増加傾向を示す反面、カシ類が減少傾向を示す。また、イネ科をはじめとする草本花粉が増加し、花粉化石全体に占める割合が多くなる。過去の志紀遺跡や田井中遺跡の結果をみると、この傾向は古墳時代後期以降顕著にみられる(渡邊, 1995; 辻本・田中, 1997)。植物珪酸体分析結果をみると、イネ属が高率に出現する。第6・5面で水田遺構が検出されていることから調和的な結果といえる。なお第6層の細分層(22.: サンプル2-14)は現地調査時の所見では洪水以前の地表面とされる。本層でもイネ属が高率に出現しており、その出現率は第5面の水田よりも高い値を示している。なお、第5層と第6層とでは機動細胞珪酸体の出現率に差がみられたが、短細胞珪酸体では有意な差が認められなかった。このようなイネ属植物珪酸体の産出は堆積物中での植物珪酸体の偏在性を示している可能性があり、いいかえれば局地性を強く反映していることを示している可能性がある。

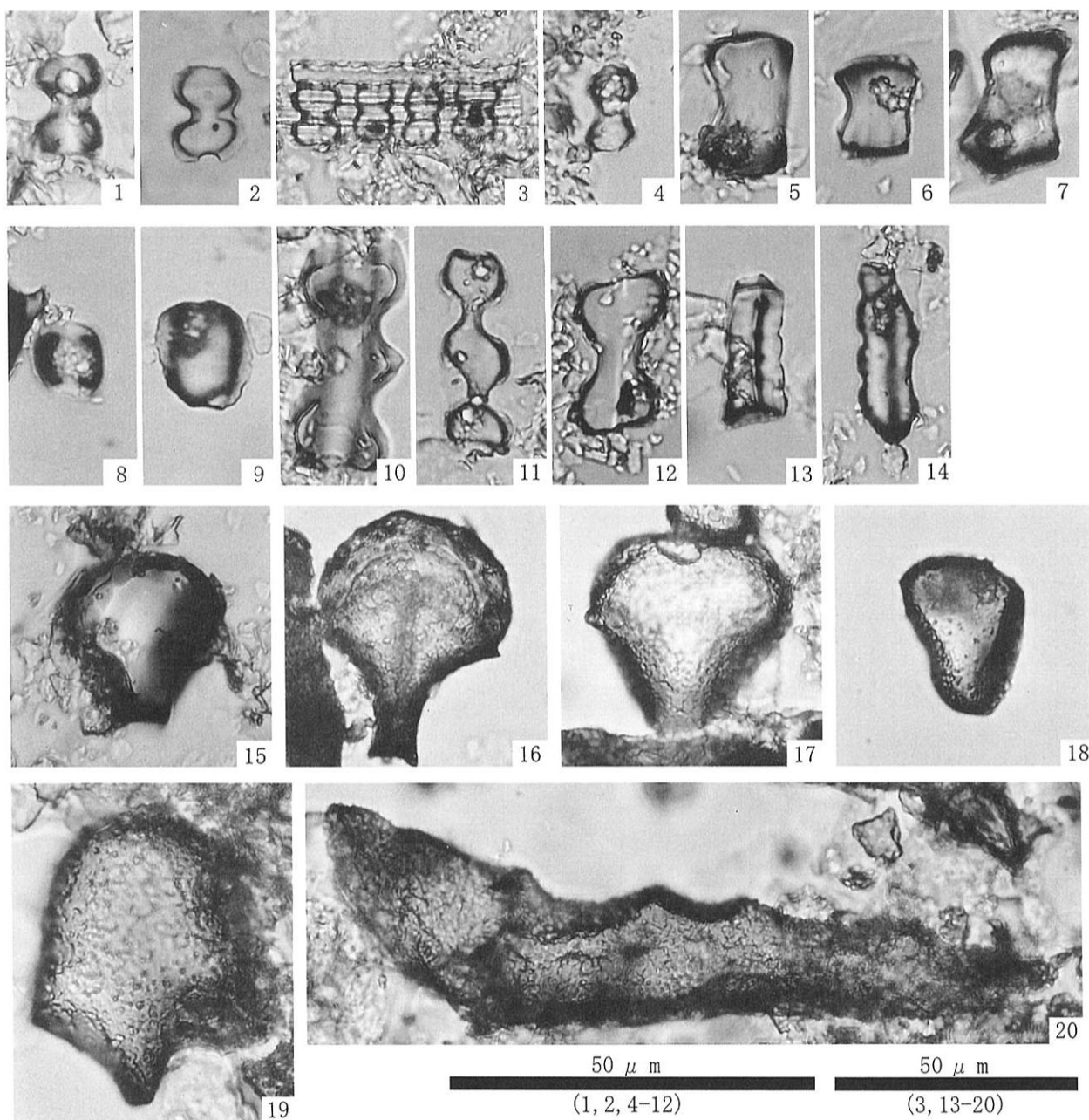
平安時代ならびにそれ以降の堆積物をみると、木本花粉化石群集に占めるマツ属の割合は50%を越え、草本花粉はイネ科が高率となる。種類数が減少して組成が単調になる一方で、ソバ属など栽培植物の花粉化石もみられるようになる。植物珪酸体をみると、イネ属の機動細胞珪酸体が30～40%の出現率を示しているほか、それとは反対にヨシ属の珪酸体が減少している。またイネ属穎珪酸体が奈良時代の層位から、イネ属短細胞珪酸体列(珪酸体が組織の中で列をなしているもの)が平安時代の層位から連続して検出される。穎珪酸体の検出は、土壌中に籾殻が混入していることを意味し、短細胞珪酸体列の産出は、葉の現地性が高いことを意味している。

引用文献

- 近藤錬三(1988)十二遺跡土壌の植物珪酸体分析。「鑄師屋遺跡群 十二遺跡-長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書-」, p.377-383, 御代田町教育委員会。
- 近藤錬三・ピアスン友子(1981)樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について。帯広畜産大学研究報告, 12, p.217-229。
- 辻本裕也・田中義文(1997)田井中遺跡95-2区・志紀遺跡95-2区における古環境復元。「田井中遺跡(1～3次)・志紀遺跡(防1次) 陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業にともなう発掘調査報告書」, p.242-277, 財団法人 大阪府文化財調査研究センター。
- 渡邊正巳(1995)志紀遺跡(93-西区)における花粉・珪藻分析。「志紀遺跡 大阪府営志紀住宅建て替えに伴う発掘調査報告書」, p.67-76, 大阪府埋蔵文化財協会。



- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1. モミ属 (S-2-10) | 2. マツ属 (S-2-10) |
| 3. ツガ属 (S-2-10) | 4. スギ属 (S-2-10) |
| 5. シイノキ属 (S-2-10) | 6. コナラ属コナラ亜属 (S-2-10) |
| 7. コナラ属アカガシ亜属 (S-2-10) | 8. ミズアオイ属 (S-2-10) |
| 9. ニレ属ケヤキ属 (S-2-10) | 10. イネ科 (S-2-10) |
| 11. カヤツリグサ科 (S-2-10) | |



- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体 (S-1-21) | 2. イネ属短細胞珪酸体 (S-2-4) |
| 3. イネ属短細胞列 (S-2-5) | 4. イネ属短細胞珪酸体 (S-2-10) |
| 5. タケ亜科短細胞珪酸体 (S-3-15) | 6. ネザサ節短細胞珪酸体 (S-2-6) |
| 7. タケ亜科短細胞珪酸体 (S-2-60) | 8. ヨシ属短細胞珪酸体 (S-2-64) |
| 9. ヨシ属短細胞珪酸体 (S-1-21) | 10. コブナグサ属短細胞珪酸体 (S-2-6) |
| 11. ススキ属短細胞珪酸体 (S-1-21) | 12. ススキ属短細胞珪酸体 (S-2-64) |
| 13. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (S-3-10) | 14. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (S-2-5) |
| 15. イネ属機動細胞珪酸体 (S-1-21) | 16. イネ属機動細胞珪酸体 (S-3-10) |
| 17. タケ亜科機動細胞珪酸体 (S-3-15) | 18. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (S-3-15) |
| 19. ヨシ属機動細胞珪酸体 (S-1-21) | 20. 樹木起源 (第IVグループ) (S-3-15) |

第2節 放射性炭素年代測定

山形 秀樹
(パレオ・ラボ)

1. はじめに

志紀遺跡その6 Bトレンチの調査区より検出された土壌3点の加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、6 Bトレンチ第13層 (^{14}C サンプル3)、6 Bトレンチ深掘り部分上層 (^{14}C サンプル6)、6 Bトレンチ深掘り部分下層 (^{14}C サンプル10) から採取した土壌有機物 (ヒューミン) である。 ^{14}C サンプル3と ^{14}C サンプル6については微量の炭化物を含んでいたが、測定可能な量を採取できなかった。なお、これら試料については、125 μm のフルイを用いて湿式篩い分けを行ない、フルイを通過したものだけを用いた。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨 (グラファイト) に調整した後、加速器質量分析計 (AMS) にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

3. 結果

表48に、各試料の同位体分別効果の補正值 (基準値-25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値 (yrBP) の算出は、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期5,568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

表48 6 B区放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (%)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 σ 暦年代範囲
PLD-1112 (AMS)	土壌 (^{14}C サンプル3) 6B トレンチ 第13層	-19.4	3105 \pm 30	cal BC 1395 cal BC 1325	cal BC 1415-1370 (64.6%) cal BC 1340-1320 (33.6%)
PLD-1113 (AMS)	土壌 (^{14}C サンプル6) 6B トレンチ 深掘り部分上層	-27.4	3610 \pm 30	cal BC 1950	cal BC 2020-1995 (26.7%) cal BC 1980-1920 (73.3%)
PLD-1114 (AMS)	土壌 (^{14}C サンプル10) 6B トレンチ 深掘り部分下層	-18.4	4050 \pm 30	cal BC 2575 cal BC 2505	cal BC 2620-2610 (14.0%) cal BC 2600-2560 (43.7%) cal BC 2525-2495 (37.5%)

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、¹⁴C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と¹⁴C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて¹⁴C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて較正暦年代を算出する。

較正暦年代の算出にCALIB4.3（CALIB3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、暦年代較正值は¹⁴C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。

4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行った。暦年代較正した1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が高い年代範囲に注目すると、¹⁴Cサンプル3はcal BC1415-1370（64.6%）、¹⁴Cサンプル6はcal BC1980-1920（73.3%）、¹⁴Cサンプル10はcal BC2600-2560（43.7%）、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代、p.3-20.
- Stuiver, M. and Reimer, P.J. (1993) Extended ¹⁴C Database and Revised CALIB 3.0 ¹⁴C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.
- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第5章 小結

6 B区では、前年度に調査を行った5区や、従前の調査の3区、4区などの調査成果をふまえながら発掘調査を行った結果、15面の遺構面が検出された。その中で、過去の発掘調査では得られなかった数々の新たな知見が得られた。以下、6 B区における変遷をまとめながら、見ていくことにする。

6 B区においてもっとも下位に位置するのは、縄文時代晩期と思われる自然堆積層上面である第15面である。しかし、第15面は調査区の一部でしか調査しておらず、詳細は不明である。

第13面、第14面ともに黒色土壌化層の上面であるが、遺構は検出されず、遺物も第13層からごく少量出土したのみで、人間の生活の痕跡などは認められない。湿地のような状況であったことが想定される。時期は縄文時代晩期～弥生時代前期と思われる。

その後、弥生時代前期に、初めて人間による大地への積極的な働きかけが認められる。第11面では北東-南西方向を基幹畦畔とする小区画水田が検出された。上面の溝に削られて依存状況は必ずしも良くないが、調査区東半で狭い区画の水田を検出した。また、調査区中央部では大畦畔が検出されており、意図的に割られた土器も出土した。なお、第11面の水田は3区で検出された志紀遺跡最古段階の水田より、一段階新しい水田であり、最古段階の水田が6 B区まで広がらないことが明らかになった。

第10面は、第11面とは異なり、北西-南東方向を基幹畦畔とする弥生時代前期末頃の小区画水田である。やや縦に長い区画の水田が多いようである。この間に土地区画の大きな変化があったことが観取できる。また、第10面のある時期には、水田の中に数条の溝が掘削されていた。

溝について

今回の調査では、弥生時代前期中頃～末頃と思われる溝群を検出した。いずれも、幅4 m前後、深さ1 m前後である。調査区内で収束する溝や、平面では検出されなかったが断面に収束部分が見られるものなどがあり、多様な溝のあり方を示す。溝はある一定の使用期間の後、最終的には人為的に埋め戻されている。また、周辺調査区との溝の対応関係についても若干検討したが、近接した調査区であるにも関わらず、埋没状況が異なっており、対応関係の比定は困難であった。溝の使用期間・時期や繋がりなど、今後水田における生産体系を考える上で非常に重要な意味を持つと思われ、検討課題と言える。

各溝の時期は遺物の出土がごく少量であり、非常に決めがたい。溝には地震の痕跡が見られるものと見られないものがあり、ある程度の時期差があったようである。また、地震の痕跡が残る溝でも、溝ごとに地震の影響を受けている段階が違うため、相対的な時期差は認められた。

地震について

溝76・77・101・102・103において、地震の痕跡が認められた。溝の肩部が地滑りを起こしているものや各溝の埋土が地震による変形を受けているのも見られた。溝によっては、底面が横方向に移動しているものもあった(図313)。当時の地震の大きさを窺える資料である。なお、断面では噴砂も確認されている。なお、地震の時期については弥生時代前期後半と大まかに位置づけることができ、田井中遺跡95-2調査区の液状化痕を起こした地震と同一と考えられる。

サヌカイト成品

溝を埋め戻したブロック土や第9・10層からサヌカイト成品が多数出土した。特筆すべきは、棘状の突起を持った尖頭器である。一つは先端部分がわずかに欠損するがほぼ完形である。近畿地方では数点

類例があるが、完形のは珍しい。他にも側縁部に鋸歯状の加工を施すものも見られる。これ以外に、石小刀も多数出土している。これら、サヌカイト成品が水田域である志紀遺跡から出土する意義を今後考えていかねばならない。

弥生時代中期中頃～後期には、水田は検出されていないが、既期の土器の出土した土坑が検出されている。この時代に稲作を行っていたかどうかは定かではないが、ある程度、人が活動していた様子が窺える。その後、古墳時代に至るまでの動向は不明である。

次の古墳時代には、整然と並んだ小区画水田が検出された（第8面）。この面は古墳時代後期と考えられ、調査区内で3条の大畦畔が検出された。大畦畔A以外は畝畝状である。それぞれの大畦畔による区画ごとに水田の区画が違うことがわかる。また、それぞれの水田のレベル差からある程度の水回しが復元できた。

その後、水田の造成が見られるのは奈良時代である（第5・6面）。この面では、条里制に伴う東西－南北方向の畦畔が検出されている。なお、第7面は条里面のベース面であり、条里制に伴うと思われる溝も数本検出されたが、上層の下面遺構として北西－南東方向の溝も数本検出された。おそらく飛鳥時代頃の自然地形に伴う水田から条里型の水田へと移行していく過渡的な様相を呈しているといえる。その中でも、第7面で検出され「第6－2面」と仮称した段階の東西・南北を指向する溝は、上層の下面遺構であるものの、条里制の施工を考える上でも興味深い資料であると言える。

条里型水田の初源

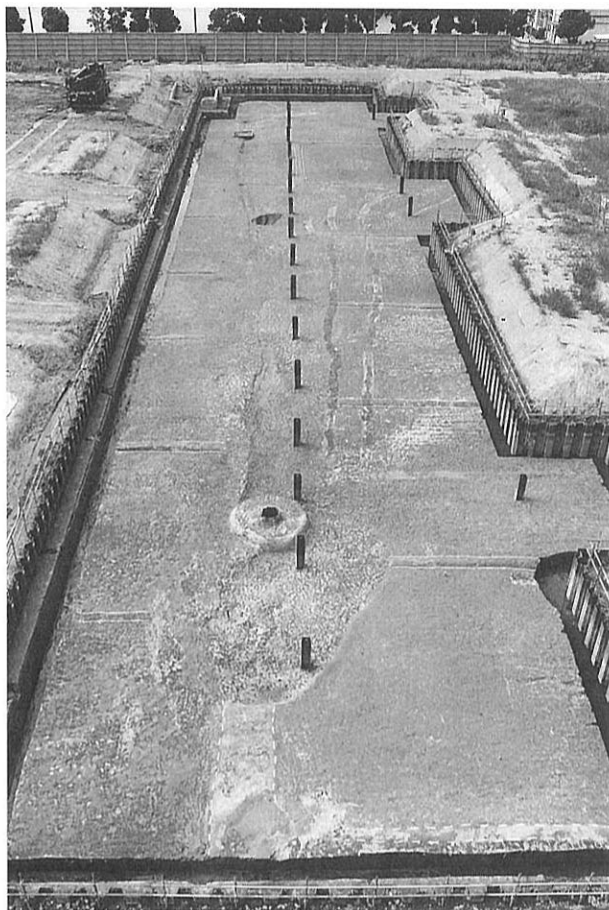
従前の調査では、志紀遺跡における条里型の水田の初現は9世紀頃であった。しかし、前年度の5区の調査で奈良時代と考えられる水田が検出された。その5区では南北方向の坪境が検出されていたので、当調査区でもその延長が検出されることを想定したところ、南北方向の坪境とともに、東西方向の坪境も検出された。坪境の溝の埋土からは、平城宮Ⅲを前後する時期の遺物が出土した。そのため、条里型の水田が奈良時代にはすでに存在していたという5区での成果が追認された。

坪境出土獣骨

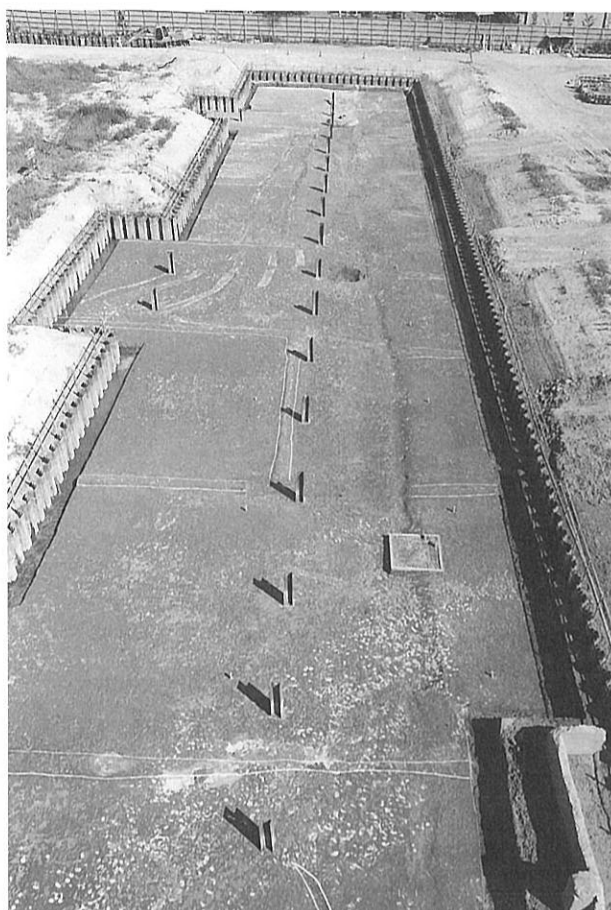
第4面坪境畦畔上や第5面坪境溝からは獣骨が出土した。それぞれの獣骨はある程度のまとまりをもって出土している。特に第5面の南北方向の坪境溝から出土した獣骨は、5点が直線状に並べられたような状態で出土した。出土した骨はほとんどが馬である。坪境におけるなんらかの祭祀の様子を彷彿とさせるものである。

条里制に伴う水田はその後の平安時代～鎌倉時代にも連綿と続けられており、周辺の各調査区との対応関係も比較的追いややすい面もある。

以上が、6B区における変遷の概要である。弥生時代前期～鎌倉時代初頭にかけて、この場所で行われてきた、主に生産に関する人間の活動を追う事ができた。



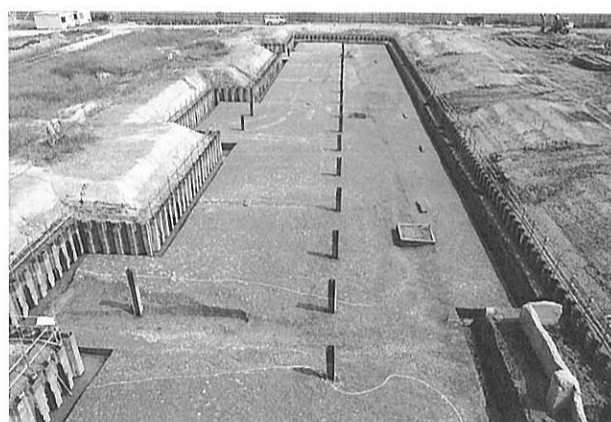
第1面 (東から)



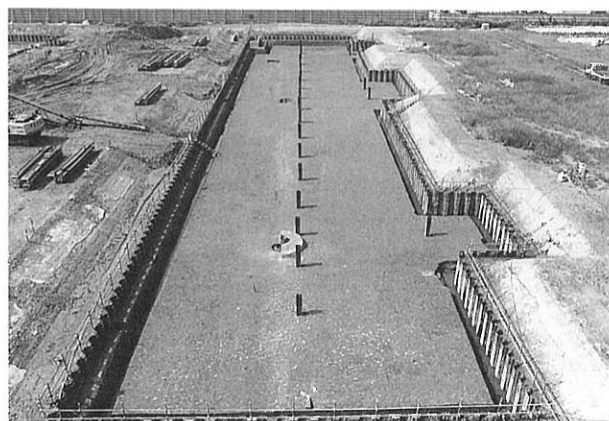
第1面 (西から)



第2面 (東から)



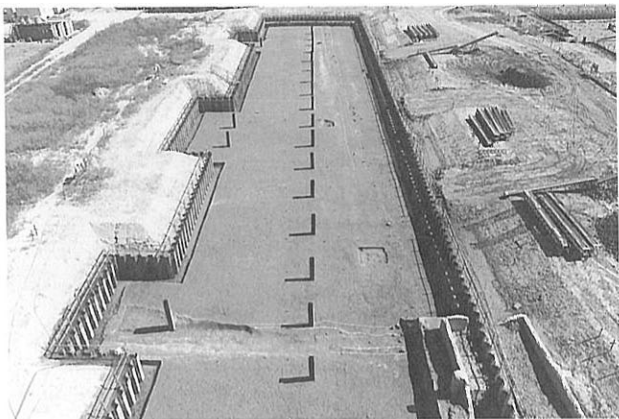
第2面 (西から)



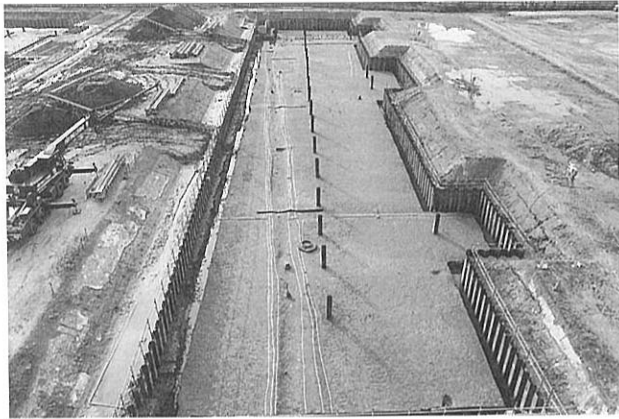
第3面 (東から)



第4面 (東から)



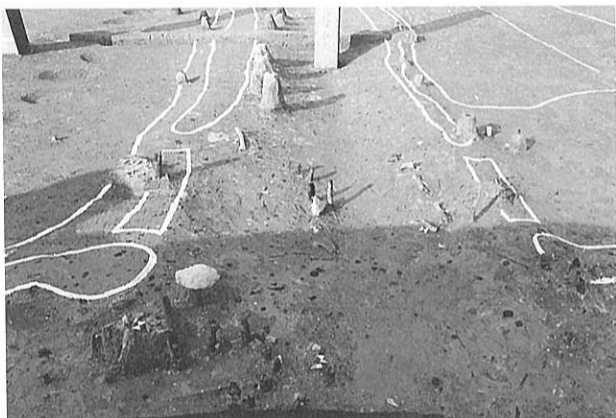
第4面 (西から)



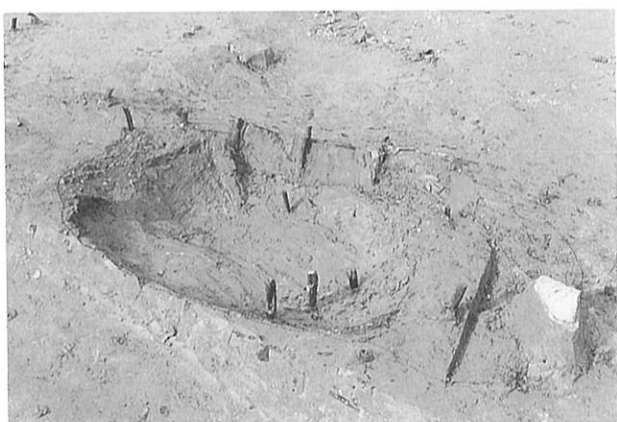
第5面 (東から)



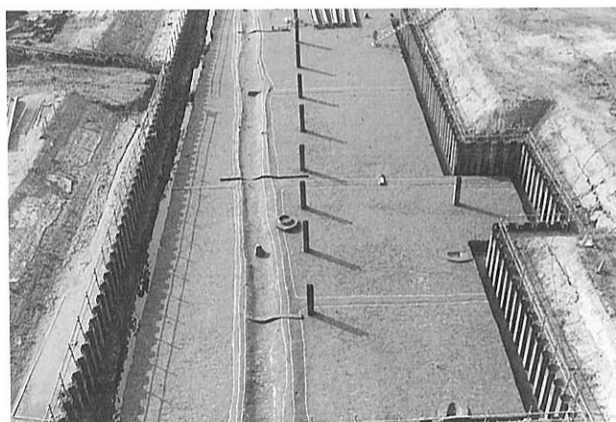
第5面 (西から)



第5面坪境交差点 (南から)



第5面畦畔下土坑 (南東から)



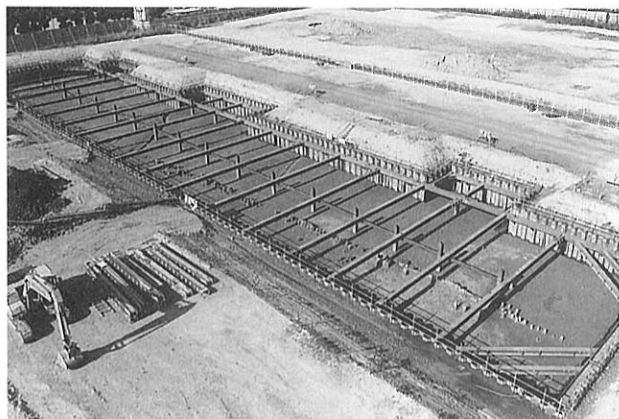
第6面 (東から)



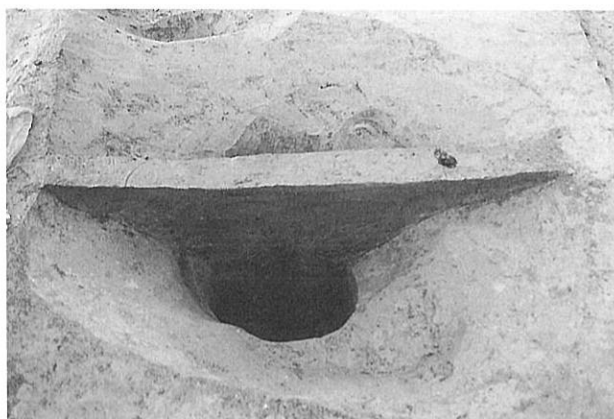
第7面 (南東から)



第8面 (南東から)



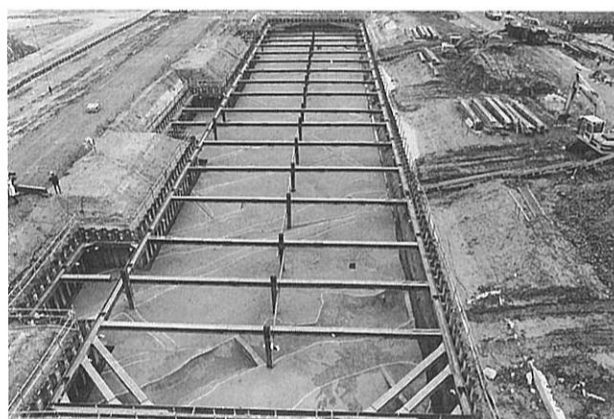
第9面 (南東から)



土坑86 (南東から)



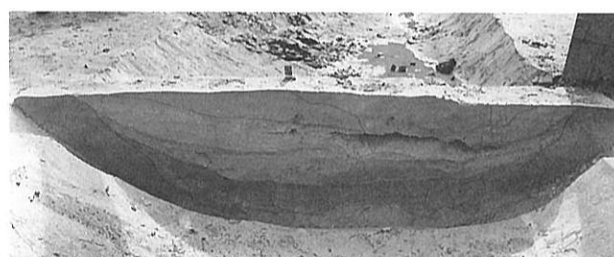
第10面 (南東から)



第10面 (西から)



溝76断面 (北から)



溝77断面 (北西から)



溝101中央断面 (北西から)



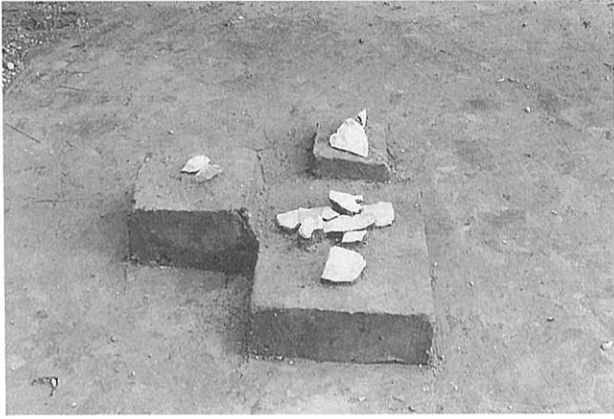
溝102北断面 (南東から)



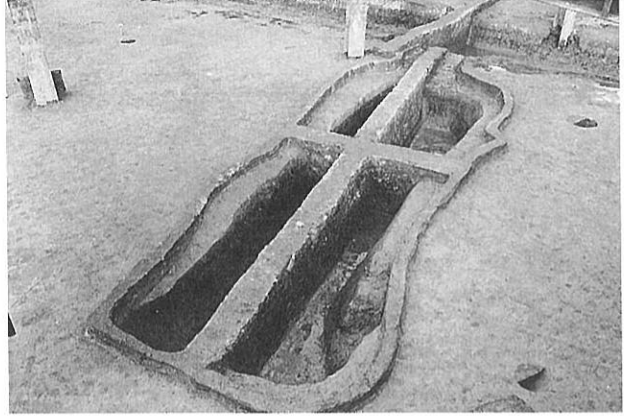
溝103北断面 (南東から)



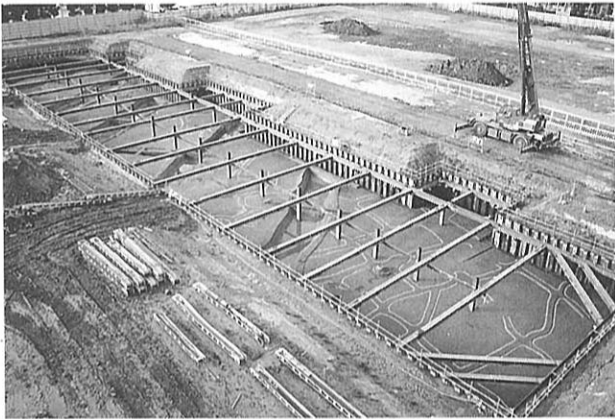
溝104南断面 (北から)



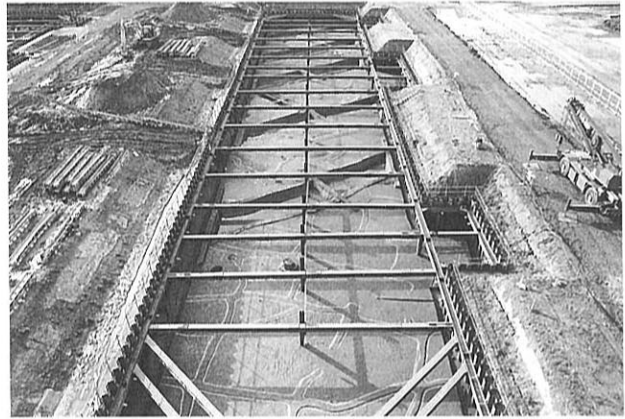
サヌカイト集石 (西から)



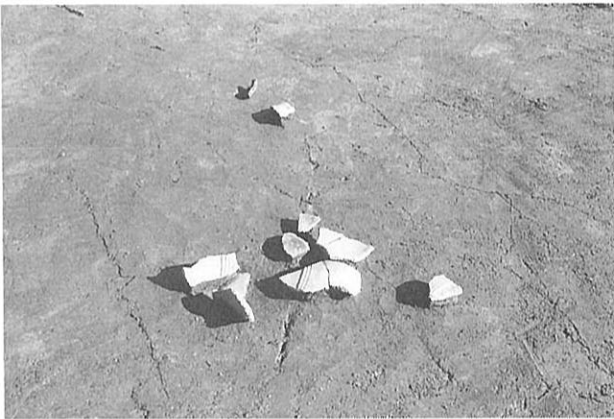
土坑107 (南西から)



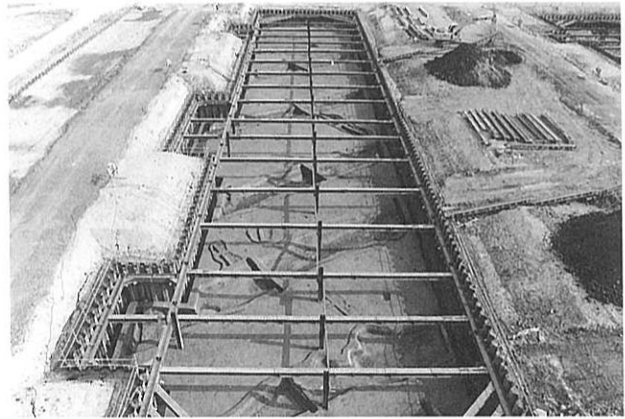
第11面 (南東から)



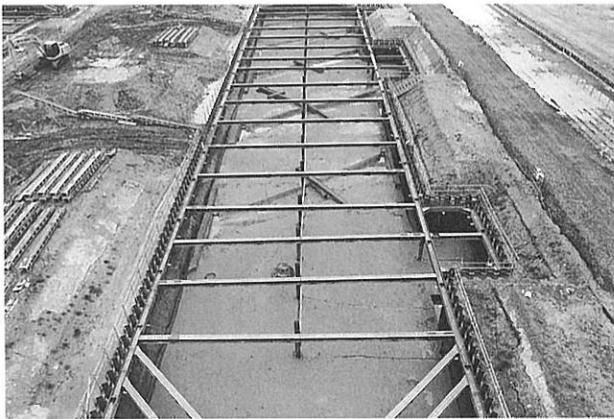
第11面 (東から)



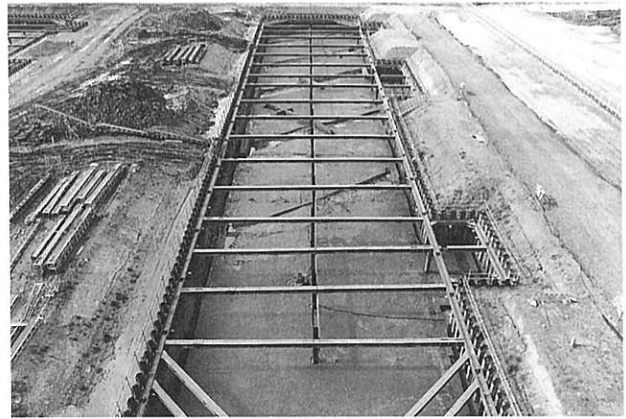
第11面畦畔上出土土器 (西から)



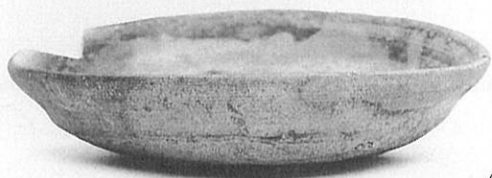
第12面 (西から)



第13面 (東から)

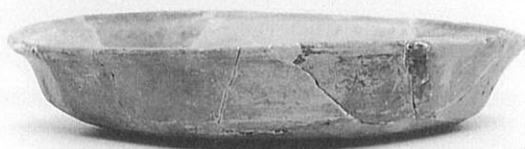


第14面 (東から)



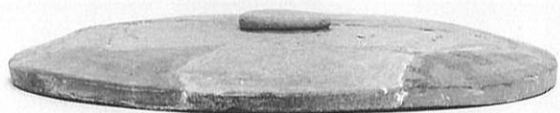
6120

第2層 出土土器

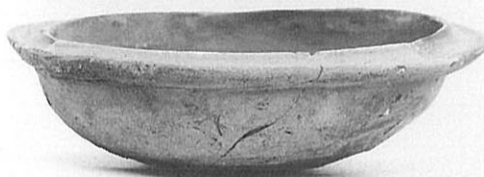


6184

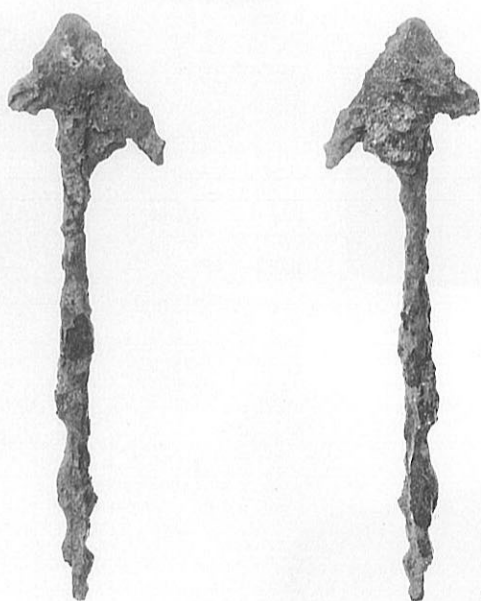
第6面 溝59出土土器



6152

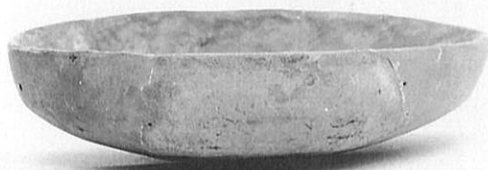


6199



6155

第4層 出土遺物

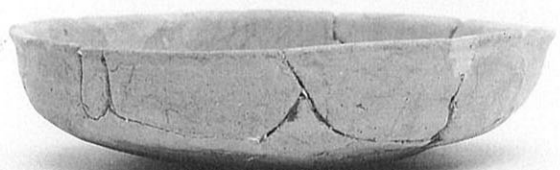


6186

第6層 出土土器

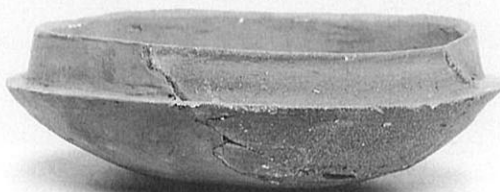


6209

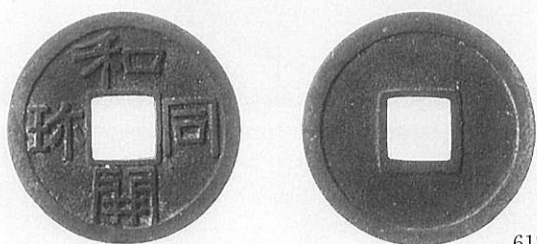


6165

第5面 溝48 出土土器

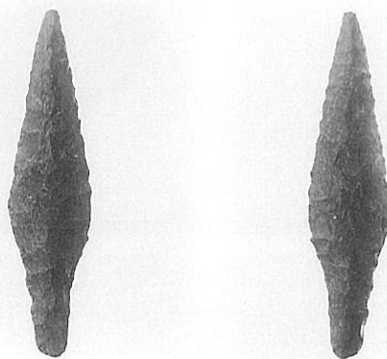


6208



6177

第5面 溝49 出土錢貨

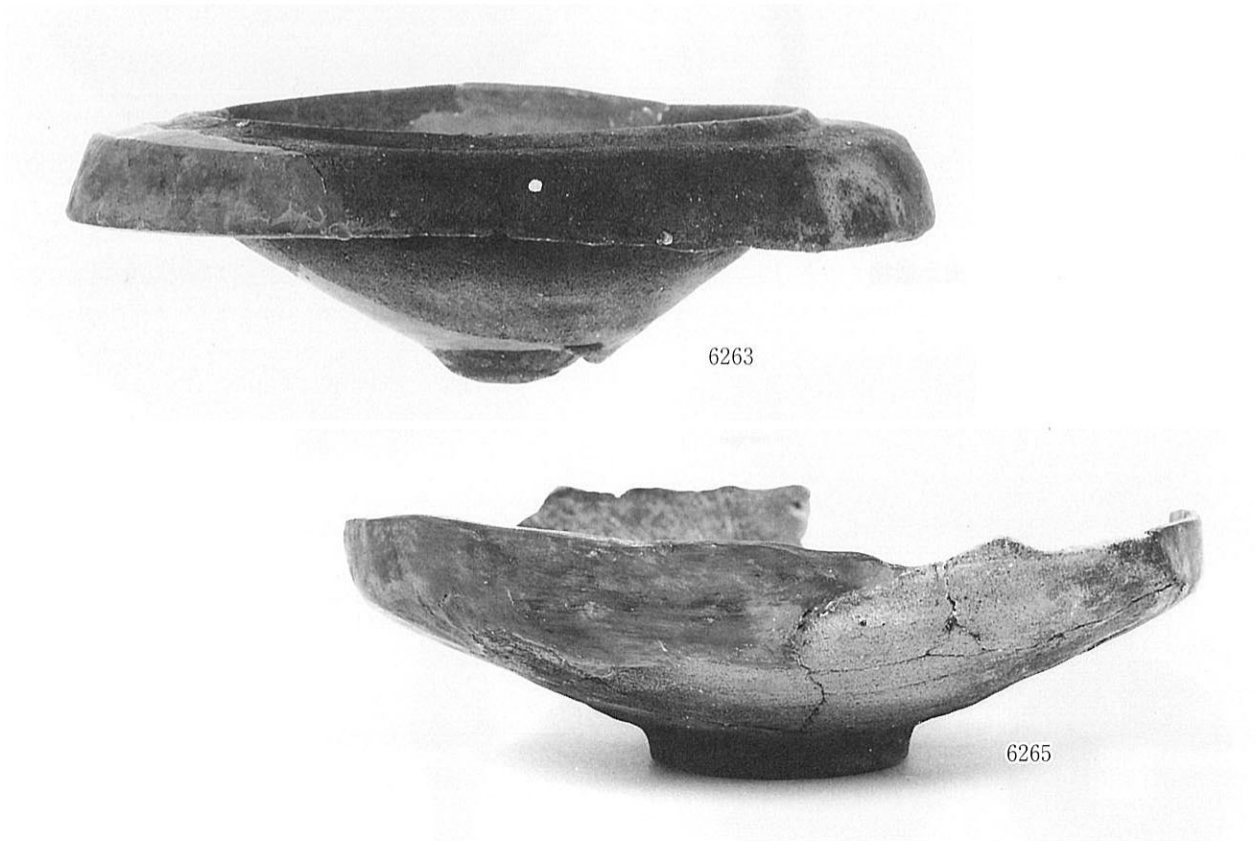


6216

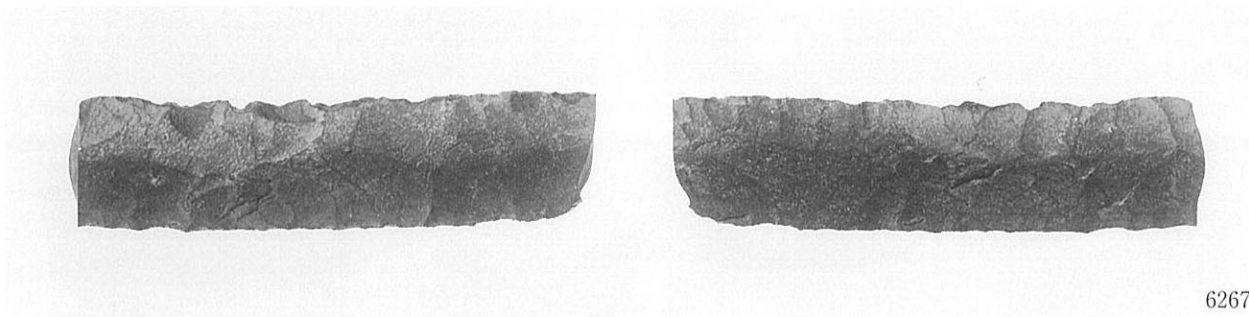
第7層 出土遺物



第9層 出土石器

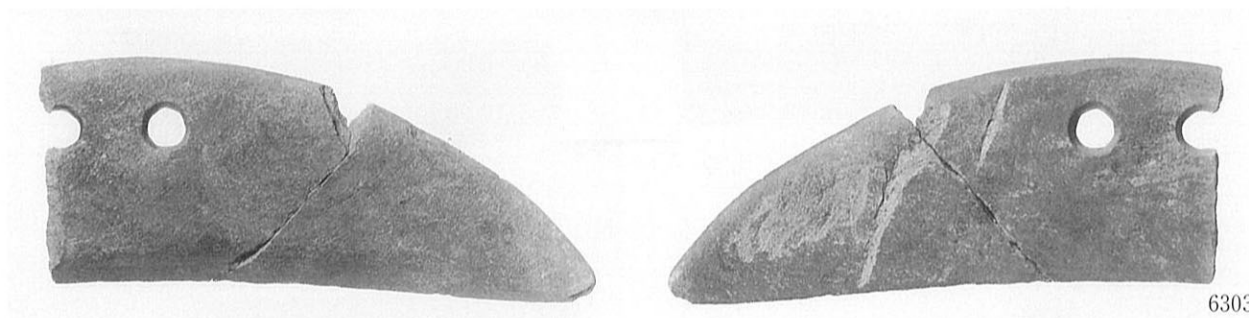


第9層下面 土坑85・86出土土器



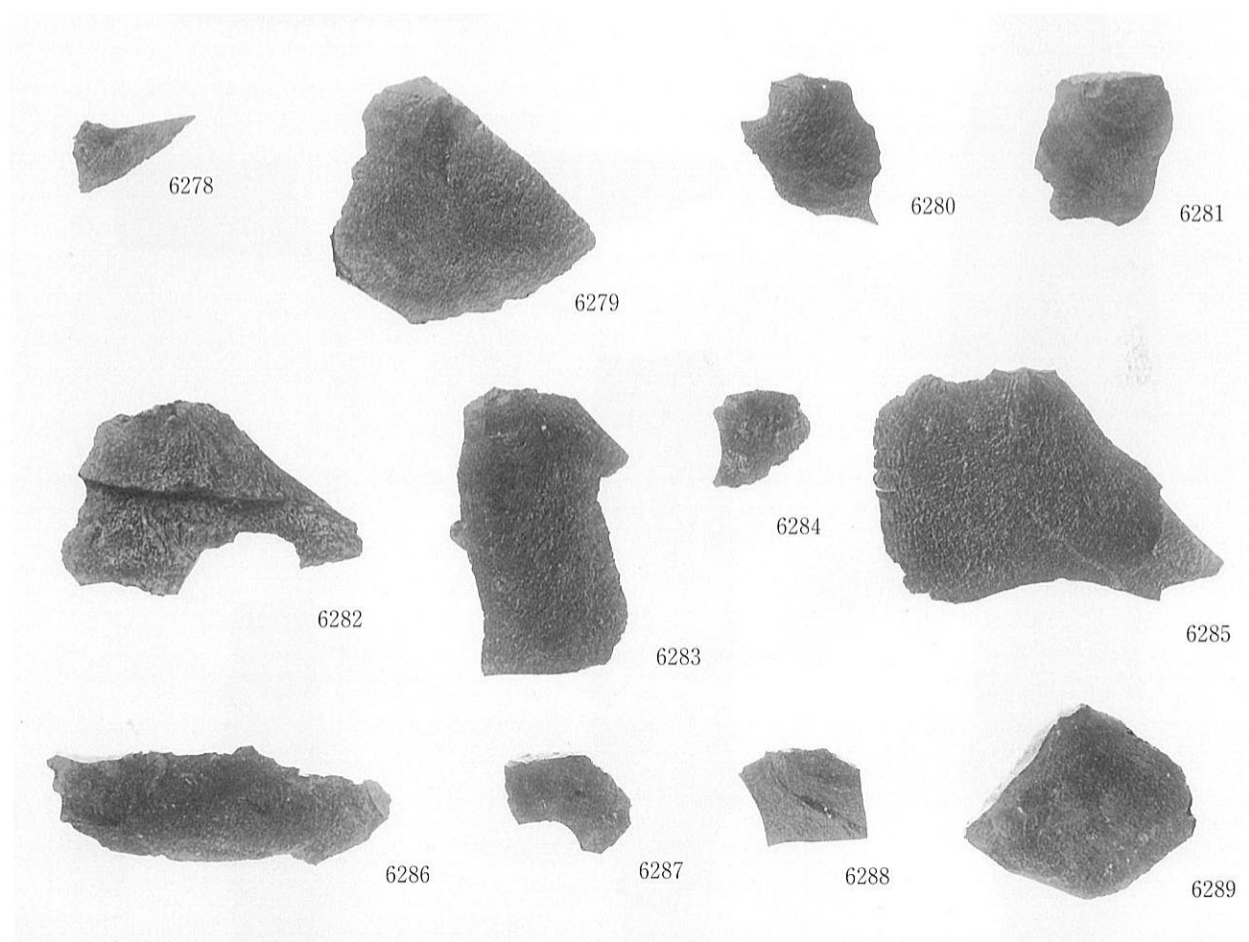
6267

第10面 出土石器



6303

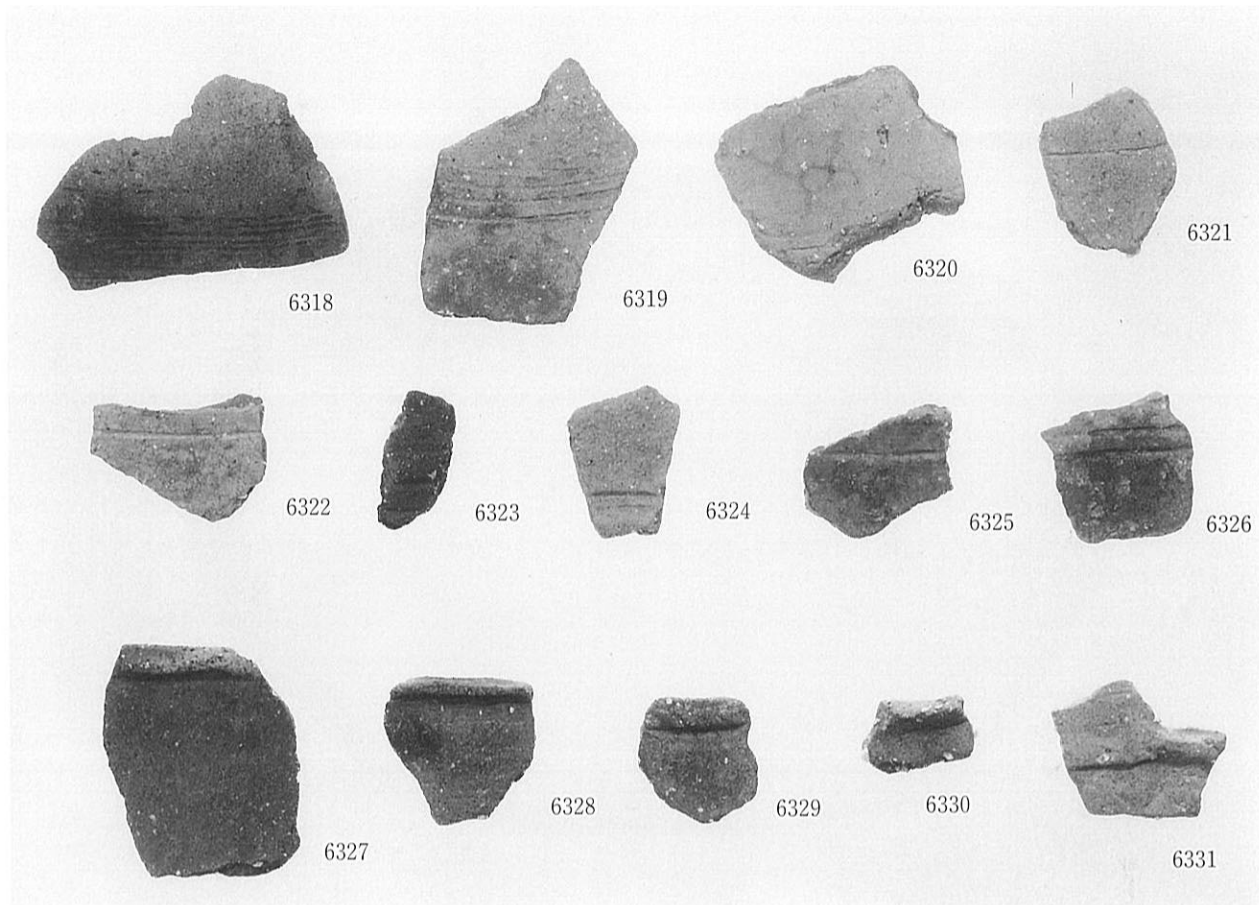
溝103 出土石器



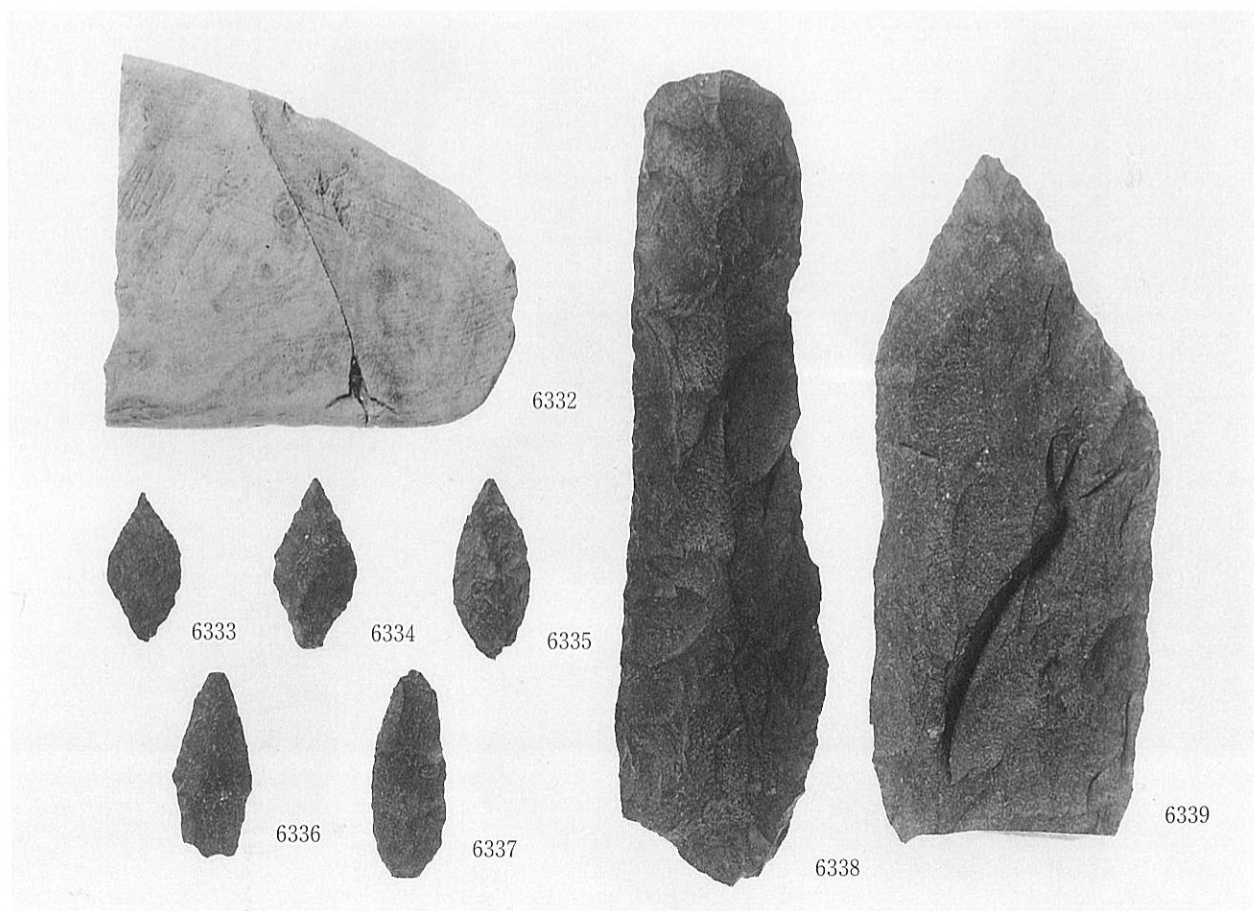
第10層ブロック土 集石サヌカイト



第10層ブロック土 出土石器



第10層 出土土器

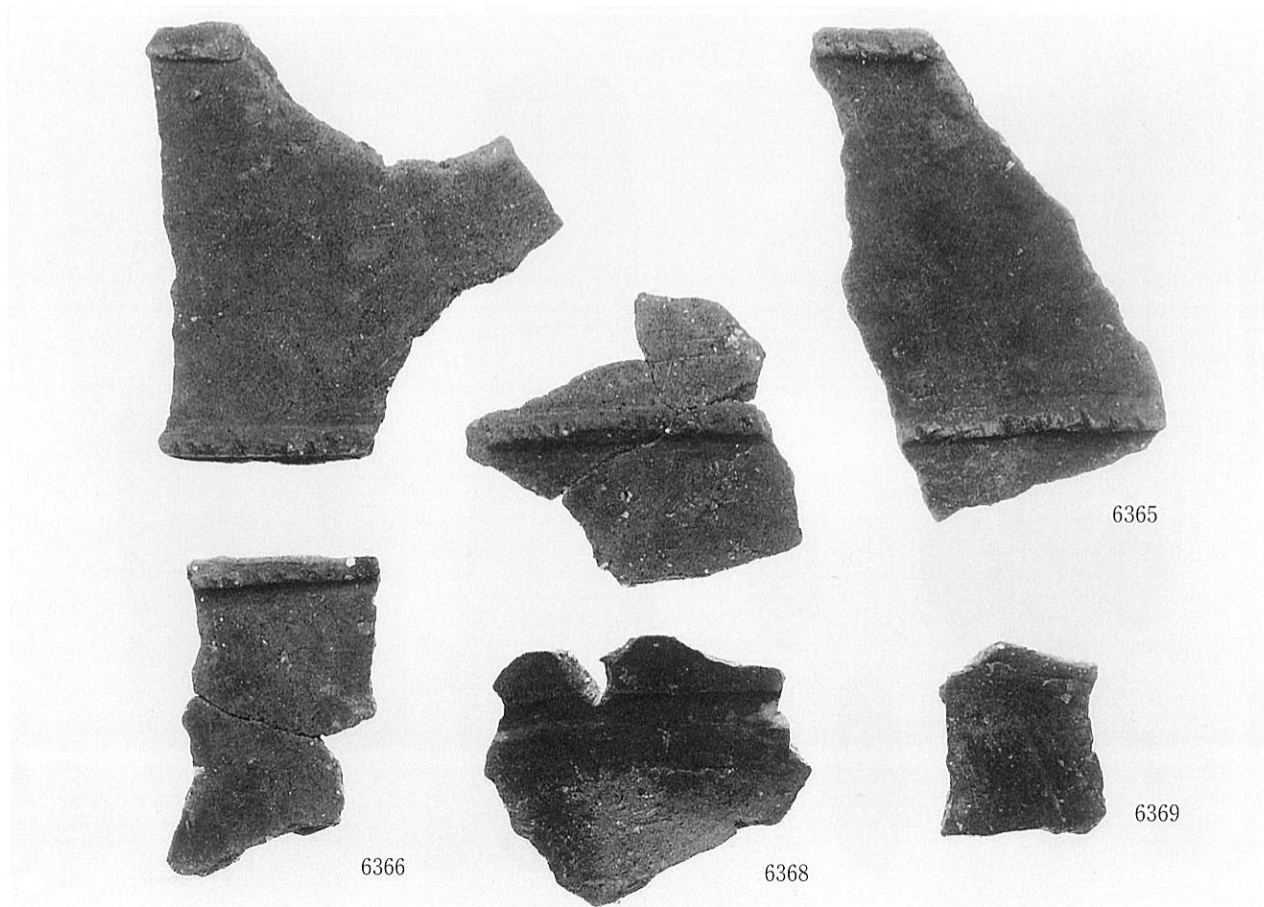


第10層 出土石器



6364

第11面 出土土器



6365

6366

6368

6369

第11層 出土土器

第7部 6C区の調査成果

第1章	調査の方法	485
第2章	層序	486
第3章	遺構と遺物	492
第4章	志紀遺跡6C区の花粉・ 植物珪酸体分析	554
第5章	小結	557
	写真図版	559

第7部 6C区の調査成果

第1章 調査の方法

調査区の位置 志紀遺跡6C区は、大阪府八尾市志紀町西2丁目に所在する(図1)。

地区割り 地区割りは、第1部第3章で述べたように(財)大阪府埋蔵文化財協会が定めた方法に従う。調査時に遺物取り上げなどで多用した4×4m四方の区画については下(図337)に掲げる。

遺構番号 遺構の種類や遺構面にかかわらず、6C区の中で通し番号を付けた。番号を付けた遺構は、第1面検出の畦畔1から第11面の落込み95までである。この他に遺構番号を付けなかった水田、水田畦畔などもある。

遺物の取り上げ 遺構出土の遺物は、検出遺構別に、包含層の遺物は層位的には「層」ごとに平面的には国土座標の4×4mの区画ごとに取り上げ、さらに必要に応じて出土位置を3次元で記録した。遺物登録番号は取り上げ単位ごとに付した。

図面作成 各面の調査区全体図は、クレーン測量(第1・2・5・6・7・9・10・11面)または地区杭を基準とし(第3・4・8・12・13面)縮尺1/50ないし1/100で作成した。土層断面図は縮尺1/20に統一して幅10mごとに1枚の図面に記録した。単独の遺構や遺物出土状況などは任意に図化した。

各種分析 土層観察、動物遺体、植物遺体については、各分野の研究者に依頼し、その成果を第8部に掲載した。花粉とプラント・オパールについては委託分析を実施した。

調査の体制 6C区の調査は、平成12年度の(財)大阪府文化財調査研究センター中部調査事務所長藤田憲司、同所中河内調査班長秋山浩三の指示の下、技師本間元樹・市村慎太郎、専門調査員野口舞・鹿野壘が担当し、調査補助員岩崎美紀子・田中エミ子・辻田有美・松下知代・辻田多江の協力を得た。

整理作業の体制 第7部は、遺構を本間が、打製石器を野口がそれぞれ分担し、その他の遺物については両者が協議して執筆した。調査補助員田中エミ子・辻田有美・辻田多江・奥村弥恵の協力を得た。

また、現地撮影以外の写真関係業務は中部調査事務所主査片山彰一が担当し、調査補助員水取康人の協力を得た。出土遺物の保存処理等は同所主査山口誠治が担当した。

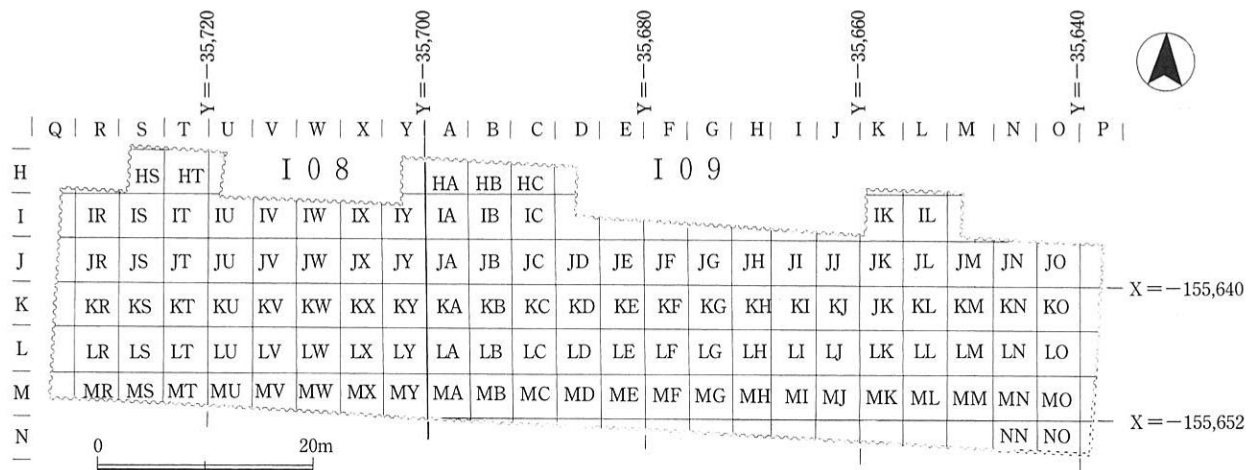


図337 6C区地区割り

第2章 層序

志紀遺跡6C区の発掘調査では、T.P.+12m前半の現地表面からT.P.+9.8～10.2mまでの厚さ2.2～2.6mの土層を重機によって除去した。

図338は、トレンチ東・南・西辺についての機械掘削終了面（T.P.+9.8～10.2m）から第13層中のサブトレンチの底（T.P.+5.7m）までの断面である。

なお、以下に報告する第1層とは、調査した面である第1面と第2面の間を指し以下同様である。さらに、各面間の層は○付き数字の土層に細分されることがある。

第0層 機械掘削終了面から第1面までの層である。

5Y5/1灰色細砂と5Y4/1灰色シルトが水平方向の細かなラミナをなしている（①層）。

第1層 よく攪拌された水田作土層である。

上面では条里地割にのる水田畦畔が検出され、南辺断面の東部にも約10.7m間隔で畦畔の高まりが表れている。

第1層は5Y5/1灰色細砂のブロックを含む2.5Y4/1黄灰色シルトを基本とするが、南辺断面の西部と西辺断面ではシルトの締まりがより強くなる（②層）。

第2層 第1層同様に水田作土層である。

調査区中～東部では10YR4/1褐灰色シルトだが、第1層の②層よりも攪拌の度合いは弱い（③層）。

調査区西部は③層よりも粘性が強い2.5Y4/1黄灰色シルトで、西辺断面では細砂～粗砂も含まれる（④層）。

A層は第2面溝14の埋土。2.5Y5/3黄褐色細砂～粗砂に2.5Y3/1黒褐色シルトのブロックを含む。

第3層 第3層は全体的に第2層との分層が難しい。

調査区中～東部では10YR3/2黒褐色シルト（⑤層）。

南辺断面の西部ではより黒味が強い10YR3/2黒褐色シルト（⑥層）。

⑤・⑥層とも炭酸カルシウムの結核を多く含む。

西辺では2.5Y4/2暗黄灰色シルトで、こちらは炭酸カルシウムの結核をほとんど含まない（⑦層）。

第4層 水田作土層であろうか。

調査区中～東部では2.5Y3/2黒褐色シルト。締まりが強く、少量の粗砂と炭酸カルシウムの結核を含む（⑧層）。

南辺断面の西部では5Y3/1オリーブ黒色シルト（⑨層）。

調査区南西部から西辺にかけては2.5Y3/2黒褐色シルト（⑩層）。第3層の⑦層とは対照的に、第4層の⑩層では炭酸カルシウムの結核を含む。

第5層 水田作土層で、基本的に上下2層に分かれる。

上半は、調査区中～東部では2.5Y3/1黒褐色シルト。粗砂を少量含むが粘質で、よく攪拌されている（⑪層）。

南辺断面の西部、南北方向の坪境の断面に該当する部分では、粗砂が多く混じる10Y3/1オリーブ黒色シルトになる（⑫層）。

西辺の大部分は崩落してしまったが、かろうじて残った個所では10Y3/1オリーブ黒色シルトに、粗砂

と炭酸カルシウムの結核が混じっているのが観察できた (⑬層)。

第5層下半は基本的にN3/0暗灰色シルトで、粘性が強く、締まりがあり、乾燥すると赤褐色の斑点が顕れる (⑭層)。

B層は第5面溝32の埋土。5Y3/1オリーブ黒色シルト。

第6層 第6面の調査区中央部には下層の第8層が露出している。その部分をはさんで、第6層の東部と西部とは土質が異なる。

東部は細部で色調は異なるが基本的に10Y4/1灰色シルトである。細砂を多く含むが、粘性が強く締まりがある (⑮層)。

南辺断面の中央やや東、第6面としても遺構等の検出が困難だった部分には、⑮層より上に5G4/1暗緑灰色シルト (⑮層) と植物遺体を少量含む2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト (⑯層) が堆積している。

南辺断面中央やや西、第6・7・8面の上面がくぼんだ部分には、上層の第5層の⑭層に類似するがより砂質の強いシルトが堆積している (⑰層)。

高まりの西側は10GY4/1暗緑灰色シルト。粘性が強く、締まりもある (⑱層)。

南辺の西隅は5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～細砂で、やはり粘性が強い。径3～5mmのシルトブロックを含む (⑳層)。

C層は溝48。5Y3/1オリーブ黒色シルトで、底部には粗砂のブロックがみられる。

D層は溝46、E層は溝43の埋土。両者とも別途 (図329) に断面を掲げる。

第7層 基本的に水田作土層である。

第7層も、第6層と同様に調査区中央部の高まりをはさんで、東部と西部とは土質が異なる。

調査区南東隅には大畦畔状の高まりがみられるが、その部分の上面は10Y4/1灰色シルトでより黒味の強いシルトと互層となっている (㉑層)。下半も色調は同様だが、粘質が強く、しまりもあり、径1cm以下の礫も多く含まれている (㉒層)。

調査区東部は2.5Y4/1黄灰色シルトと2.5Y3/1黒褐色シルト、さらに細砂が互層をなす (㉓層)。

南辺断面中央部から西側にかけては2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルトで、締まりが強く、径0.5～2cm程度の礫が非常に目立つ (㉔層)。24層は第7面溝56の傍らでは色調はやや明るめになり、細砂・粗砂・シルトで形成されたラミナが溝側に傾斜している。

調査区南西部から西辺では、10Y3/1オリーブ黒色シルト～細砂である。植物遺体は観察できないが、よく攪拌されている (㉕層)。

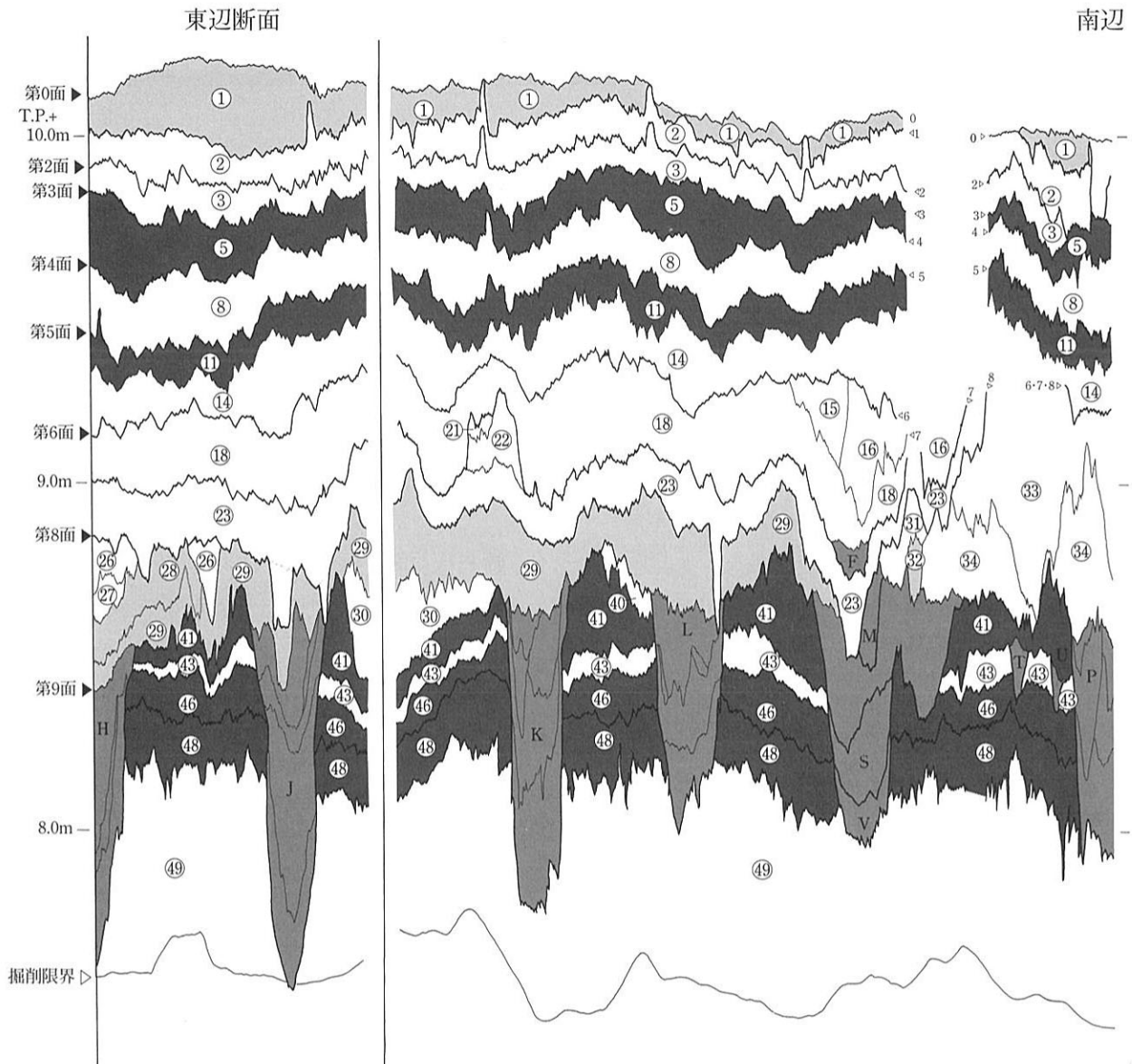
F層は第7面溝57の埋土。10Y3/1オリーブ黒色シルト～細砂。全体に粘性が強く、締まりがある。埋土上部には攪拌された5Y4/3暗オリーブ色粗砂のブロックがみられる。

G層は第7面溝56の埋土。断面が記録前に崩落したため土色は不詳だが、粗砂とシルトからなるかなり明瞭なラミナと底部では植物遺体を多く含む層が観察できた。

第8層 第7層の水田作土のベース層であるが、調査区の各所で層相が異なる。

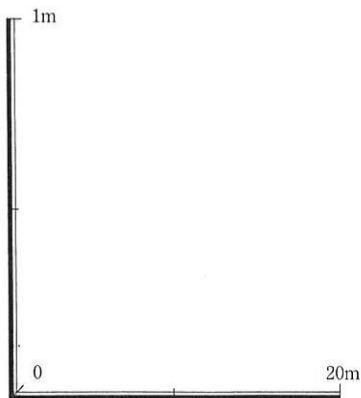
調査区東部で第8層の基本となるのは、10Y5/1灰色細砂～粗砂である。主に細砂で構成され、水平方向のラミナが明瞭に観察できる (㉖層)。

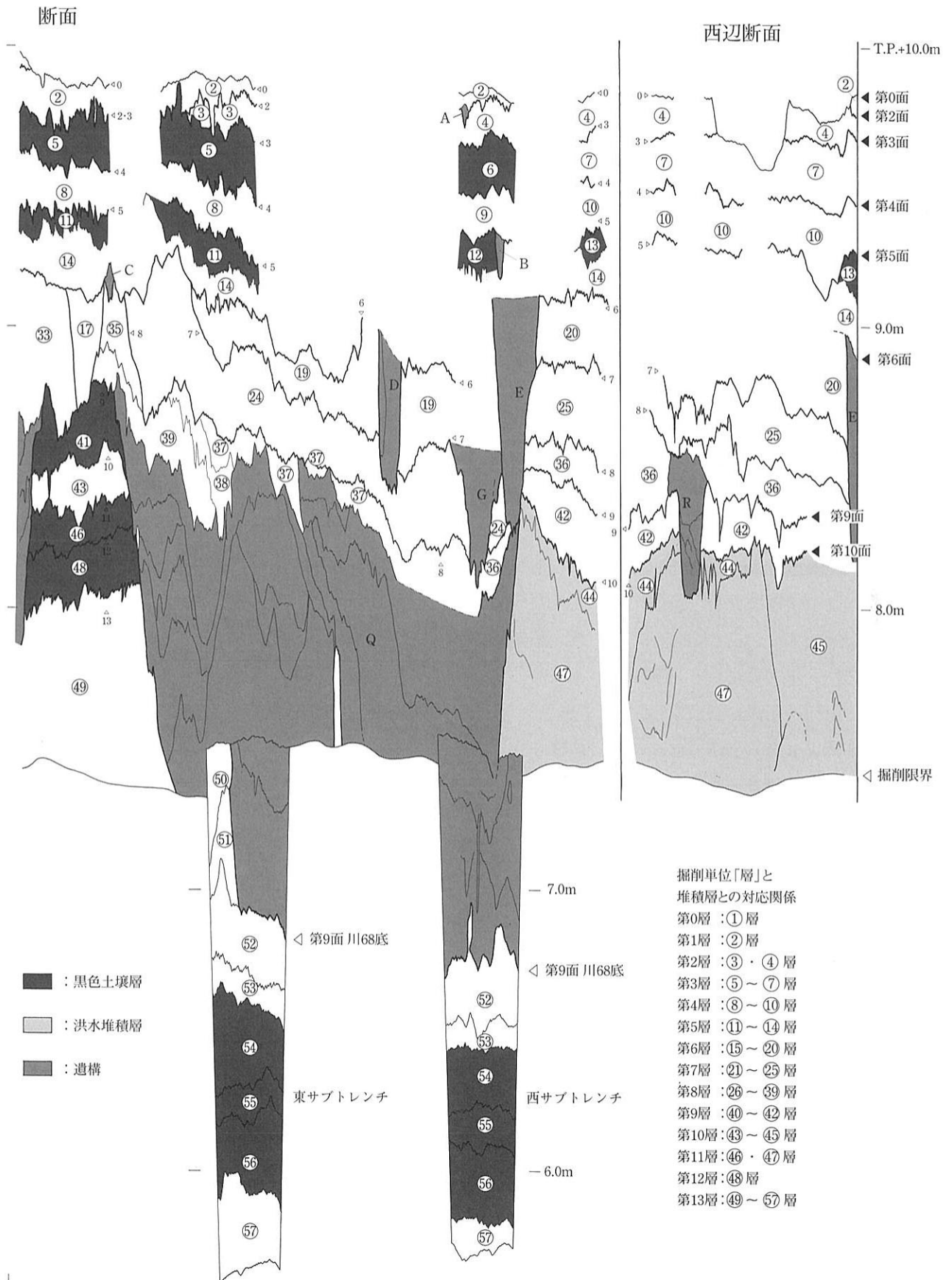
東辺断面では㉖層上の所々に、ブロック状の粗砂を含む7.5Y5/1灰色シルト (㉗層)、砂を多く含む2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト～粗砂 (㉘層)、2.5Y4/2暗灰黄色粗砂～2.5GY4/1暗オリーブ灰色細砂 (㉙層) がみられる。



遺構断面(A~V層)(I・Oは除く)

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| A : 第2面溝14 | L : 第9面溝77(図386に断面掲載) |
| B : 第5面溝32 | M : 第9面溝73 |
| C : 第6面溝48(図357に断面掲載) | N : 第9面溝76および落込み80 |
| D : 第6面溝46(図357に断面掲載) | P : 第9面溝72(図386に断面掲載) |
| E : 第6面溝43(図357に断面掲載) | Q : 第9面溝68(図378に断面掲載) |
| F : 第7面溝57 | R : 第9面溝71(図386に断面掲載) |
| G : 第7面溝56 | S : 第10面落込み91 |
| H : 第9面溝87 | T : 第10面溝89 |
| J : 第9面溝79(図386に断面掲載) | U : 第10面溝88 |
| K : 第9面溝78(図386に断面掲載) | V : 第11面溝95 |





6 C区土層断面

調査区南東隅では、⑳層の下に5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～細砂（㉔層）が広がる。㉔層に比べて粘性が強く、締まりもある。径3～5cmのシルトブロックを含む。

南辺断面中央部では第8層が高まりをなしている。

高まりの東裾に該当する部分には、10Y4/1灰色～10Y3/1オリーブ黒色シルト～粗砂（㉑層）と7.5GY5/1緑灰色～2.5Y4/2暗灰黄色粗砂（㉒層）が堆積している。

高まりの大半を占めるのは2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト～粗砂で、粗砂の部分には径2～4cmのシルトブロックが混じる（㉓層）。㉓層の下には、7.5Y3/1オリーブ黒色シルト～砂と10Y4/1灰色細砂がラミナとなって互層している（㉔層）。

高まりの西肩は、7.5Y3/1オリーブ黒色シルト～細砂で、シルトブロックが含まれる（㉕層）。その西側、第9面の川68に相当する範囲には、上から順に、下部に粗砂ブロックを含むが、全体的に締まりの強い5Y4/1灰色シルト～粘土（㉖層）、砂を多く含む2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト～粗砂（㉗層）、2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト～径2～4cmのシルトブロックが混じる粗砂（㉘層）が堆積する。

南辺断面西端から西辺では7.5Y4/1灰色シルトを基本とするが、間層として植物遺体を含むシルト層が入る（㉙層）。

第9層 黒色土壌化層である。

調査区南東部、第9面溝77の東岸の一部に、5G4/1暗緑灰色シルト～細砂。径2cm程度のシルトブロックおよび粗砂を含む（㉚層）。

川68より東岸では5Y2/1黒色シルトで、調査区東部に向かうに連れて漸移的に締まりのある5Y4/2灰オリーブ色シルトに変わる（㉛層）。

一方、川68の西岸には5Y3/1オリーブ黒色シルトが分布する。第8層に比べて粘質で、より黒味の強いシルトブロックも全体に含まれる（㉜層）。

M層は第9面溝73の埋土。2.5Y4/1黄灰色シルト～細砂。径5mm程度の礫と5Y6/2灰オリーブ色シルト～細砂のブロックを含む。

N層は第9面溝76および落込み80の埋土。N層内の東側は10Y2/1黒色シルトと10Y4/1灰色細砂のラミナで、西側は2.5GY3/1暗オリーブ灰色細砂と5Y4/3暗オリーブ灰色粗砂がラミナとなっている。ただし分層は困難で、両遺構の切り合い関係も把握できなかった。

第9面のその他の溝（J・K・L・P・R層）については、第9面の遺構の項に個々の断面図を掲げる。

なお、掘り下げ時点では第8層の㉑～㉓層と第9面川68の埋土（Q層）とが分離できず、川68掘り下げ後の再検討の結果その両者を区別した。そこで、第9面川68断面（図378）には第8層の㉑～㉓層も含めて掲げておく。

第10層 第9層の黒色土壌化層を除去して検出したベース層である。

第9面の川68より東側は、5Y3/1オリーブ黒色ないし10Y4/1灰色シルト～細砂が分布する。粘性はあまり強くないが、締まりはあり、層中の所々では7.5Y4/1灰色細砂の薄い層が観察できる（㉔層）。

調査区南西隅は、2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～細砂と7.5Y3/2オリーブ黒色シルトの互層。後者には粗砂が大量に含まれる（㉕層）。

西辺断面北部では、10Y5/1灰色細砂と7.5Y4/1灰色シルト～細砂の互層（㉖層）。本来は、第11層の㉗層と一連の流水堆積と考えられるが、第9層を除去した面に露出していたので発掘調査の過程では第

10層に含めた。

S層は第10面落込み91の埋土。10Y4/1灰色細砂と10Y3/1オリーブ黒色が水平方向のラミナとなって互層している。

T層は第10面溝89の埋土。2.5Y3/1黒褐色シルトに、植物遺体と径1～5mmの礫を含む。

U層は第10面溝88の埋土。7.5Y2/1黒色シルトに、砂を含む。

第11層 調査区西部を除き、基本的に黒色土壌化層である。

調査区中部以東は、7.5Y3/1オリーブ黒色シルト。締まりは強く、層の下部には特に砂が多く含まれる(④層)。

一方、西部は5Y4/4暗オリーブ灰色粗砂で、水平方向のラミナがみられる(④層)。調査区西部はこの④層の途中で調査限界深度に達した。

第12層 第11層の④層と第12層の④層はともに黒色土壌化層である。

両層の分離が明確ではない範囲も広いが、第12層の方が黒味が強い。

第9面の川68の東岸に該当する部分全域に分布する第12層は、7.5Y2/2オリーブ黒色シルトである。層の下部には砂が多く混じる(④層)。

第13層 第12層の黒色土壌化層のベース層である。

7.5GY5/1緑灰色シルト～細砂や2.5Y5/2暗灰黄色粗砂を主体とするが、さらに微妙に色調の異なる灰色細砂～粗砂が混じり互層をなしている(④層)。調査区の大半はこの④層中でT.P.+7.5mの調査限界深度(床付け面)に達した。

さらに下層および未検出の第9面川68の底を確認するために、床付け面からの深さ1.8mのサブトレンチ(深掘りトレンチ)を2か所設定した(図401参照)ので、以下にその堆積状況を述べる。

⑤層は、7.5Y7/1灰白色細砂と10Y4/1灰色シルト～細砂の互層。第9面の川68に近い部分は10Y4/1灰色シルトと植物遺体と砂が混じりあっている。

⑤層は7.5Y7/1灰白色細砂。ラミナが明瞭にみえる。

⑤層は5Y2/2オリーブ黒色シルトと5Y3/2オリーブ黒色シルトと植物遺体の互層。第9面川68の底はこの⑤層にまで及んでいる。

⑤層は7.5Y4/1灰色シルト。全体に砂を含むが、粘性が強く、締まりもある。

⑤層は10Y2/1黒色シルト。粘性がきわめて強く、締まりもある。植物遺体も含む。深掘りトレンチ東の西半と深掘りトレンチ西では、基本となる黒色シルト層の間に、灰白色シルトの薄い層が数本みられるので、数時期にわたって形成された土壌化層と考えられる。

⑤層は7.5Y3/1オリーブ黒色シルト。締まりはあるが、⑤層よりは粘性が弱い。

⑤層は7.5Y2/1黒色シルト。⑤層より砂質で、径1cm以下の植物遺体のブロックを多く含む。

⑤層は5Y4/1灰色シルト～細砂。⑤層の黒色シルトが斑点状に少量混じる。

第3章 遺構と遺物

第0層出土遺物

6C区の調査前地盤高は、概ねT.P.+12.4mであった。地表面から重機により整地土層・攪乱層・近世以降の包含層を調査区西半ではT.P.+9.8~9.9mまで、東半ではT.P.+10.0~10.2mまで、厚さ2.2~2.6mにわたり掘り下げた。この機械掘削停止面から第1面までを第0層とする。

第0層からは、陶器1片、瓦1片、瓦器・瓦質土器2片、弥生土器3片、計7片出土した。その他、第0層に該当する攪乱や側溝からも、陶器、瓦、須恵器、土師器などが出土している。

第1面 (図339) ————— 鎌倉時代の水田面

概要

重機により途中まで除去した洪水砂層を、人力により徐々に掘削し、見いだした水田面である。

調査区東半の面の高さはT.P.+9.9~10.1mで、遺構として、条里地割にのる畦畔を12条、段1か所、水田を検出した。

一方、西半は上層からT.P.+9.8~9.9mまで攪乱が及んでおり、遺構は検出できなかった。

第1面上からの出土遺物はない。

遺構

調査区東半で、南北方向の畦畔5条、東西方向の段1か所と畦畔7条、それらに囲まれた水田を検出

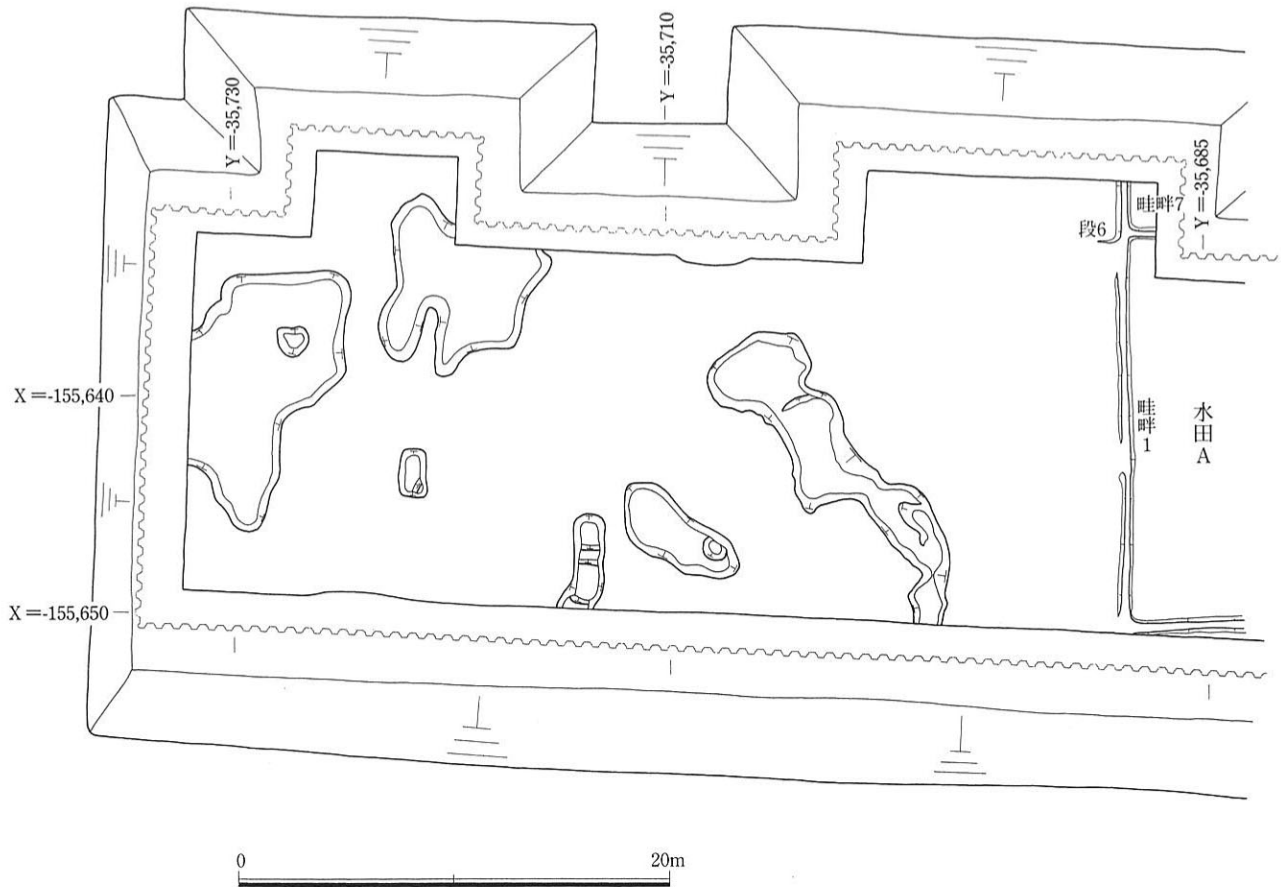


図339

した。

畦畔1～5は、南北方向に伸びる。

畦畔1は基底部の幅（以下「幅」）53～64cm、最高部での高さ（以下「高さ」）18cm。

畦畔2は畦畔1の東11.0～11.1mに位置する。幅52～63cm、高さ5cm。

畦畔3は畦畔2の東約9.8～10.0mに位置する。幅65～80cm、高さ6cm。南半分は現代の攪乱を受けたため検出できなかった。

畦畔4は畦畔3の東10.8mに位置する。幅51～62cm、高さ17cm。

畦畔5は畦畔4の東11.1mに位置する。幅48m～61m、高さ10cm。

以上の5条の南北方向の畦畔は、平均10.7m間隔で平行しており、条里の一坪を10等分した地割りが復原できる。

畦畔7～13は東西方向の畦畔である。

畦畔7は畦畔1から東へ伸びるもので、幅約50cm、高さ9cm。

畦畔8は畦畔4から西に伸びるもので、幅56～60cm、高さ2cm。

畦畔9は畦畔7とほぼ平行し、その南約18.0mに位置する。幅58～81cm、高さ8cm。

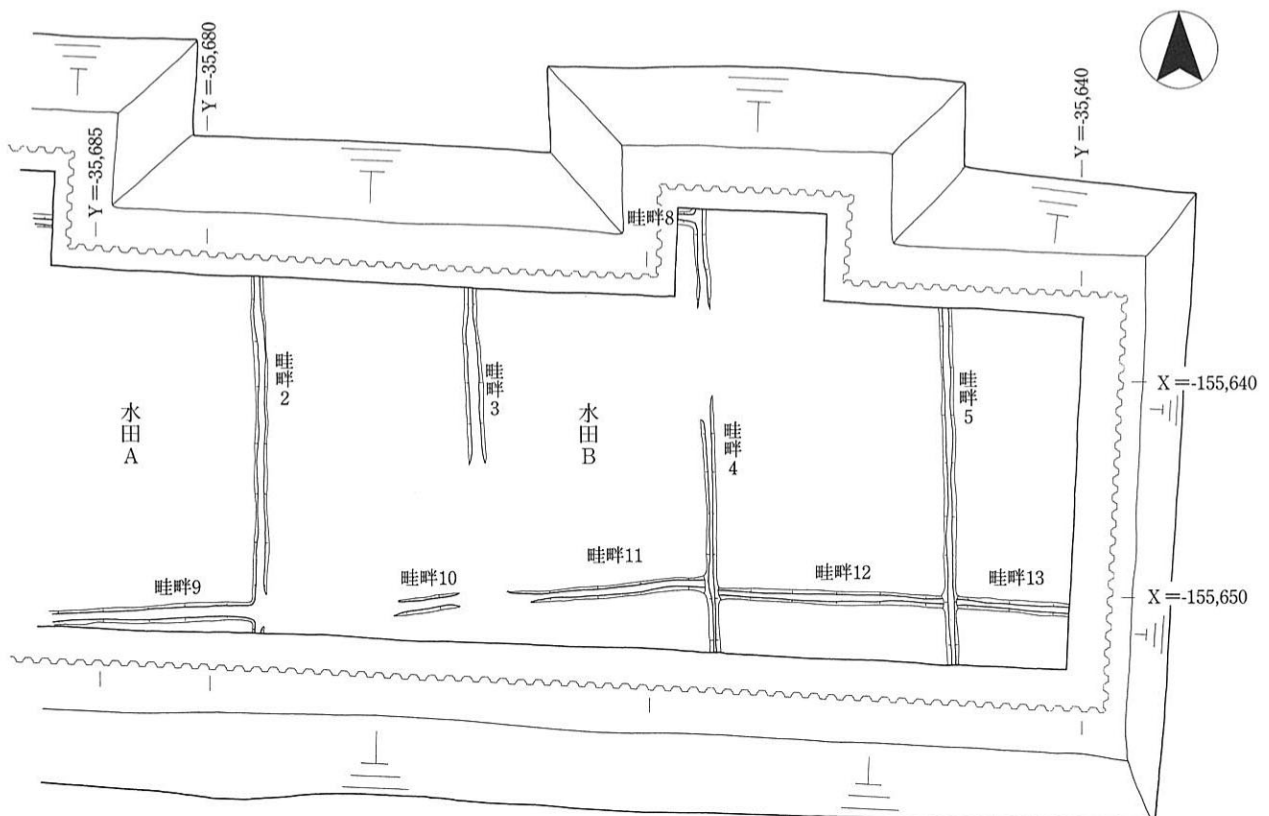
畦畔10は畦畔2・3をつなぐ。幅65～72cm、高さ9cm。

畦畔11は畦畔8とほぼ平行し、その南16.7mに位置する。幅52～60cm、高さ11cm。

畦畔12は畦畔4・5をつなぐ。幅50～60cm、高さ16cm。

畦畔13は畦畔5から東に伸びる。幅55cm～60cm、高さ10cm。

以上の東西方向の畦畔7～13は、南北方向の畦畔よりも低い傾向がある。



6 C区第1面

段6は畦畔1から西に伸びるもので、北に向かって3cm落ちる。南側の高い水田と北側の低い水田を区画していた東西方向の畦畔の痕跡で、削平または圧密のため段状に残ったものであろう。

以上の畦畔に囲まれた水田を検出した。畦畔の下端で測ると、水田Aは東西10.4m、南北17.4mで、推定面積約180㎡。水田Bは東西10.2m、南北16.2mで、推定面積約165㎡となる。

調査区の西半では、中世以降の攪乱あるいは整地のためか、畦畔等の遺構は検出できなかった。しかし、第1面よりもさらに24～73cm下層まで掘り込まれた不定型の攪乱が6か所みられた。これらの攪乱からは、磁器、陶器、瓦、ランプの傘、鉄の棒、ガラス瓶、碇子^{がし}などとともに、旧日本陸軍の鉄カブト、金属板、革製手甲、食器などが出土した。

時期

この面に伴う遺物はないが、上下の包含層の出土遺物および周辺の調査区との対応から鎌倉時代の可能性が高い。

なお、調査区西半の攪乱群は、出土遺物から太平洋戦争ないしその直後に掘り込まれたものと判断できる。

第1層出土遺物

瓦器2片、土師器7片、モモ核1点、計10点出土した。いずれも細片で時期を特定できるものはないが、奈良時代後期～鎌倉時代の幅広い年代のものが含まれる。

第2面 (図340)———平安時代の水田?面

概要

第1層の水田作土を除去して検出した。この面も水田土壌の面である。

面の高さはT.P+9.7～9.9mで、東側が比較的高い。

坪境と考えられる位置に溝14と畦畔15が存在する。その他、主に南北方向に伸びる畦畔8条、段1か所、鋤溝6本を検出した。

第2面上の出土遺物はない。

遺構

周辺調査区との対比から、溝14および畦畔15が坪境である可能性が高い。

溝14は幅78～93cm、深さ約9cmだが、調査区の北部では幅52cm以下、深さ約8cmと規模が小さくなる。埋土は2.5Y5/3黄褐色シルト。

畦畔15は基底部の幅76～110cm、高さ約5cm。

次に南北方向にのびる畦畔を、坪境の東から順に報告する。畦畔間の距離はいずれも心々での計測である。

畦畔16は畦畔15の東10.5～10.7mに位置する。基底部の幅73～85cm、高さ5～6cm。

畦畔17は畦畔16の東11.3mに位置する。幅47～65cm、高さ3～6cm。

畦畔18は畦畔17の東10.5～10.6mに位置する。幅74～96cm、高さ7cm以下。

畦畔19は畦畔18の東11.2～11.4mに位置する。幅49～74cm、高さ3～7cm。

畦畔20は畦畔19の東10.0～10.3mに位置する。幅57～72cm、高さ3～16cm。

畦畔21は畦畔20の東10.6～10.8mに位置する。幅44～63cm、高さ6～14cm。

畦畔22は畦畔21の東10.9～11.0mに位置する。幅55～67cm、高さ4～9cm。

以上の8条の南北方向の畦畔は、ほぼ10.8m間隔で平行しており、条里の一坪を10等分した地割りが復原できる。

東西方向の畦畔は、畦畔20と21とをつなぐ畦畔23のみである。基底部の幅60～76cm、高さは2～4cmと低い。

段24は畦畔18から西に伸びる。北に向かって3cm落ちる。東西方向の畦畔の痕跡であろう。

調査区西部、畦畔15と17との間で鋤溝を6条検出した。溝間も心々距離で表示する。

鋤溝25は坪境の畦畔15の東に隣接する。溝の幅は南部では103～136cm、北部では78～85cm、深さは約5cm。

鋤溝26は鋤溝25の東5.0～5.3mに位置する。幅35～53cm、深さ約5cm。

鋤溝27は鋤溝26の東0.6～0.7mに位置する。長さ3.6m、幅36～44cm、深さ5cm。

鋤溝28は鋤溝27の東約5.5mに位置する。幅66～93cm、深さ4～8cm。

鋤溝29は鋤溝28の東約2.8mに位置する。長さ2.8m、幅37～43cm、深さ4cm。

鋤溝30は鋤溝29の東約1.8mに位置する。幅42～66cm、深さ2～6cm。

いずれの鋤溝も埋土は第1層と同じで、遺物は出土していない。これら鋤溝群は基本的に南北を指向しており、耕作の痕跡と考えられる。

鋤溝25・26・28が調査区南側から北へ伸び、座標で示すとおよそX=-155,635で終わっており、また比較的小規模な鋤溝27と29の南北端がほぼ揃っているため、東西方向に何らかの区画線が存在した可能性が考えられる。

なお、第1面の畦畔と第2面の畦畔はほとんど同位置に存在し、土層観察によると第1層・第2層とも水田作土と判断できる。そこで、二通りの解釈が可能になる。ひとつは、第2面廃絶後、意識的に同位置に第1面の畦畔を設けたという推定。

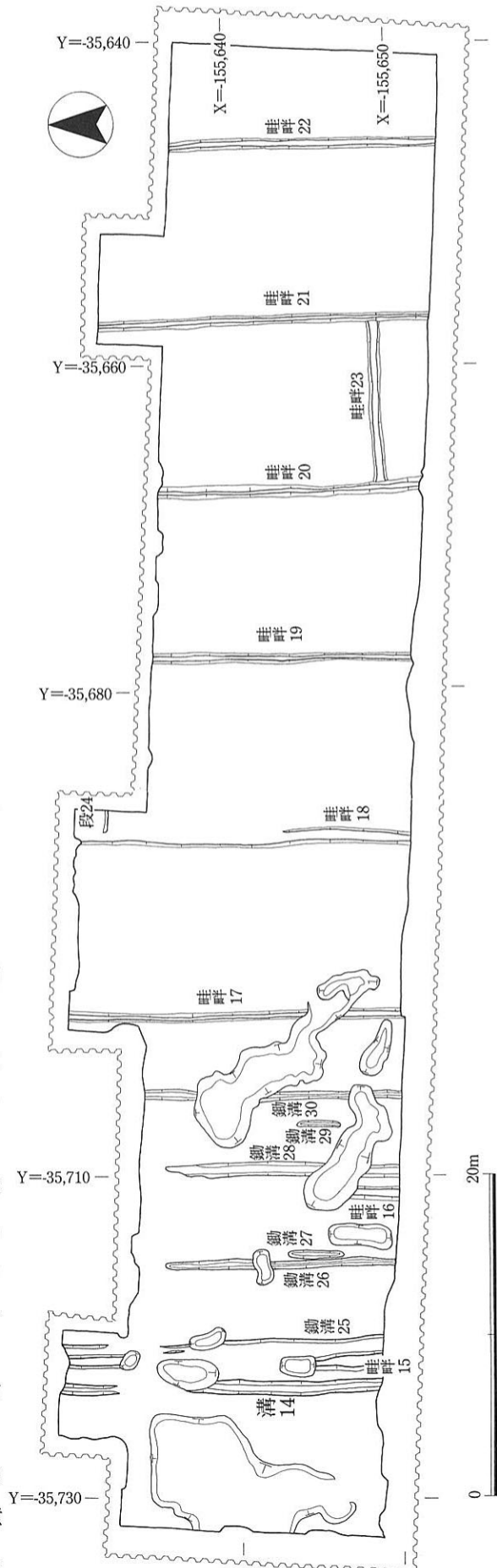


図340 6C区第2面

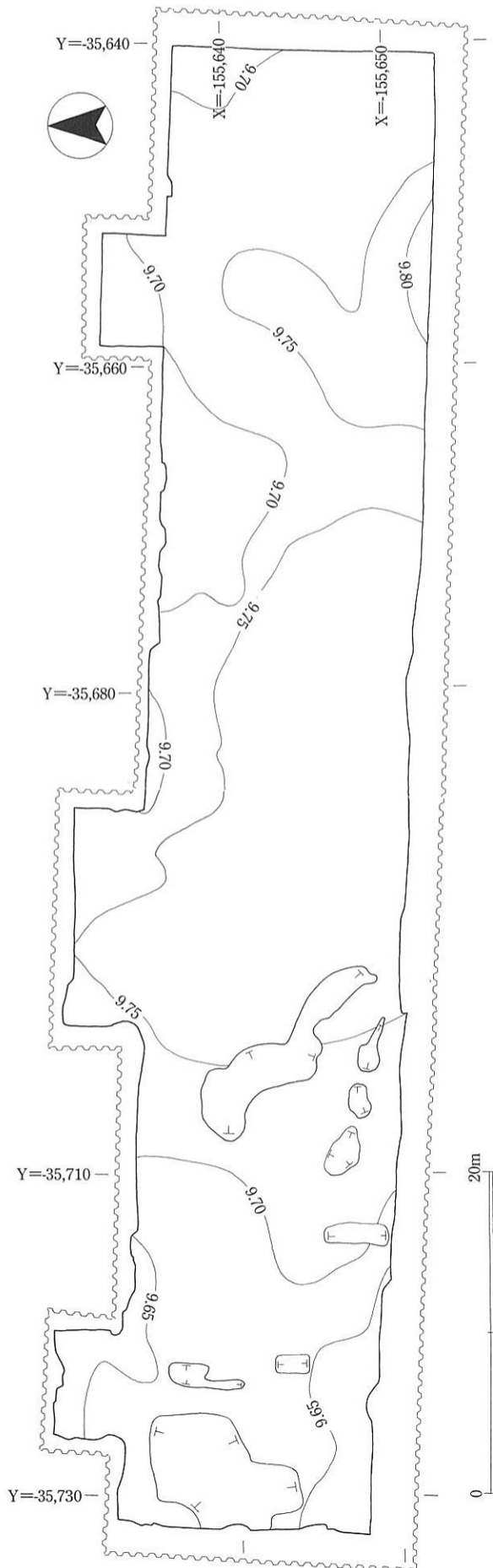


図341 6C区第3面

もうひとつは、第1面の水田景観形成過程で第2面の水田作土上部が第1層の耕作により失われ、結果的に第1面の作土下面（いわゆる疑似畦畔B）を第2面として検出したという推定である。6C区の調査担当者は後者と考えている。

時期

上下の包含層の遺物などから、平安時代と考えられる。

第2層出土遺物

須恵器1片のみ出土した。杯と思われる細片である。

第3面 (図341)——平安時代の面

概要

第2層の水田作土を除去して検出した水田土壌の面である。

面の高さはおよそT.P.+9.6~9.8mで、調査区中央部がわずかに高いがほぼ平坦である。

第3面上の遺物はない。

遺構

遺構は検出できなかった。

断面観察によると、この面の上下である第2・3層とも水田作土と判断できるので、第3面は、第2層の水田耕作によって削平された水田作土と考えられる。

時期

上下の包含層の遺物などから、第2面同様に平安時代と考えられる。

第3層出土遺物 (図342)

瓦1片、瓦器・瓦質土器12片、黒色土器17片、須恵器10片、土師器51片、獣歯1点、計92点出土した。

瓦器には碗と皿がある。図342-6501は瓦器碗の底部である。外面にはヘラケズリの痕が明瞭に残り、見込部には斜格子状の粗いミガキが施される。高台は径約5cmで、断面は逆台形を呈する。

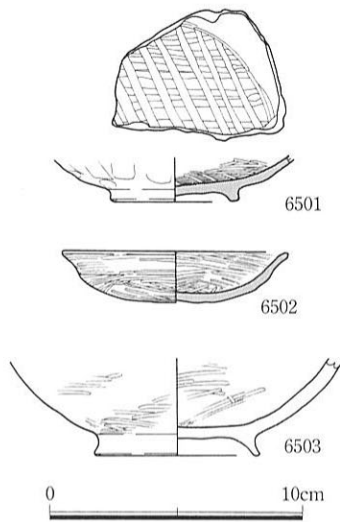


図342 6C区第3層出土土器

6502は瓦器皿。内外面とも緻密なミガキがみられる。いずれも12世紀前半の所産であろう。

黒色土器17片中、内黒（A類）が6片、両黒（B類）が10片ある。6503は内黒の椀。口縁部を欠くが、高台が外に開き、ミガキが粗雑なことから、9世紀末から10世紀に位置づけられる。

須恵器には、杯身、盤の高台部分がある。

土師器には、甕、皿がある。ただし、須恵器、土師器とも細片が多く、時期の特定は難しい。

第4面（図343）———平安時代の耕作面
概要

作土層の上面ではあるが、水田の景観は検出できなかった。

面の高さはT.P.+9.5~9.7mで、遺構として、溝31のみ検出した。

第4面上では石8点を検出した。溝31からは土器3片と石1点、計4点が出土している。

遺構と遺物

溝31は幅50~100cm、深さ10~15cm。埋土は、10YR3/3暗褐色の縮まりのあるシルトを基本とし、7.5Y5/6明褐色細砂が溝底付近にブロック状に堆積している。溝底から自然石（石1）1個、埋土から内黒の黒色土器1片と土師器2片が出土した。土器類は平安時代中頃の所産である。

溝31からその東6mまでと調査区中部（図343

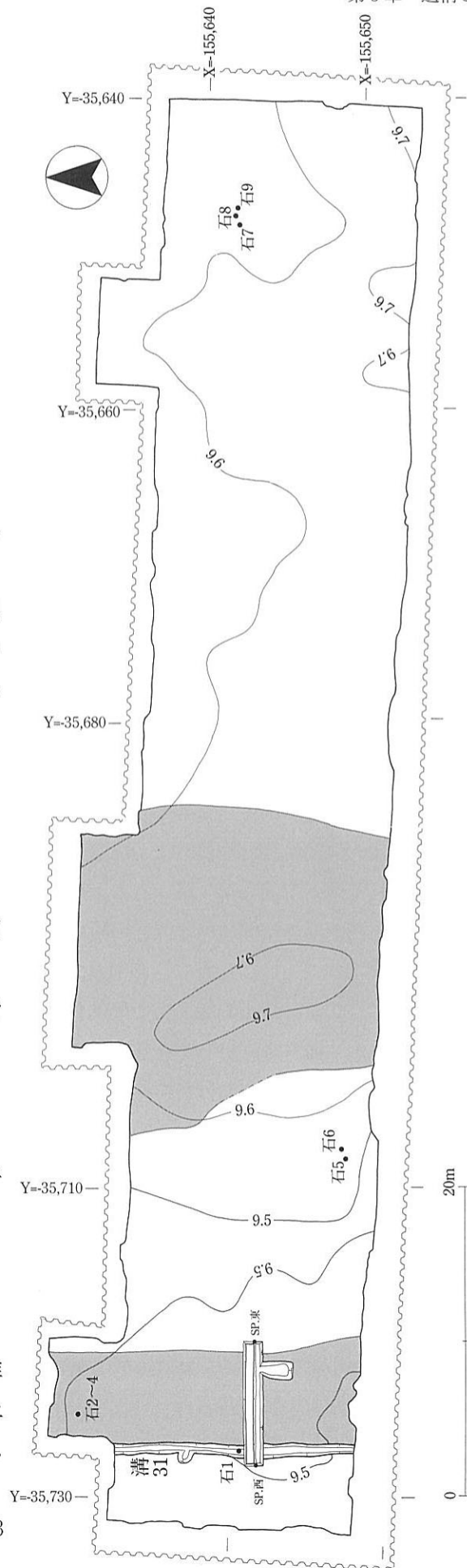


図343 6C区第4面

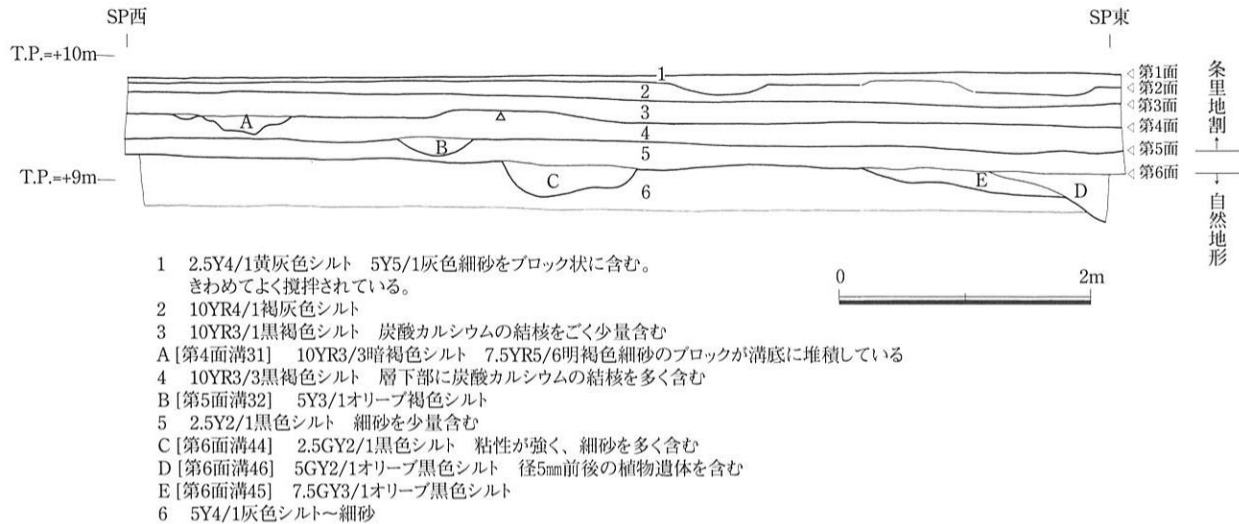


図344 6C区第1～5面坪境断面

のアミかけ部分) とが、周辺よりも数cm高く土色もより茶色味が強い。

第4面上からは、溝31の1個を含め9個の自然石が検出された。石1が溝31のほぼ中央に位置しているので、これを基点とすると、石2～4は東へ2.4m北へ10.5m、石5は東へ19.0m南へ6.9m、石6は東へ19.8m南へ6.6m、石7は東へ79.5m南へ0.6m、石8は東へ80.1m南へ0.4m、石9は東へ80.7m南へ0.4mの位置にある。

以上が、事実の報告である。この第4面で唯一検出された溝31を坪境であると考えがちであるが、以下若干検討する。図344に掲げた第1～6面の坪境付近の断面と合わせて参照されたい。

条里畦畔の良く残る各面(第4面よりも上層の第1・2面、下層の第5面)を参考にすると、当6C区の条里は、東西方向の畦畔は南北方向の畦畔に比べて不明瞭だが、南北方向の畦畔は一町を10等分した10.9m間隔が基本である。ただし、図344に掲げるように、各面の坪境となる遺構は厳密に同位置に存在するわけではなく、数mの範囲内で移動している。

第4面に戻ると、溝31の底に石が存在することから、石には区画に関する何らかの意味があると推定できる。この前提に立って石の分布をみると、調査区の東部に存在する石7～9は、第1・2・5面の南北方向の畦畔と同じ位置にある。3個もの石の存在と上下各面の畦畔との一致から、第4面にもこの位置に畦畔が存在した可能性は高い。この推定畦畔と溝31内の石1との東西距離は約80mあるが、これを7分割すると約11.4m間隔、8分割では約10.0m間隔となり、必ずしも10.9mとは合致しない。

そこで、仮に石7～9の存在する南北方向の畦畔を基準に10.9m間隔で西方に畦畔を想定していくと、その位置は第2面の全ての南北方向の畦畔と、後述する第5面の畦畔37・35・34によく一致する。さらに、石7と石2～4との間隔は約77mで、これは10.9m×7単位分の76.3mに近い。

したがって、第4面の坪境は、溝31東側の幅約6mにわたる周囲とは土質の異なる範囲内で、中で有力なのはわずかながらも高まった部分(図344中の△印)と石2～4とを結ぶ線(座標で示せばおよそY=-35.725ライン)と推定できる。とすれば、溝31は、坪境の西端を構成するかあるいは坪境の西側に隣接する溝と考えられる。

では、石1の位置は無意味かというところではなく、石1と石2～4との南北距離10.5mは10.9mに

近いので、東西方向に伸びる畦畔のための目印であった可能性がある。

時期

溝31出土の土器類から、平安時代の中頃、強いていえば10世紀頃と考えられる。

第4層出土遺物（図345）

第4層からは、磁器1片、陶器1片、瓦1片、瓦器・瓦質土器4片、黒色土器16片、須恵器259片、土師器919片、弥生土器16片、製塩土器3片、石・石製品9点、棒状の木製品4点、モモ核14点、獣歯4点、計1251点と比較的多くの遺物が出土した。

図345-6504は内外面とも緻密なヨコミガキが施された瓦器皿である。12世紀前半の所産であろう。

黒色土器16片中、内黒11片、両黒2片である。6505は内黒の黒色土器の椀である。細い「ハ」字状に開く径7cmの高台がつき、内面にはヘラミガキが施されている。9世紀に位置づけられる。

6506～6509は土師器。6506・6507は杯。6506は底部をユビオサエしたのち、ナデを施している。9世紀の所産。6507の内面と口縁部はヨコナデされ、底部はユビオサエのみで未調整である。8世紀の所産。6508は皿で、口径16.8cm、器高2.4cm。内面の一部にヘラミガキが残っている。平城宮IVか。6509の甕は平城宮IIと考えられる。

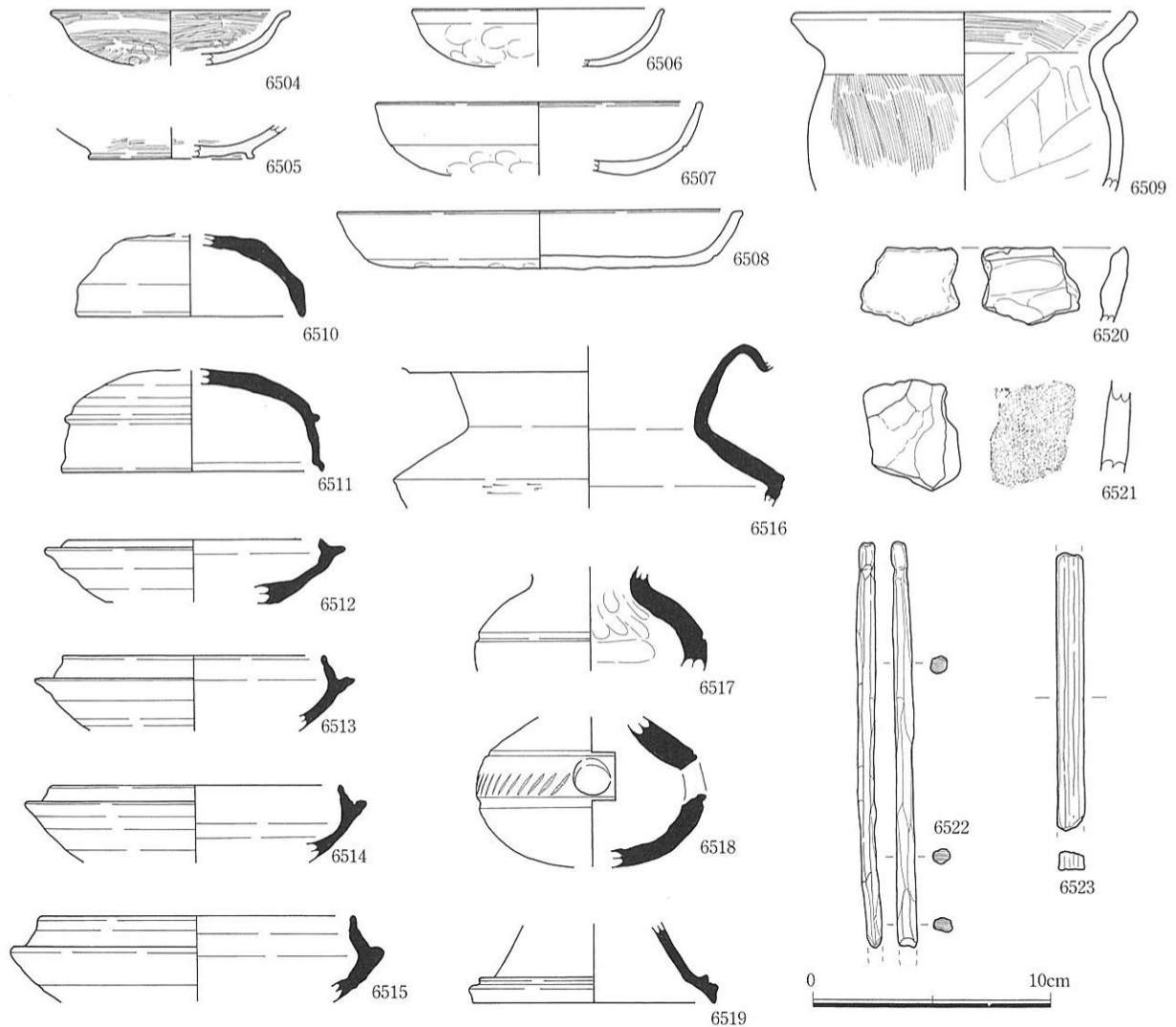


図345 6C区第4層出土土器・木器

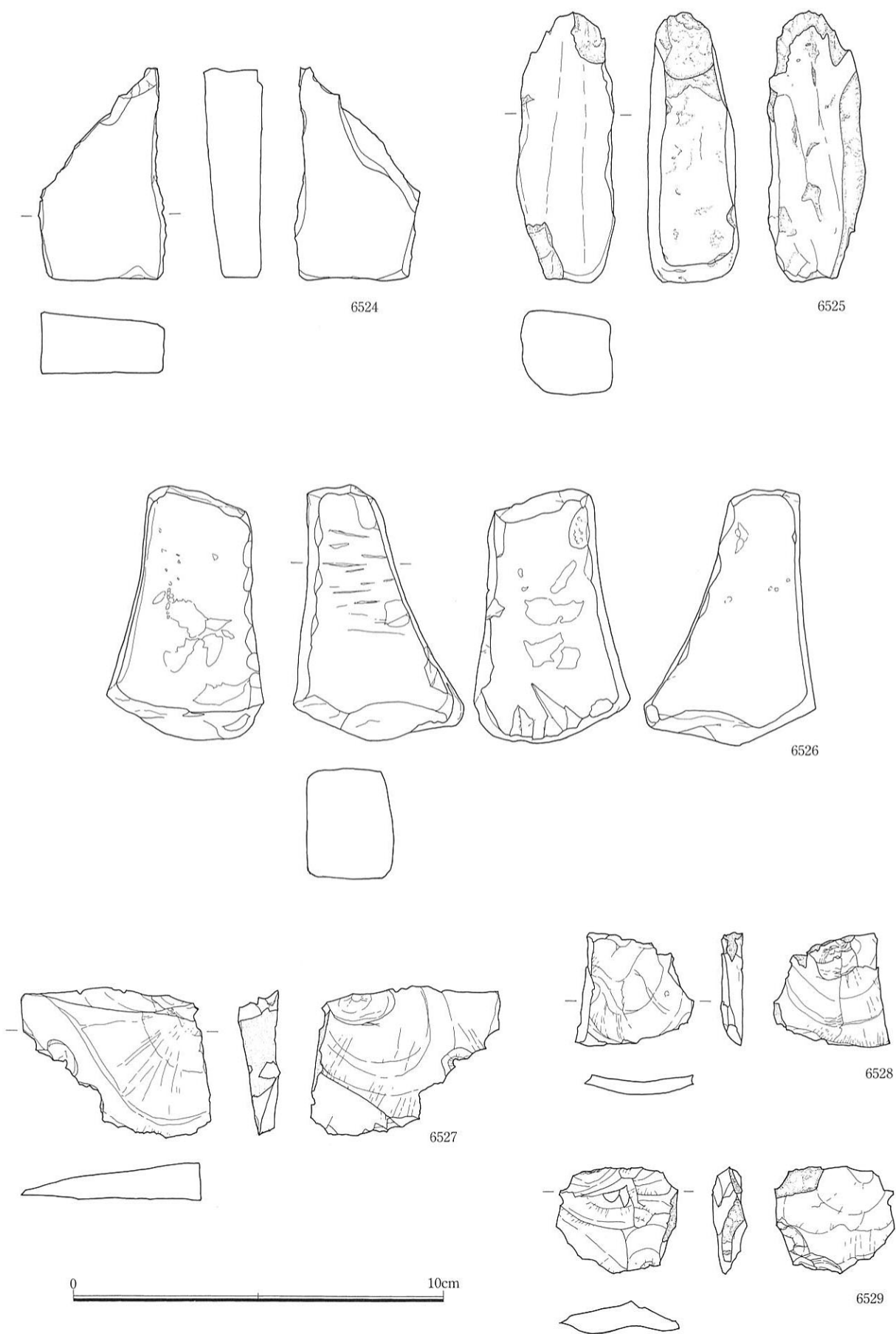


図346 6C区第4層出土石器

6510～6519は須恵器である。6510・6511は杯蓋。6510は口径9.4cmと小型化している。TK209型式。6511は天井部と口縁部の境は明瞭な稜をなす。口縁端部は短く外反する。TK208～TK23型式と考えられる。6512～6515は杯身。6512は全体に扁平小型で、たちあがり部も短い。TK217型式。6513・6514は6512ほどではないがたちあがり部は短く、TK209型式と考えられる。6515はたちあがり部・受部ともに先端が丸い。TK10～TK43型式に位置づけられる。6516は広口壺。口縁部は焼け歪み端部を欠く。8世紀代の所産であろう。6517・6518は甗。6517の肩部に凹線がめぐり。6518は丸い体部に2条の凹線がめぐり、その間にクシ描き列点文が施される。両者ともTK10～TK43型式と考えられる。6519は高杯脚部だが、小片のため脚部の高さも透かしの形状も不明。

6520・6521は製塩土器。6520は内面はユビオサエ、外面はナデにより調整されている。6521は内面に布目痕をもつ。両者とも二次焼成を受けている。8世紀の所産であろうか。

6522は不明木製品。細い棒状の一端に抉りが施される。樹種はスギ。6523もスギ材の棒状木製品。ともに用途は不明。

石・石製品9点の内訳は、砥石3点、サヌカイト片3点、自然石3個である。

図346-6524～6526は砥石。6524は含ざくろ石安山岩製。44.2g。研磨痕は顕著でないが、2面で研磨をしたと考えられる。6525は泥質砂岩製。所々に自然面が残っているが、面に平坦な研磨痕があるため砥石と考えた。59.0g。6526は砂岩製。研磨面は4面でそのうち1面に工具痕が残る。132.4g。

6527～6529はサヌカイトの剝片。6527・6529は一部に自然面が残る。6527は17.6g、6529は7.6gを量る。6528は打面に自然面が残る。5.9g。

上下の遺構面・包含層との対比あるいは破片の点数から、第4層の時期を示す土器は奈良～平安時代の土師器・黒色土器だと判断する。須恵器は土師器より掲載点数は多いが、細片がほとんどである点と第5面で条里地割が検出された点から、サヌカイトの剝片とともに第5層以下からの巻き上げと考えられる。

第5面 (図348) 奈良時代の水田面

概要

6C区の調査で検出した最古の条里面である。

面の高さはT.P.+9.2～9.6mで、南東側が高い傾向にある。

遺構として、溝3本、畦畔8条を検出した。6B区の第6面に対応するが、そのような杭列や畝畝は見いだせなかった。

面上からの遺物はないが、溝32・41・42から土器他が出土した。

遺構と遺物

溝32は、調査区南北に設けた側溝の断面では認識できたが、第5面上では平面的にきわめて検出しにくかった。そこで、中間にサブトレンチを設定した上で、わずかな土質の違いを手掛かりとして掘った。幅約75～120cm、深さ11～30cmだが、北部が広く深い。埋土は5Y3/1オリーブ黒色シルト。須恵器1片と土師器9片が出土した。図347-6530は小型丸底壺。外面上半には横方向のナデが、下半にはケズリが施される。口径9.8cm、器高9.6cm。布留式の前段階に

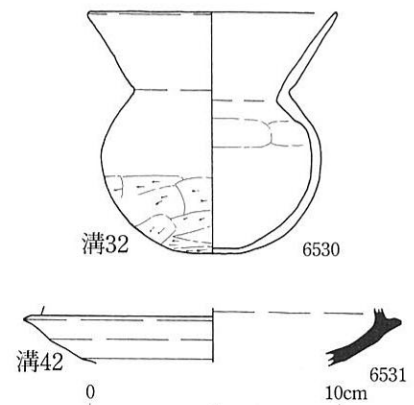
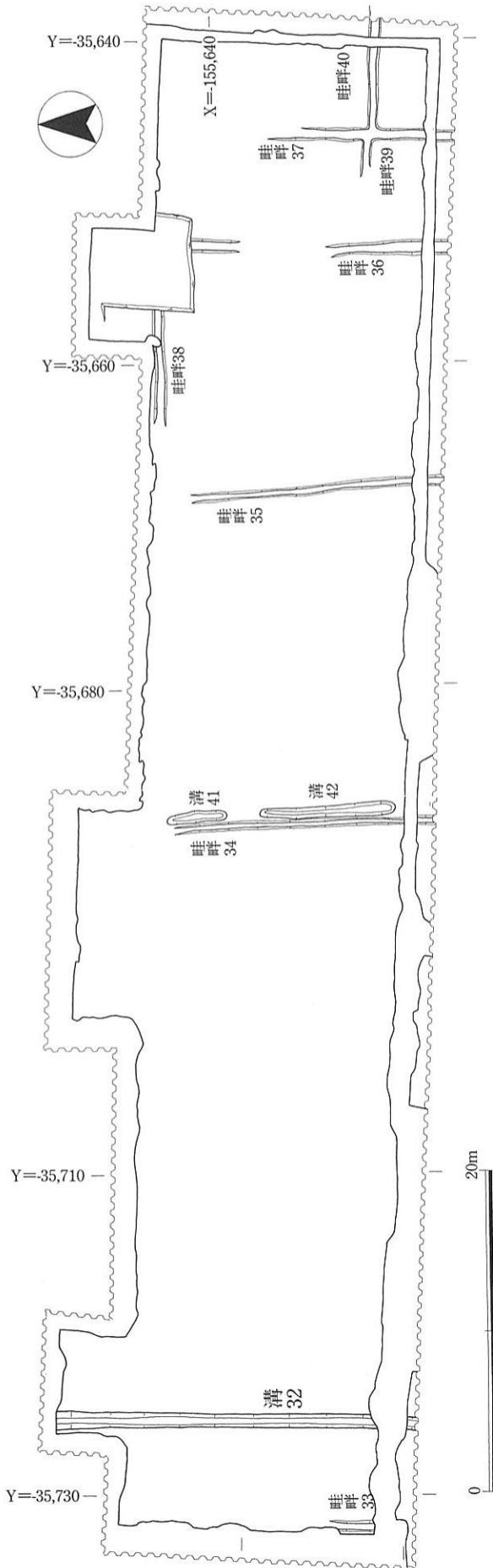


図347 6C区第5面溝32
・42出土土器



あたる。ただし、時期的にみて、溝32に伴うものでなく下層からの巻き上げであろう。

溝41・42は調査区中央部で南北に直線上に並ぶ。溝41は幅52～65cm、深さ5cm。溝42は幅52～85cm、深さ4cm。埋土は両者とも、2.5Y4/1黄灰色シルト。溝41から須恵器1片、土師器2片、弥生土器1片が、溝42からは須恵器2片が出土した。位置規模・埋土・出土遺物の諸点から、本来は一連の溝であったと考えられる。図347-6531の須恵器杯身は溝42から出土した。外面はヨコナデで、下半にケズリの痕跡がみられる。小片から図化したため、傾き・径ともに推定だが、6世紀後半の所産であろうか。

哇畔を8条検出した。しかし、いずれも遺存状況は悪く途中で消失している。以下の哇畔間の距離はいずれも心々での計測である。

図348 6C区第5面

南北方向の哇畔は、哇畔33～37の5条である。

哇畔33は調査区西端に位置する。検出長3.0m、基底部の幅59～63cm、高さ3cm。

哇畔34は調査区中央部に位置する。幅42～55cm、高さ2～3cm。

哇畔35は哇畔34の東20.3～20.9mに位置する。幅45～70cm、高さ1～5cm。

哇畔36は哇畔35の東14.6～15.8mに位置する。幅64～96cm、高さ1～4cmだが、途中は検出できなかった。

哇畔37は哇畔36の東7.0～7.1mに位置する。幅62～74cm、高さ1～3cm。

東西方向の哇畔は、哇畔38～40の3条である。

哇畔38は調査区北辺に位置する。幅56～71cm、高さ4～5cm。

哇畔39は調査区南東部、哇畔37から西へ約2mだけ検出できた。幅約55cm、高さ1cm。哇畔38と哇畔39の主軸をそれぞれ延長するとその間隔は約13mになる。

哇畔40は、南北方向の哇畔37をはさみ、哇畔39から主軸が南に約35cmずれて東へ伸びる。幅55～77cm、高さ1～2cm。

以上の第5面の畦畔は、高さについてはいずれも1～5cmと低く明瞭な差を見いだせないが、幅は畦畔37に顕著なように、第1面の畦畔同様南北方向にのびる方が広い傾向にある。

時期

溝42出土の須恵器杯身からは6世紀後半に、溝32出土の土師器からは古墳時代前期に位置づけられる。しかし、第5面は条里型地割の遺構面なので、古墳時代にまで遡ることは考え難い。直上の第4層が奈良時代の土器が比較的多数出土していることと、5区において最古の条里面である第6面のさらに上層から掘り込まれたピット（5区ピット69）から奈良時代中頃の平城宮Ⅲの杯が出土したことを合わせ、第5面の時期は奈良時代と考えるのが妥当であろう。

第5層出土遺物（図351～353）

須恵器111片、土師器468片、弥生土器107片、サヌカイト剥片4片、自然石1個、木製品1点、モモ核1点、焼土1点、計694点出土した。

ただし、後述する第6面で下層の第8層が露出している範囲を手掛かりとして区分すると、第5層の土器類の組成は、調査区西部では須恵器12片・土師器185片・弥生土器12片、中部では須恵器26片・土師器131片・弥生土器83片、東部では須恵器73片・土師器152片・弥生土器12片と、調査区の部分によって大きく異なる（図349・350）。

これらの出土点数と第6～8面の検出状況とを合わせ考えると、第5層は第5面の条里施行に伴って土地を平坦化するために整地された可能性が高い。そのため、本来起伏に富んでいた第6面以下は攪乱され、整地された第5層には部分ごとに異なる時期の土器が含まれるようになったと考えられる。

図351～6532～6535の土師器は、いずれも調査区中部から出土した。6532は土師器Ⅲ。外反する口縁部から口縁端部を水平に成形し、杯部内面にやや間隔の開いた一段の放射暗文を施す。平城宮Ⅲに位置づけられる。6533～6535の土師器杯3点は同一グリッド内で近接して出土した。6533の底部は未調整、外面ヨコナデ。内面には短い放射暗文を施す。6534は比較的密な暗文がみられる。6535は口径が10cm前とやや小型。外面は未調整で、内面には放射暗文が施されている。6534・6535ともに飛鳥Ⅲと考えられ、6533は若干新しい様相を示す。出土状況からすると、この3点は土器埋納遺構に納められていた可能性が高い。しかし、周辺を精査したものの遺構の掘形等は全く見いだせなかった。第6面は古墳時代、第5面は奈良時代と考えられるので、これら3点の土器は飛鳥時代に埋納されたが、条里地割の施行に伴う第5層の整地によって掘形が失われたともの推定する。

6536～6545は須恵器。6536～6541は杯である。6536・6537のたちあがり部は内傾し、低い。6537の底部は尖り気味である。TK217型式。6538～6540のたちあがり部と受部の端部は丸く、面をなさない。TK10～TK43型式。6541の口縁端面は内面に傾斜し、ごく浅くくぼむ。TK47～MT15型式と考えられる。6542は杯蓋。天井部と口縁部の境には不明瞭な凹線がみられ、内面には当て具痕が残る。TK43型式。6543は無蓋高杯の杯部と考えられる。口縁は直線的に外上方に開き、口縁部と底部との境にはわずかに稜がつく。TK10型式。6544の壘には体部上半からラッパ状に開く口縁部にかけてカキメが明瞭に残る。6545の体部上半は回転ナデで仕上げられている。両者とも体部と頸部の境が細く締まっており、TK10型式に位置づけられる。以上の須恵器は、いずれも調査区中部以東から出土した。6世紀後半のTK10～TK43型式が主体を占める。

6546は木器である。中央部に孔が貫通している。紐を固定するための溝が切ってあれば小形の浮子に

第7部 6C区の調査成果

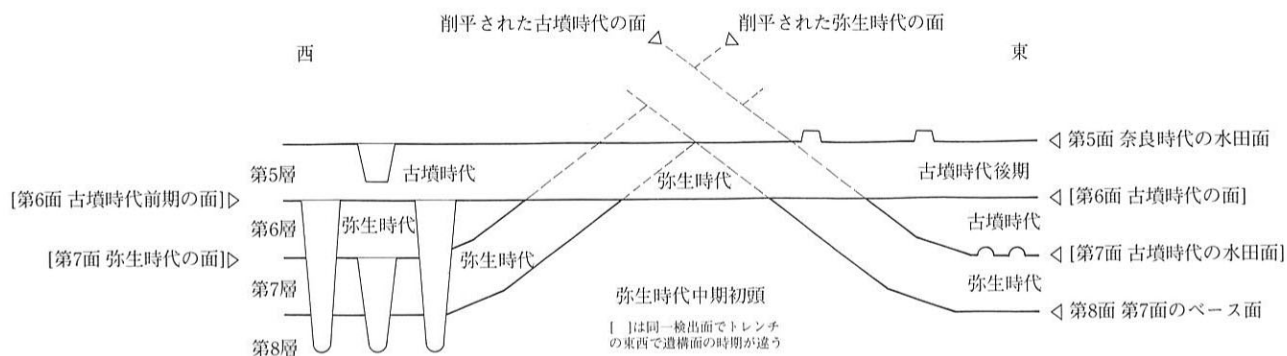


図349 6C区第5～8層断面模式

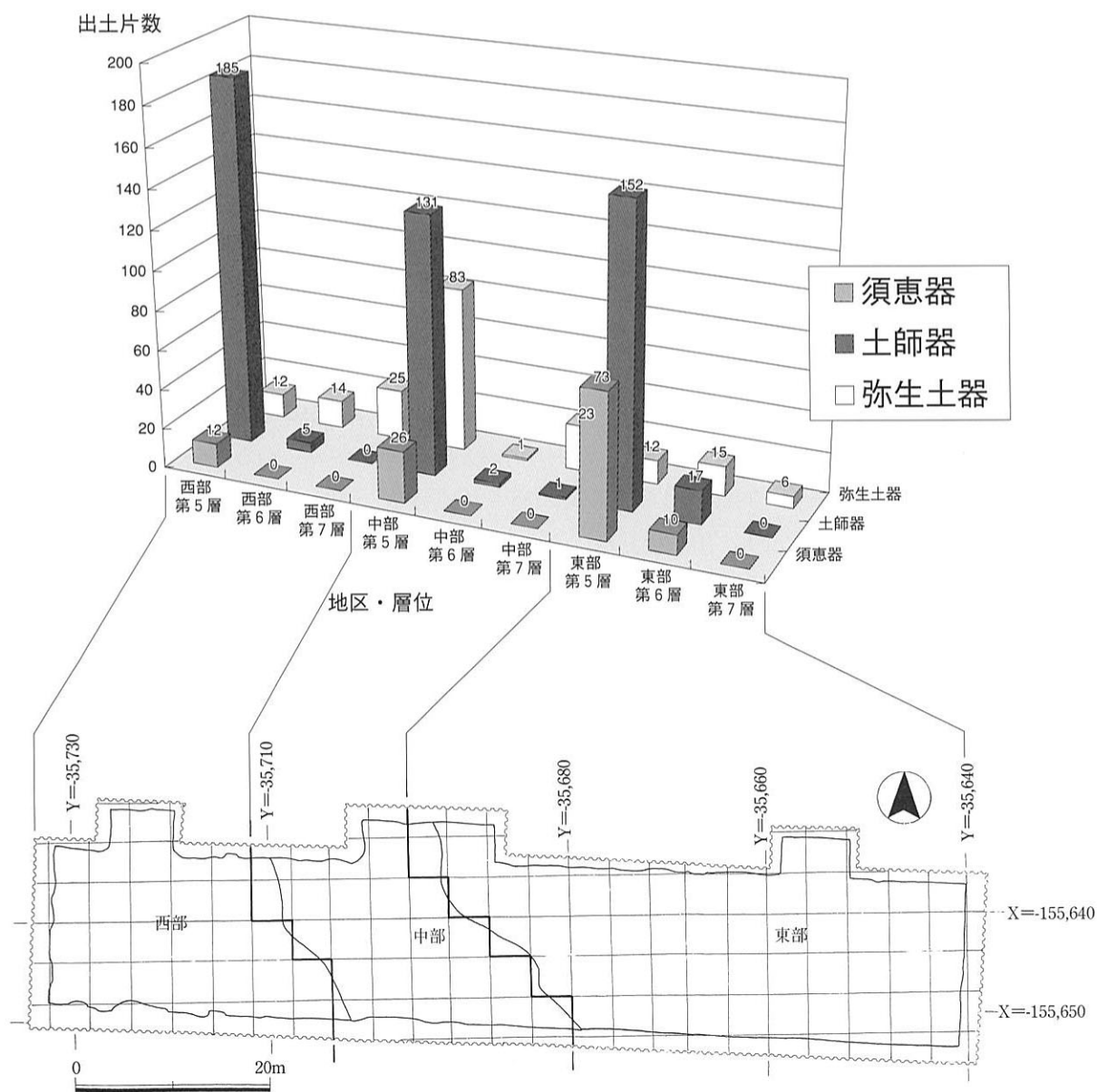


図350 6C区第5～7層の土器出土点数

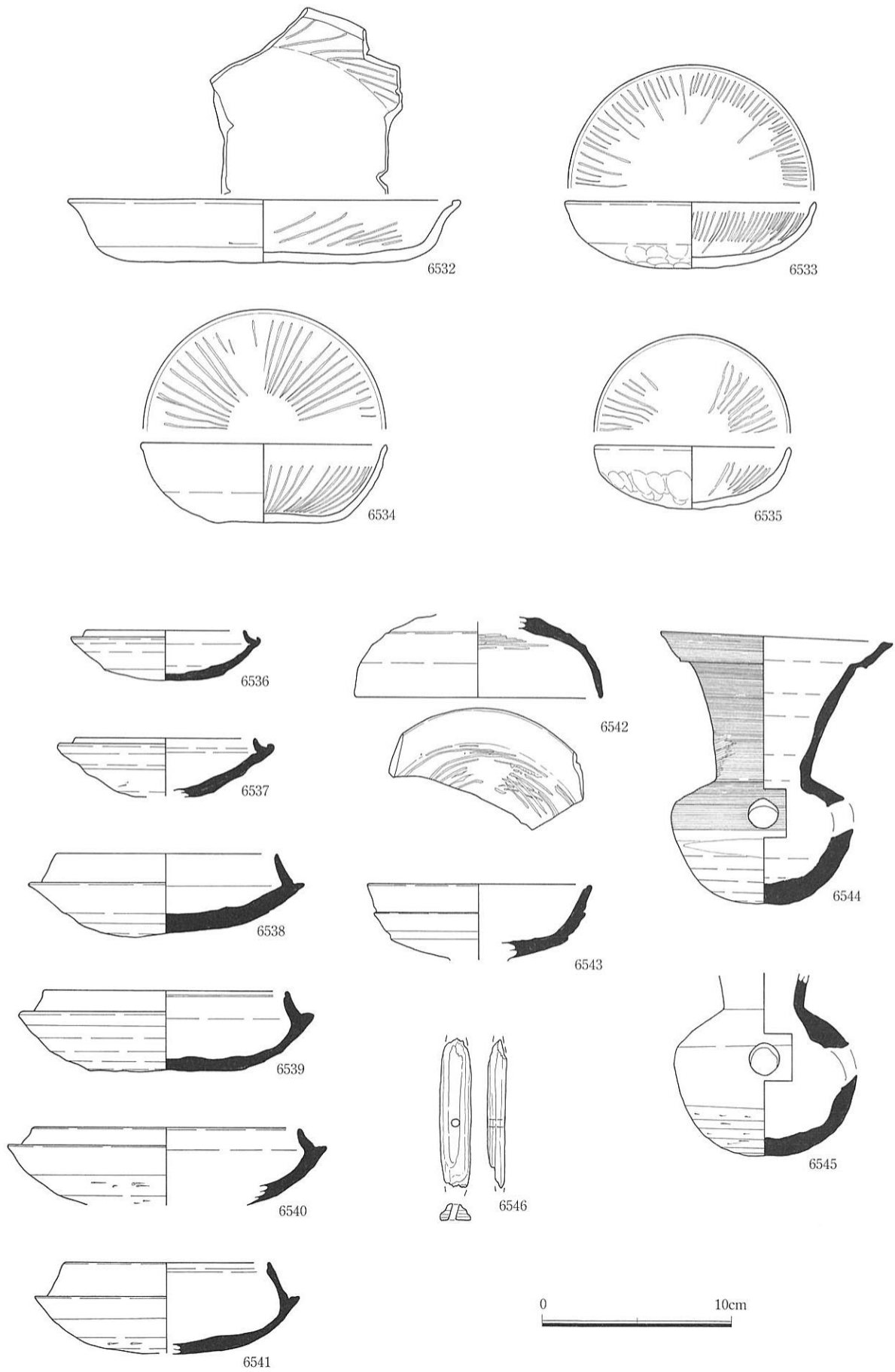


図351 6 C区第5層出土土器(1)・木器

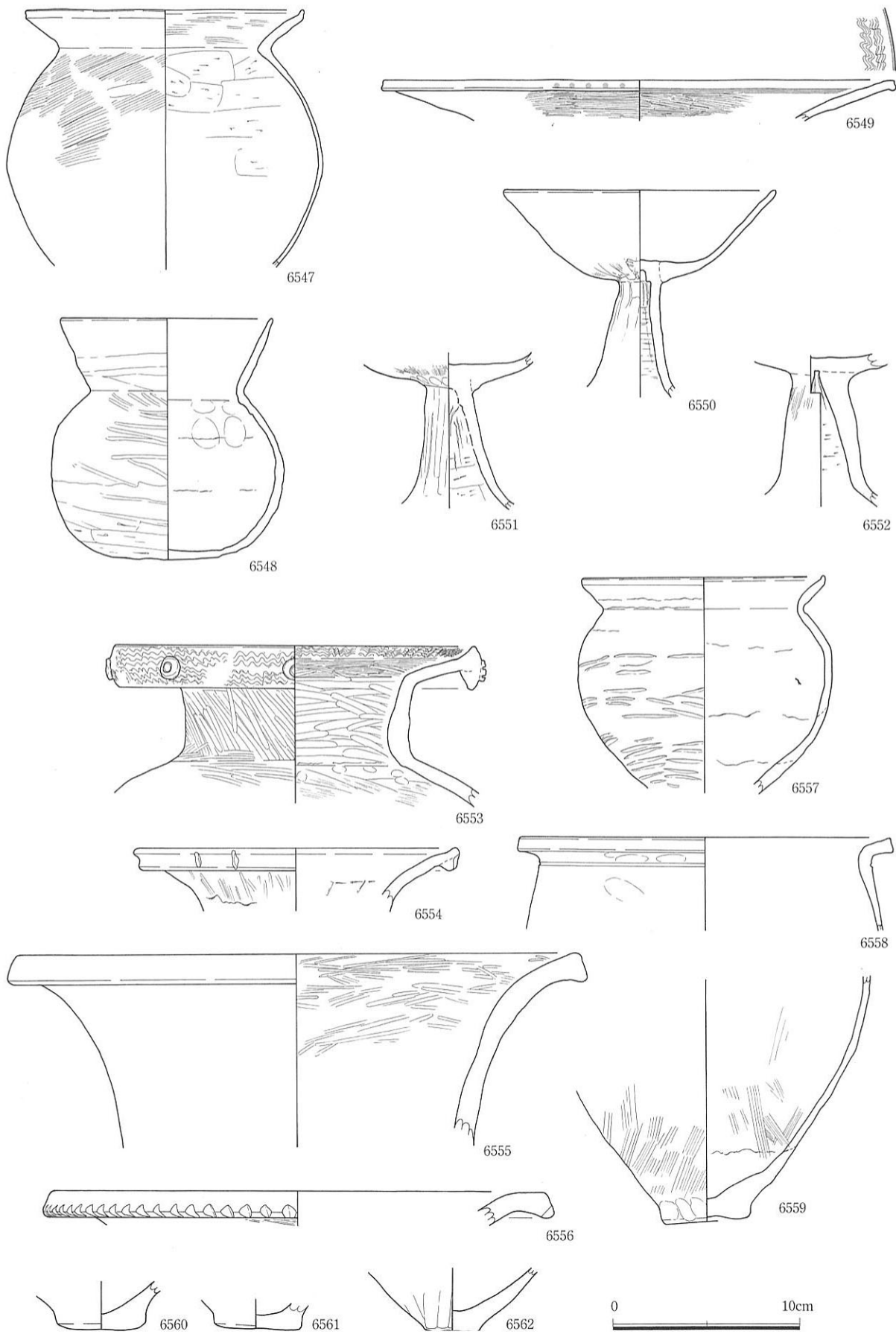


図352 6C区第5層出土土器(2)

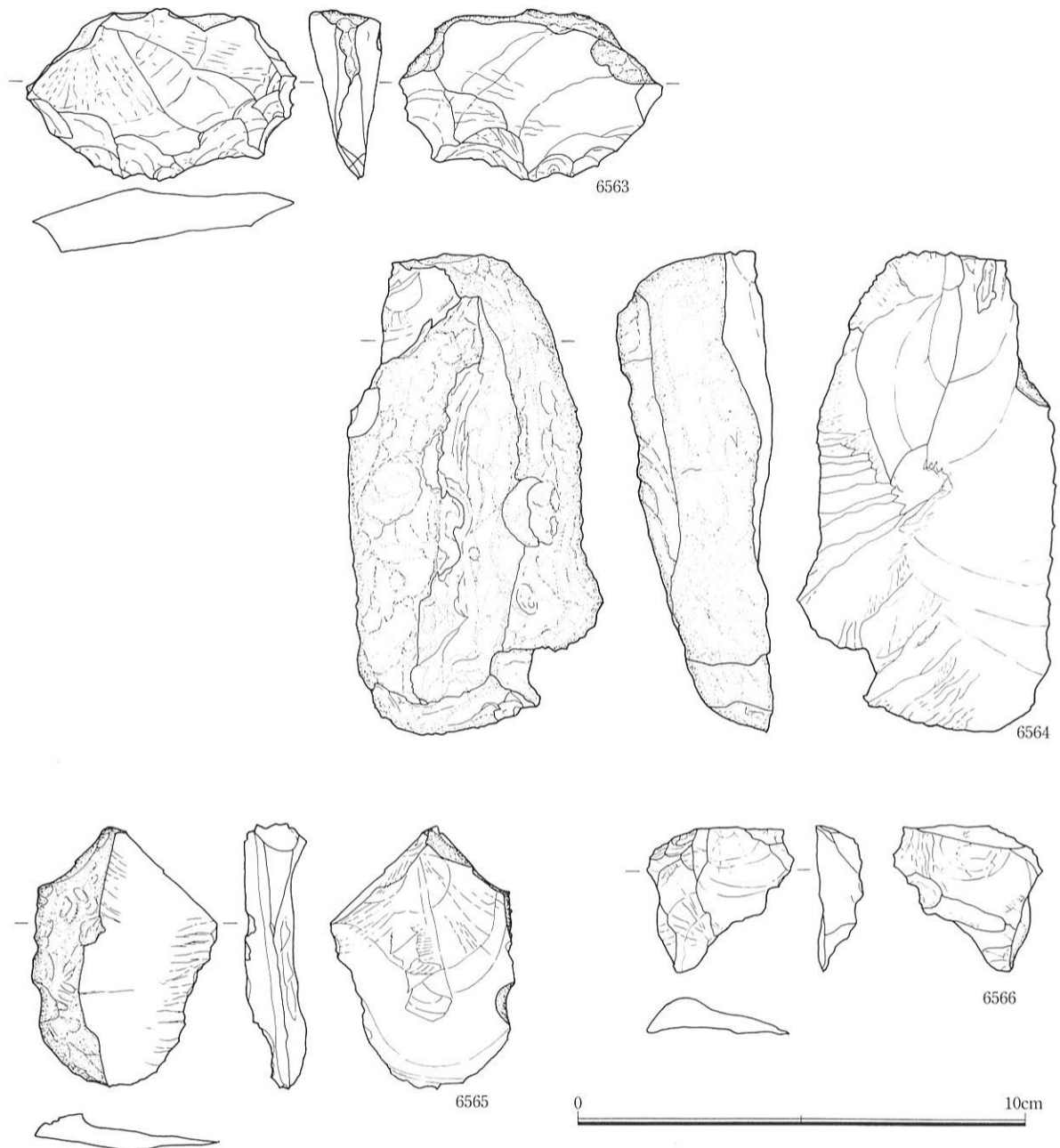


図353 6C区第5層出土石器

形態に近いが、用途不明である。樹種はヒノキ。

図352-6547~6552は土師器。6547はいわゆる河内型庄内式の甕である。「く」字に折れる口縁部から口縁端部をつまみ上げる。体部外面には右上がりの極細のタタキを、体部内面には横方向のケズリを施す。6548は直口壺。6世紀代の所産であろうか。6549は少片だが、口縁端面に約1cm間隔に径3mmの丸と、口縁端から内側に2~3mm幅の赤彩がみられる。口縁内面にはさらに、クシ描き波状文と直線文が施されている。庄内期の器台と考えられる。6550~6552は高杯である。杯部の稜がほとんどなくなり、脚部はゆるやかに外反する。外面はハケのちナデ、杯部最下段にハケメが残る。脚部内面はケズリ調整。布留式期IIIと考えられる。これらの土師器は調査区中部以西からの出土が多い。

6553~6562は弥生土器。6553は口縁部に加飾のある広口壺。拡張された口縁端面にクシ描き波状文が施され、さらに1/8周ごとに円形浮文が貼付される。内面の口縁直下にもクシ描き波状文がみられる。

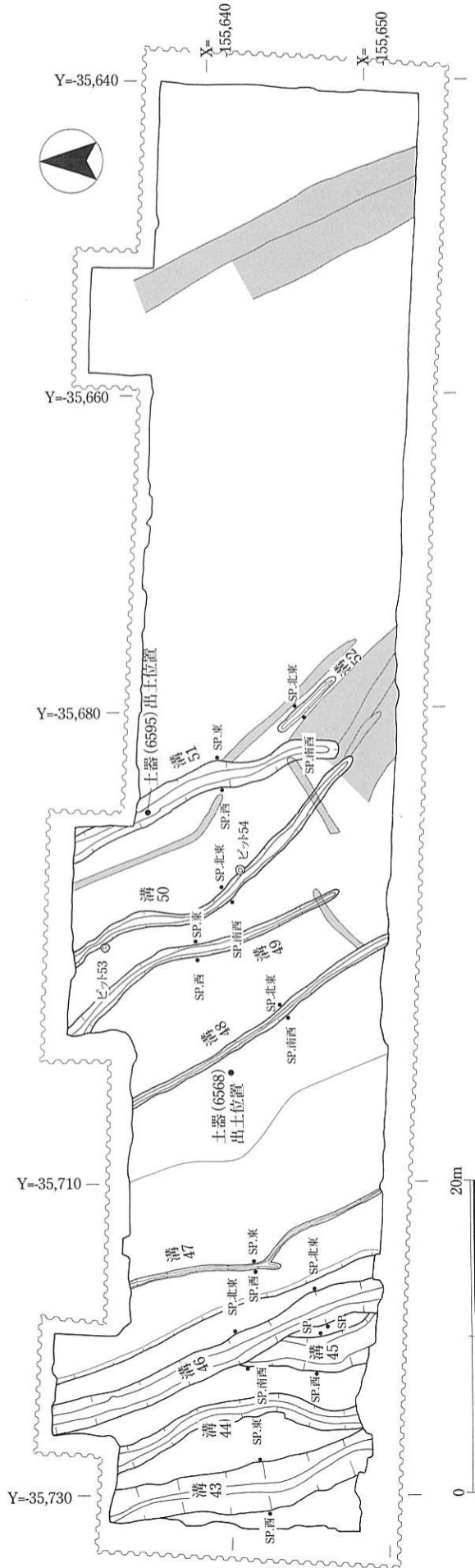


図354 6C区第6面

V様式の前半に類例がある。6554～6556は広口壺。6554は口縁外面に粘土紐を貼り付け口縁端面を拡張し、そこに縦に短い棒状浮文を貼付している。胎土は生駒西麓産。V様式に位置づけられる。6555・6556は大きく外反し、かなりの厚みがある。6555の表面は磨耗し調整は不明瞭だが、内面はヘラミガキされている。6556の口縁下端には刻みが施される。II様式であろう。6557はV様式系の小型甕。口縁部はわずかに上方につまみ上げられている。外面は横方向の粗いタタキ、内面はナデ調整である。体部では分割成形による粘土帯の合わせ目が3ヵ所観察でき、口縁部も別に付加されている。6558は中期の甕。口縁端部は面をなす。頸部外面に沈線が1条めぐり、その上下に指頭圧痕が残る。6559は甕の体部下半。内外面ともハケ調整される。中期後半であろうか。6560～6562は底部。6560の外面には不明瞭ながらタタキらしき痕跡が見え、内面には炭化物が付着している。以上の弥生土器は調査区中部からの出土が多い。

図353-6563はサヌカイト製スクレイパーである。一端を両面から加工し、付刃している。30.8g。6564～6566はサヌカイト剥片である。6564は粗割段階の剥片。大型の剥片で背面の全体に自然面が残し、腹面は強い敲打のためフィッシャーが発達している。最大長10.8cm、最大幅5.6cm、最大厚3.1cm、177.8g。6565・6566は母石をやや加工した段階の剥片である。6565は22.5g、6566は7.1g。これらサヌカイト剥片はいずれも調査区中部からの出土で、弥生土器と同じ分布傾向を示す。

第6面 (図354) ————— 古墳時代の面概要

条里型地割の第5面を構成する土壌化層を除去し検出した。自然地形に沿って南東から北西に流れる溝を検出したので、条里施行以前の地表面が削平されたと推定できる。

面の高さはT.P.+8.7～9.6mで、基本的に南東

から北西に向けて低くなっていく。

遺構として検出した10条の溝もこの傾斜に従い、南東（南南東）から北西（北北西）に流れていたと考えられる。ただし、調査区西側、溝46と47との間の段から西側はT.P.+9.1~9.2mと比較的高く、段の東直下とは約30cmの比高がある。溝の他に、ピット2個を検出した。

第6面上からは土器2個体と自然石1個が、さらに複数の溝からも土師器などが出土した。

遺構と遺物

第6面上から弥生土器が2個体出土した。図356-6568の甕は、体部上半以上は欠損しているが図355に示すように正立状態で出土した。内外面ともにヘラミガキが施される。その南東約1.2mからは、6567の中期の広口壺の口縁部が出土した。

溝を10条検出した。個々の溝について西から順に報告する。

溝43~46は調査区西部に位置する。

溝43は南南東から北北西に主軸をとる。幅2.45~3.15m、深さ78~99cm。埋土（図357）は7層に分かれる。溝内から、土師器185片、流木1本、モモ核

1個が出土した。図358-6569は大型の複合口縁壺。垂直に立ち上がる口縁下に一条の突帯が付く。口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ、内面はハケのち胴上半にケズリを施す。胎土はやや白っぽい。布留式前半に併行する山陰系の土器であろう。図359-

6570は甕。口縁端部は内側に肥厚する。体部外面ハケは、縦方向の後、上部は横方向に施される。内面はヘラケズリされるが、頸部直下には指頭痕が残る。

6571は全形は窺えないが、鉢等大型品の底部であろうか。6572~6576は小型壺。中でも6575・6576は精製品のいわゆる小型丸底壺。6577~6589は高杯。杯部は6577・6578のように丸味を帯びたものと6579・6580のように

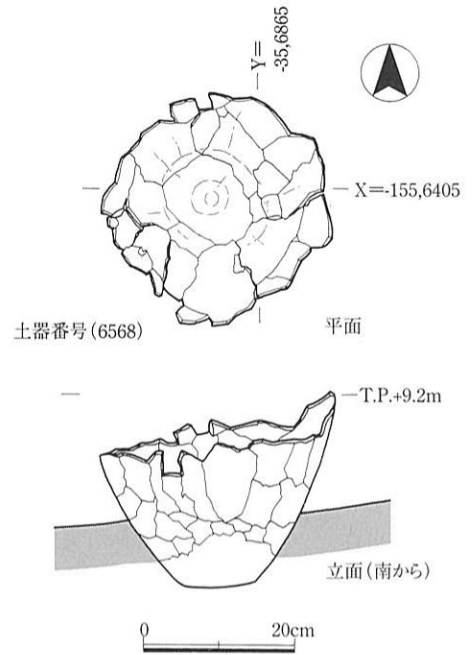


図355 6C区第6面土器出土状況

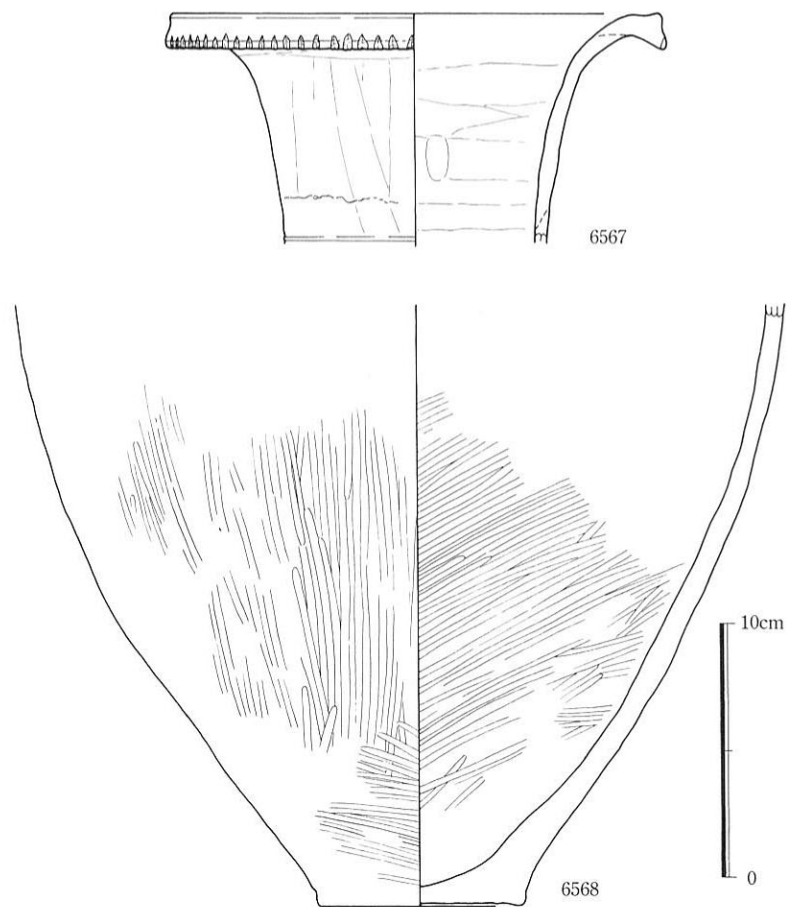


図356 6C区第6面出土土器

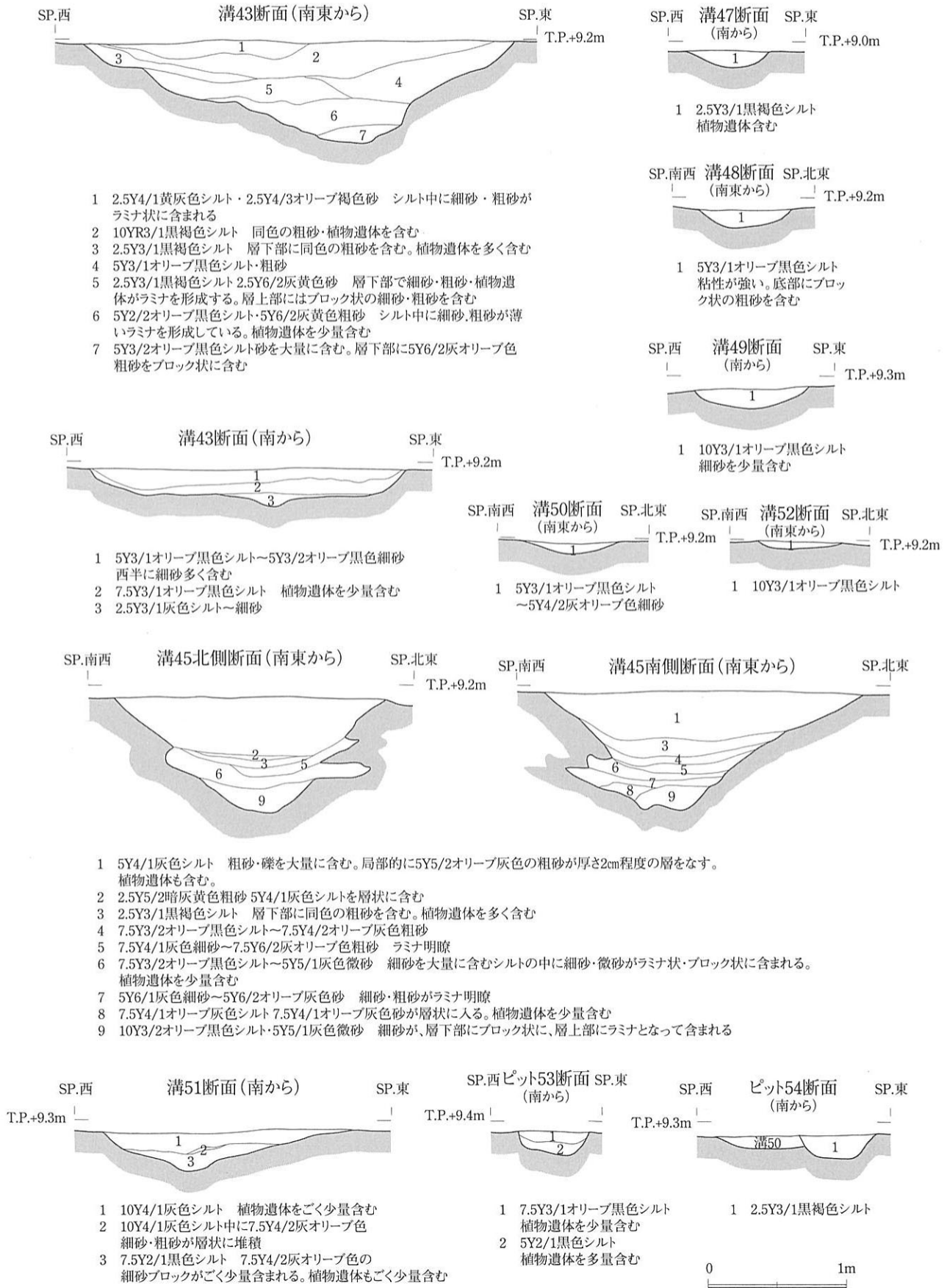


図357 6C区第6面遺構断面

底部と口縁部との境が屈曲するものがある。脚部はいずれも極端な屈曲はなく、なだらかに裾が開く。これら溝43出土の土師器は、布留式期IIを主体とする。

溝44は、調査範囲内では円弧の一部のように南から北北東に向かい、さらに北北西へ向きを変える。幅1.1～1.6m、深さ22～32cm。埋土は2.5GY2/1黒褐色シルトの単層。出土遺物はない。

溝45は、南から北北西に向かい次いで北北東へ向きを変えるが、溝46に切られその先は不明である。周辺では続きを検出できなかったため、調査区内で途切れていたかあるいは溝46に流路を取って変わったものと推定できる。幅1.9～2.4m、深さ15～22cm。埋土（図357）は3層に分かれる。出土遺物はない。

溝46は南南東から北北西に流れる。幅1.45～2.3m、深さ80～96cm。埋土（図357）は、北側では6層に、南側では8層に分層できる。埋土の6層以下は側方にかなり張り出しており、水面がそのレベル（T.P.+8.6～8.7m）にあった時の浸食の可能性はある。しかし、流路が直線的な割には、北側の断面では東に、南側の断面では西に偏っているため、溝46に先行する別の溝の痕跡とも考えられる。溝内から、土師器43片、木製の柄1本、モモ核1個が出土した。図361～6590は甕。外面はタタキ、内面はナ

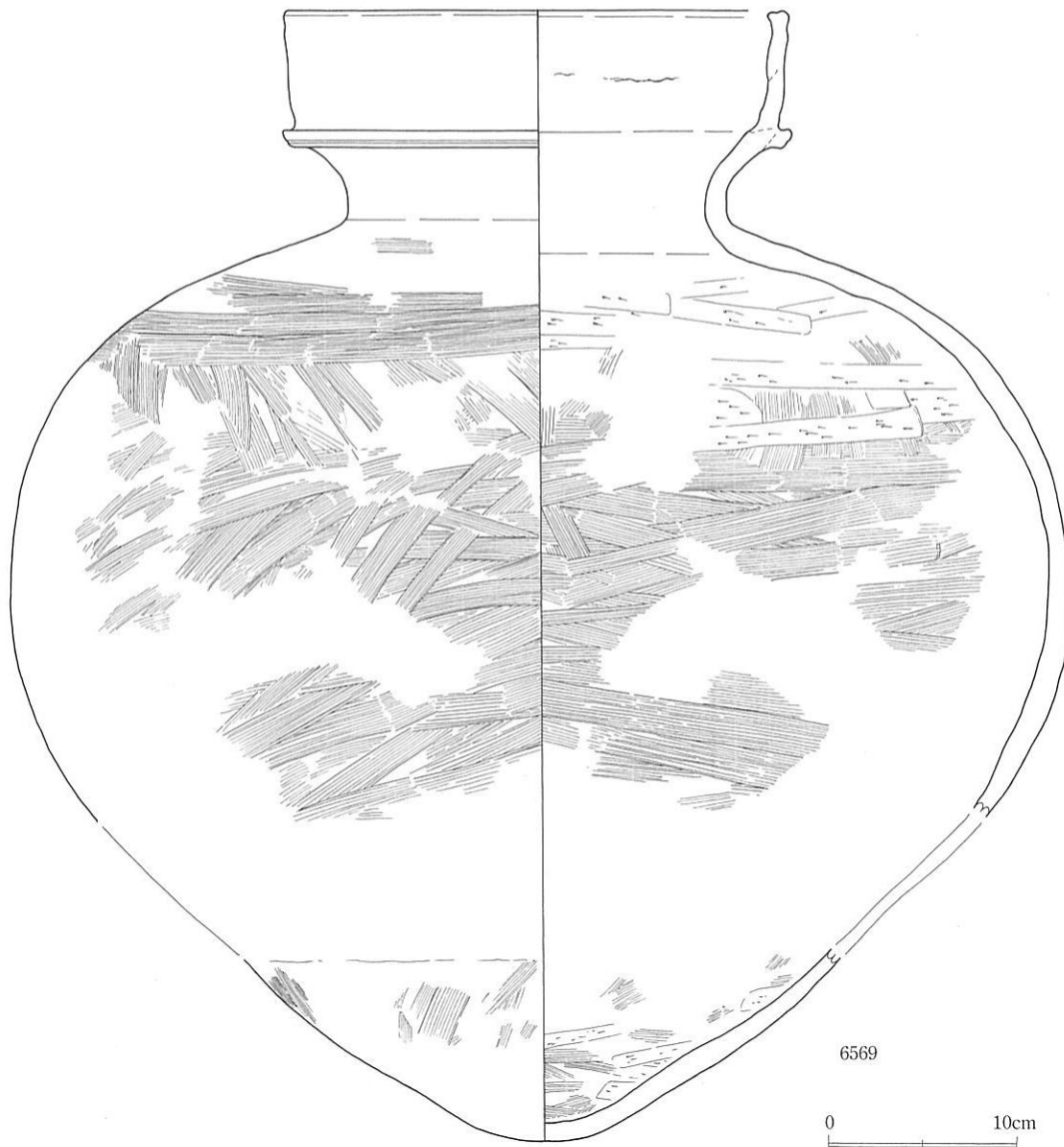


図358 6 C区第6面溝43出土土器(1)

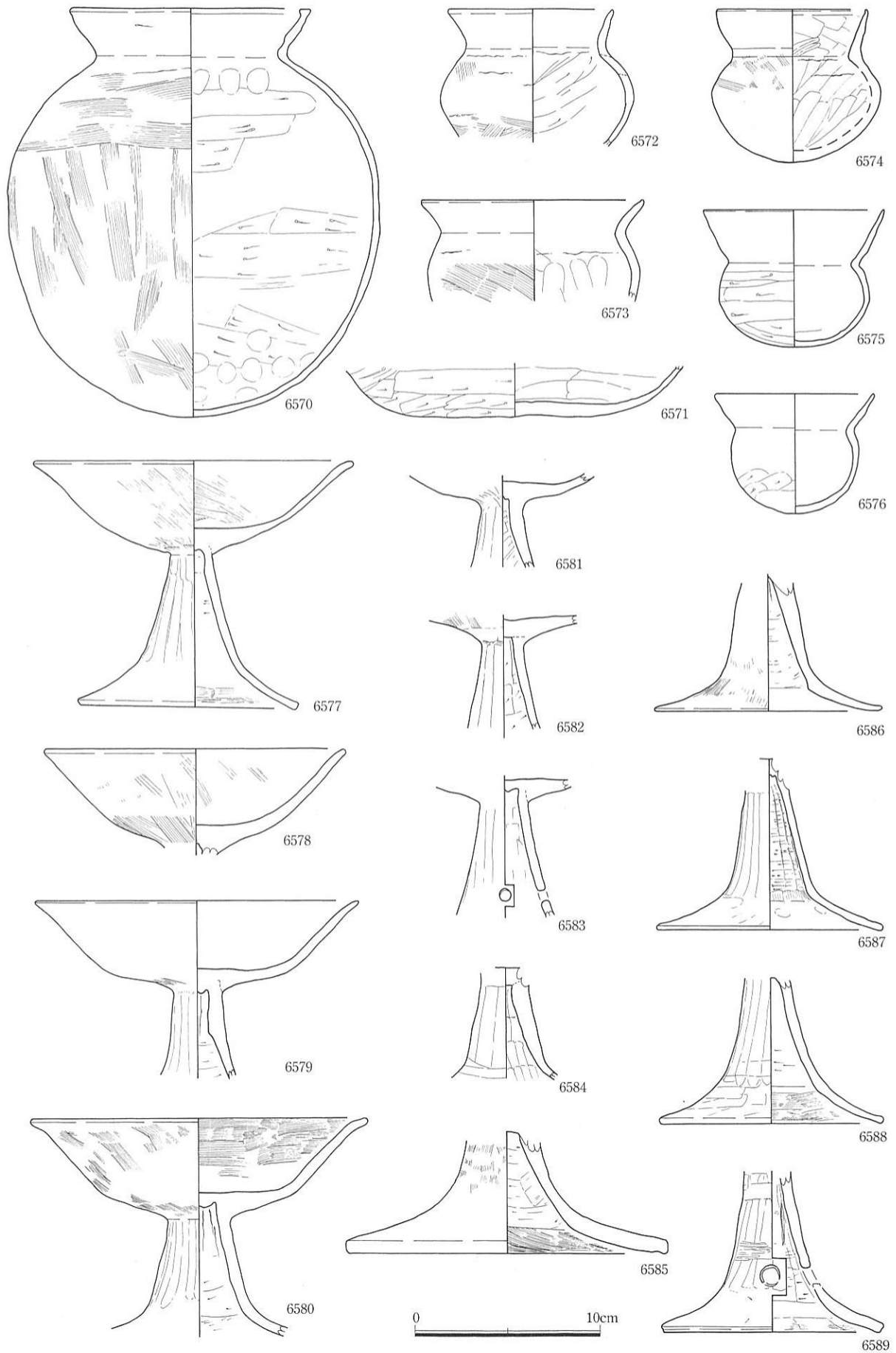


図359 6C区第6面溝43出土土器(2)

デだが部分的にヘラケズリ状に砂粒が動いている。器壁は庄内系甕に比べ厚く、V様式系と考えられる。6591・6592は小型丸底壺。6591は口径よりも体部径が大きい。6593は高杯脚部。脚柱部はふくらみをもち、裾部は屈曲して開く。6594は団扇形木製品の柄部。断面は楕円形、下端は石突（鐵）状に仕上げられている。樹種はヒノキ。以上の出土遺物から、溝46は布留式期II～IIIに位置づけられる。

段が溝46の東肩から東0.6～1.85mにあり、東に23～41cm落ちる。その下端が第6面で最も低い部分になる。

溝47は段の東約2～4mに位置する。調査区中央から北に向かう溝の途中に、南東からの溝が合流したような平面形を呈する。深さは前者が7～17cm、後者は4～8cmだが、幅はいずれも約30～40cmで、埋土（図357）は植物遺体を含む2.5Y3/1黒褐色シルトで共通するので、一連の溝と考える。遺物は出土しなかった。

溝48～52は調査区中央部に位置する。なお、溝48・49をこの第6面で調査したが、土層断面観察によると削平のため第6層が分布しない範囲に存在するため、本来は第7面以下の遺構である。

溝48は南東から北西に流れる。幅47～71cm、深さ8～16cm。埋土（図357）は単層。出土遺物はない。

溝49～52は基本的に北北西に向かって伸びる。溝49の南端一帯は周囲より数cm低くなっているものの、溝50～52の南端部周辺は南に向かってさらに高まる傾向にある。したがって、これらの溝への水回りは不明だが、溝群の南端以南が削平により消失したとは考えにくい。

溝49は幅47～126cm、深さ6～18cm。埋土（図357）は単層。土師器14片、弥生土器2片、自然石1が出土した。

溝50は幅57～104cm、深さ6～20cm。埋土（図357）は単層。出土遺物はない。溝50は後述のピット53・54と切り合い関係にあり、それらに先行する。

溝51は幅1.15～1.8m、深さ16～38cm。埋土（図357）は3層に分かれる。出土遺物は、土師器28片、石包丁2点。図361-6595の甕は、図360のように溝埋土中から口縁部が西を向いた横倒しの状態で出土した。6596も甕の口縁部。6597・6598は高杯。6597の脚上部には沈線が4条めぐる。6598の脚部は裾が屈曲して広がる。6599・6600は石庖丁。6599はA・B面（片刃の場合、付刃されている面をA面とする）とも丁寧な研磨が施され、片刃が付刃されている。紐孔はみられない。未成品であろうか。現状で38.9g。結晶片岩製。6600は楕円形もしくは杏仁形。片刃で、背部も研磨されている。37.8g。千枚岩に近い粘板岩を素材とする。溝51は出土土器および同じ第6面の溝43・46の時期から、布留式期に位置づけられる。その場合、2点の石庖丁は下層からの混入と考えられる。

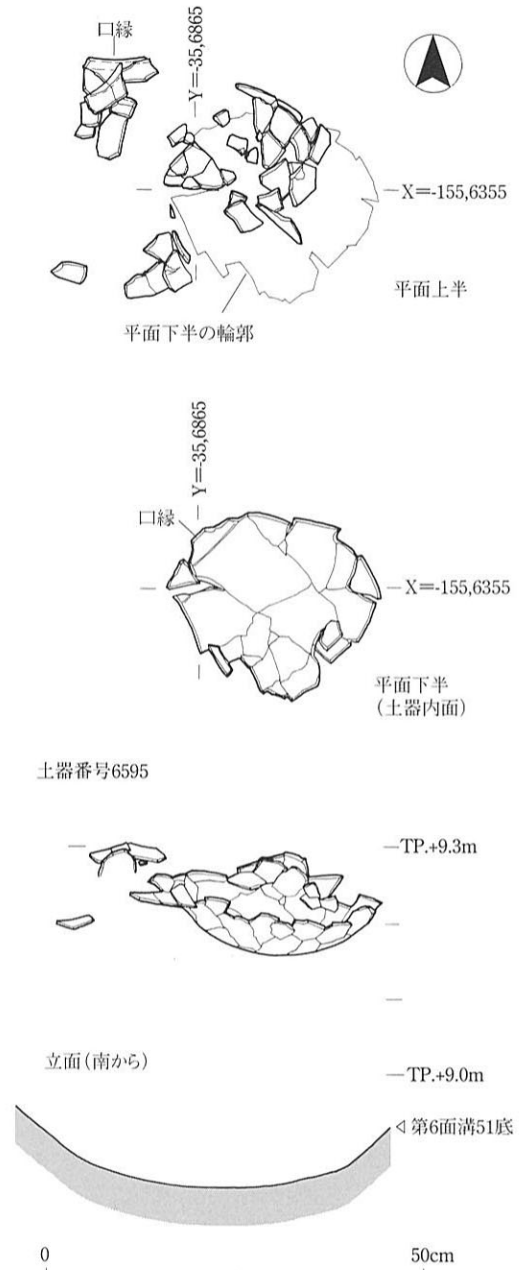


図360 6C区第6面溝51土器出土状況

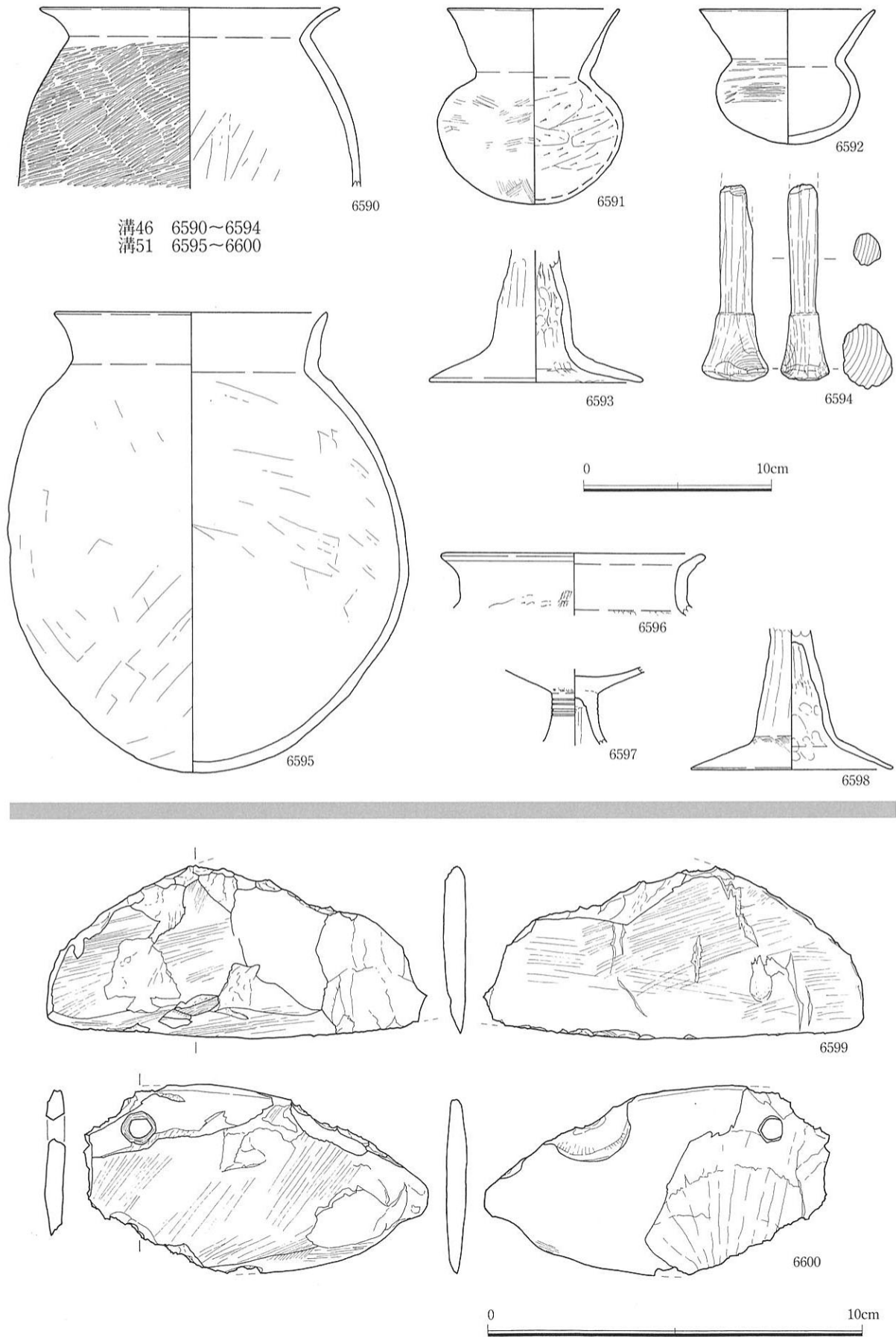


図361 6C区第6面溝46・51出土土器・石器

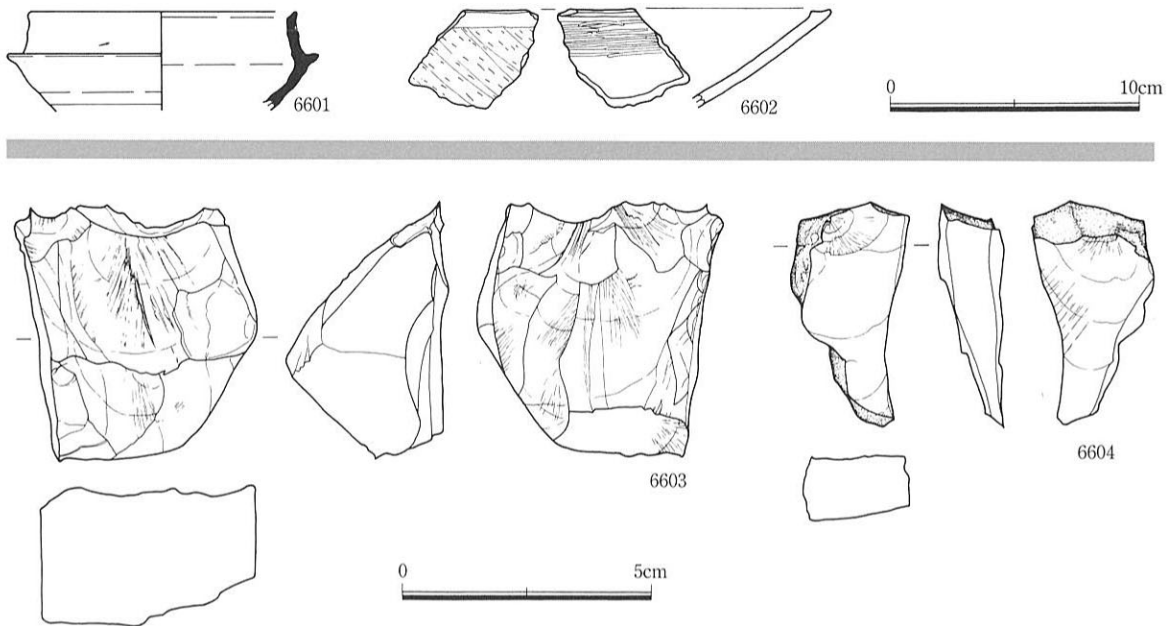


図362 6C区第6層出土土器・石器

溝52は、検出長5.0m、幅44～59cm、深さ4～7cm。埋土(図357)は単層。出土遺物はない。

ピット53・54は調査区中央部に位置する。溝50と切り合っており、より新しい。ピット53は平面円形で、直径約52～58cm、深さ16cm。埋土(図357)は2層に分かれる。ピット54も平面円形で、直径約50～52cm、深さ16cm。埋土(図357)は単層。両ピットとも出土遺物はない。

他に、遺構として認識できるほどではなかったが、図354のアミかけ部分のように溝群とほぼ平行あるいは直交して、周囲の第6面とはわずかに土質の異なる部分がみられた。規模および主軸方位から、溝等の痕跡と考えられる。

時期

第6面の時期は、調査区中部以西では溝43・46・51出土の土器からすると布留式期である。ただし、第6面は条里型地割の作土層である第5層を除去して検出した面である。したがって、かつて存在した地表面は第5層の攪拌によって失われ、布留式期に掘り込まれた溝の一部が結果的に残存していたものと考えられる。

一方、調査区東部は、上下の包含層出土土器から、布留式期に限定できず古墳時代後期までの時期幅のうちに位置づけられる。

第6層出土遺物(図362)

第6層からは、須恵器10片、土師器23片、弥生土器30片、縄文土器1片、サヌカイト片2片、自然石1点、計67点出土した。ただし、調査区中央部では第6面調査段階ですでに第8層の一部が露出していたので、その部分を避けて第6層として掘り下げた。その結果、調査区の部分ごとの遺物組成に差異がみられた(図349・350)。

調査区東部の第7面で水田畦畔が検出できた範囲の上層にあたる第6層からは、須恵器10片、土師器17片、弥生土器15片が出土した。図362-6601は須恵器杯身。たちあがり部の端面は内傾しわずかにくぼむ。復原口径10.3cm。TK23～TK47型式と考えられる。

調査区中部では、土師器2片と弥生土器1片のみ。

調査区西部からは、土師器5片、弥生土器14片、縄文土器1片、サヌカイト片2片、自然石1点が出土した。6602は小片のため傾きにやや不安があるが、縄文時代晩期の浅鉢であろう。口縁端部は内傾し、ほぼ水平の面となる。外面は粗くケズられている。6603はサヌカイト石核。石核の一部が欠損している。82.6g。6604はサヌカイト剥片。側面と打面に自然面が残る。14.7g。サヌカイトは2点とも調査区西隅から出土した。

以上のように、出土遺物からすると第6層は、調査区東部は古墳時代の、中部以西は弥生時代の包含層と考えられる。

第7面 (図363) ————— 古墳時代の水田面・弥生時代の面 概要

第6層を除去した土壌化層上面である。結果的に、古墳時代の水田面、弥生時代の面、弥生時代の包含層の3者を同一面で検出した。

面の高さはT.P.+8.4~9.25mで、かなりの高低差がある。

遺構として、溝2条、大畦畔1条、複数の小畦畔とそれらに囲まれた水田を検出した。

第7面上の遺物はないが、溝57からサヌカイト製石小刀1点が出土した。

遺構と遺物

上述の第6層は、調査区東部は古墳時代、中部以西は弥生時代の包含層と考えられた。その下面の第7面では、古墳時代の水田面、弥生時代の面、弥生時代の包含層の3者を同一面で調査した。

古墳時代の水田域は、調査区東部の小畦畔が検出された範囲である。小畦畔は幅31~97cm、高さは3cm以下が大半で、周囲との土質の違いは認識できるが高まりとしては全く検出できない畦畔もある。周辺の水田面の高さはT.P.+8.9~9.0m。

調査区南東隅から北西方向に向けて、幅約2.6~9.0mの大畦畔状の高まりが存在する。その中央部には幅67~約250cm、深さ3~10cmの溝状のくぼみがある。この大畦畔状の高まりよりも北東側はT.P.+8.95~9.05mであるが、遺構は検出できなかった。



図363

弥生時代の包含層は第8層露出部分（図363のアミかけ部分）で、調査区中央やや西寄りの、南東から北西に主軸をもつ幅約12～17mの高まり部分である。この範囲では遺構の検出はできなかった。この範囲の高さはT.P.+9.0～9.25mで、東辺から西に向けて徐々に低くなっている。

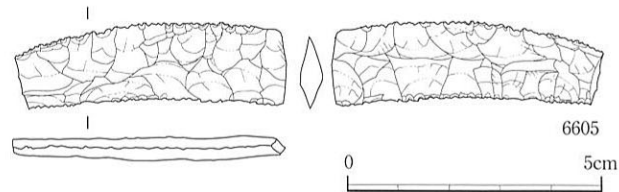


図364 6C区第7面溝57出土石器

弥生時代の面は、第8層露出部分を除く調査区中部以西である。

第8層露出部分の東では溝や大畦畔などが検出され、地形的にもやや複雑な様相を呈する。

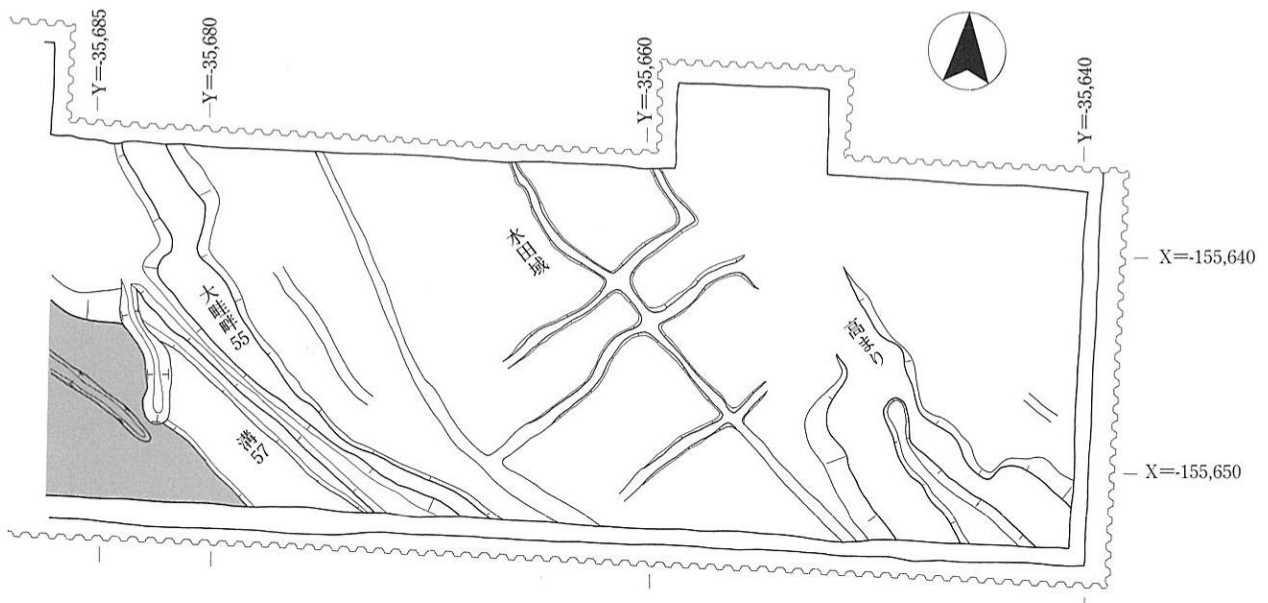
溝57は南東から北西に向けて流れる。幅約0.7～1.5m、深さ13～21cm。埋土は10Y3/1オリーブ黒色シルトを基本とするが、埋土上部には攪拌された5Y4/3暗オリーブ色粗砂ブロックがみられる。図364-6605のサヌカイト製石小刀1点が出土した。基部と尖端部が欠損しているが、内湾型であろう。内刃・外刃とも鋸歯刃である。4.6g。

溝57の延長線上北側に水田域が広がる。西を高まりに、東を大畦畔55に挟まれた東西幅6m程の範囲であるが、T字型に連なる小畦畔を検出できた。小畦畔は幅36～57cm、高さ1～5cm。先述の溝57は調査区内で水田域に開口しており、開口部の溝底とそのすぐ北側の田面はT.P.+8.87mのほぼ同じレベルだが、調査区北辺の水田域はT.P.+8.80mと低くなる。この水田域については、調査区東部で検出した古墳時代の水田と一連のものとも考えられるが、この範囲の上下いずれの包含層からも弥生土器が出土していることと古墳時代の小畦畔とは方位が異なることから、弥生時代の可能性が高いと判断する。

大畦畔55は溝57の東に隣接する。蛇行しているが、主軸は南東から北西に伸びる。基底部の幅66～318cm、高さ3～14cm。

一方、第8層露出部分の西側は10～15cmの段となり、その直下はおよそT.P.+8.9mである。そこから西へは溝56周辺のT.P.+8.5mと低い部分に向けて緩やかに下がり、溝56以西はT.P.+8.7～8.8mの調査区西端に向かって再び高まる。

溝56は南南東から北北西に向けて流れる。幅1.9～3.9m、深さ31～47cm。埋土の色調は一定しておら



6C区第7面

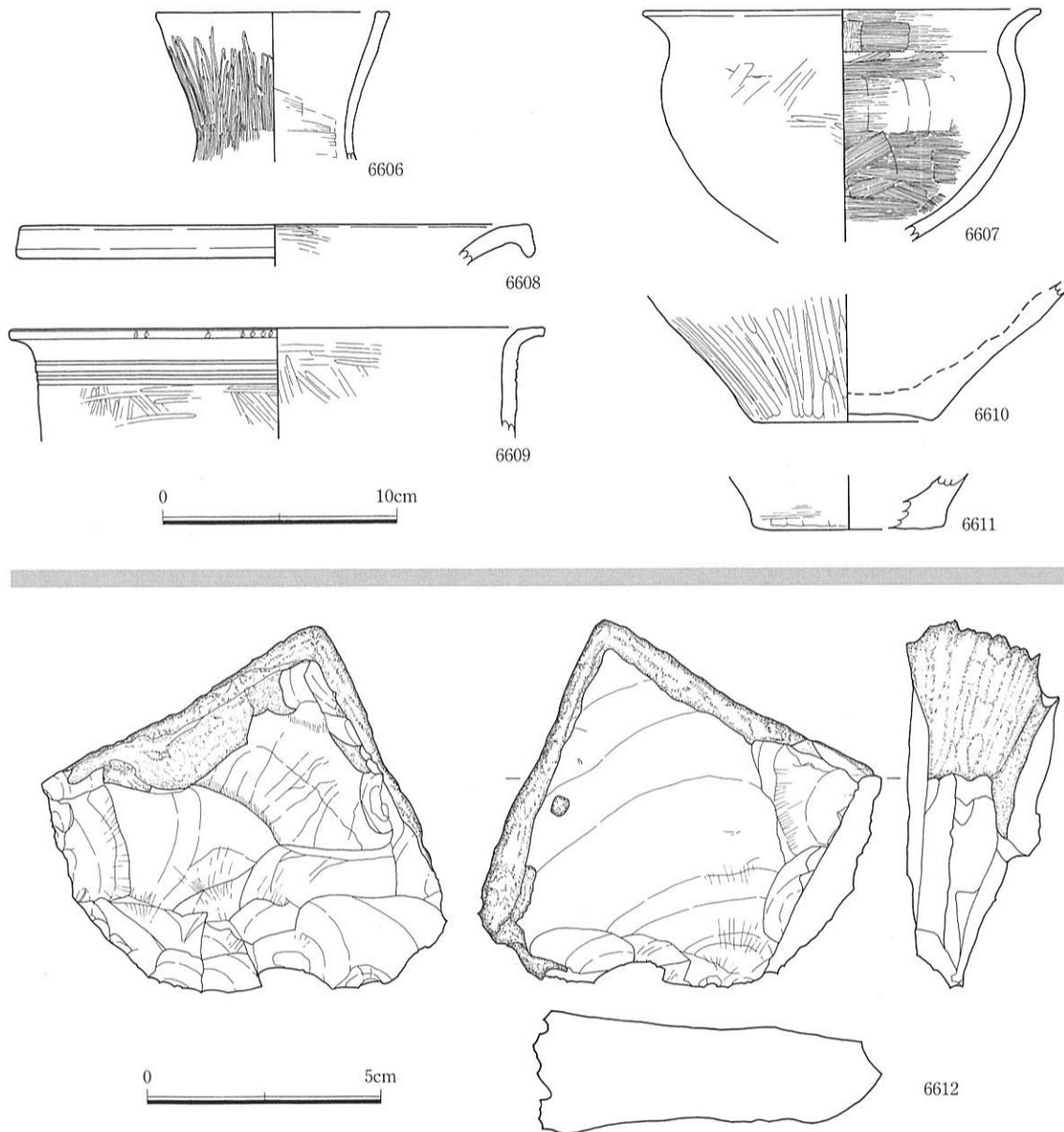


図365 6C区第7層出土土器・石器

ず、20~30cm厚の粗砂、10~50cm厚のシルト、10~20cm厚の細砂が互層をなし、西下がりのラミナを形成する。流木がみられたが、それ以外の出土遺物はない。

時期

遺構の項で述べたように、第7面では、調査区東部の古墳時代水田面、中部以西の弥生時代面、中央やや西寄りの弥生時代包含層の3者を同一面で検出した。

第7層出土遺物 (図365)

土師器1片、弥生土器54片、時期不明の土器1片、サヌカイト製スクレイパー1点、同剝片1片、計58片出土した。

第6層と同様に、調査区中部の第8層露出部分を避けて掘削した。その結果、調査区西部で弥生土器25片とサヌカイト片1片、調査区中部で土師器1片と弥生土器23片とサヌカイト製スクレイパー1点、調査区東部で弥生土器6片と不明土器1片と、いずれも弥生土器が主体を占めた (図349・350)。

図365-6606は直口の壺の口頸部。外面の縦方向のミガキが顕著。胎土は生駒西麓産。6607は口縁の外反する鉢。外面の丁寧なナデ、内面の横方向の明瞭なハケメ、褐色ないし橙色という色調などは古代の土器に類似するが、形態と第7層の遺物組成から、6606とともにV様式の弥生土器と考えておく。6608は中期の広口壺の口縁部。6609の甕には、口縁端部に刻み、頸部に沈線3条が施される。I様式。6610・6611は壺の底部であろう。他は細片が多いが、調査区中部以西から中期の、東部からは前期の弥生土器が出土している。

6612はサヌカイト製スクレイパー。片側面に自然面が残り、もう片面に細部調整を加え、付刃している。171.2g。もう1点剝片があるが、風化が著しく図化できなかった。

第8面 (図366)

古墳時代水田・弥生時代のベース面

概要

第7層の水田作土を除去して検出した。第7面のベース面である。

面の高さはT.P.+8.1~9.0mで、第7面同様にかんがりの高低差がある。

ベース面なのでこの面から掘り込まれた遺構ではないが、溝7条、ピット1個、落込み1か所を検出した。

なお、調査区中央やや西寄りの高まり部分は、第6面の検出時点ですでに露出しており、検出された溝は第6面の溝48と溝49として調査した。

第8面上および第8面検出の遺構からの出土遺物はない。

遺構

溝を7条検出した。埋土は溝ごとに若干異なっているが、いずれも単層で基本的に第7層の堆積土と同一である。溝群からの出土遺物はない。

溝58は調査区西端に位置する。南東から北西に主軸をもつ。幅60~118cm、深さ12~17cm。埋土は10Y3/1オリーブ黒色シルト。

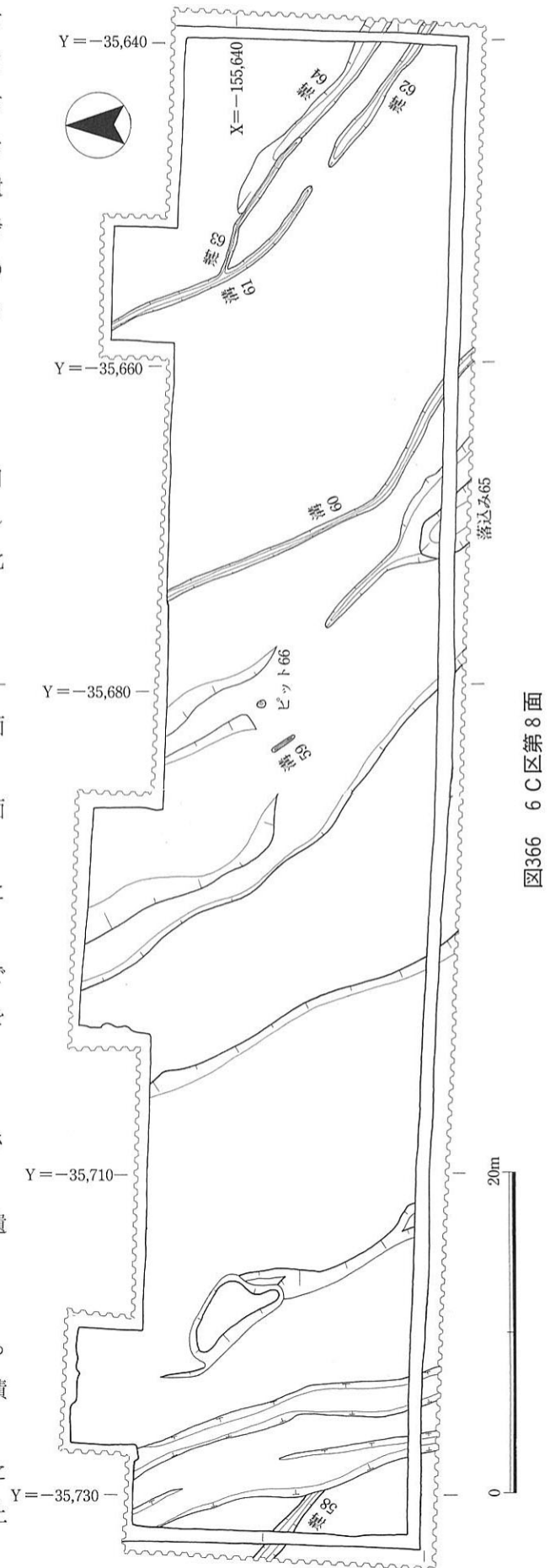


図366 6C区第8面

溝59は調査区中央部に位置する。主軸は南東から北西。検出長1.7m、幅18cm程度、深さ約3cm。埋土は2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト。

溝60は調査区中央やや東に位置する。西北西に向かい次いで北北西へ向きを変える。幅35～72cm、深さ15～28cm。埋土は2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト。

溝61～64は調査区東部に位置する。主軸方位は、いずれも基本的に南東から北西である。

溝61は幅39～54cm、深さ12～14cm。溝62は幅53～86cm、深さ9～27cm。溝61と溝62の埋土は同じ10GY3/1暗緑灰色シルトで、位置関係と規模の共通性からも本来は一連の溝であった可能性が高い。そうであれば、14～17mの間隔をもちながら溝60とほぼ平行の関係にある。

溝63は幅29～37cm、深さ3～6cm。溝61との切り合い関係は、やや不明瞭だが溝61の方が新しくみえる。埋土は2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト。

溝64は幅73～約120cm、深さ9～22cm。埋土は10GY3/1暗緑灰色シルト。溝63に切られている。

したがって、切り合い関係からみると、溝64→溝63→溝61の順に新しくなる。

落込み65は溝59と溝60との間に位置する。調査区南辺で幅約4.5mのうち西寄りの3.0mが41cmと深く落ち込み、そこから北西に向けて約7m、幅55cm程でごく浅く溝状に伸びる。出土遺物なし。

ピット66は調査区中央部、溝59の約3m東に位置する。平面円形で、直径42～47cm、深さ10cm。埋土は2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト。出土遺物はない。

時期

第7面のベース面という性格上古墳時代を下限とするとするが、第7層の遺物からみるとさらに遡り弥生時代と考えられる。

第8層出土遺物 (図368～372)

調査時に第8層出土として取り上げた遺物の総計は、土師器4片、弥生土器729片、縄文土器5片、不明土器1片、土製円板1点、投弾1点、石器類47点、木製品5点、トチノキ種皮片、モモ核3点、高師小僧1点、計798点である。

ただし、後述する第9面川68も第8層として同時に掘り下げてしまったので、川68に該当するグリッド出土遺物を除くと、弥生土器387片、縄文土器1片、土製円板1点、投弾1点、石器類30点、モモ核3点、高師小僧1点、計424点となる。

以下、川68以外のグリッド (図367の淡いアミかけ部分) の遺物を第8層出土として報告する。

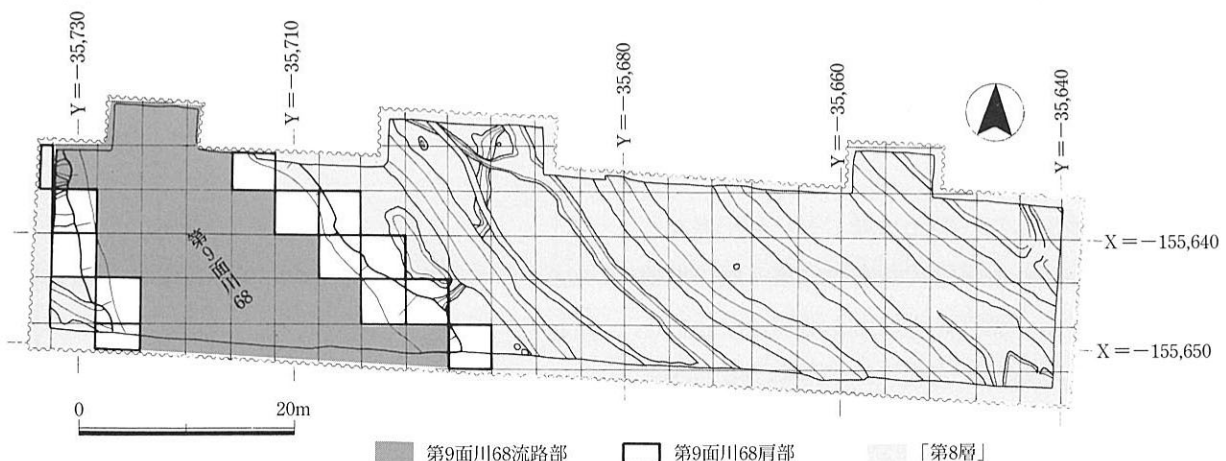


図367 6C区第8層・第9面川68出土遺物グリッド割り

弥生土器には壺、甕、鉢、高杯がある。図368-6613は広口壺の大きく外反する口縁部。口縁端面に2条の沈線を引き、上中下に斜めの刻みを施す。6614は中期の広口壺または甕の口縁部。胎土は生駒西麓産。6615・6616は無文の広口壺。6616の頸部は丸く外反し、口縁端部はわずかながら上下方に拡張されている。口縁端面はナデの後、内面と同じ粗いハケが当たっている。6617は甕。口縁端部は面をもつ。6618はいわゆる大和型の甕。口縁下端に刻みを施し、口縁内面に横方向、体部外面に縦方向のハケメがみられる。6619は小型の甕。口縁端部に刻みがなく、外面をヘラケズリしているので紀伊型であろうか。6620・6621は鉢の直口の口縁部。6622は復原口径約30cmと大形の鉢。体部外面は全体に煤が付着している。6623は高杯杯部。水平の口縁端面の両側に細かな刻みが施される。6624・6625は高杯脚部。裾の形態は異なるが、いずれも中実である。6626-6633は壺または甕の底部。6626は他に比べ径の小さな底から体部に向け大きく開く。図示した8点の底部のうち6631・6632は生駒西麓産の胎土。以上、第8層出土の弥生土器はII様式を主体とする。

6634・6635は突帯文土器の深鉢の口縁部。6634には突帯上の刻みはなく、6635の刻みも軽い。長原式と考えられるが、6635の粘土帯は外傾接合である。胎土は生駒西麓産。

6636の土製円板は、外面ヘラミガキ、内面ハケメの土器片を転用したもの。円中心部に、外面に1ヵ所、内面には2ヵ所穿孔しかけのくぼみがある。胎土は生駒西麓産。

石器類30点のうちサヌカイトを素材とするものが27点と多数を占める。その内訳は、尖頭器3点、尖頭器未成品1点、石小刀2点、石鏃1点、両面調整剥片1点、敲石1点、石核3点、二次加工のある剥片2点、剥片13片である。サヌカイト以外では、石庖丁未成品、砥石、結晶片岩片が1点づつある。

図369-6637は石庖丁未成品である。両刃が付刃され、両面と背部に研磨が施されている。石英片岩製。現状で106.4g。

6638-6640は尖頭器。6638は尖端は欠損、基部は折れている。やや幅広の器形で、刃部と基部との境に棘状突起を持つ。鋸歯刃である。現状で長さ12.9cm、幅3.7cm、厚さ1.0cm、61.8g。6639は細身の器形である。基部は折れ。棘状突起がつくり出されている。長さ14.5cm、幅2.7cm、厚さ1.0cm、32.5g。6640は有茎型の尖頭器であろう。背面中央部分に自然面を持つが、刃部は鋭く加工されており、実用可能なものと考えられる。21.2g。

図370-6644は尖頭器の未成品であろうか。刃部の中程以下と基部が残存している。基部は折れ。刃部の二次加工が荒く、側面に繰り返し敲打を加え、剥離をしようとした痕跡がある。6C区出土の尖頭器としては粗雑なつくりである。40.3g。

図369-6641は凹基型の石鏃。3.3g。

6642・6643は石小刀。6642は無突起の鉤手型。基部は折れ。ほぼ完形である。内刃に剥離のための敲打痕がある。10.6g。6643はほぼ完形で18.9g。基部端面に自然面が残る。

図370-6645は両面調整石器である。A面は山形になるように剥離されている。上端は折れ、下端部には自然面が残る。類例からみると楔形石器か。16.9g。

6646は敲石。自然面が残る部分以外の面は完全に変色するほど敲打がなされている。411.2g。

6647-図371-6649は石核。6647は背面に自然面が残る。101.0g。6648は上端面に自然面が残る。70.2g。6649は側面と腹面に敲打痕が残る。99.0g。

6650-図372-6656はサヌカイトの剥片。6650・6652・6653・6656は背面に自然面を残す大型の剥片である。このような剥片は6C区で数多く出土した。6650・6652は腹面に二次加工がなされているが、

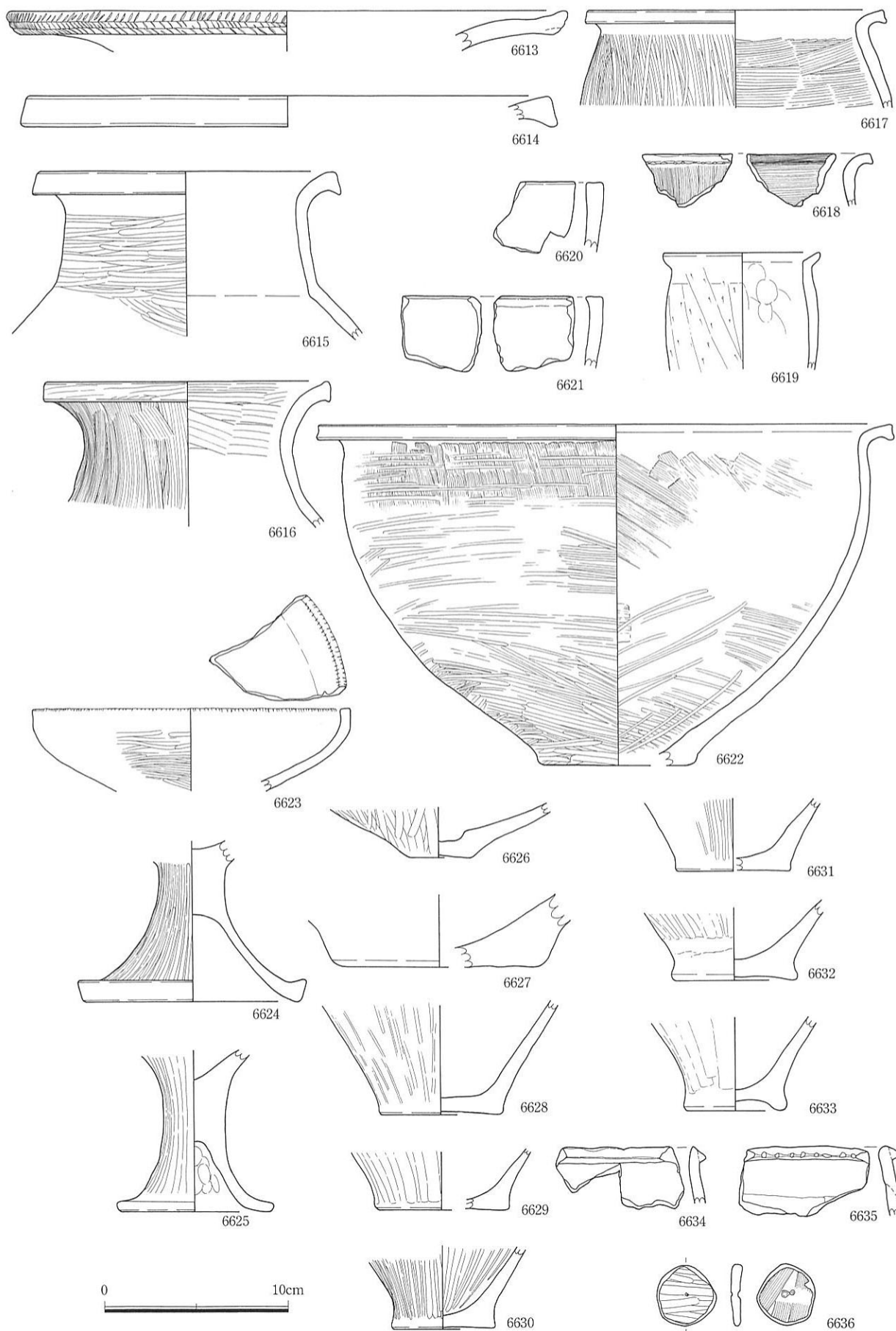


図368 6C区第8層出土土器

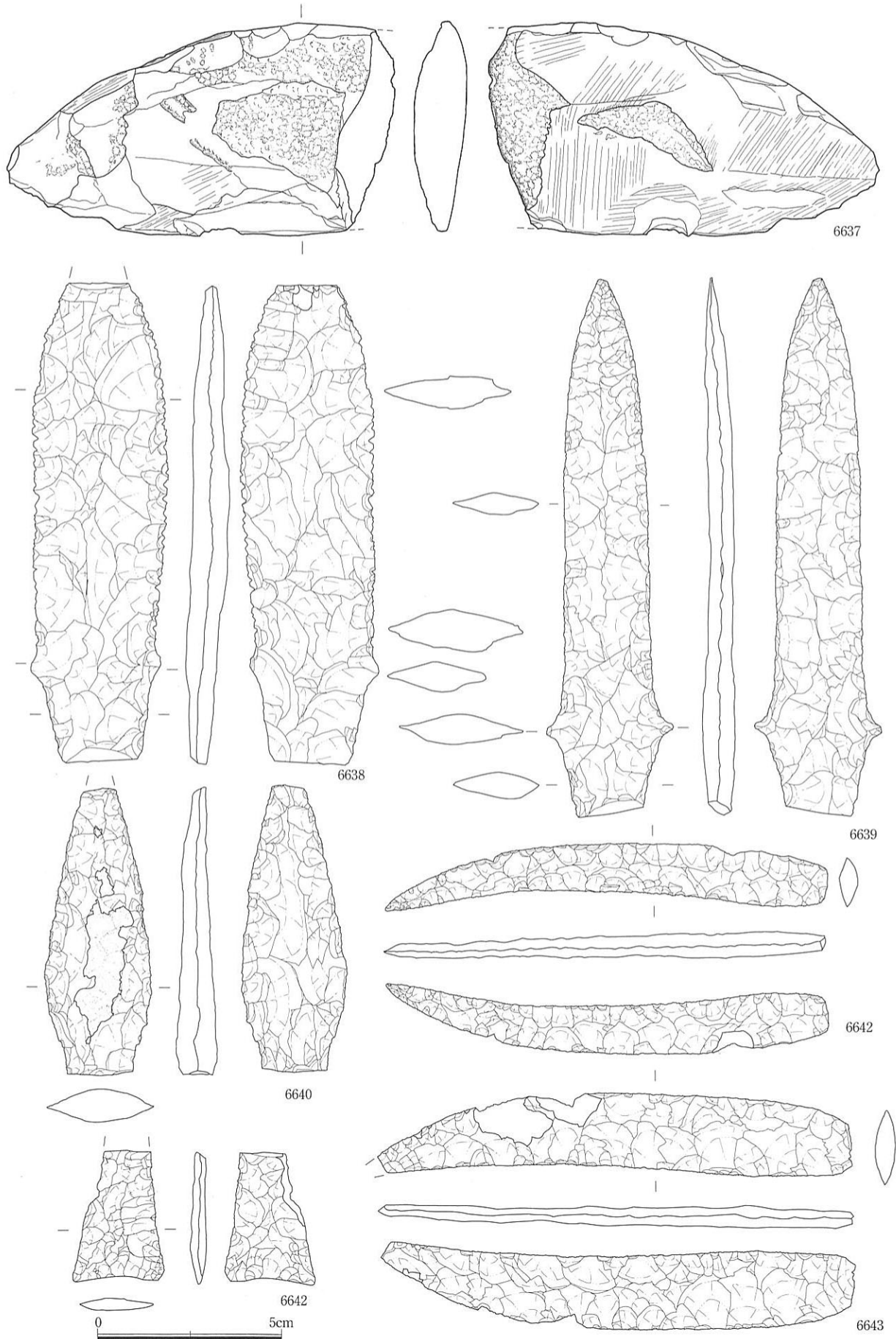


図369 6 C区第8層出土石器(1)

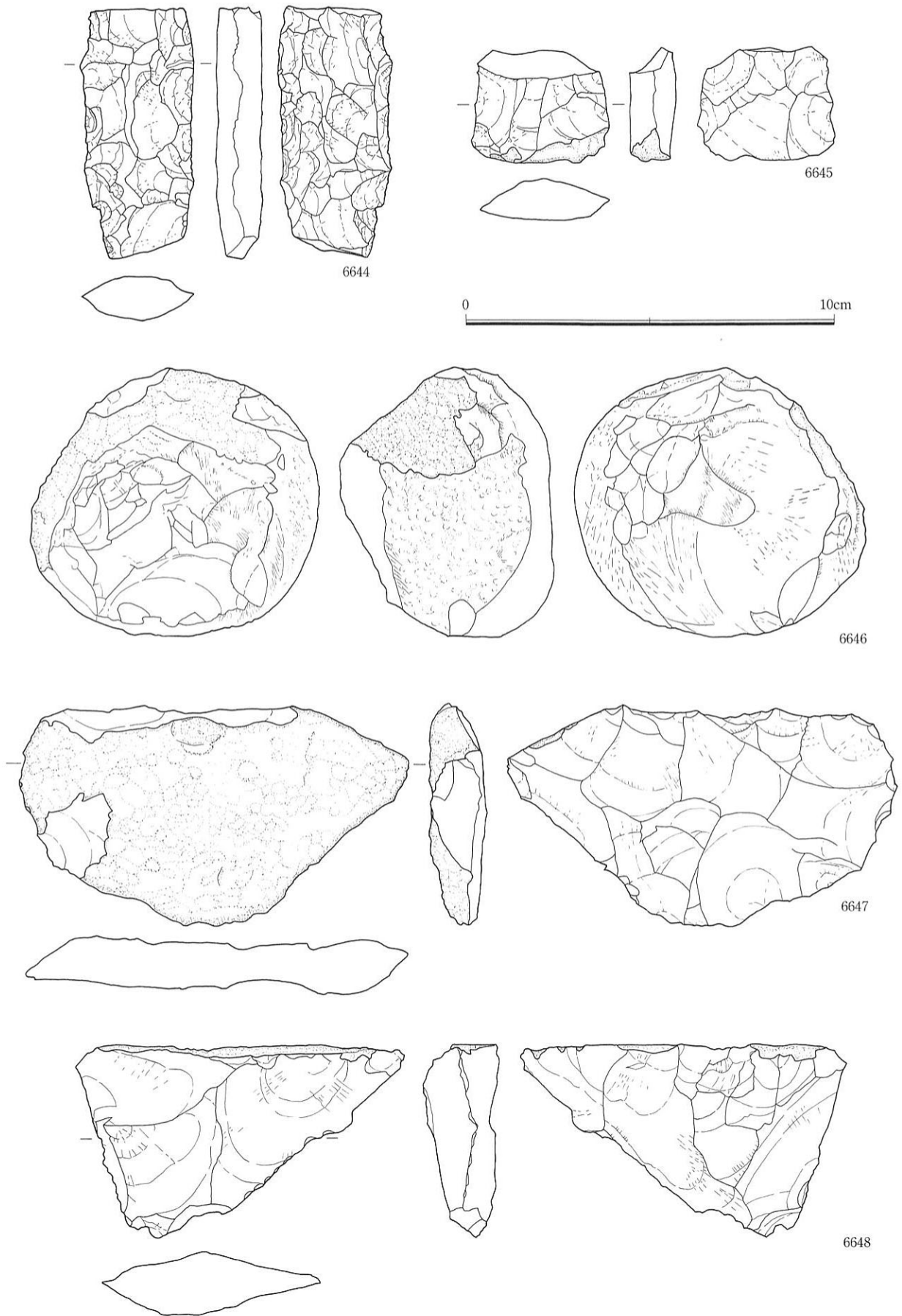


図370 6C区第8層出土石器(2)

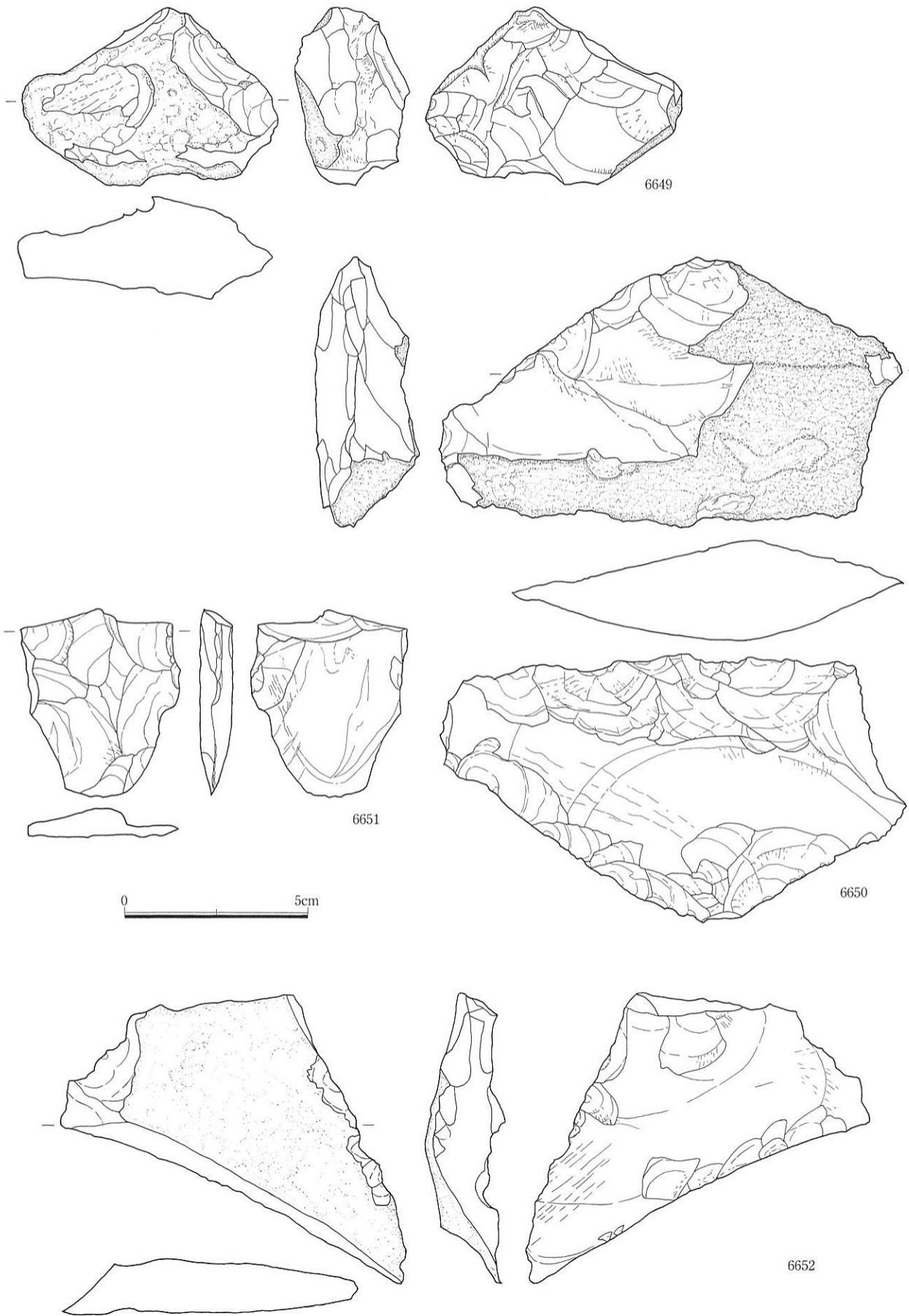


图371 6 C区第8層出土石器(3)

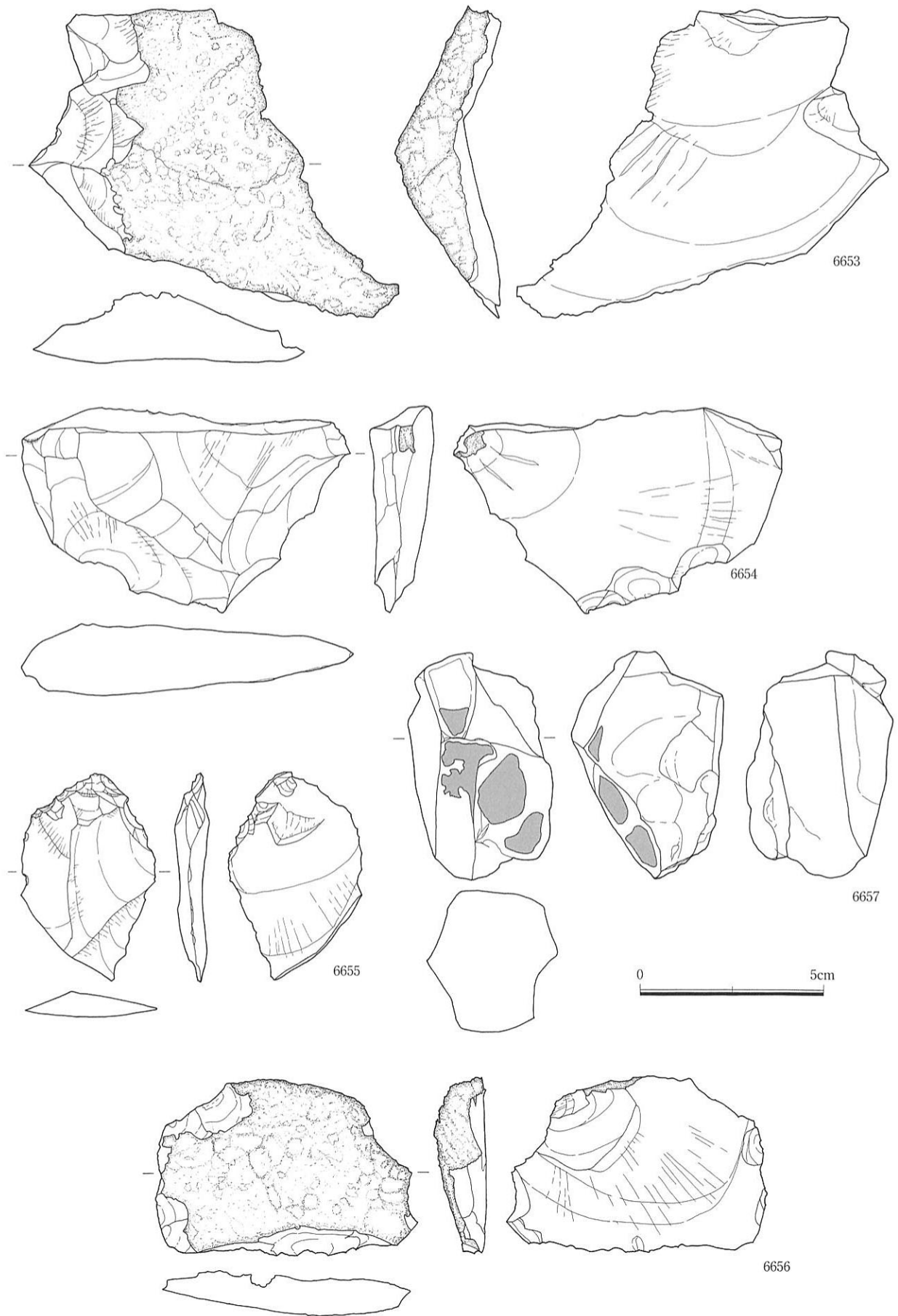


図372 6C区第8層出土石器(4)

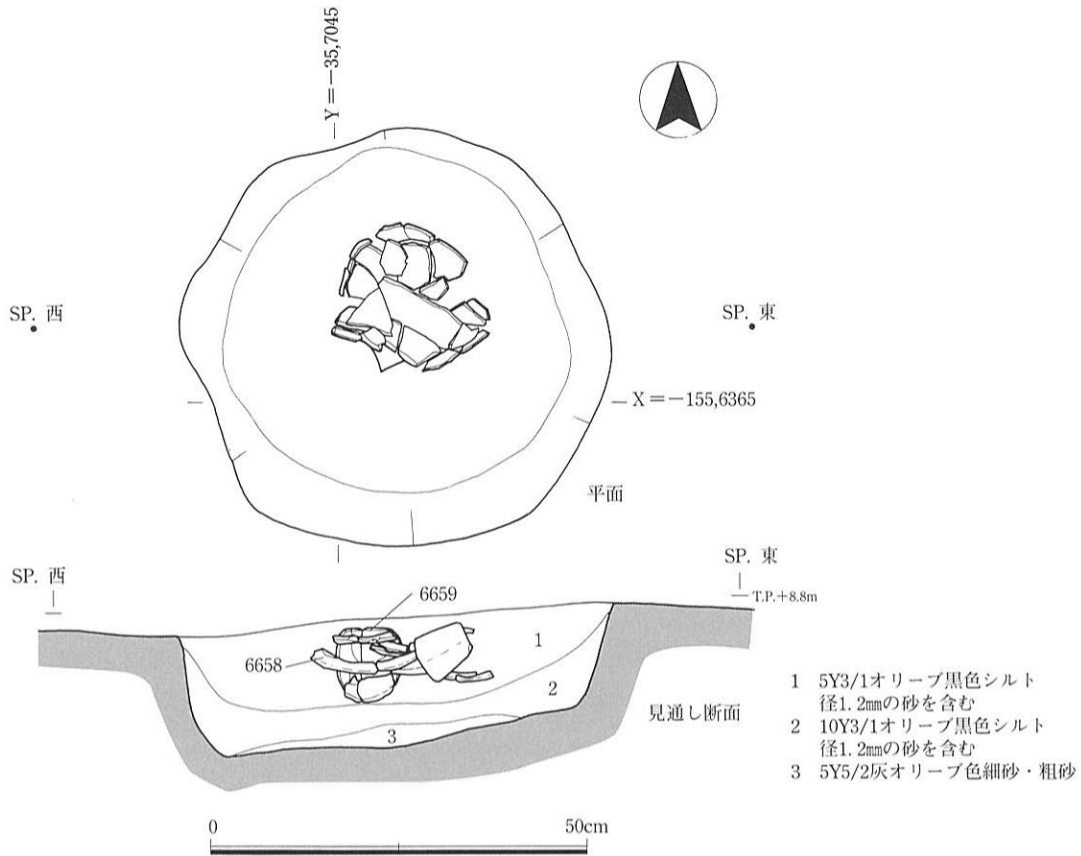


図373 6C区第8層中ピット67

背面には自然面が残っており、刃部にはなっていない。6650は220.9g、6651は20.6g、6652は84.6g、6653は111.2g、6654は82.3g、6655は14.6g、6656は51.7gをそれぞれ量る。

6657は用途不明石製品。図中アミかけ部分は二次焼成を受けている。92.7g。砂質泥岩製。

また、第8層掘削中に調査区中央やや北西寄りでピット67(図373)を検出した。平面不整形円形で、直径51～58cm、検出した深さ17cm。埋土は3層に分かれる。図374-6658のV様式系の甕と6659の鉢が出土しているので、庄内式～布留式期に掘り込まれたと考えられる。

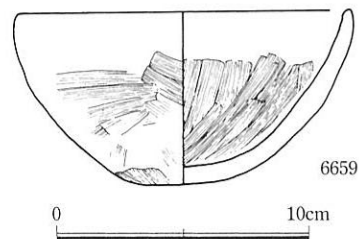
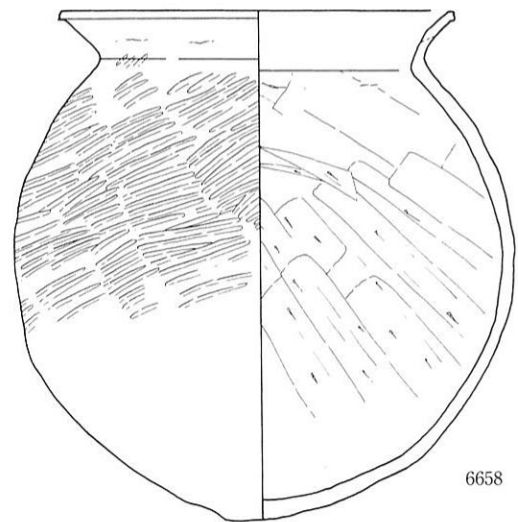


図374 6C区第8層中ピット67出土土器

第9面(図375)——————弥生時代前～中期の面 概要

第8層の洪水砂を除去した黒色土壌化層の上面。

面の高さはT.P.+8.6～8.8mで、わずかながら南側が高い傾向にある。

第9面の景観の特徴は、川と複数の溝である。

遺構として、川1条、大畦畔2条、溝10条、落込み1か所、土坑2基、ピット4個、杭群などを検出した。さらに、調査区東部は水田域の可能性もある。

第9面では、多くの遺構から遺物が出土している。

なお、図375中のサンプル3-10・15・17の表示は、第4章に掲載する花粉およびプラント・オパール分析試料（第9層）の採取位置を示す。

遺構と遺物

川68は調査区西部の大部分を占める。検出幅約20~30m。西岸は南南東から北北西にほぼ直線状に伸びる。南部で溝71と、北部では溝状のくぼみ2か所と切り合っているが、先後関係は明確ではない。西岸の高さは南部でT.P.+8.5m、北部でT.P.+8.1mである。一方、東岸は基本的に南東から北西に伸びるが、かなりの出入りがある。東岸の高さはT.P.+8.7~8.8m。

川底中央部に川と主軸を同じくする高まりが存在する。その他の部分では調査深度の制約がありT.P.+7.5mまでの掘り下げに止まったが、一部に設定した下層確認のトレンチにおいて川底をT.P.+6.7mで検出したので、川の深さは約2mとなる。

川68の東肩が最も東へ張り出した部分の法面で、川の流に直交する杭群（図376）を検出した。杭の頂部はことごとく亡失していたが、川68東肩法面への打設深度と配列から川68に伴うものと判断できる。川68の溝75との時期的関係は厳密には不明だが、それらが同時に存在していたとすれば、杭群は川68の水を溝75に導くための堰であったと考えられる。ただし、溝75はそれと切り合う全ての溝群に時期的に先行するので、川68が溝75と同時存在であれば川68も第9面の多くの溝群よりも古くから流れていたことになり、川68が多くの溝群と同時併存であればその段階では溝75はすでに機能していなかったことになる。杭群を構成する木杭のうち図376に6660~6664の番号を付けたものを図377に掲げる。樹種は6660・6661はケヤキ、6662はアカガシ亜属、6663はトチノキ、6664はコナラ亜属。

川68は調査時には第8層して掘り下げてしまったので、第8層と第9面川68の出土遺物は分離できなかった。以下、第9面の川68の流路に該当するグリッド（図367の濃いアミかけ部分）出土遺物を報告する。それらは、土師器2片、弥生土器255片、縄文土器1片、時期不明の土器1片、石器類11点、木

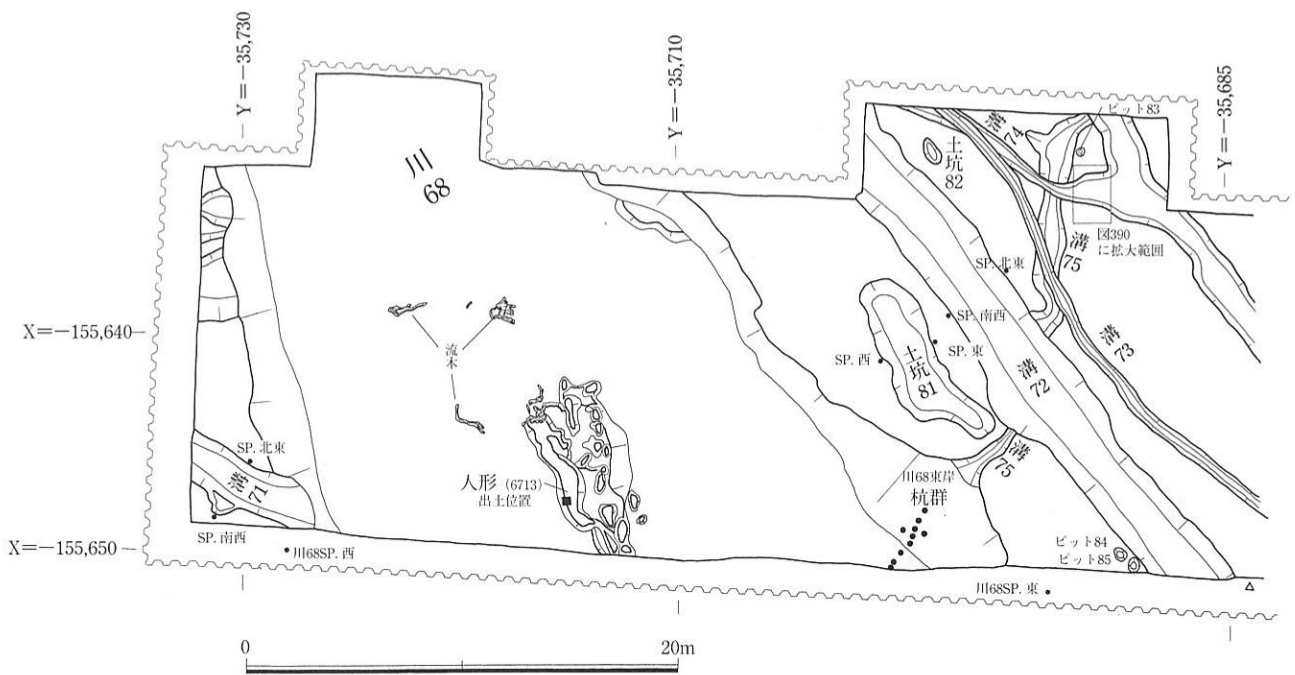


図375

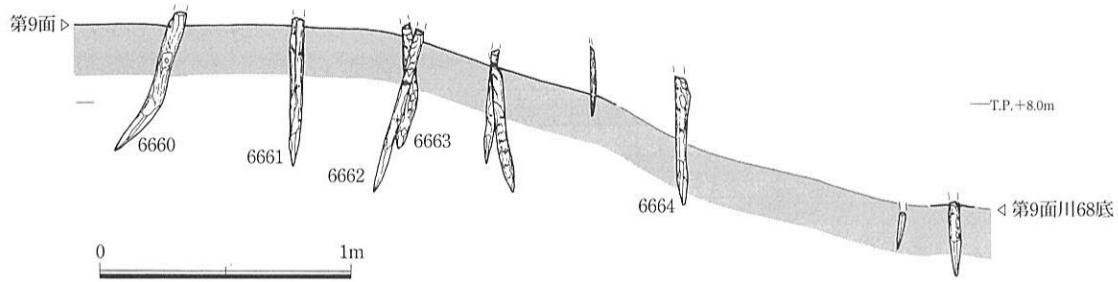


図376 6 C区第9面川68東岸杭群

製品4点、トチノキ種皮片、計275点である。

図379-6665~図380-6696は弥生土器である。

6665~6670は広口壺。6665の頸上部のクシ描き直線文の原体は9条以上あり、口縁端面にもクシ描き文がみられる。胎土は生駒西麓産。6666は口縁部が分厚い。頸部には乱雑なクシ描き文が施される。6667・6668は広口長頸壺の頸部。6667は口縁に向かって大きく広がる形状で、頸部クシ描き直線文間には幅広のヘラ描き沈線が1条施される。胎土は生駒西麓産。6668は筒状に伸びる頸部。6669・6670は無文の広口壺。6669は厚手で、さらに口縁部が外側に肥厚する。頸部外面はタテ方向に、内面は横方向にハケが施される。

6671は太頸の広口壺。1/12周からの推定で、口径43~47cmと大きい。口縁端面はくぼみ気味の面をなし、頸部には口縁側に高い段が付く。図379の他の土器よりも古く、I様式前半に位置づけられる。

6672~図380-6681は甕。ただし、6674は1/8周から図上復原したために傾きにやや不安が残り、もう少し外傾した鉢の可能性もある。6675は後述する木製人形を包含する川68埋土の8層から出土した。6677は内外面とも横方向にハケ調整される。6679の口縁端面には沈線状のくぼみがある。6680は口縁下端に刻みがあり、口縁部内面に横方向の、体部外面には縦方向のハケ調整を施す、大和型の甕である。6681は厚手の甕口縁。以上10個体の甕のうち、6673・6674・6678の胎土は生駒西麓産である。

6682はクシ描き波状文の施された口縁部片。中期前半の鉢であろう。

6683~6696は弥生土器の底部。6683~6687はミガキ調整が卓越する。平底から外反して体部に向かう

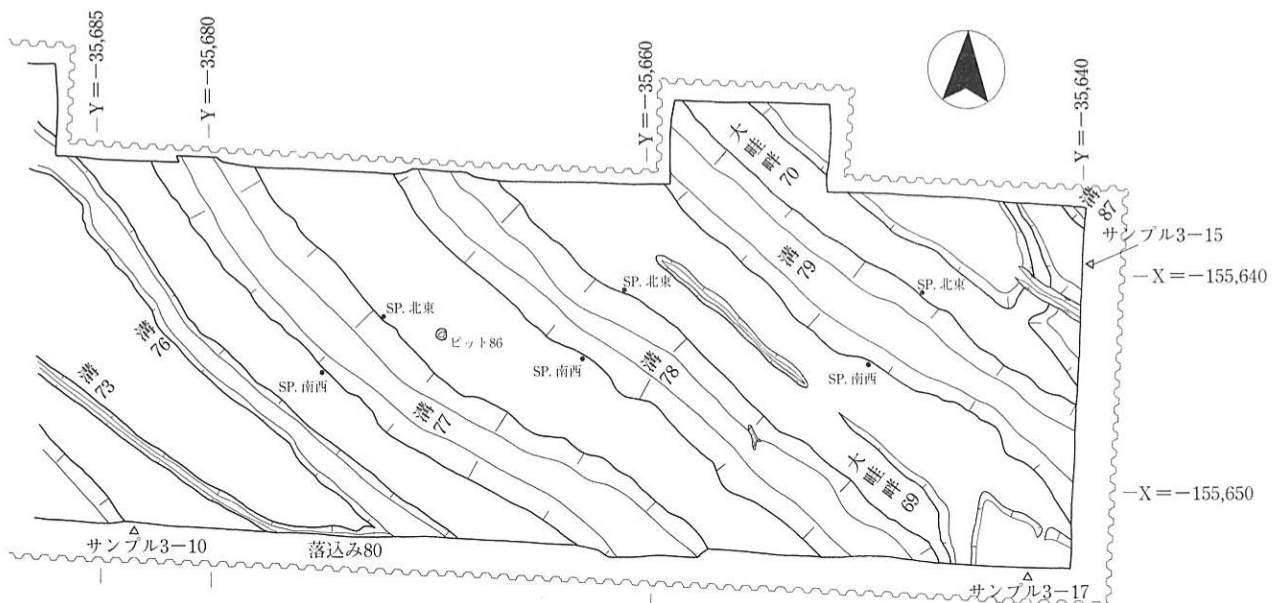
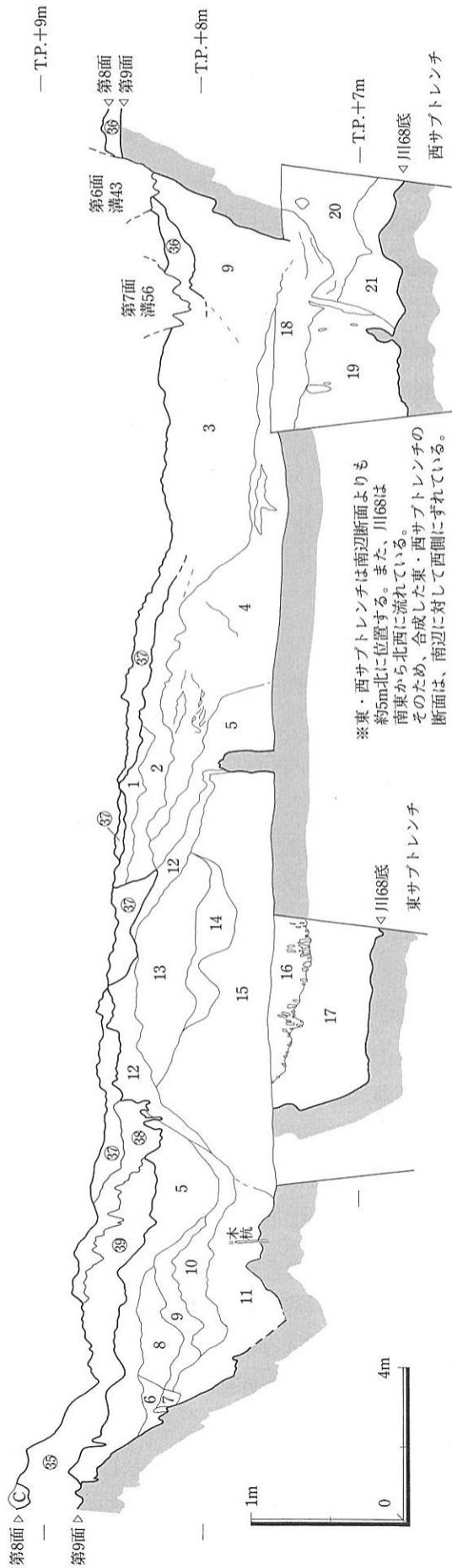




図377 6C区第9面川68東岸杭群の杭



第6面検出遺構

C層 溝48・5Y3/1 オリーブ黒色シルト。底部には粗砂のブロック状がみられる

第8層(⑤～⑧)層は調査区南辺断面(図338)と同じ

- ⑤層 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト～細砂で、シルトブロックが含まれる
- ⑥層 7.5Y4/1 灰色シルトを基本とするが、間層として植物遺体を含むシルト層が入る
- ⑦層 5Y4/1 灰色シルト～粘土。下部に粗砂ブロックを含むが、全体的に締まりの強いシルト～粘土
- ⑧層 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色シルト～粗砂。砂を多く含む
- ⑨層 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色シルト～粗砂。粗砂の部分には径2～4cmのシルトブロックが混じる

第9面川68埋土

- 1 10Y4/2 オリーブ灰色シルト。粗砂を大量に含む
- 2 7.5Y3/2 オリーブ黒色シルト。植物遺体と互層をなす
- 3 10Y4/1 灰色シルト～粘土。植物遺体を大量に含む
- 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂、植物遺体を大量に含む2.5Y3/2 オリーブ黒色シルト、灰色細砂が互層をなす。
- 5 2.5GY5/1 オリーブ灰色細砂と7.5Y4/1 灰色粗砂の互層。細砂に植物遺体を含む

※東・西サブトレレンチは南辺断面よりも約5m北に位置する。また、川68は南東から北西に流れている。そのため、合成した東・西サブトレレンチの断面は、南辺に対して西側にずれている。

- 6 10GY4/1 暗オリーブ灰色細砂～シルトが西下がりのラミナとなる
- 7 2.5Y5/3 黄褐色粗砂～礫
- 8 5Y3/1 オリーブ黒色シルト。細砂と植物痛いを含む
- 9 5Y4/2 暗オリーブ灰色粗砂と5Y3/2 オリーブ黒色細砂～粗砂の互層。植物遺体を含む
- 10 10Y3/1 オリーブ黒色シルト。礫が混じる
- 11 7.5Y2/1 黒色シルト。下部にシルトのブロックが混じる
- 12 5Y5/2 暗オリーブ灰色粗砂と10Y4/1 灰色細砂～シルトが水平のラミナをなす
- 13 2.5Y5/3 黄褐色粗砂。礫と径約10cmのシルトブロックを含む
- 14 2.5Y4/2 暗灰色粗砂と2.5Y3/1 細砂～シルトの互層
- 15 11に似るが、粘土ブロックと粗砂が挟持されている
- 16 2.5GY7/1 明オリーブ灰色細砂～粗砂が水平方向のラミナをなす。拳大のシルトブロックが入る
- 17 16と同様に2.5GY7/1 明オリーブ灰色細砂～粗砂がトラフ型の斜交層理をなす
- 18 10Y4/1 灰色細砂～シルト。粗砂を少量に含む
- 19 7.5Y6/1 灰色粗砂。径2～5cmのシルトブロックを含む
- 20 5Y7/1 灰色細砂～粗砂。下部に植物遺体が溜まる
- 21 5GY6/1 緑灰色細砂～粗砂がラミナをなす

図378 6C区第9面川68断面

ので壺の底部であろう。6688～6696は甕または壺の底部。平底とあげ底とがある。

6697は突帯文土器。6698は底部。両者ともに外面には粗いケズリが施され、胎土は生駒西麓産で、同一個体の可能性もある。

さらに、第13層出土遺物の項でものべるが、川68の底を確認することを目的として調査掘削限界深度のT.P.+7.5mよりも下層に至るサブトレンチを2ヵ所設定した(図401参照)。その結果、川68の底をT.P.+6.7～6.9mで確認し、川68相当層からは弥生土器30片、突帯文土器1片、サヌカイト剥片3片、他にトチノキ種皮も出土した。弥生土器には、前～中期1片、中期の壺口縁3片、鉢1片、底部1点などが含まれる。

図380-6699～6703は西サブトレンチの川68流路部と認められる層位から出土した土器である。6699はI様式の壺の口縁部。6700は中期前半と考えられる甕または鉢。6701の外面は簾状と扇形のクシ描き文で飾られる。III様式の鉢または高杯杯部であろう。6702は弥生土器の底部。6703は刻目突帯文の深鉢の口縁部。口縁端部外面に突帯があるので長原式と考えられる。

川68流路部出土の石器類は全てサヌカイトを素材とし、石核1点、剥片9片、翼状剥片1点、計11点である。

図381-6704は石核。背面のほとんどに自然面が残る。69.2g。

6705～6711は剥片で、一部に自然面が残る剥片が多くみられる。6705は5.9g、6706は47.3g、6707は42.2g、6708は21.0g、6709は20.7g、6710は3.1g、6711は7.0g。6710・6711は西サブトレンチの川68相当層から出土した。

6712は旧石器時代の翼状剥片である。技法および風化の度合いから判断した。16.7g。

川68流路部出土の木器には、人形、鋤、鋳などがある。

図382-6713は人形^{ひとがた}である。ヒノキの柁目材を用い、頭側、首、腰、脚間の各部に抉りを入れ、人の形に成形している。木目は縦方向に約90数えられる。頭部の一部と足先を欠く。右側に図示した方の腹部にみられる径10数mmのくぼみも、他の部分に比べて木目が新しい。股間に抉り状の部分があるが、意図的に成したものかは判断しがたい。墨書は認められない。現状で高さ30.8cm、最大幅7.1cm、厚さ0.6cmを測る。形態的には7世紀後半以降に多い人形に類似し、弥生時代には類例が少ない。そこで、出土状況を検証しておく。

平面位置は川68中央部(図375参照)の高まり部分の西端。高さは、頂部がT.P.+7.73mの高まり箇所の上方31cm(T.P.+8.04m)。砂層中から、頭部を北にした水平状態で出土した。先述のように、川68の埋土は細分せず一括して掘り下げた。遅ればせながら川68掘削後、人形出土地点から約3m南の断面(図378)観察用アゼで検討したところ、人形の出土層位は土質とレベルから川68埋土の4層または5層と判断できた。そこで、調査区南辺のアゼだけではあるが、1+2+3・4・5の各層ごとに遺物を取り上げた。その結果、1+2+3層からは前期の壺1片を含む弥生土器4片、4層からは木製平鋤(図382-6715)1点、5層からは中期の甕(図379-6675)を含む弥生土器3片が出土した。したがって、人形の埋没時期は弥生時代中期、さらに川68出土遺物の組成からみてII様式と認定してよいだろう。

6714は板材。孔が1ヵ所みられるが用途不明である。樹種はアカガシ亜属。

6715は平鋤。川68の4層から出土した。折れてはいるが柄との一木造りである。鋤部は角肩で復原身幅16.5cm。柄の付く部分が厚く、側縁に向かって薄くなる。鋤先部を欠く。樹種はアカガシ亜属。

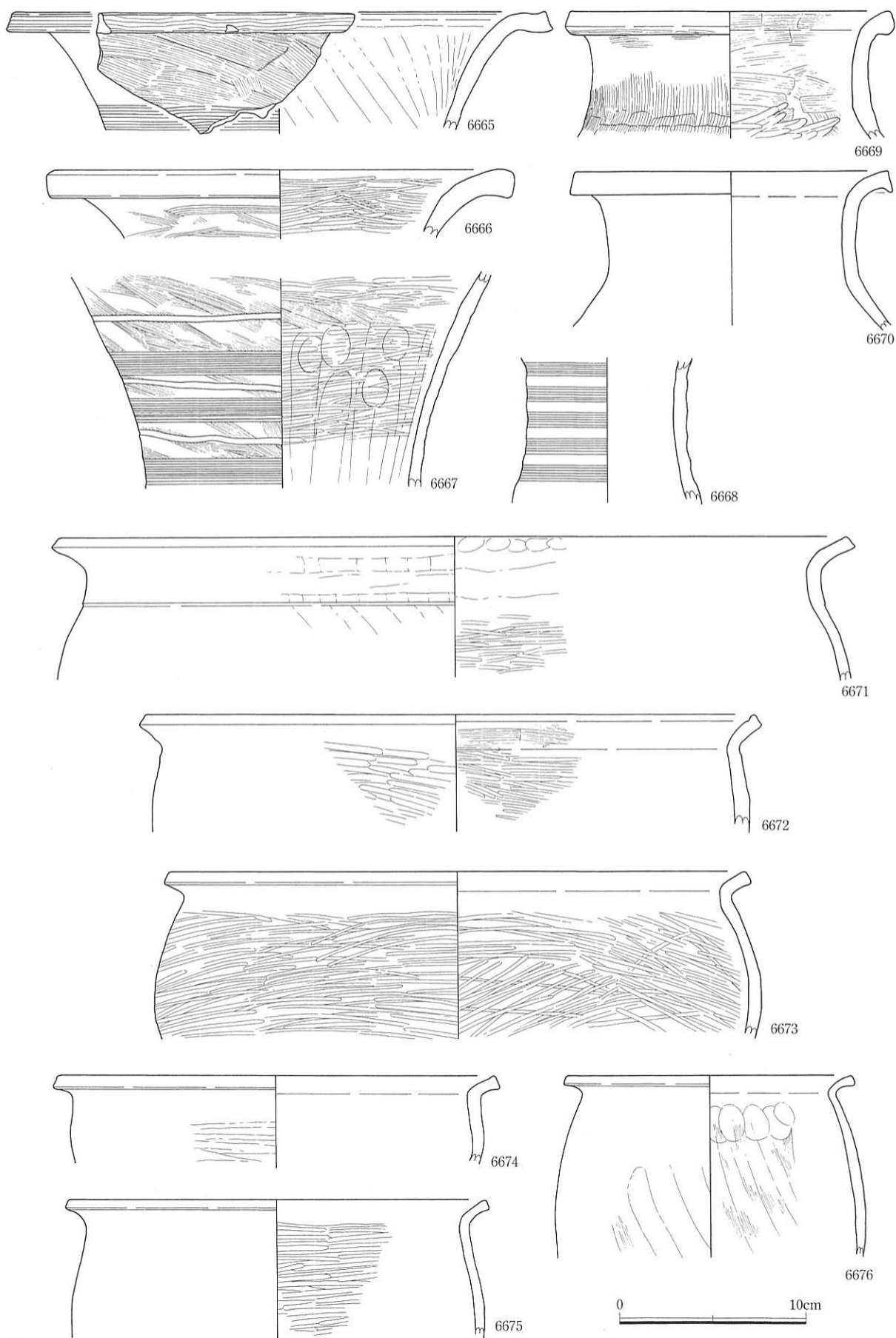


図379 6 C区第9面川68出土土器(1)

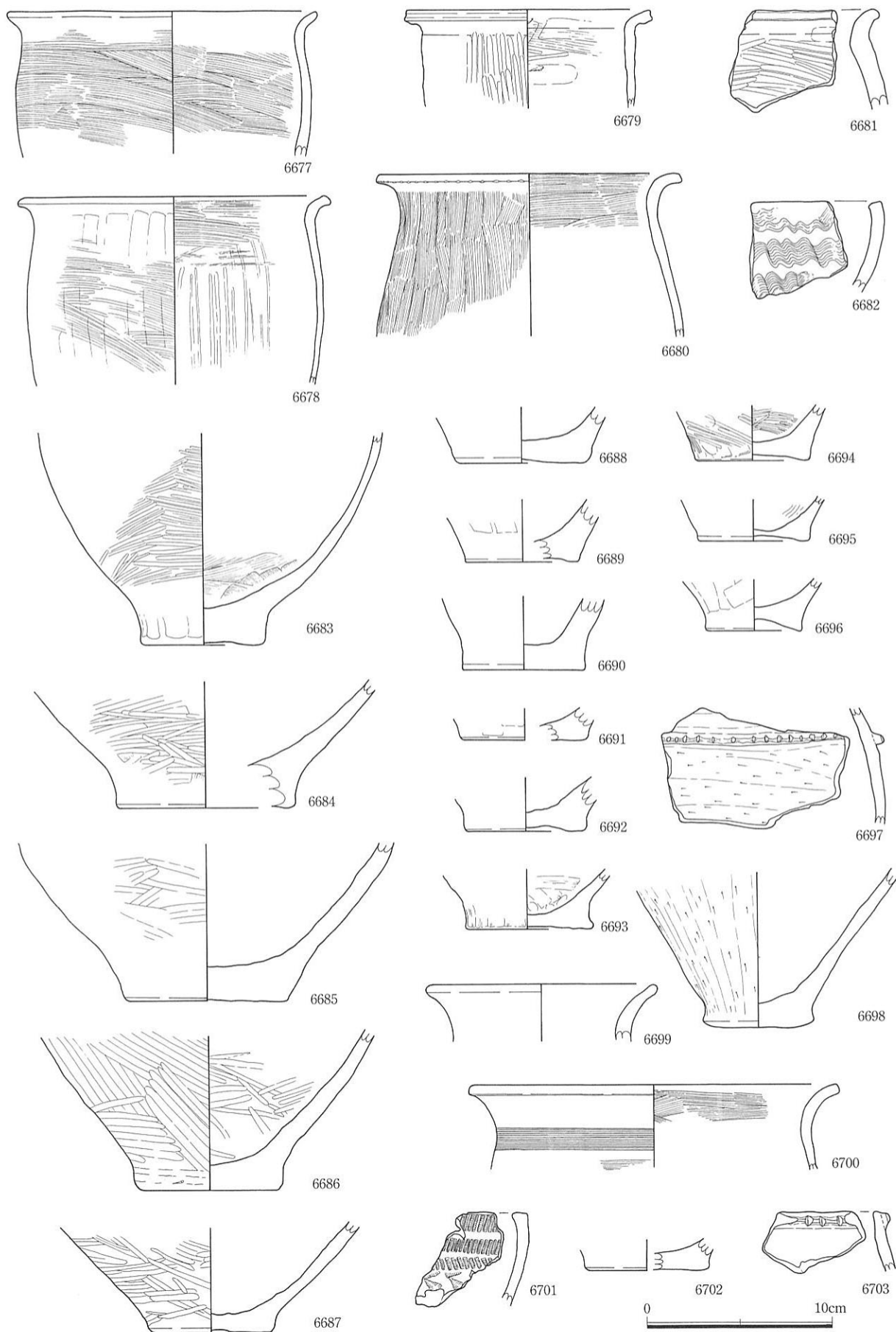


図380 6C区第9面川68出土土器(2)

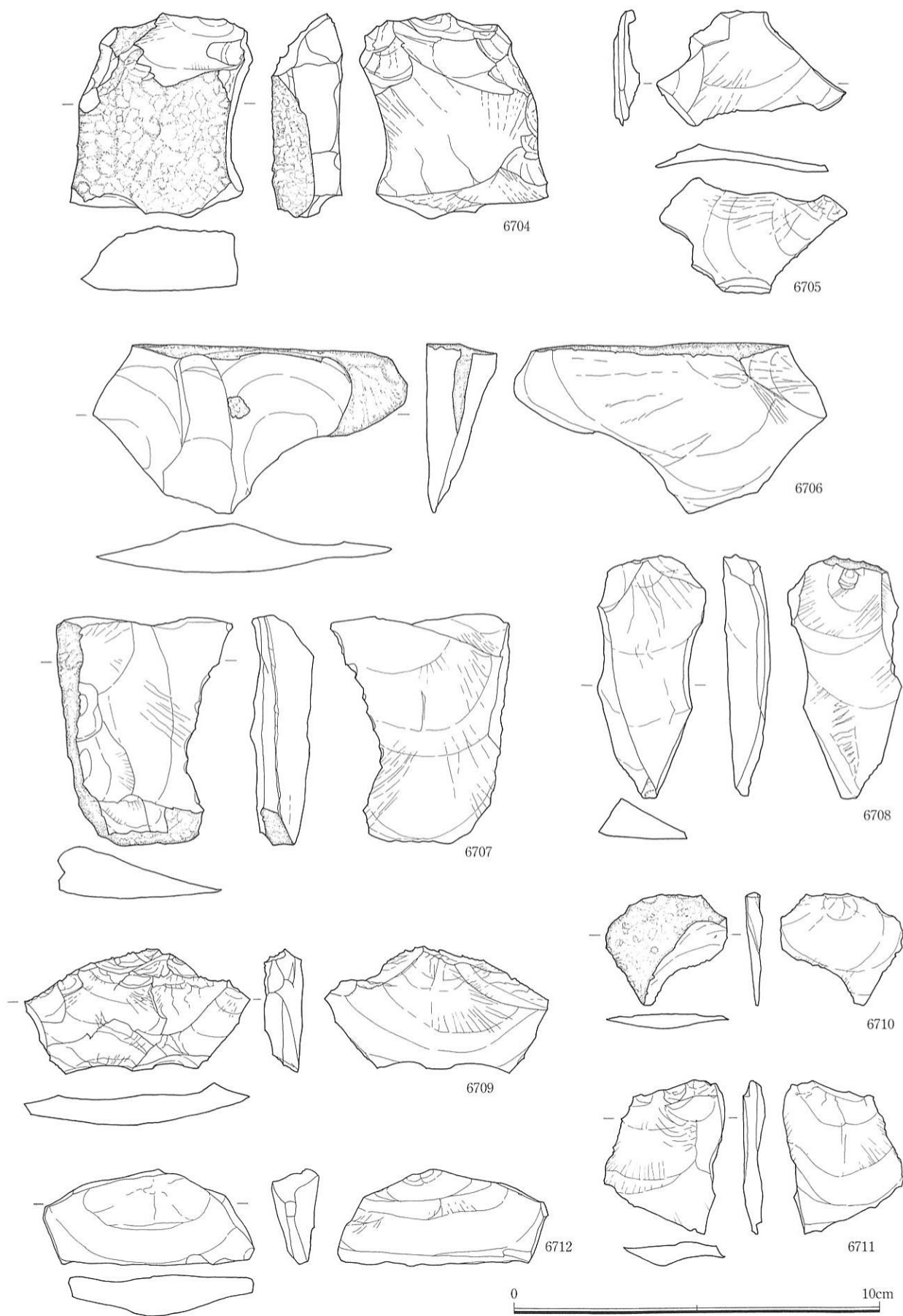


图381 6 C区第9面川68出土石器

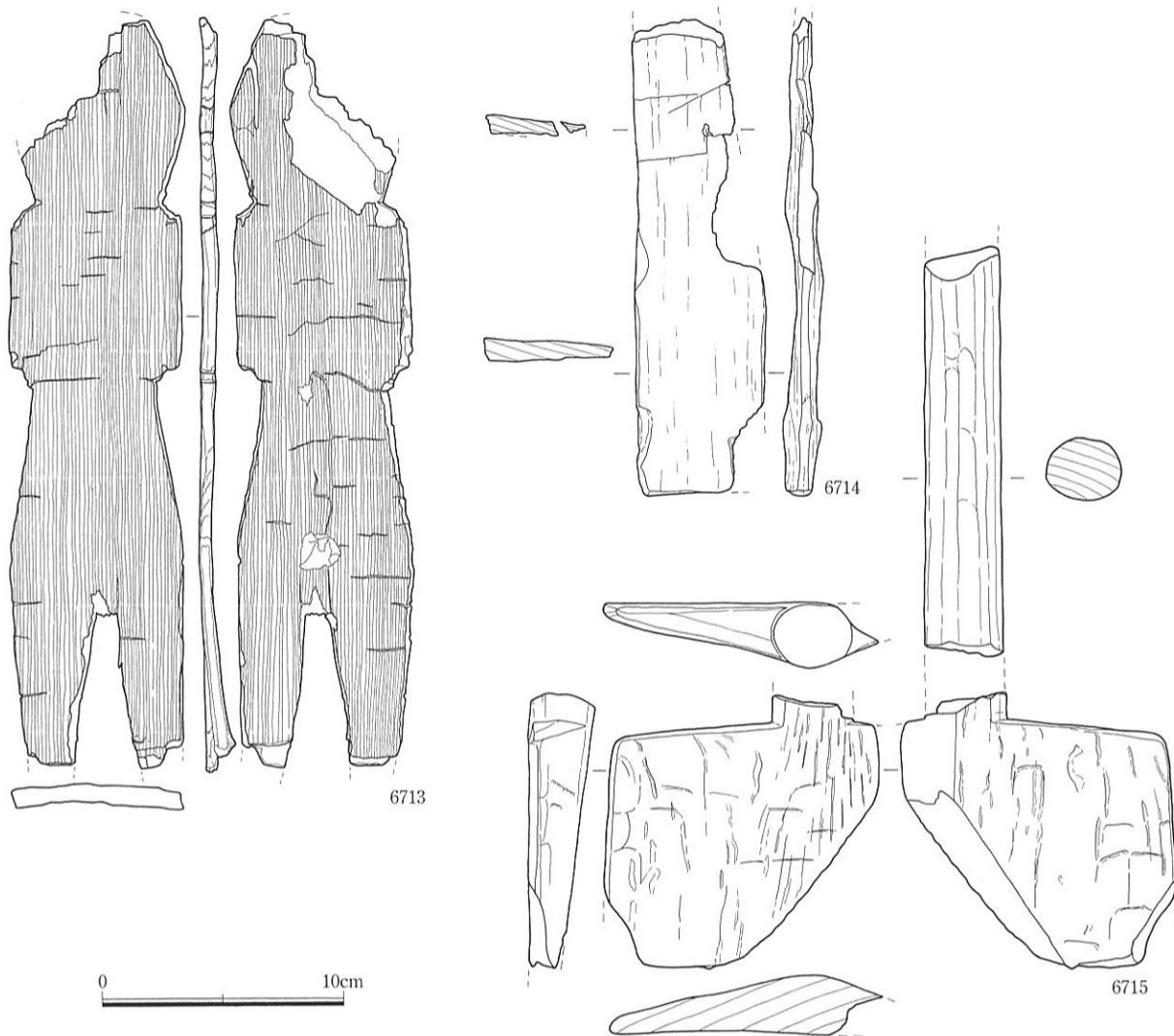


図382 6C区第9面川68出土木器(1)

図383-6716~6718の柄と6719の平鍬は、同一グリッド（I 0 8 J V）から出土した。6716~6718は直接接合しないが、径は約3.6cmと共通するので本来は一本の柄であったと考えられる。6718の図示した左端は細く加工されており、6719の鍬の径3.0cmの円い柄孔に約60°の着柄角度で柄結合する。6719の平鍬は刃部を欠くが、幅の狭い上端から刃部に向かって広がる形態で、後面が隆起している。樹種はアカガシ亜属。

以上、川68流路部分の出土土器には縄文時代晩期から弥生時代中期中頃までの時期幅があるが、主体はII様式の弥生土器が占める。木製人形については検討の余地があるものの、その他の石器と木器も弥生時代中期初頭として矛盾はない。

流路部分の他、川68の肩部に該当するグリッド（図367の太柁部分）からは、土師器2片、弥生土器87片、縄文土器3片、石器類9点、木の棒1点、計102点出土している。

図384-6720~6723は壺である。6720は広口壺の口縁部。口縁端部下端に刻みがある。6721は無文の広口壺。口縁は水平にまで外反し、端部は肥厚しない。6722・6723は長頸の広口壺。頸部にはクシ描き直線文を密に施す。6723の胎土は生駒西麓産。

6724は甕の蓋。煤が全体に付着しており、特に内面のアミかけ部分では厚い。

6725~6727は甕。6725は復原口径36.6cmを測る大形の甕。6726は口縁部に刻みがなく、外面を縦方向

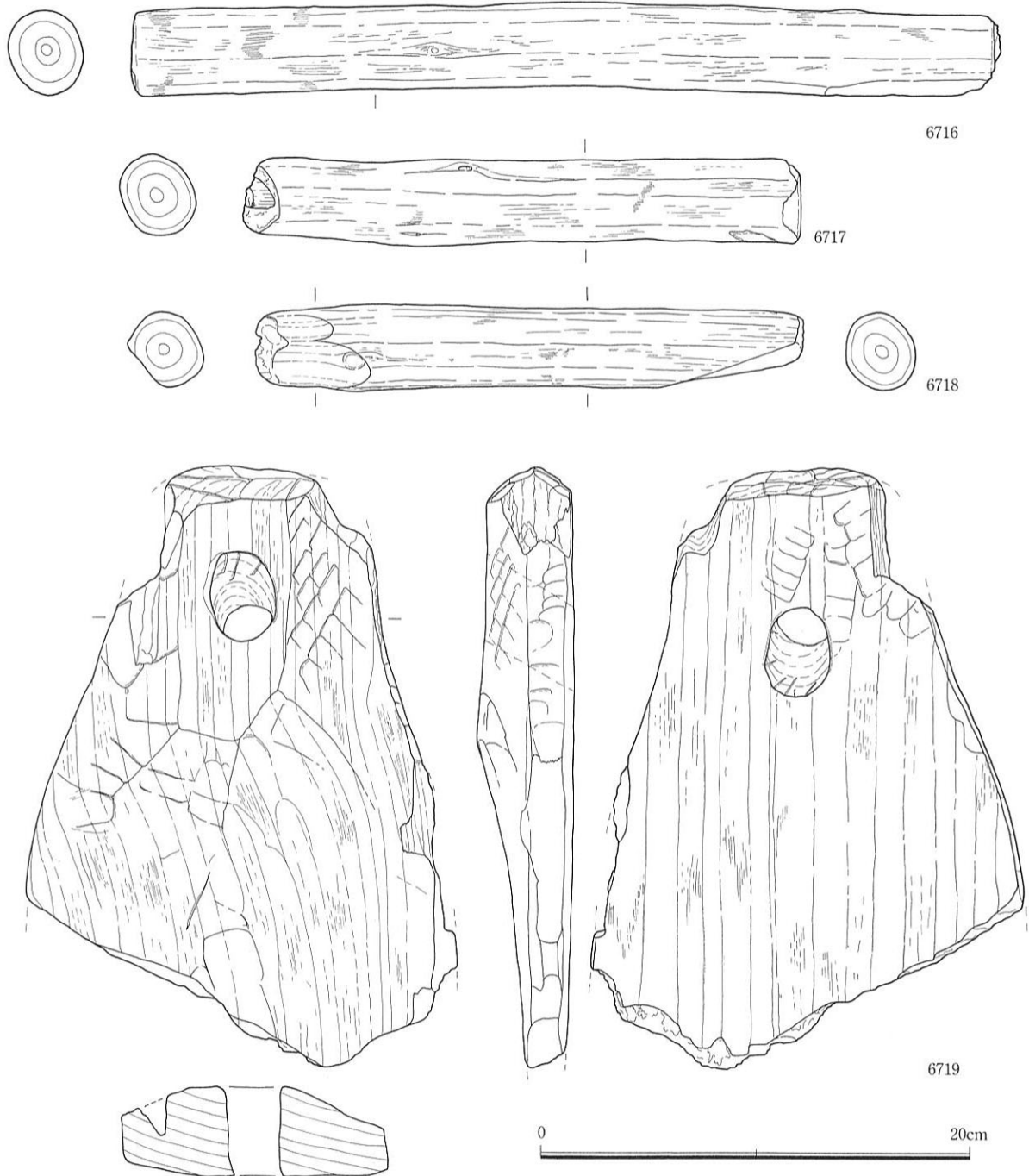


図383 6 C区第9面川68出土木器(2)

に、内面を横方向にヘラミガキするいわゆる河内型の甕。底部中央と体下部に焼成前穿孔がみられる。6727は復原口径11.8cmの小形の甕である。

6728～6730は壺、6731～6733は甕と考えられる底部。6733の底部中央には、外面からの焼成前穿孔があるが、内面にもこの孔の傍らに穿孔途中のくぼみが残る。

6734は縄文土器。横方向の貝殻条痕の後、縦方向にヘラによる沈線が引かれている。型式は特定できないが、縄文時代後期末頃の深鉢であろうか。

6735は棒状の木製品。木針やヤスなどに類似するが、いずれともいいがたい。樹種はスギ。

川68肩部出土の石器類は全てサヌカイト素材で、使用痕のある剥片3点、剥片4片、チップ1点、そ

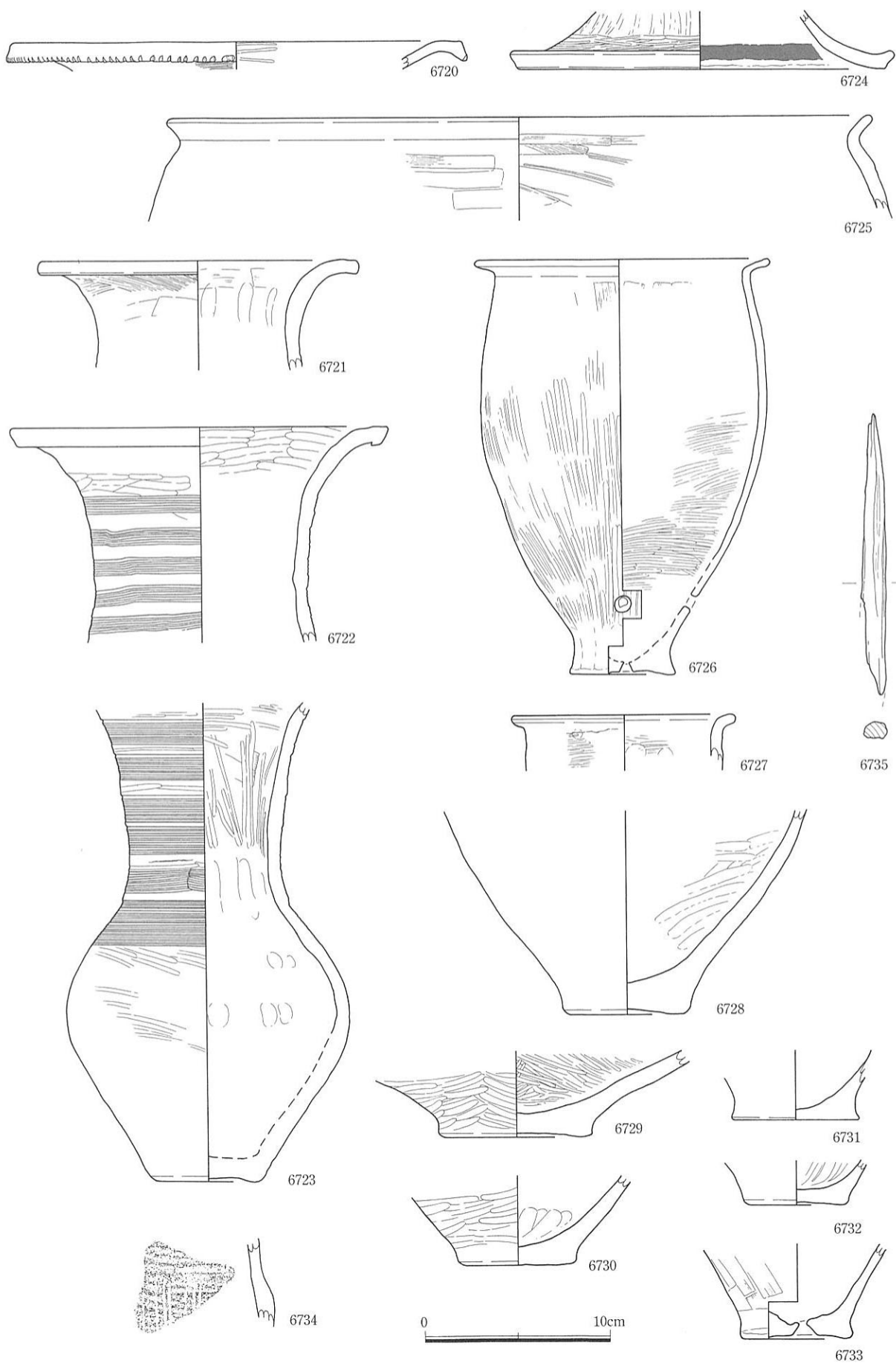


図384 6C区第9面川68肩部出土土器

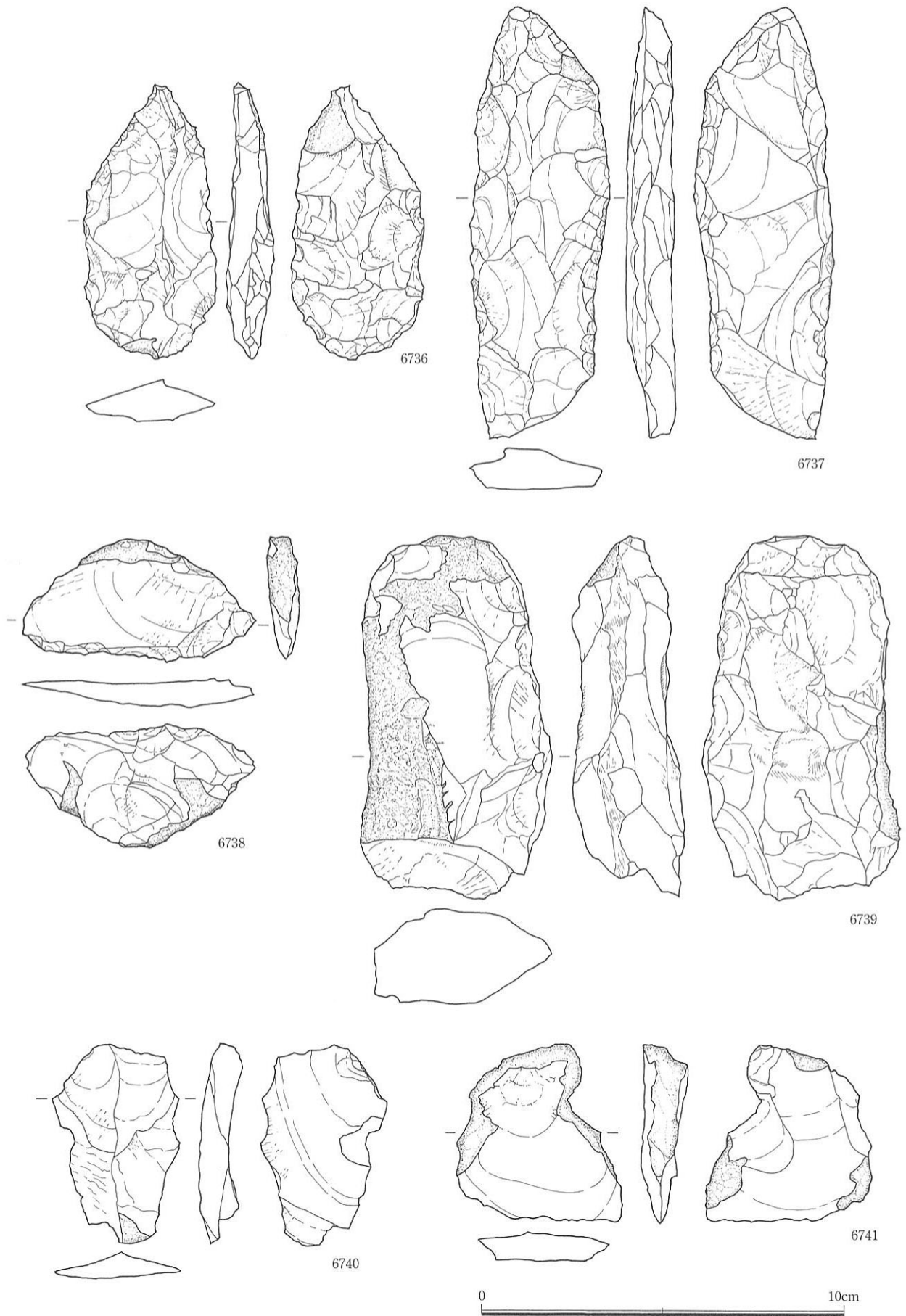


图385 6 C区第9面川68肩部出土石器

の他1点、計9点である。うち6点を図示した。

図385-6738はスクレイパーである。形態および風化の度合いからみて縄文時代の所産と考えられる。18.7g。6736・6737・6739は尖頭器未成品である。6736は尖端部の細部加工が施されている。30.1g。6737は一側縁はほぼ全辺付刃されているが、加工中に基部の部分が折れ、そのために廃棄されたと考える。66.6g。6739は背面の一部に二次調整が施され、腹面も全体が平らになるような剝離や、中央部分に剝離を試みた敲打痕がある。192.3g。

6740・6741は剥片。6740は25.3g、6741は22.5g。

川68肩部からも以上のように多くの遺物が出土した。土器は、流路部分と同様にII様式の弥生土器を主体とする。

溝を10条調査した。

溝71は調査区西端、川68の西側に位置する。川68との先後関係は不明。東南東から西北西を指向する。幅1.9~2.1m、深さ約50cm。埋土(図386)は5層に分かれる。弥生土器9点が出土した。うち、図387-6742はI様式の甕の体部。ヘラ描き沈線が2条認められる。

比較的規模の大きい溝72・76・77・78・79は、調査区中央部以東に位置する。ほぼ平行して、いずれも南東から北西方向に伸びる。

溝72は幅2.6~4.3m、深さは北西端では100cm程度まで深くなるが、その他の部分では70~86cm。埋土は、最下層に黒っぽいシルトが溜まるが、中層以上は基本的に砂層である(図386)。前~中期の弥生土器46片とサヌカイト剥片1点が出土遺物した。図387-6743は広口壺の口縁部。口縁端面の幅一杯に沈線状の刻みが施される。6744は広口長頸壺の頸部。6745は甕。6746は底部。これらの土器から溝72はII様式に位置づけられる。図389-6768はサヌカイト製剥片。大型で背面に自然面が残る。強い力で敲打したらしくリングが発達している。134.6g。

溝76は幅1.2~1.9m、深さは6~19cm。埋土は5Y4/1灰色シルト~粗砂で、植物遺体が斑状に混じる。調査区北部で後述する溝74と分岐している。出土遺物は弥生土器6片。図387-6749は壺の肩部6750は甕の体部、6751は底部である。6749・6750および細片2点はI様式と判断できる。

溝77は幅3.3~4.9m、深さは63~84cm。埋土は、最下層には溝72と同様に黒っぽいシルトが溜まるが、中層以上はより細かいシルトが堆積する(図386)。出土遺物は、前期の壺片を含む弥生土器6片、サヌカイト製の尖頭器5点と石小刀5点。出土位置は厳密には特定できないが、10点のサヌカイト製打製石器は溝南部の東寄りにある程度まとまっていた。

図388-6758~6762は尖頭器。6758~6760は棘状突起をもつ尖頭器である。6758は尖端部は欠損、基部は折れている。全体に鋸歯刃に加工されている。20.2g。6759は小さい棘状突起をもつ。全体に鋸歯刃に加工されている。27.5g。6760は棘状突起の一部、尖端部は欠損、基部は折れ、刃部の一部を鋸歯刃に加工している。14.2g。6761は有茎型の尖頭器。やや粗い鋸歯刃である。27.5g。6762も欠損部分が多いが、有茎型になろう。刃部は鋭角に先端に向かい、鋸歯状に加工されている。8.7g。

6763~6767は石小刀。6763は切先、基部が欠損している。鉤手形である。10.1g。6764は先端部のみ残存。直線型。5.9g。6765は刃部中ほどが残存。10.2g。6767は先端と基部が欠損している。無突起の鉤手型で、内刃側のみ鋸歯状。8.3g。6767はやや内湾していることから鉤手型になるだろう。内刃、外刃ともに鋸歯状に加工されている。6.0g。

溝78は幅3.2~3.8m、深さ91~113cm。埋土はやはり最下層には黒っぽいシルトが溜まり、分層数

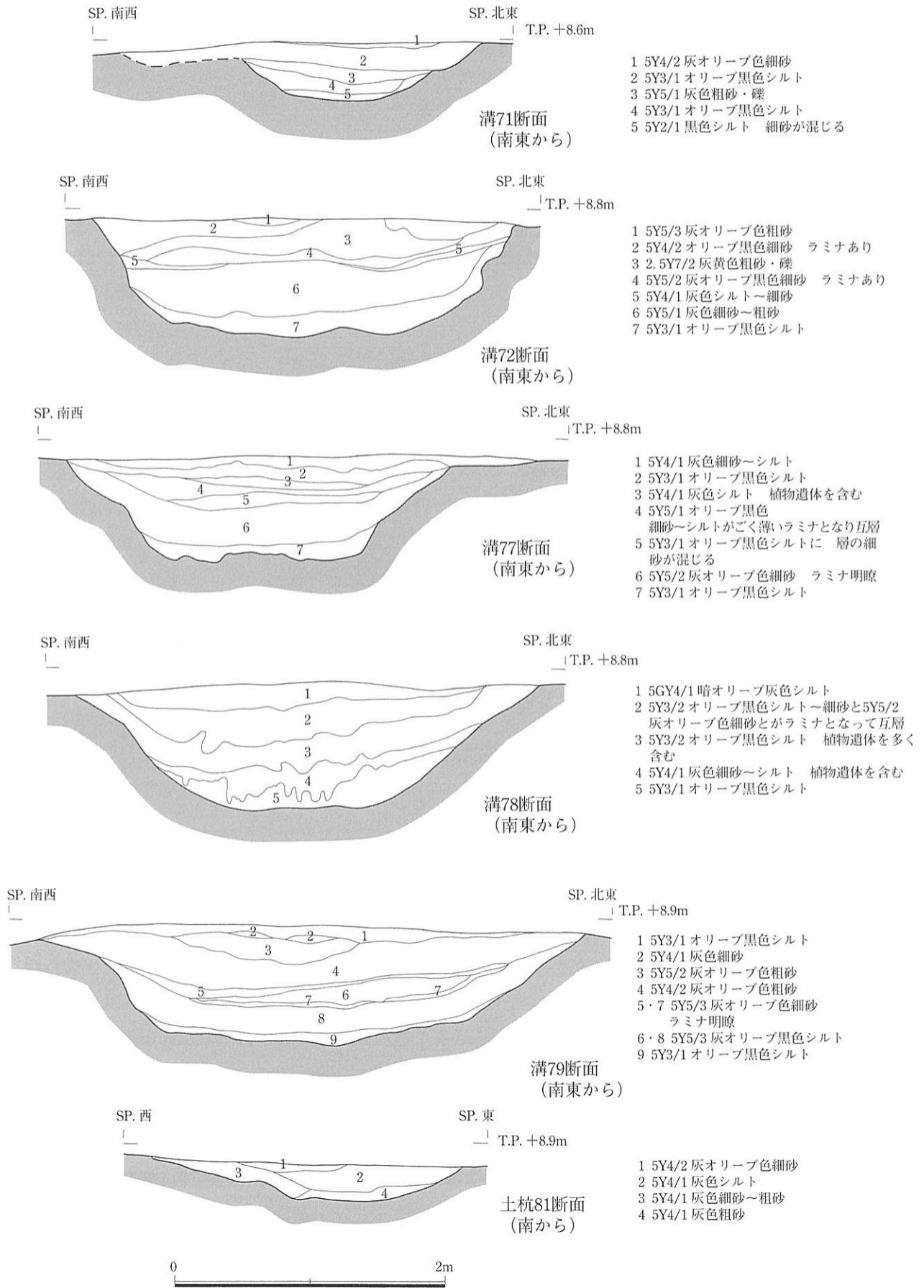


図386 6 C区第9面遺構断面

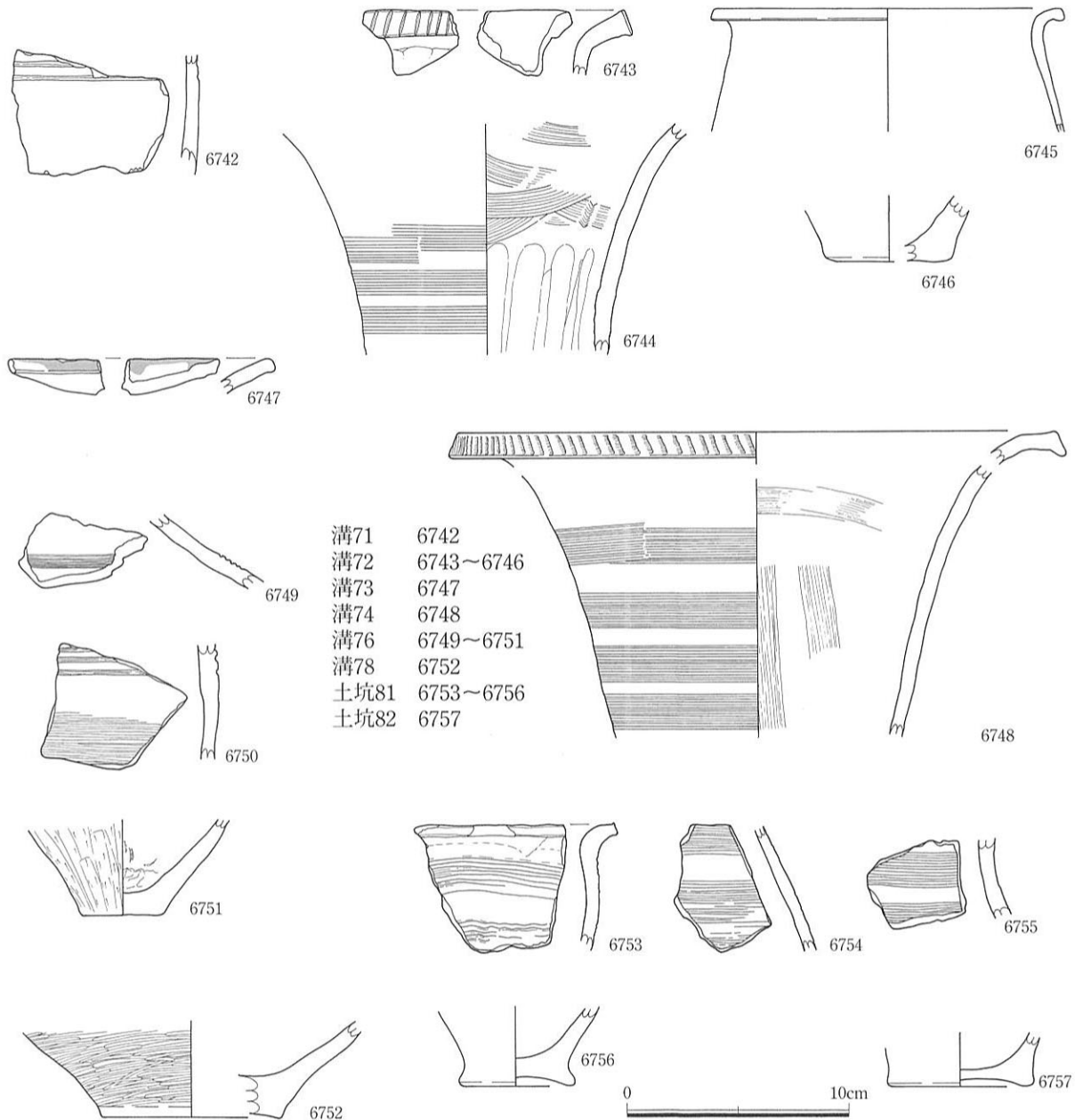


図387 6C区第9面遺構出土土器

は異なるものの埋没状況は溝77に類似する（図386）。出土遺物は少なく弥生土器2片のみで、うち図387-6752はI様式の壺底部である。

溝79の幅は2.7～4.4mだが、3.5m程度の部分が多くを占める。深さは71～100cm。埋土は8層に細分される（図386）が、層相から1～3層・4層・5～8層・9層の4つに大別できる。出土遺物に土器はなく、石器類2点のみ。図389-6769はサヌカイト剥片。4.8g。6770は砥石。紅簾石片岩製で、9.4gをはかる。

溝87を調査区北東隅で検出した。断面から推定すると溝72・76・77・78・79と同様に南東から北西に流れていた可能性が高い。幅は不明だが、深さは91cm以上ある。出土遺物はない。

以上の主軸方位をほぼ同じくする溝群以外にも、溝が3条ある。

溝73は調査区中央部に位置する。基本的に南東から北西に向かうが、ゆるやかに蛇行する。幅44～70cm、深さ7～25cm。埋土は2.5Y4/1黄灰色シルト～細砂で、径5mm程度の礫が含まれる。弥生土器が3

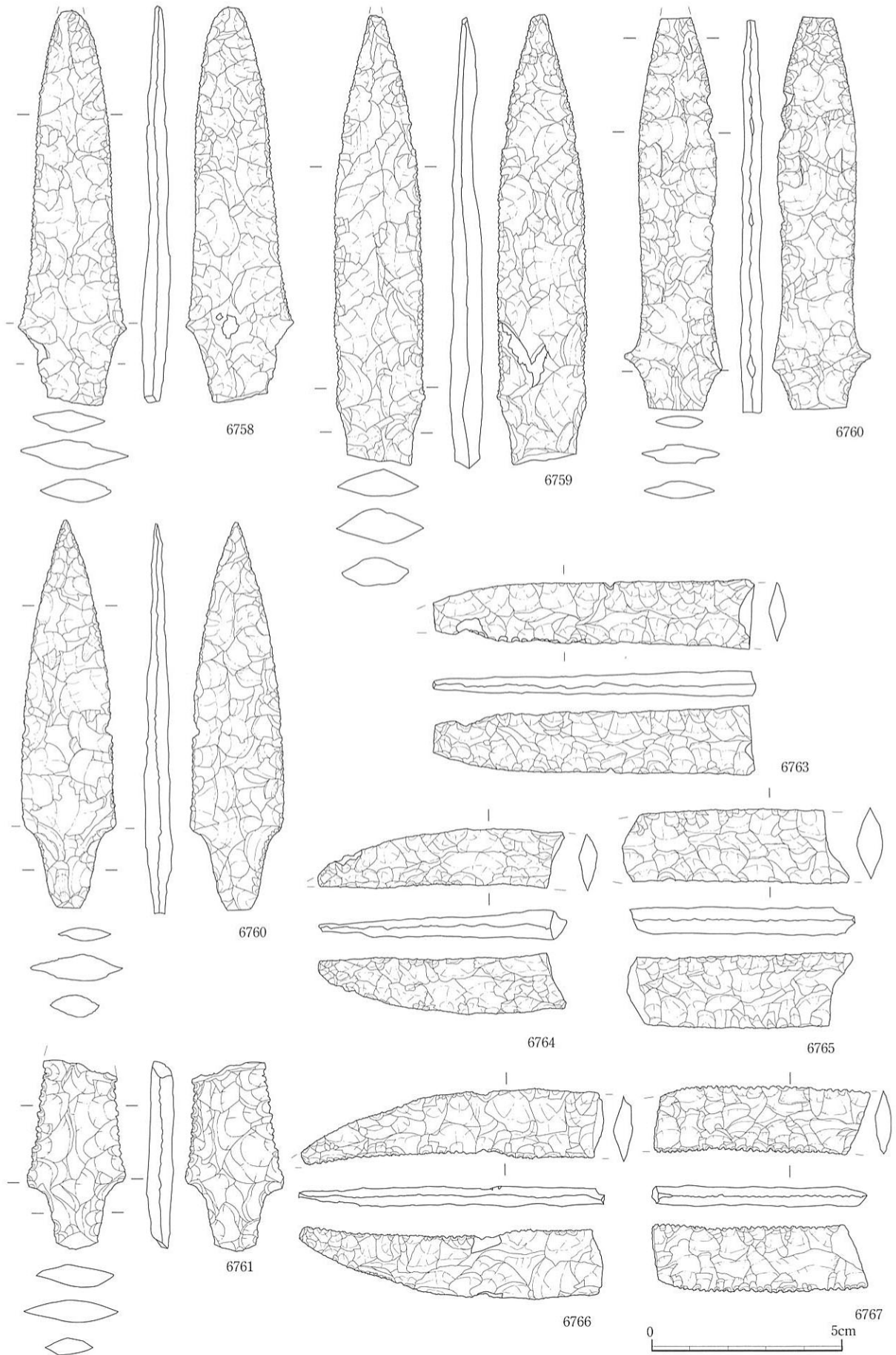


图388 6 C区第9面溝77出土石器

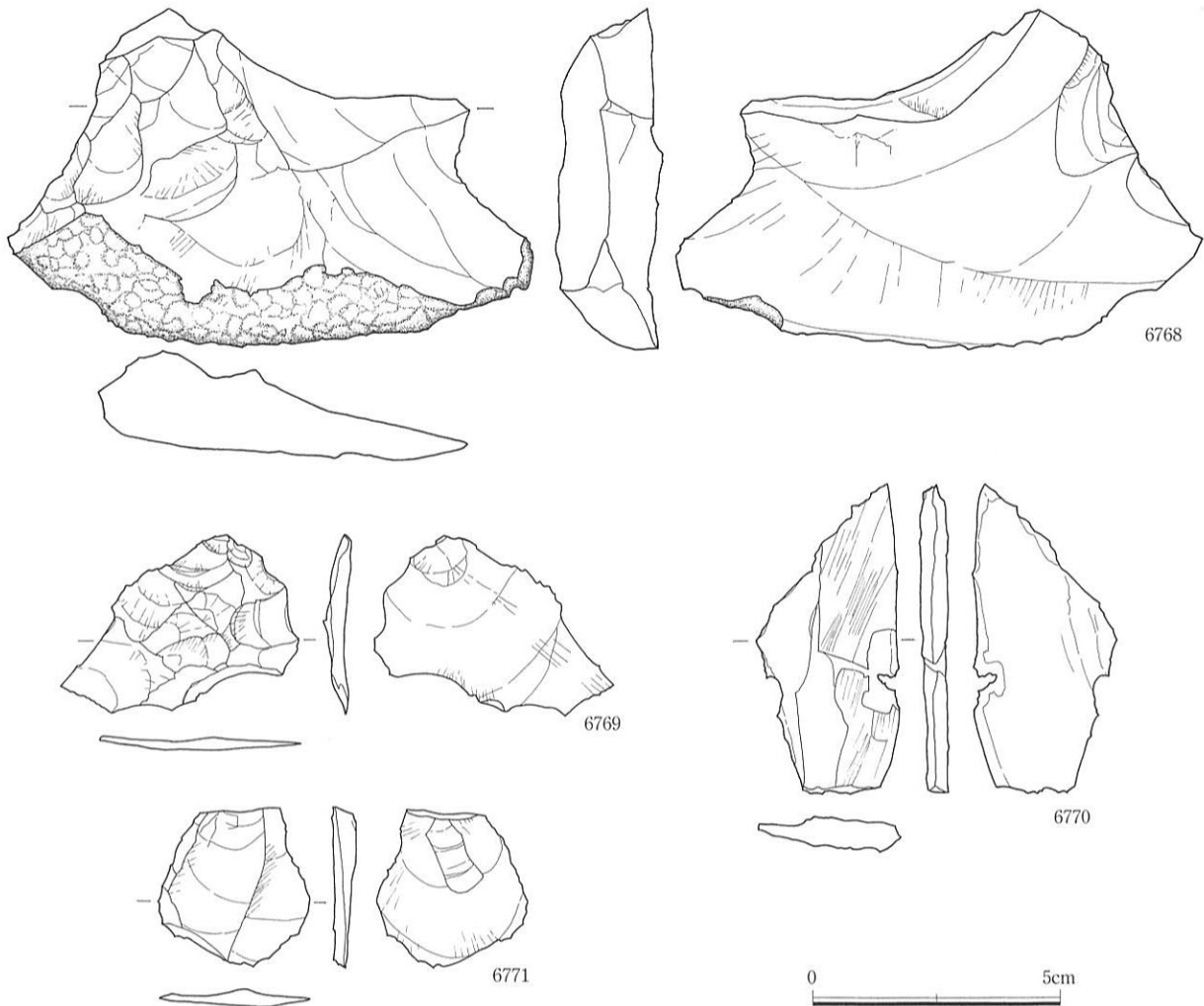


図389 6C区第9面遺構出土石器

片出土した。図387-6747はI様式の壺の口縁部で、アミかけ部に赤彩が施される。ただし、溝73は南辺断面では落込み80やI様式の土器が出土した溝76よりも新しいことが観察でき、調査区北部でもII様式の土器が出土した溝74を切っている。さらに、小片で図示できないが中期の甕片も出土していることから、溝73はII様式を含む中期に位置づけられる。

溝74は先述の溝76から分岐している。その交点のやや西側には、数10本以上の木杭が打ち込まれている(図390)。うち残りの良い杭を2本図示する。図391-6772は現存長55.1cm、先端は細く加工されている。樹種はヒノキ。6773は断面台形状で、先端もあまり尖っていない。樹種はアカガシ亜属。杭の一部は溝76の東肩部や溝74のこの面で検出した肩の外側にも分布しているが、基本的に溝74の流れに直交し、また溝76の西肩のラインにも平行しているという位置関係から、溝76から溝74への流入を制御する施設であったと考えられる。杭群の西での溝74は幅45~89cm、深さ11~17cm。埋土は5Y4/3暗オリブ色シルトに5Y3/1オリブ黒色の細砂~粗砂がまじる。弥生土器が6片出土した。図387-6748は長頸の広口壺。口縁端面にクシ描きの列点文、頸部には直線文が施される。胎土は生駒西麓産。II様式。他にもう1片中期の壺がある。

溝75は調査区中央に位置する。検出幅は42~約150cmと一定しない。深さは7~35cmで北側が深い傾向にある。埋土は5Y4/1灰色と5Y5/2灰オリブ色の細砂~粗砂が互層となっている。他の溝群とは異なり南南西から北北東に主軸をもち、交差する溝72・73・74・76のいずれよりも古い。ただし、遺物が

出土していないので時期がどこまで遡るかは不明である。

2条の大畦畔を、いずれも調査区東部の溝の東肩で検出した。

大畦畔69は溝78の東に隣接する。検出長約9m、上面の幅は調査区南端ではその東に存在する水田に制約されて0.6mと狭いが、その他の部分では1.9~2.1mとほぼ同じ幅を保つ。最大高は15cm。

大畦畔70は溝79の東に隣接する。上面の幅は調査区東端では0.6mと狭いが、その他の部分では1.8~2.3mとなる。最大高は22cm。

小畦畔と考えられるのは次の2条で、その周辺は水田域の可能性はある。

ひとつは大畦畔70につながる1条で、大畦畔70からほぼ直交する北東方向に1m程伸び、そこから北北西に向きが変わる。北東側の溝87に制約されたためと考えられるが、畦畔の連なりや水田形態は不明である。この畦畔状の高まりは、基底部の幅77~220cm、高さは大畦畔70際では12~18cmだが、調査区北辺では1cmしかない。

もうひとつは、溝78・79間の南東部、水田状の低地の北東側である。溝79と直交するように南西に60cm程伸びるが、その先で高さを失っている。

落込み80は溝73・76の南部に位置する。平面形は不詳。調査区の南辺断面では深さ約40cm、切り合い関係からみると溝73よりも古い。埋土は基本的に10Y2/1黒色シルト~細砂と10Y4/1灰色細砂がラミナとなって互層している。落込み80単独の出土遺物は検出できなかったが、南辺断面の溝76および落込み80



図390 6C区第9面溝74杭群

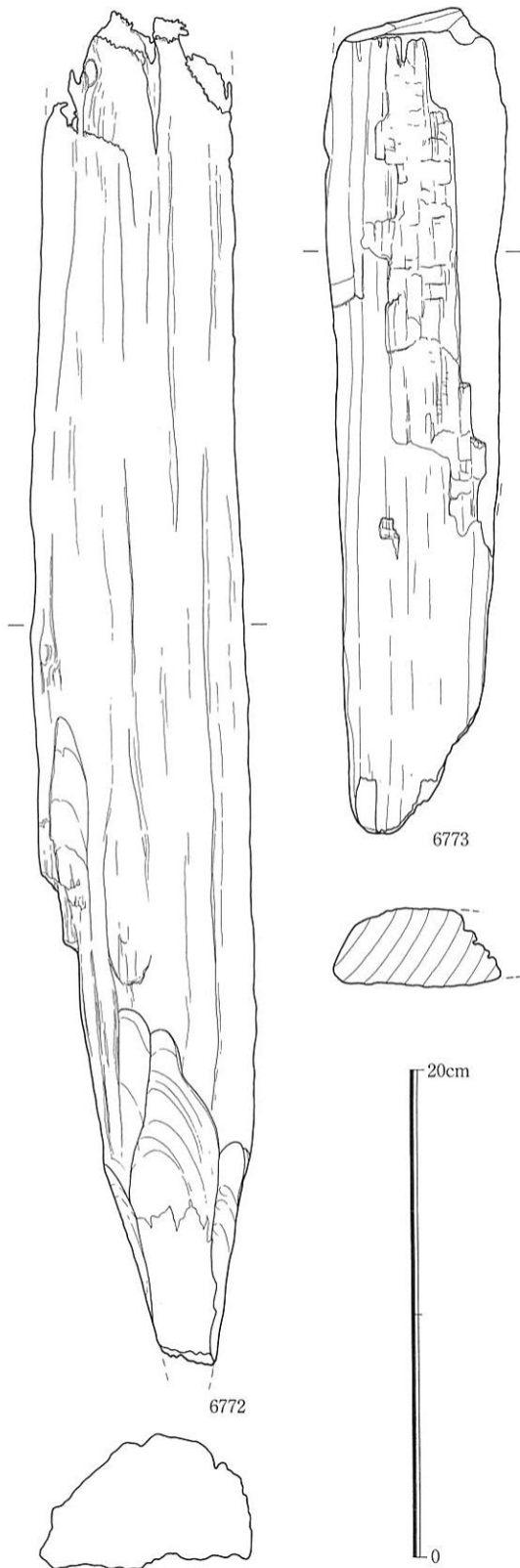


図391 6C区第9面溝74杭群の杭

に相当する堆積層から弥生土器が2片出土した。

土坑81は川68と溝72との間に位置する。平面不整長円形で、長径8.8m、最大短径2.7m、深さ36cm。埋土(図386)は4層に細分できる。弥生土器21片とサヌカイト剥片1片が出土した。図387-6753は甕、6754・6755は壺で、いずれもクシ描き直線文が施されている。6756は甕の底部。図389-6771は4.0gのサヌカイト剥片。土坑81は出土土器からII様式に位置づけられる。

土坑82は土坑81の北約6mに位置する。平面卵形を呈し、北北西から南南東に主軸をもつ。長径128cm、短径70cm、深さ9cm。埋土は5Y3/1オリーブ黒色粗砂に植物遺体が混じる。弥生土器が4片出土。図387-6757は甕の底部。図示できなかった他の土器片とともに中期に位置づけられる。

ピット83は、土坑82の東約6.5m、溝74と溝76の分岐部北西側に位置する。平面円形で、直径37cm、深さ6cm。埋土は5Y3/2オリーブ黒色と5Y5/2灰オリーブ色の細砂～粗砂が互層している。出土遺物はない。

ピット84・85は調査区中央南部、溝72の西肩に位置する。ピット84は平面楕円形で、北西から南東に長径66cm、短径は48cm、深さ9cm。ピット85も平面楕円形だが、主軸方位は南北。長径62cm、短径53cm、深さ9cm。埋土はともにN1.5/1という真っ黒のシルトで、粘性・締まりともない。木杭の痕跡であろうか。両ピットとも出土遺物なし。

ピット86は調査区中央やや東、溝77・78間に位置する。平面円形で、直径45～48cm、深さ10cm。埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色細砂。出土遺物はない。

時期

切り合い関係と出土土器から遺構の埋没時期を細分すると、溝71・溝75?・溝77?・溝78はI様式、川68・溝72・溝73・溝74・土坑81・土坑82はII様式となる。溝76からはI様式の弥生土器が出土しているが、一連の流れである溝74からII様式の弥生土器が出土しているので、溝76もII様式に下る可能性が高い。

少量の出土土器、それと時期的に矛盾しない石器類、さらに上下の包含層の弥生土器やサヌカイト剥片の存

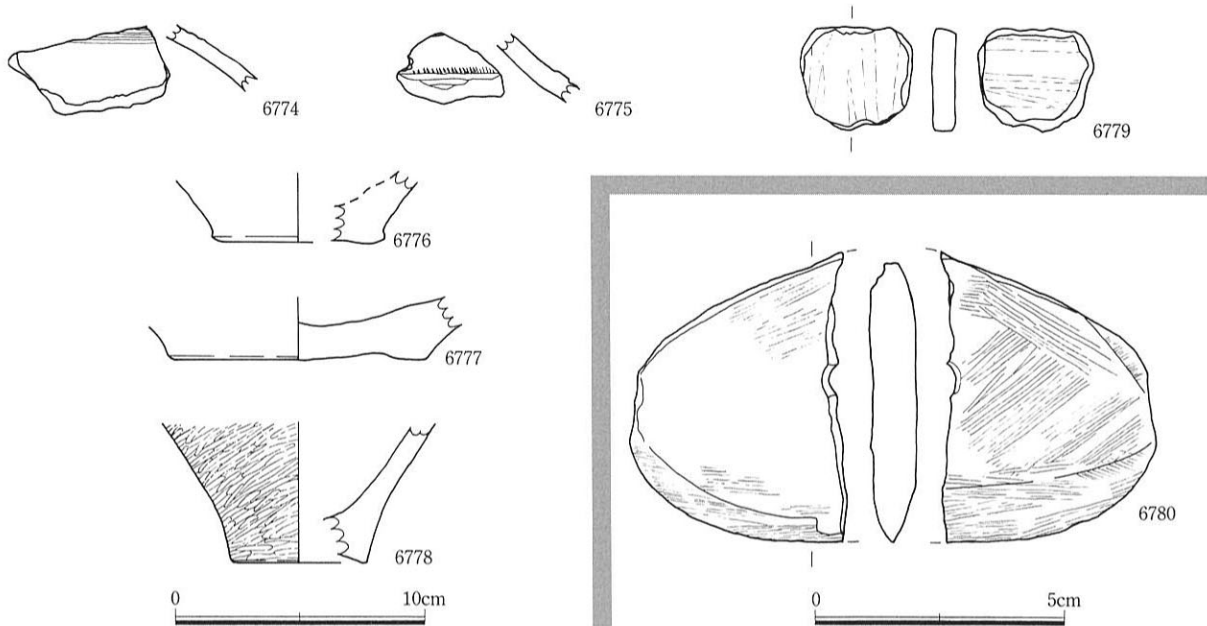


図392 6 C区第9層出土土器・石器

在からみて、第9面の遺構群はI様式からII様式にかけて順次掘削ないし構築され、埋没したものと考えられる。

第9層出土遺物 (図392)

弥生土器89片、縄文土器1片、土製円板1点、石庖丁1点、計92点出土した。

図392-6774~6778は弥生土器。6774・6775はI様式の壺の肩部。6776・6777はI様式の壺の底部。6778は甕の底部であろうか。外面に煤が付着している。6779は割れ口が粗いままの土器片だが、土製円板に転用したものか。直径3.8~4.8cm、内外面ともにヘラミガキが施される。

6780は凝灰岩製石庖丁。全体の1/3ほどと紐孔の一部が残る。両面から刃部を研磨し、背面を平坦に研ぎだしている。現存長5.8cm、幅4.3cm、厚さ0.8cm、現状で24.0g。

第10面 (図393) ————— 弥生時代前~中期のベース面 概要

第9層の黒色土壌化層を除去した面。

面の高さは、第9面で調査した川68の西岸部はT.P.+8.0~8.3mと低いが、それ以外の大部分はT.P.+8.4~8.6mでほぼ平坦である。

遺構として、溝2条、ピット3個、落込み2か所と杭群を検出した。

杭群以外に第10面上からの遺物はないが、溝89と落込み90から弥生土器が出土している。

遺構と遺物

調査区中央部で溝を2条調査した。

溝88は、調査区南辺から北西へ、次いで北へ、さらに北西へ向きを変える。幅35~73cm、深さ4~15cmで、北へ向かうほど規模が小さくなる。埋土は7.5Y2/1黒色シルトに砂を含む。出土遺物はない。

溝89は南南西から北北東へ伸びる。幅32~71cm、深さ7~16cm。埋土は2.5Y3/1黒褐色シルトに、砂と植物遺体を含む。I様式を含む弥生土器2片が出土した。

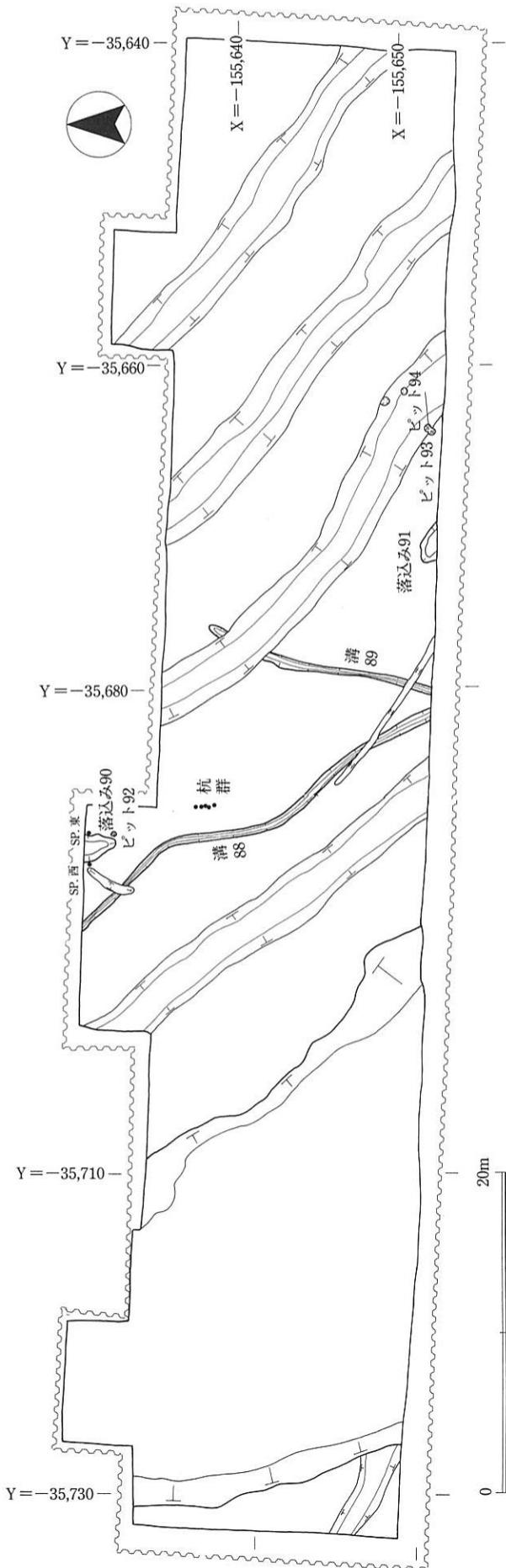


図393 6C区第10面

これらの溝は、第9面の溝と交差する位置に伸びるのでそれらと同時存在ではないが、第10面はベース面なので第9面の景観形成中に掘削された溝と考えられる。

ピットを3個検出した。いずれからも出土遺物はない。

ピット92は調査区中央北部に位置する。平面円形で、直径24~27cm、深さ6cm。埋土は5Y3/1オリーブ黒色シルト。

ピット93・94は調査区南東部に、2個連なって存在する。南西側をピット93、北東側をピット94とした。両者とも直径約42cmで、深さはピット93が44cmに及ぶ。埋土はピット93が2.5GY4/1暗オリーブ灰色細砂、ピット94が7.5Y4/1灰色細砂。この両ピットは、第9面の溝77の西肩部に位置し、さらに溝の対岸にも同様のピット状のくぼみがみられることから、溝77に関わる何らかの施設、例えば橋脚の痕跡と推定できる。

落込み90は調査区中央北部、ピット92の西0.2mに位置する。東西1.7m、南北検出長1.9m、深さ29cm。埋土(図394)は2層に分かれる。生駒西麓産胎土の弥生土器片1点のみ出土。

落込み91は調査区中央やや東、南辺際に位置する。下層の第11面落込み95に由来するくぼみと考えられる。出土遺物はない。

杭群(図395)を調査区中央部で検出した。5本の木杭は、南北1.1mのほぼ直線上に並び、第10面下に5~45cm打ち込まれている。この第10面をベース面とする第9面に杭群を投影しても該当する遺構等は存在しないので、第9層形成中に打設されたものであろう。

出土杭のうち残りの良い2本を図示する。図396-6781は現存長44.3cm、樹種はヤブツバキ。6782は44.5cm、樹種はアカガシ亜属。両者とも先端を尖らせている。

時期

第9面のベース面なので、それをあまり遡らない弥生時代前期新段階ないし中期初頭であろう。

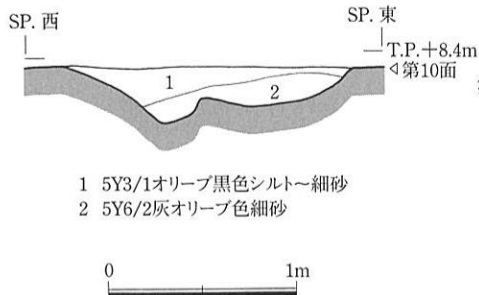


図394 6C区第10面落込み90断面

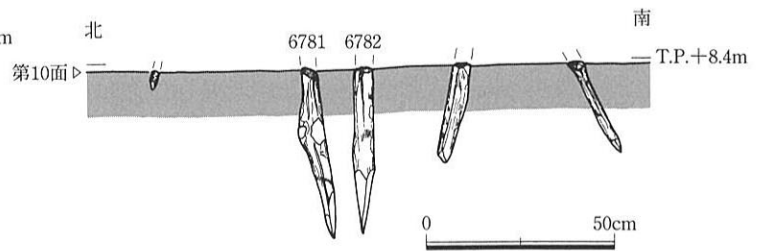


図395 6C区第10面杭群



図396 6C区第10面杭群の杭

第10層出土遺物 (図397)

弥生土器15片、石錘? 1点、計16点出土した。

弥生土器は細片のみで、時期の判明するのはI様式の2片。

図397-6783は、一端に加工痕がある細長く平たい自然礫。使用による磨滅は観察できなかった。石錘であろうか。最大長8.4cm、最大幅5.8cm、最大厚1.6cm、124.2g。砂岩製。

第11面 (図398) ————— 縄文時代晩期～弥生時代前期の面

概要

黒色土壌化層上面である。

面の高さはT.P.+8.3～8.5mで、東側が高い傾向にある。

明確な遺構とはいいがたい落込み1か所と杭群とを検出した。

第11面上の出土遺物はない。

遺構

落込み95は第10面落込み91の下層、調査区中央やや東の南辺際に位置する。落込み95の南部は側溝のため調査できず、検出できた範囲では北を頂点とする東西2.4m、南北1.1mの三角形状を呈する。深さは調査区南辺断面で約40cmを測る。埋土は、上半が

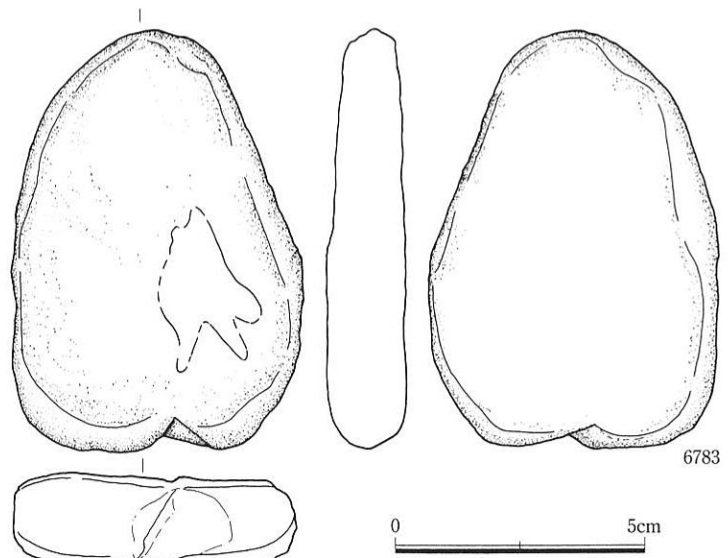


図397 6C区第10層出土石器

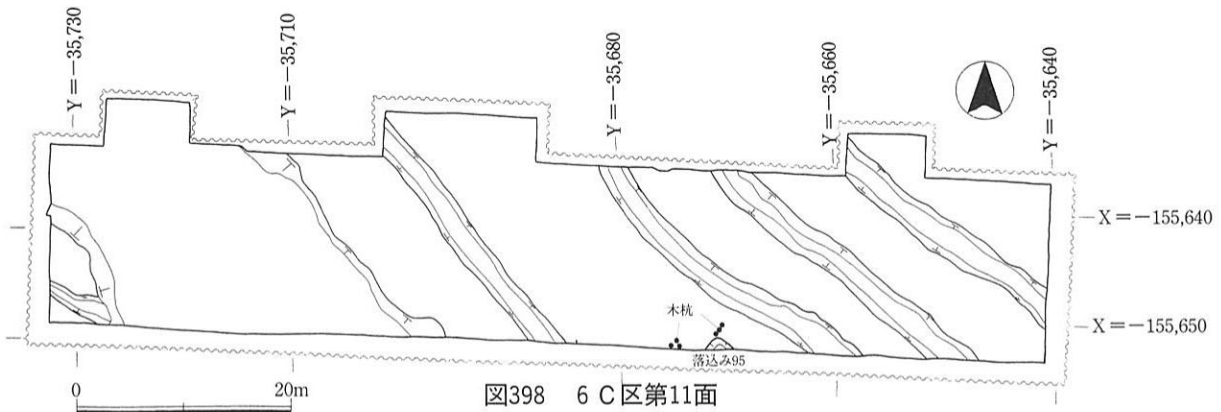


図398 6C区第11面

10Y4/1灰色細砂と10Y3/1オリーブ黒色細砂がラミナとなって互層しており、下半は10Y3/1オリーブ黒色シルトで水平方向のラミナが観察できる。出土遺物はない。

杭群が落込み95周辺にみられる。北側の一群は北東から南西方向に70cmの間に4本の杭が並ぶ。第11面より上は亡失しているが、面下に31~35cm打ち込まれている。ただし、この杭群と落込み95との関係は不詳である。

落込み95の西約2.5mにも、一辺約20cmの正三角形の各頂点の位置に杭が打設されている。杭の遺存状況が悪く、深さなどは把握できなかった。ただし、この杭群の南約1mに設定した調査区南辺断面には第9層中に木杭3本が見えているので、第11面で検出した杭群も第9面あるいはその上層から打設された可能性が高い。

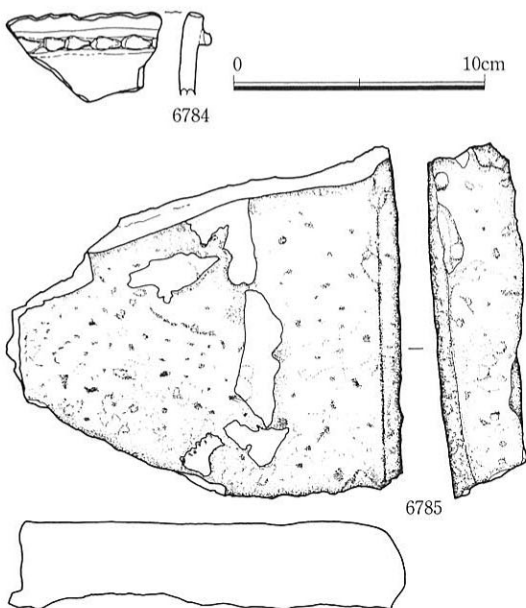
時期

上下の包含層出土遺物から、縄文時代晩期~弥生時代前期と考えられる。

第11層出土遺物 (図399)

弥生土器1片、縄文晩期土器3片、台石1点、計5点出土した。

図399-6784は刻目突帯文土器。口唇部に刻みがあり、縁端部からやや下がった位置の貼り付け突帯上



にもD字形の刻みが施される。縄文時代晩期の滋賀里IV式。

6785の台石は、第12面に近いレベルから出土した。使用痕が残る一面以外は欠損している。石英安山岩製。1242g。

第12面 (図400)——縄文時代晩期~弥生時代前期の面概要

黒色土壌化層である第11層は、調査区中央部では黒味の弱い上半と黒味の強い下半とに分層できる。この分層線の明確な範囲を第12面として平面的に調査した。南側が高く、北側が低い。

遺構は見いだせなかった。

第12面上の出土遺物はない。

図399 6C区第11層出土土器・石器

遺構

検出遺構なし。

時期

上下の包含層出土の数少ない遺物から、縄文時代晩期～弥生時代前期と考えられる。

第12層出土遺物

弥生時代前期の壺1片のみ出土した。

第13面 (図401) ————— 縄文時代晩期～弥生時代前期のベース面

概要

第12層の黒色土壌化層を除去したベース面。第9面川68よりも東部のみで検出した。

面の高さはT.P.+7.8～8.3mで、第12面同様に南東側が高く、北側が低い。

遺構は全く検出できなかった。

第13面上の出土遺物はない。

遺構

検出遺構なし。

時期

第12面のベース面という性格と上下の包含層出土の遺物から、縄文時代晩期～弥生時代前期に位置づけられる。

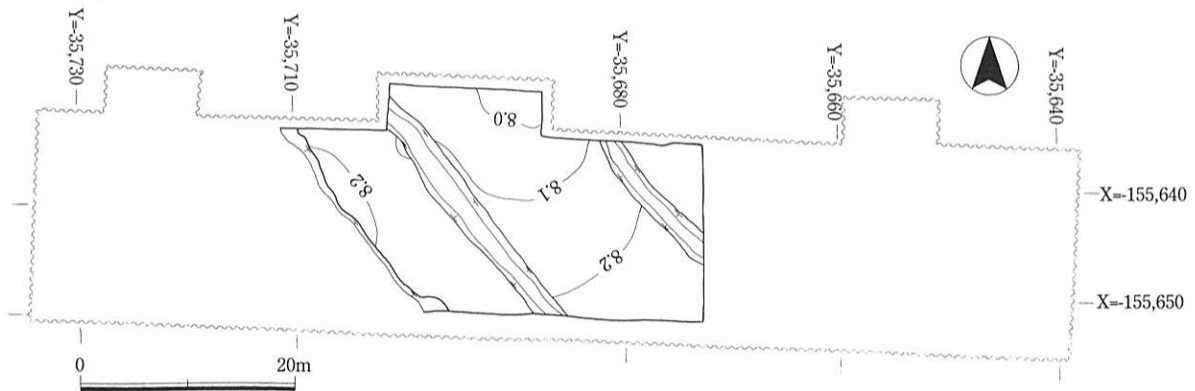


図400 6 C区第12面

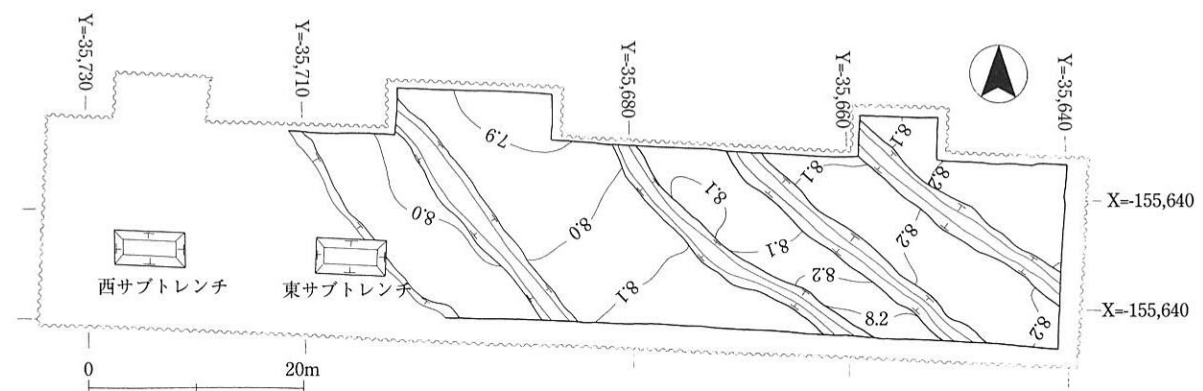


図401 6 C区第13面

第13層出土遺物

第13面調査後、掘削限界深度のT.P.+7.5mで床付けを行った。床付け面より上方の第13層からの出土遺物は縄文土器2片のみである。

床付け後、さらに下層の状況および第9面川68の底を確認するために、東西6.7m、南北3.3m、床付け面からの深さ1.8mのサブトレンチを調査区西部に2ヵ所設定した(図401)。その結果、第9面川68の底を、東サブトレンチではT.P.+6.9m、西サブトレンチではT.P.+6.7mで確認した。

第9面川68相当層の出土遺物は先述のように、東サブトレンチでは、鉢1片と中期の壺1片の弥生土器計2片、トチノキ種皮他。西サブトレンチでは、弥生土器28片、突帯文土器1片、サヌカイト剥片3片が出土した。弥生土器には、前～中期1片、中期の壺口縁2片、底部1点などが含まれる。これら出土遺物は、先述の第9面の川68が弥生時代中期初頭に埋没したという想定と矛盾しない。

第9面川68底より下層のシルト層からは、東サブトレンチから弥生土器2片と縄文土器2片が出土した。したがって、第13層出土遺物は床付け面より上層と合わせ、縄文土器4片と弥生土器2片となる。

包含層出土遺物(図402)

以上の他にも、出土層位を確定できないがセクションベルトや側溝などから、土器片を主体とする遺物が出土した。図402に、そのうち土器4点、サヌカイト尖頭器2点、剥片3点、計9点を掲げる。

6786～6788は土師器。6786は杯。内面に施された放射状暗文は粗雑で、口縁部までは及ばない。底部外面は無調整。飛鳥Ⅲ～Ⅳと考えられるが、同時期の杯に比べ器高は高い。6787は古墳時代の丸底の壺。6786・6787は第0層以下の側溝から出土した。6788の長胴の壺は布留式古相に位置づけられる。弥生～古墳時代の土器が多い第5～6層から出土。6789は頸部以上を欠くが、V様式の弥生土器の壺であろう。体部下半に焼成後穿孔がみられる。出土レベルは第9層に該当するものの、弥生時代前期～中期の第9層出土土器とは時期的に整合しない。この他、第0～4層相当層から韓式系土器の磨耗の著しい細片が出土した。

6790・6791はサヌカイト製尖頭器。6790は南辺側溝中より出土した。層位的には第9層のあたりで、平面的には第9面溝77に近い地点から出土した。基部は折れ。茎部はやや細みにつくり出している。53.7g。6791は南辺側溝の第8層以下を掘削中に出土した。先端部は欠損、基部は折れ。棘状突起をもつ。21.3g。6792～6794はサヌカイトの剥片である。6792は14.1g、6793は5.6g、6794は16.2gを量る。

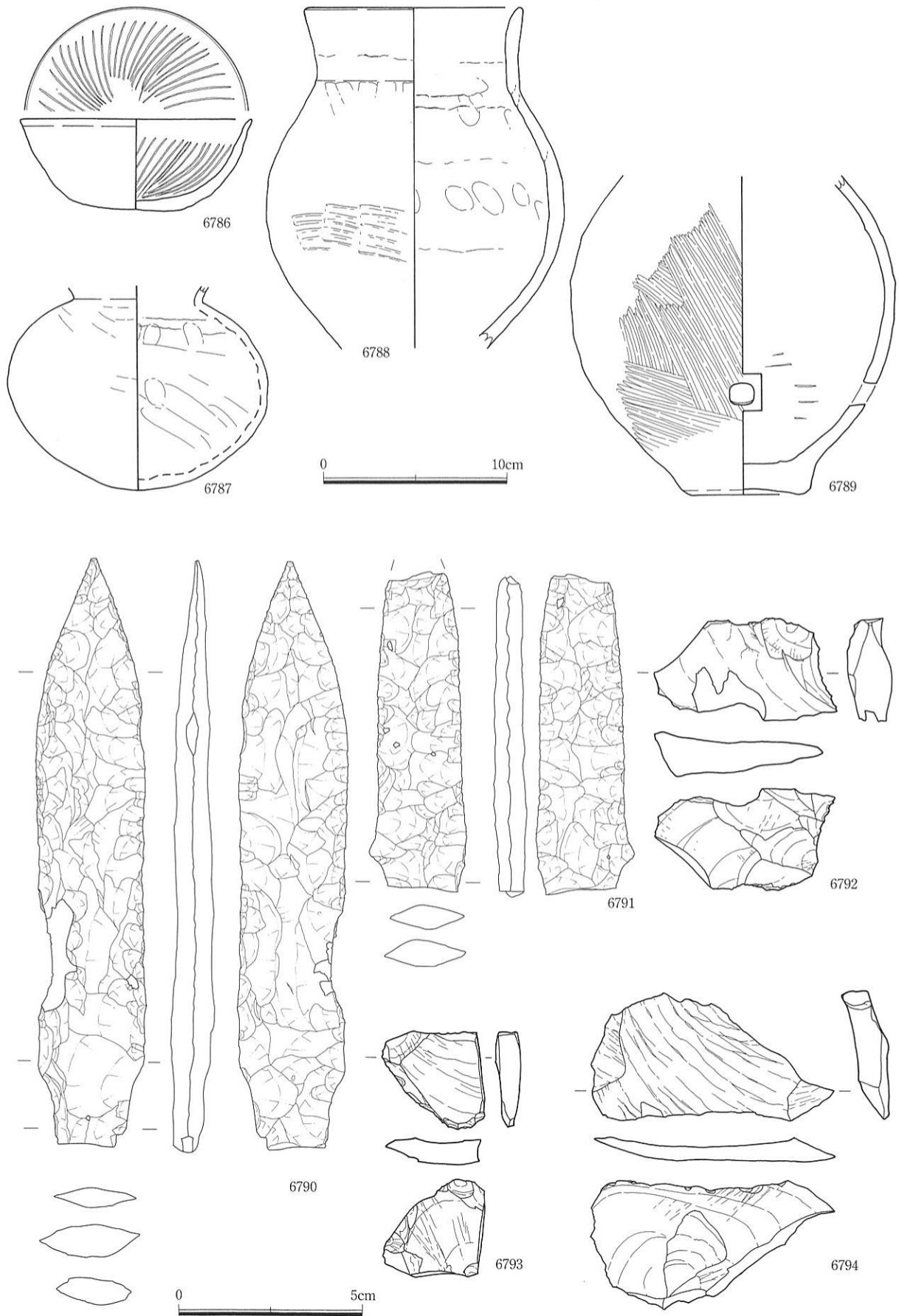


图402 6 C区包含層出土土器・石器

第4章 志紀遺跡6C区の花粉・植物珪酸体分析

辻本裕也・辻康男・田中義文・馬場健司

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

1. 調査目的

調査目的は、弥生時代前期～中期の第9層における古環境を推定することである。第9層は黒色の有機質に富む砂質シルトからなり、その上面(第9面)では、調査区北東部で水田畦畔状の高まり、中央部以東に南東-北西方向の溝群、西部に川68が確認されている。溝群は埋積物中の出土遺物の時代観から弥生時代前期末～中期初頭(I様式新～II様式中)にかけて埋没したと考えられている。また、川68は弥生時代中期初頭(II様式後半)に埋没したと考えられている。なお、第9層と同一層は6A区・6B区でも確認されており、その6調査区全体における古環境を捉える上でも有効と考えられている。

2. 試料

試料は、調査区内に分布する第9層について、遺構の配置を考慮して3箇所の地点から採取された(図375参照)。採取位置は調査区北東部の畦畔状の高まり近辺(サンプル3-15)、調査区南東部(サンプル3-17)、調査区南辺中央部の溝72の東肩から約60cm東の地点(サンプル3-10)である。

3. 分析方法

花粉分析および植物珪酸体分析の分析方法は、先述した6A区の分析調査方法と同じである。

4. 結果

(1) 花粉化石

結果を表49・図403に示す。サンプル3-10は花粉化石の保存状態が悪く、化石数も少ない。サンプル3-15・17の花粉群集は類似した組成を示す。草本花粉の割合が高い。木本花粉ではアカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属などが認められる。草本花粉はイネ科により占められており、カヤツリグサ科、ミズアオイ属などが認められる。また、水生植物のガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属なども検出されている。

(2) 植物珪酸体

結果を表50、図404に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、多くは保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。植物珪酸体組成は地点によって多少異なっている。いずれの地点もタケ亜科・ヨシ属の産出が目立ち、ウシクサ族やイチゴツナギ亜科などが検出される。タケ亜科にはネザサ節がわずかに認められるが、大部分は保存状態が悪いため、属までの細分は困難である。栽培種のイネ属由来の短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体はいずれの試料からも検出されたが、その出現率は地点により異なり。サンプル3-17では低く、サンプル3-10と3-15では高い。なお、これらのイネ科植物以外の樹木起源珪酸体である第IIIグループ・第IVグループ(近藤ほか,1981)がわずかに検出される。

5. 考察

6C区第9層の花粉化石・植物珪酸体の産状は調査地点によって多少の差異が認められた。花粉化石

は保存状態および化石数が地点によって異なっていた。「川68」に近い溝72の東肩（サンプル3-17）で保存が悪く化石数が少なかったが、その東側の地点では比較的良好に多産した。このような同一層における花粉化石の産状の違いについては、次のようなことが推定される。

植物珪酸体分析結果では地点間で化石数に有意な差が認められなかった。花粉化石と植物珪酸体の大きさはほぼ等しく、堆積物中での挙動が類似する可能性があることなどからすると、溝72の東肩に限って花粉の供給・堆積量が少なかったとは考えにくい。また、溝72肩部で検出された花粉・孢子化石の種類を見ると、圧倒的にシダ類孢子が多かった。一般にシダ類孢子は花粉化石に比較して風化に対する抵抗性が強いとされる。このことと、上記のこと、および僅かに水生シダ植物のミズワラビ属が認められたことを合わせ考えると、地点による産状の違いは、堆積後の経年変化における分解作用の影響の違いを反映している可能性が高い。一般に花粉化石は酸化条件下で紫外線や土壤微生物の活動により分解されるとされており、溝72の東肩地点が他地点に比較して、風化作用の影響が及び易い状況にあった可能性がある。このように今回の結果は第9層の成因を考える上で興味深く、今後、堆積物の層相や、堆積物中の化石の絶対量や土壤の多寡（腐植・粒径・有機物の状態）を測定し、総合的に検証する必要がある。

植物珪酸体組成では、栽培種のイネ属の出現率に違いが認められた。溝72の東肩地点で高率であったが、調査区北東部の畦畔状の高まり部分では低率であった。このような栽培種のイネ属の出現率の違いについては、局地的な植生の違いを反映している可能性もあるが、堆積物の成因を含めて総合的に評価する必要がある。なお、現在の水田土壤中の植物珪酸体の調査によれば、機動細胞珪酸体中のイネ属の割合が9%、稲藁を堆肥として与えている水田で16%の出現率を示した結果が得られている（近藤，1988）。今回の調査地点の出現率は、これらの値や6A区の畦畔状遺構が確認されている地点の植物珪酸体分析結果とも類似する出現率を示している。

以上のように溝72の東肩地点は、調査区北東部の畦畔状の高まりの近くや南東隅の地点とは様相を異にしてい

表49 6C区の花粉分析結果

種類	試料番号	S-3		
		10	15	17
木本花粉				
マキ属	-	9	6	
モミ属	1	43	31	
ツガ属	-	42	31	
トウヒ属	-	1	-	
マツ属単維管束亜属	-	-	1	
マツ属複維管束亜属	-	29	33	
マツ属（不明）	-	23	17	
コウヤマキ属	-	2	1	
スギ属	1	11	17	
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	4	1	
ヤマモモ属	-	2	1	
サワグルミ属	-	2	-	
クルミ属	-	1	1	
クマシデ属-アサダ属	-	9	5	
カバノキ属	-	2	4	
ブナ属	-	5	6	
コナラ属コナラ亜属	-	19	13	
コナラ属アカガシ亜属	2	63	81	
クリ属	-	2	1	
シイノキ属	1	7	8	
ニレ属-ケヤキ属	-	8	5	
エノキ属-ムクノキ属	-	2	-	
ガマズミ属	-	-	1	
草本花粉				
ガマ属	-	-	1	
オモダカ属	-	-	2	
イネ科	4	363	210	
カヤツリグサ科	6	31	30	
ミズアオイ属	-	28	27	
クワ科	-	-	1	
サナエタデ節-ウナギツカミ節	1	6	3	
ナデシコ科	-	6	9	
アブラナ科	-	1	-	
バラ科	-	2	3	
マメ科	-	1	-	
フウロソウ属	-	1	-	
ヨモギ属	3	-	-	
キク亜科	3	1	2	
不明花粉	-	4	6	
シダ類孢子				
ヒカゲノカズラ属	3	1	3	
イノモトソウ属	10	5	6	
ミズワラビ属	1	3	1	
他のシダ類孢子	95	52	59	
合計				
木本花粉	5	286	264	
草本花粉	17	440	288	
不明花粉	0	4	6	
シダ類孢子	109	61	69	
総計（不明を除く）	131	787	621	

表50 6C区の植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	S-3		
		10	15	17
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	8	5	4	
タケ亜科ネザサ節	2	1	1	
タケ亜科	55	51	47	
ヨシ属	55	30	25	
ウシクサ族コブナグサ属	8	2	2	
ウシクサ族ススキ属	22	12	10	
イチゴツナギ亜科	14	1	-	
不明キビ型	64	34	45	
不明ヒゲシバ型	13	11	25	
不明ダンク型	11	8	25	
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	65	39	8	
タケ亜科ネザサ節	2	2	2	
タケ亜科	63	111	42	
ヨシ属	35	45	29	
ウシクサ族	18	28	16	
不明	40	79	54	
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	252	155	184	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	223	304	151	
総計	475	459	335	
樹木起源				
第IIIグループ	1	2	-	
第IVグループ	4	5	1	

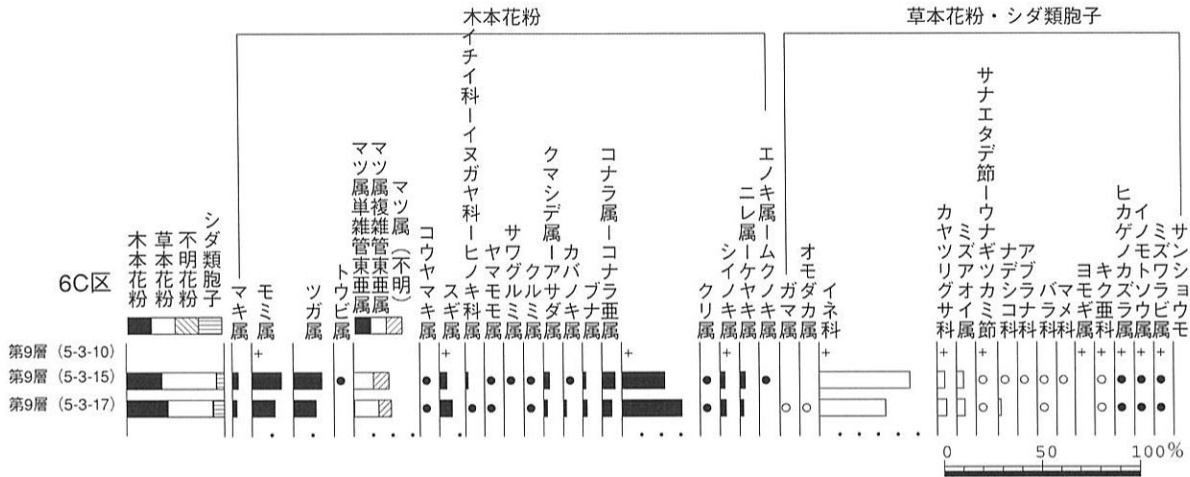


図403 6C区の主要花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個未満の試料について検出した種類を示す。

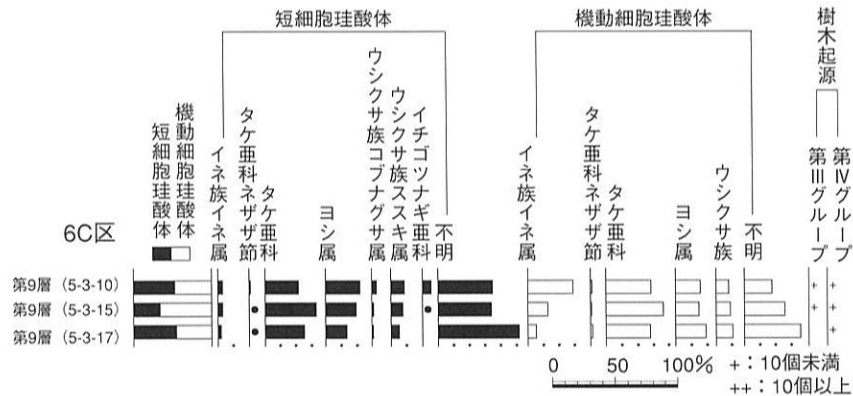


図404 6C区の植物珪酸体群集と組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+は各珪酸体で100個未満の試料より検出された種類を示す。また、組織片や樹木起源珪酸体の産状を検出個数により+の記号で示す。

た可能性がある。後者の2地点では湿地や水深の浅い水域に分布する抽水植物のミズアオイ属やミズワラビ属・ヨシ属などが認められていることから、調査地点周辺にそのような場所が存在したことが推定される。なお、これらの種類は水田雑草の種類でもある。

一方、木本花粉化石の組成は、第9層に対比される6B区10層・6A区15層の組成と類似する。モミ属、スギ属、ツガ属などの温帯性針葉樹、マツ属、常緑広葉樹のアカガシ亜属の高率出現が特徴である。これらの種類が当時の植生を構成する要素であったことが窺える。当時の森林植生や植物相については第8部で詳述するが、花粉化石群集に占める木本花粉の比率が低いことから、周辺に森林と呼べる林分の成立は考えにくい。周辺は基本的にはヨシ属などのイネ科を中心とした草地の植生であったことが推定される。

引用文献

近藤鍊三 (1988) 十二遺跡土壌の植物珪酸体分析。「鑄師屋遺跡群 十二遺跡—長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書—」, p.377-383, 御代田町教育委員会。
 近藤鍊三・ピアスン友子 (1981) 樹木葉のケイ酸体に関する研究 (第2報) 双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について。帯広畜産大学研究報告, 12, p.217-229。

第5章 小結

調査の概要

第0層は鎌倉時代以降の包含層である。陶器、瓦、瓦器・瓦質土器などが出土した。

第1面は鎌倉時代の水田面である。面の高さはT.P.+9.9～10.1m。畦畔と段を検出した。調査区の西半では、旧日本陸軍の施設を撤去した際に掘り込まれたと考えられる攪乱がみられた。

第1層は奈良時代後期～鎌倉時代の包含層である。瓦器、土師器、モモ核が出土した。

第2面は平安時代の水田土壌の面である。溝、畦畔、段、鋤溝を検出した。

第2層からは、須恵器1片のみ出土した。

第3面は平安時代の面である。遺構は検出できなかった。

第3層は平安時代の包含層である。黒色土器、須恵器、土師器、獣歯などが出土した。

第4面は平安時代の耕作面である。坪境の溝と条里地割関係と考えられる石8点がみられた。

第4層は奈良～平安時代の包含層と考えられる。土師器、黒色土器、須恵器をはじめ、磁器、陶器、瓦、瓦器・瓦質土器、製塩土器、砥石、棒状の木製品、モモ核、獣歯など計1251点が出土した。

第5面は6C区最古の条里水田面で、奈良時代と考えられる。面の高さはT.P.+9.2～9.6m。溝と畦畔を検出した。

第5層からは、土師器と須恵器をはじめ、弥生土器、サヌカイト剥片、自然石、木製品、モモ核、焼土が出土した。基本的に古墳時代の包含層である。しかし、第5面の条里地割の施行に伴って整地したためか、第5層の土器類の組成は調査区の部分によって異なる。調査区東部では須恵器が主体を占める。中部では、上層からの埋納と推定される飛鳥～奈良時代の土師器と、下層の包含層が露出したためと考えられる弥生土器およびサヌカイト剥片が出土した。中部以西からは古式土師器の出土が多い。

第6面は古墳時代の面である。溝とピットを検出した。調査区西部には布留式期の溝がある。

第6層からは、須恵器、土師器、弥生土器などが出土した。第5層同様に調査区の部分によって土器組成が異なり、調査区東部は古墳時代の、中部以西は弥生時代の包含層と考えられる。

第7面は、調査区の東部は古墳時代の水田域、中央やや西寄りでは弥生時代の包含層が露出、中部以西は弥生時代の面である。

第7層は弥生時代の包含層である。弥生土器、サヌカイト製スクレイパーなどが出土した。

第8面は第7面のベース面である。上層から掘り込まれた溝、ピット、落込みを検出した。

第8層は弥生時代中期初頭を主体とする包含層である。弥生土器やサヌカイト製打製石器をはじめ、石器類、土製円板、投弾、縄文土器などが出土した。また、第8層掘削中に庄内式～布留式期に掘り込まれたと考えられるピットを検出した。

第9面は弥生時代前～中期の面である。面の高さはT.P.+8.6～8.8m。遺構として、基本的に南東から北西に流れる川68と複数の溝をはじめ、大畦畔、落込み、土坑、ピット、杭群などを検出した。

川68は幅20～30m、深さ約2m、東肩法面に杭群がある。流路部分から、II様式の弥生土器や石器類などのほかに、木製の^{ひとがた}人形、鋤、鋤も出土した。また、溝77からは、弥生土器と、サヌカイト製の尖頭器5点および石小刀5点が出土した。

第9層は弥生時代前期末～中期初頭の包含層である。弥生土器、石庖丁、土製円板などが出土した。

第10面は弥生時代前期～中期のベース面である。溝、ピット、落込み、杭群を検出した。

第10層は弥生時代前期の包含層。弥生土器などが出土した。

第11面は縄文時代晩期～弥生時代前期の面である。落込みと杭群とを検出した。

第11層は縄文時代晩期～弥生時代前期の包含層。晩期の縄文土器、弥生土器、台石が出土した。

第12面も縄文時代晩期～弥生時代前期の面である。遺構は見いだせなかった。

第12層も縄文時代晩期～弥生時代前期の包含層と推定できる。前期の弥生土器1片のみ出土。

第13面は、第12層の黒色土壌化層を除去したベース面である。面の高さはT.P.+7.8～8.3m。

第13面も縄文時代晩期～弥生時代前期の包含層である。縄文土器と弥生土器が出土した。

弥生時代前期末～中期初頭の石器群

サヌカイト製尖頭器が、第8層から3点、第9面溝77から5点、調査区南辺側溝から2点、計10点出土した。他に未成品も数点ある。石小刀は、第7面溝57から1点、第8層から2点、第9面溝77から5点、計8点出土した。

計10点の尖頭器うち6点にみられる棘状突起は、近畿地方では数遺跡から出土例があるが、類例は少ない。第9面溝77の溝南部の東寄りからまとまって出土した計10点の成品は、尖頭器5点と石小刀5点という組成とその一括性が特徴的である。

なお、これら石器群については第8部考察の中に一項を設けた。第4・6・7部の事実報告と合わせて参照されたい。

弥生時代中期初頭の川から出土した木製人形^{ひとがた}

木製人形は、第9面川68の底部近くから出土した。川68出土遺物は528～537ページで述べたように、土師器2片、弥生土器255片、縄文土器1片、時期不明の土器1片、石器類8点、木製品3点、トチノキ種皮片である。土師器は2片とも古式とおぼしい小片で、大多数を占める弥生土器の主体はII様式である。さらに、人形以外の木器は、角肩の一木鋤と平鋤（広鋤）で、弥生時代に通有な形状である。したがって、人形の埋没時期は弥生時代中期初頭として大過ないと考える。

しかし、この人形の形状は律令期にその類例が多い。近畿地方古代の人形の分類〔町田章・上原真人編『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所史料第27冊 1985年〕では、B II型式（B：手の表現を欠く／II：頸部の切欠きは、一辺が長く一辺が短い）に該当する。ただし、律令期の人形では墨書や刻線によって顔の目・鼻・口を表現することが多いが、当例ではその表現は認められない。

弥生時代の木製人物表現は、一般に木偶と呼ばれる立体的なものが一般的である。板材を用いた扁平な人形の例は少ない。鳥取県気高郡青谷町青谷上寺地遺跡国道1区の弥生時代後期末から古墳時代初頭の溝状遺構SD11から出土した木製人形〔北浦弘人編『青谷上寺地遺跡3』鳥取県教育文化財団調査報告書72 2001年〕は、長さ53.5cmと志紀遺跡例の30.8cmに比べかなり大きい。滋賀県野洲郡中主町湯ノ部遺跡の弥生時代中期後半とされる4体の木偶〔濱修編『湯ノ部遺跡発掘調査報告書I』（財）滋賀県文化財保護協会 1995年〕は厚みがあり、志紀遺跡例とは印象が異なる。

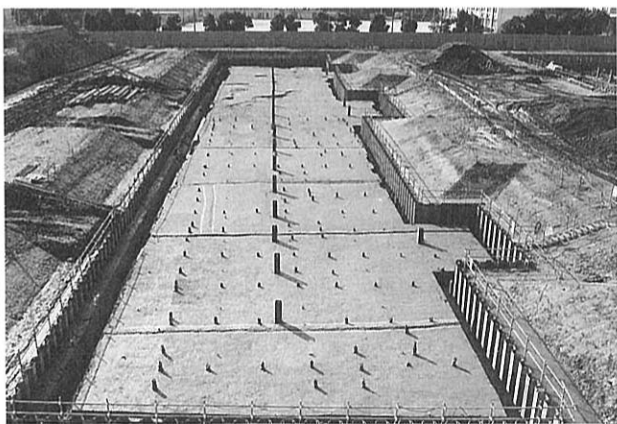
志紀遺跡6C区出土の人形を、形状からみて律令期の遺物の混入と考えるか、あるいは、出土状況からみて弥生時代の人物形象のひとつの形と考えるか。本書では事実報告のみに止まるが、さらなる検討が必要である。



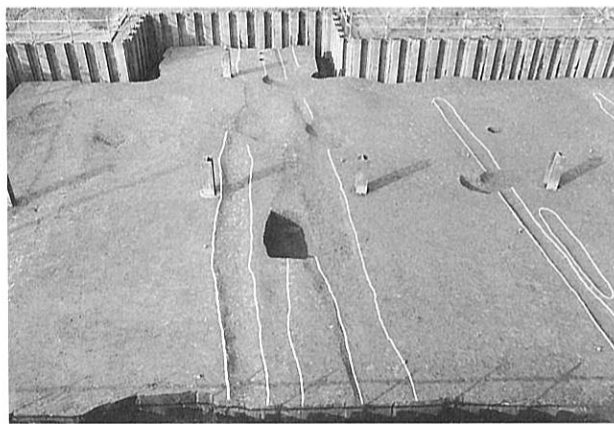
第1面(西から)



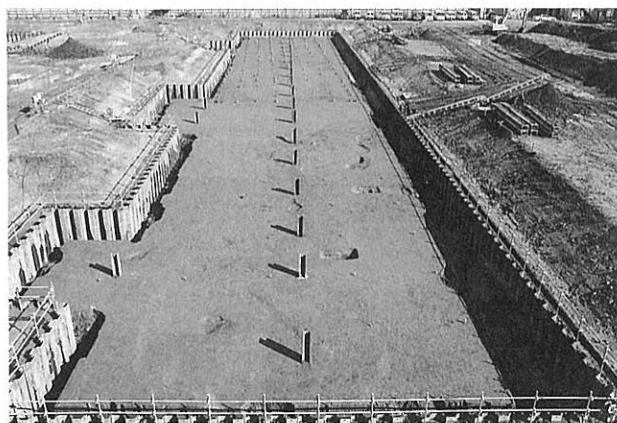
第1面(東から)



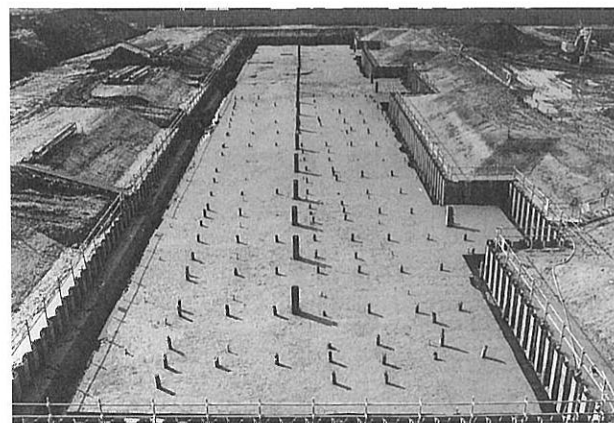
第2面(東から)



第2面坪境(南から)



第3面(西から)



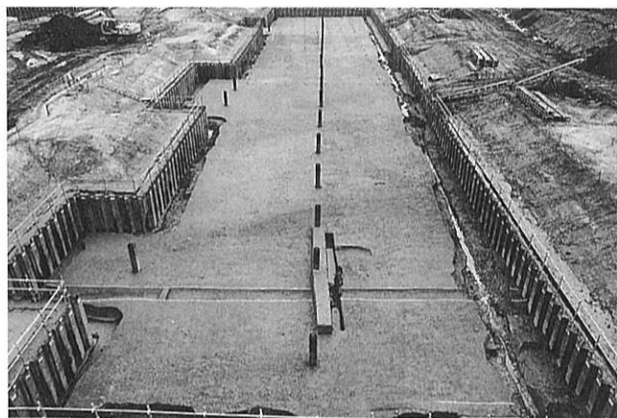
第3面(東から)



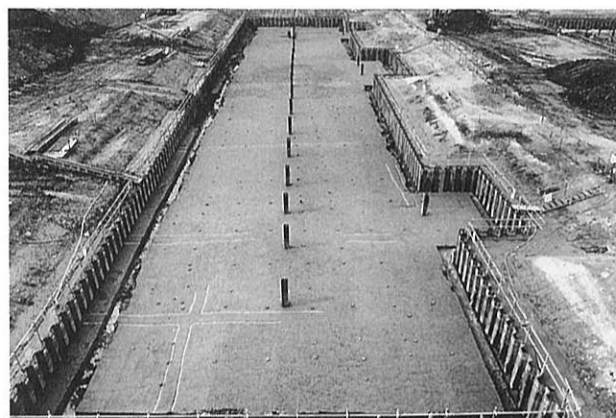
第4面(西から)



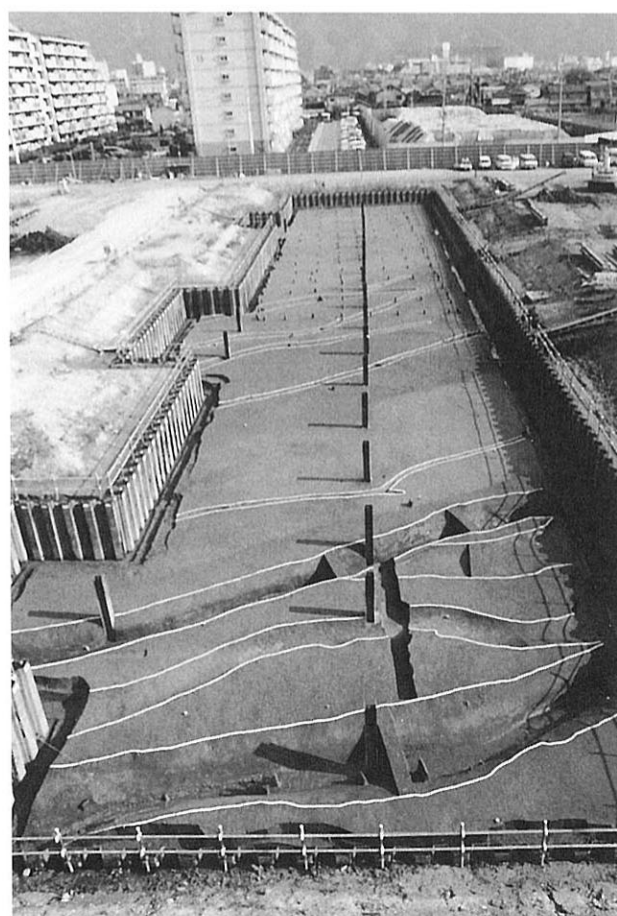
第4面(東から)



第5面(西から)



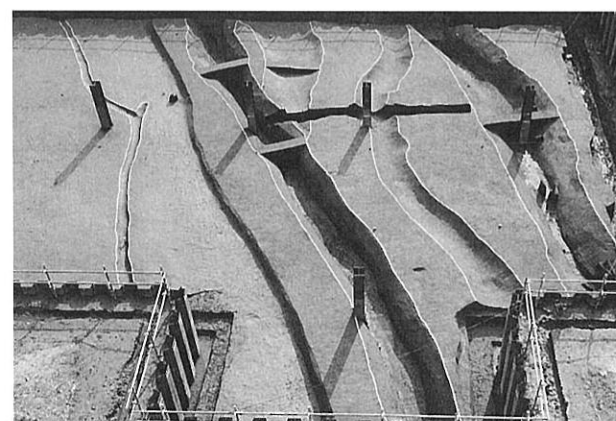
第5面(東から)



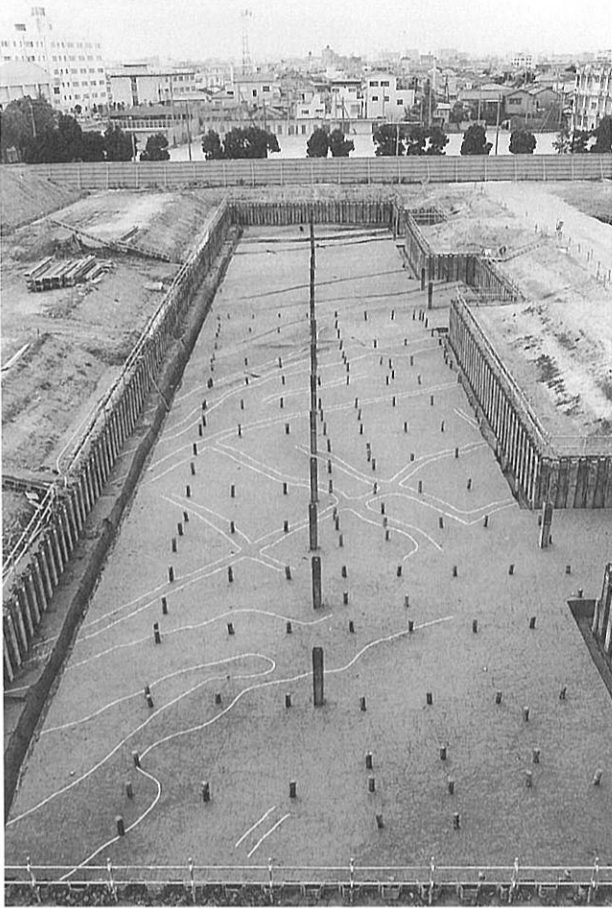
第6面(西から)



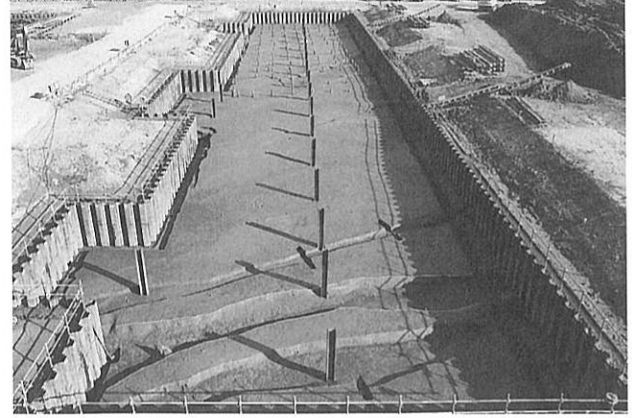
第6面(南東から)



第6面溝群(北から)



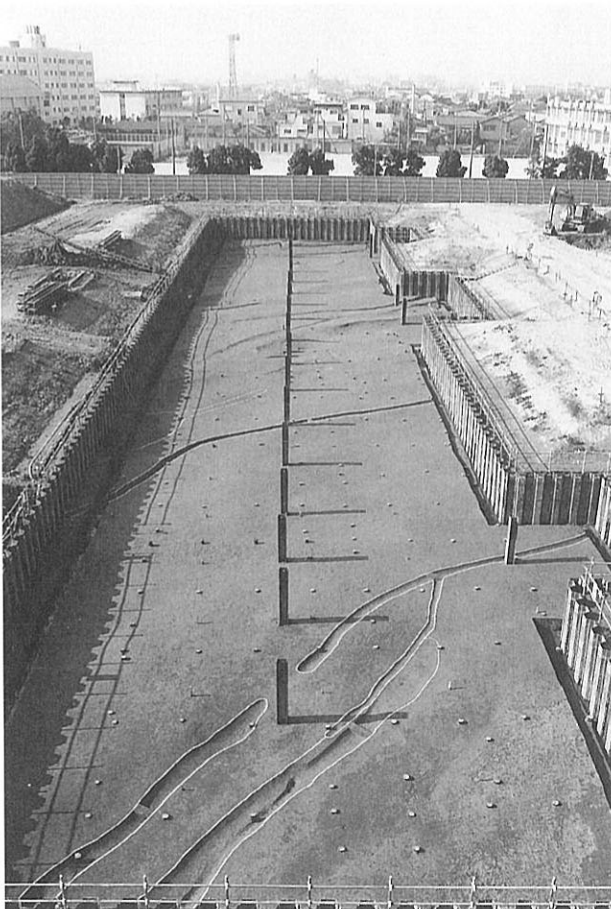
第7面 (東から)



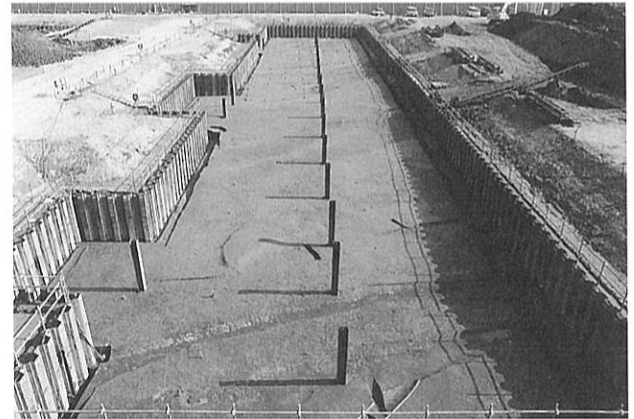
第7面 (西から)



第7面 (南東から)



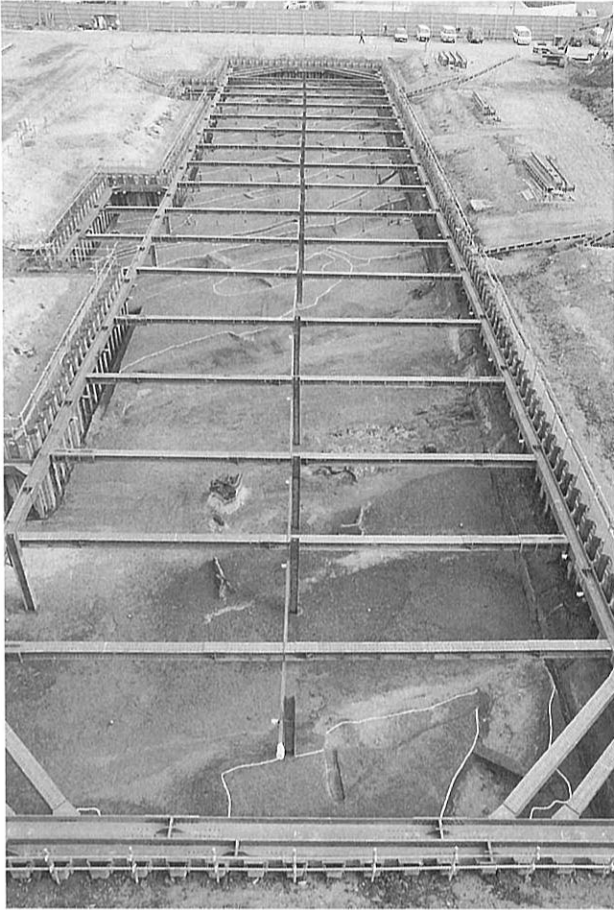
第8面 (東から)



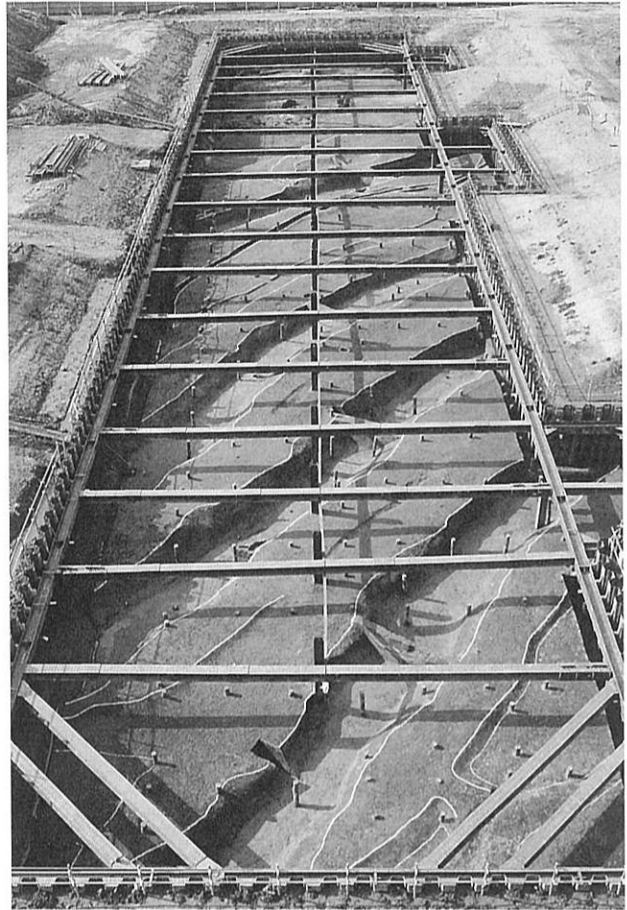
第8面 (西から)



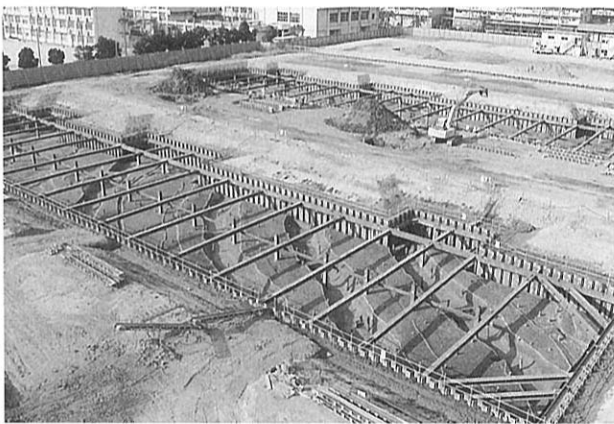
第8面 (南東から)



第9面 (西から)



第9面 (東から)



第9面 (南東から)



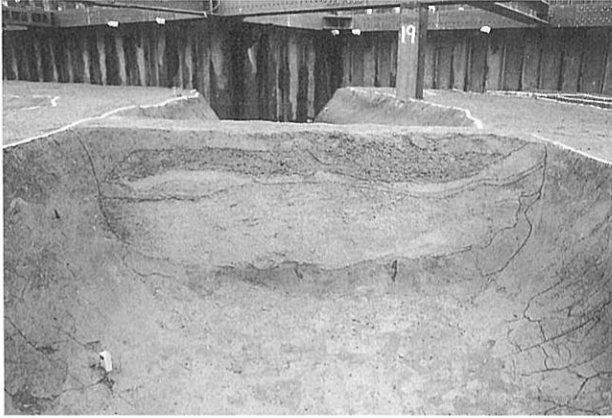
第9面ピット93・94 (南から)



第9面川68杭群 (北西から)



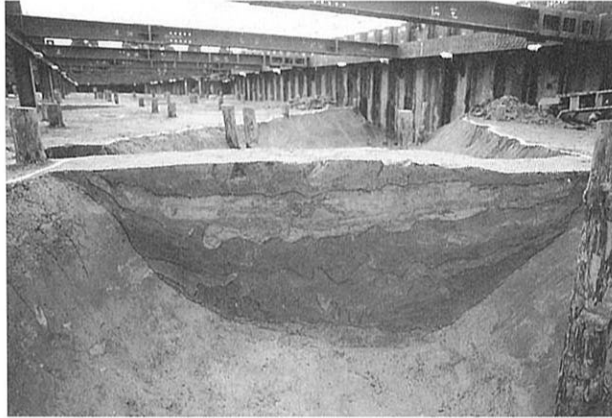
第9面川68杭群掘削状況 (北から)



第9面溝72断面 (南東から)



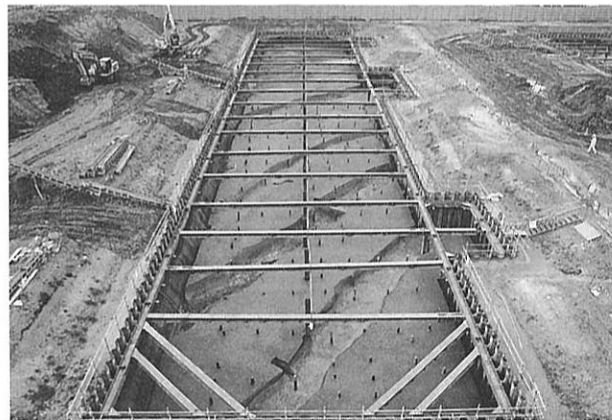
第9面溝77断面 (南東から)



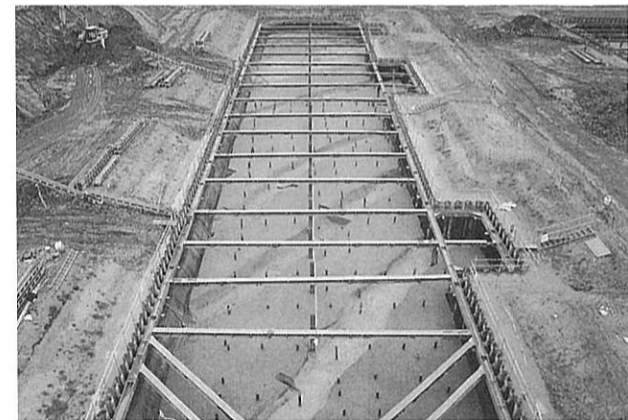
第9面溝78断面 (南東から)



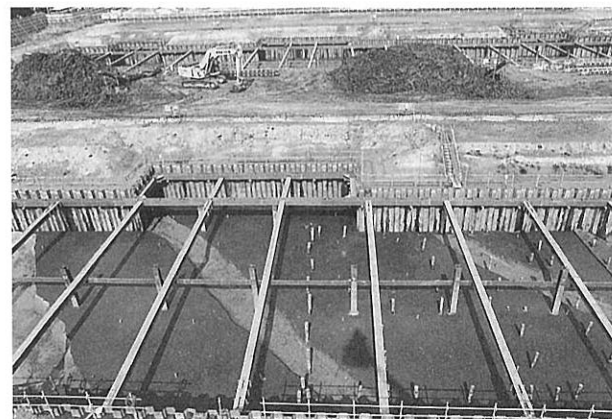
第9面溝79断面 (南東から)



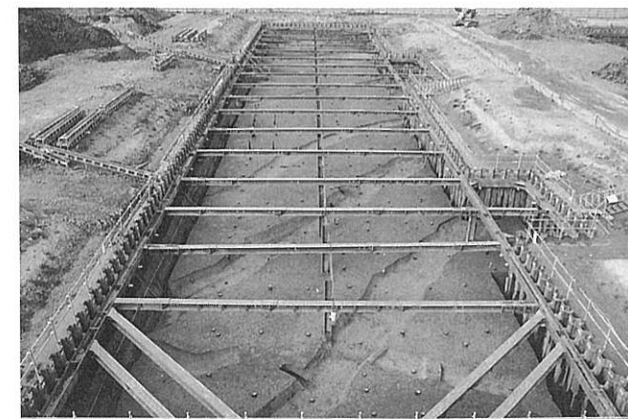
第10面(東から)



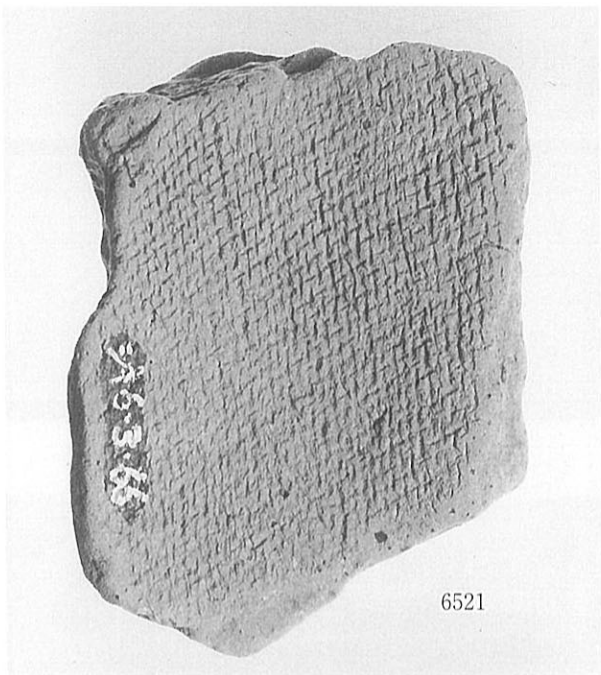
第11面(東から)



第12面(南から)

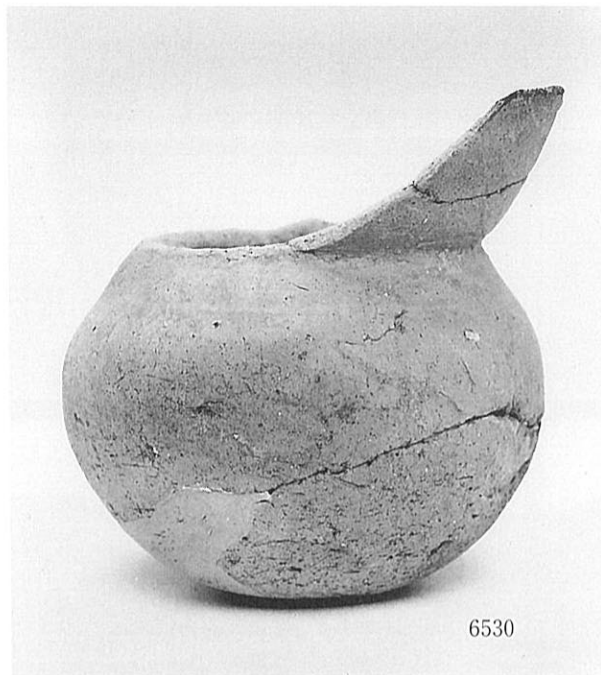


第13面(東から)



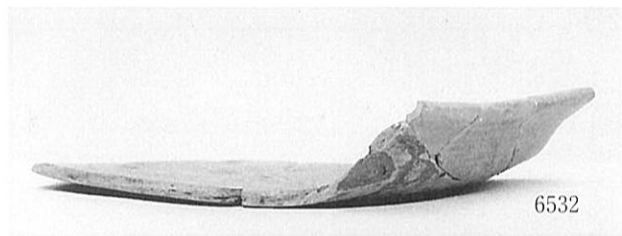
6521

第4層出土土器



6530

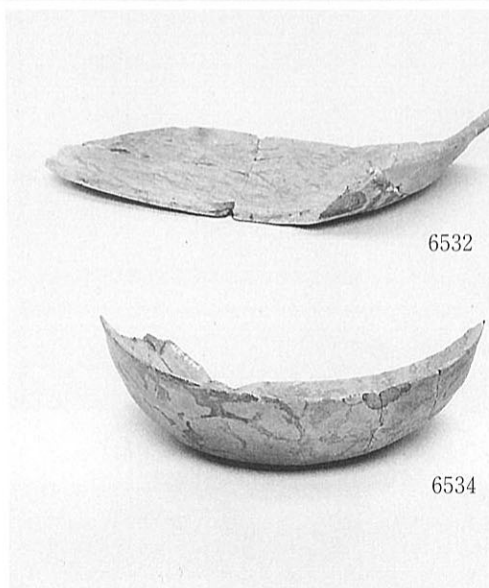
第5面溝32出土土器



6532



6533



6532

6534



6533

6535

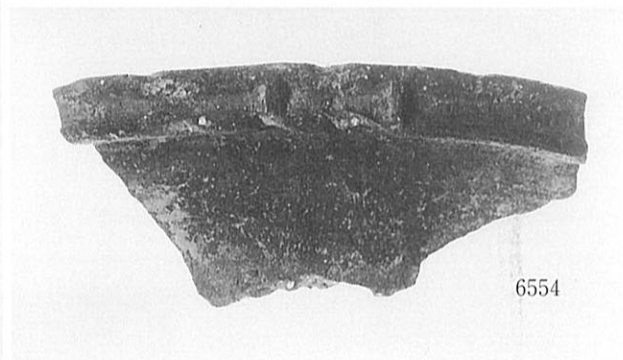
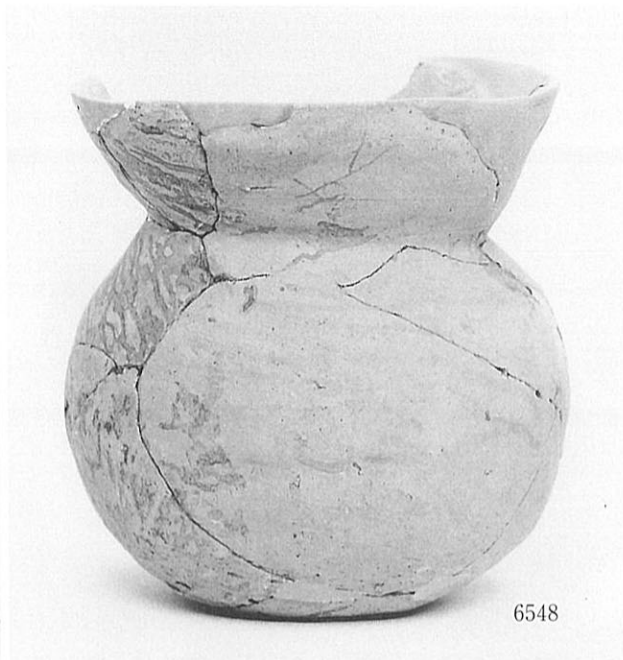


6534



6535

第5層出土土器(1)



第5層出土土器(2)

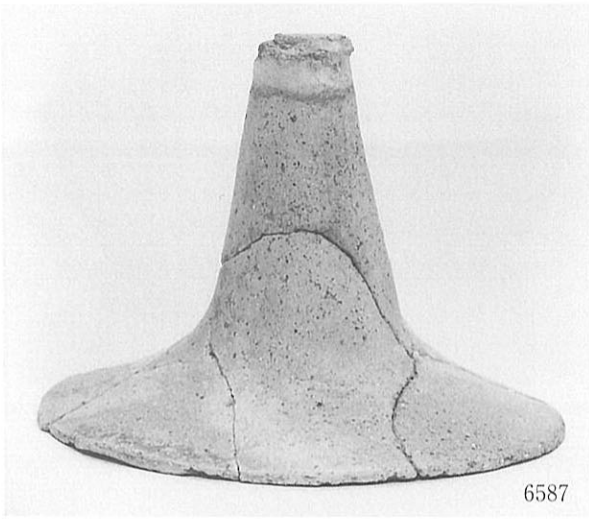


6569

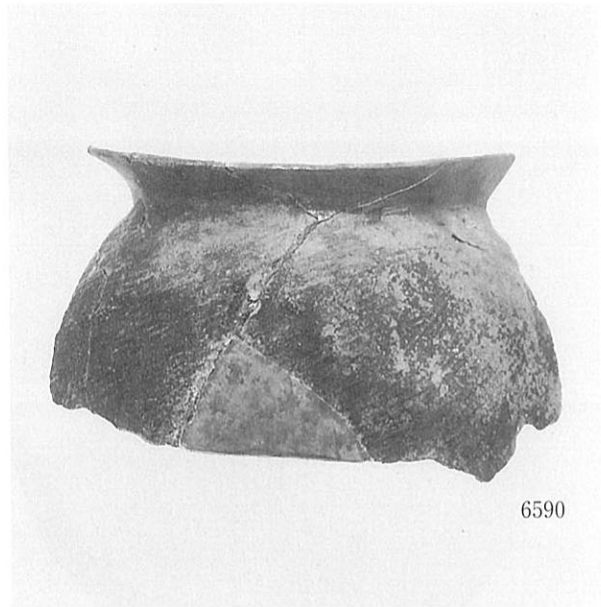
第6面溝43出土土器 (1)



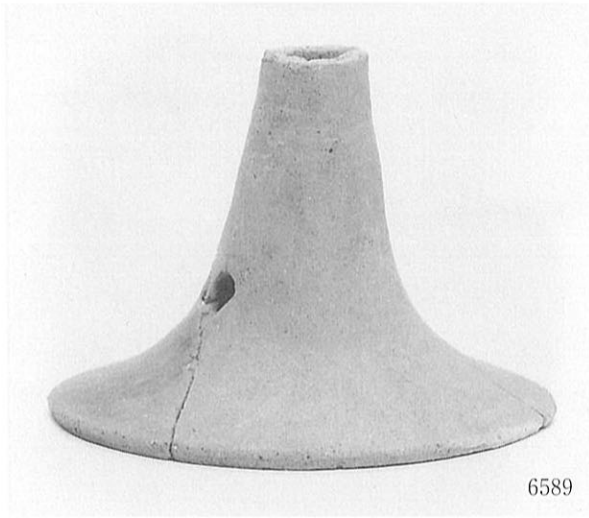
第6面溝43出土土器(2)



6587



6590

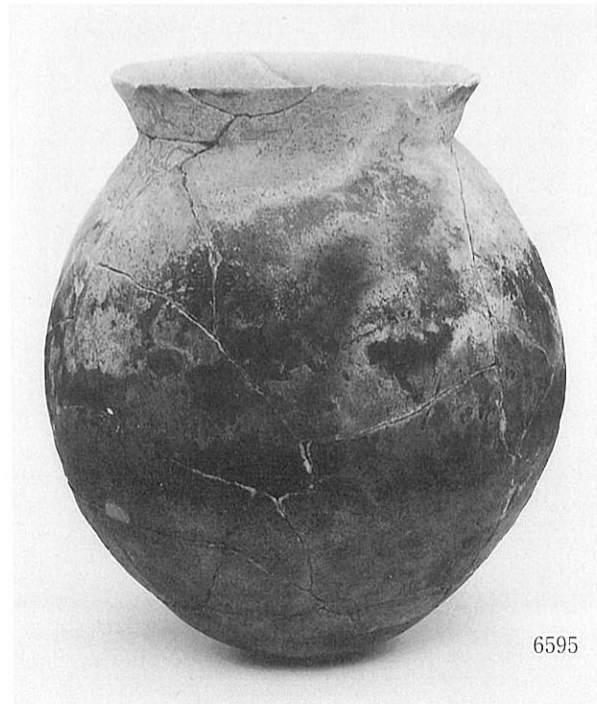


6589

第6面溝43出土土器 (3)



6591



6595

第6面溝51出土土器



6593

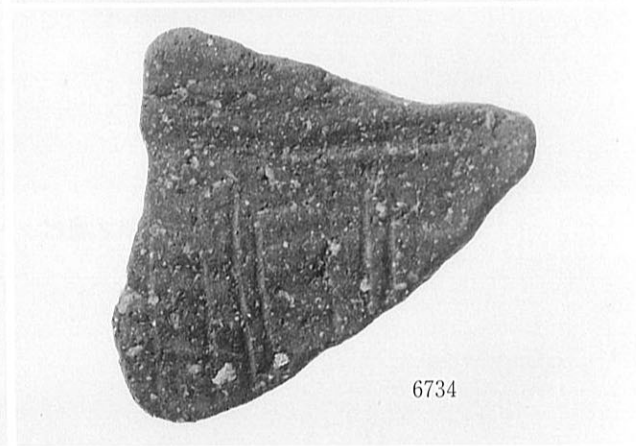
第6面溝46出土土器



第8層ピット67出土土器



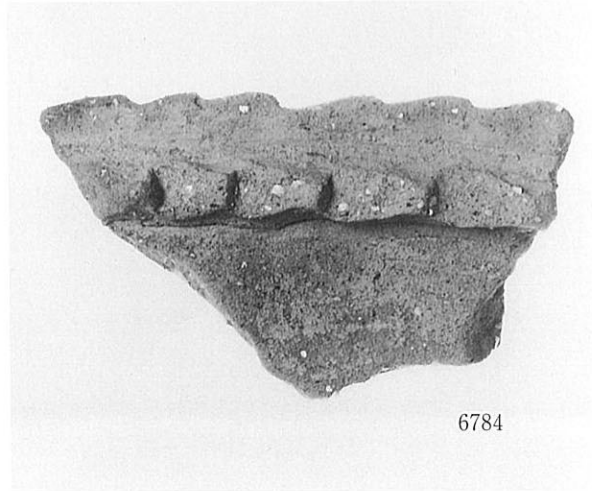
第8層出土土器



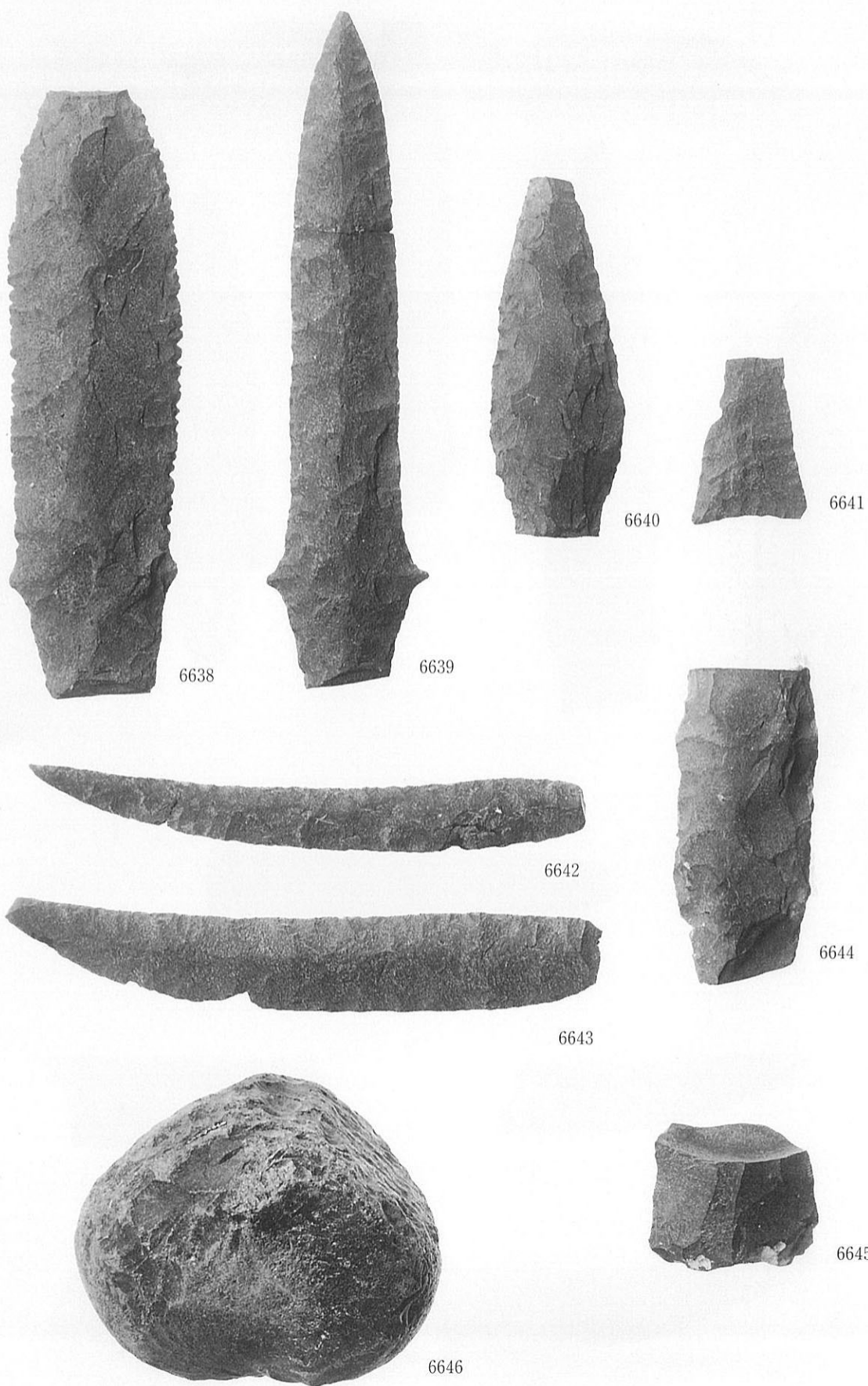
第9面川68肩部出土土器



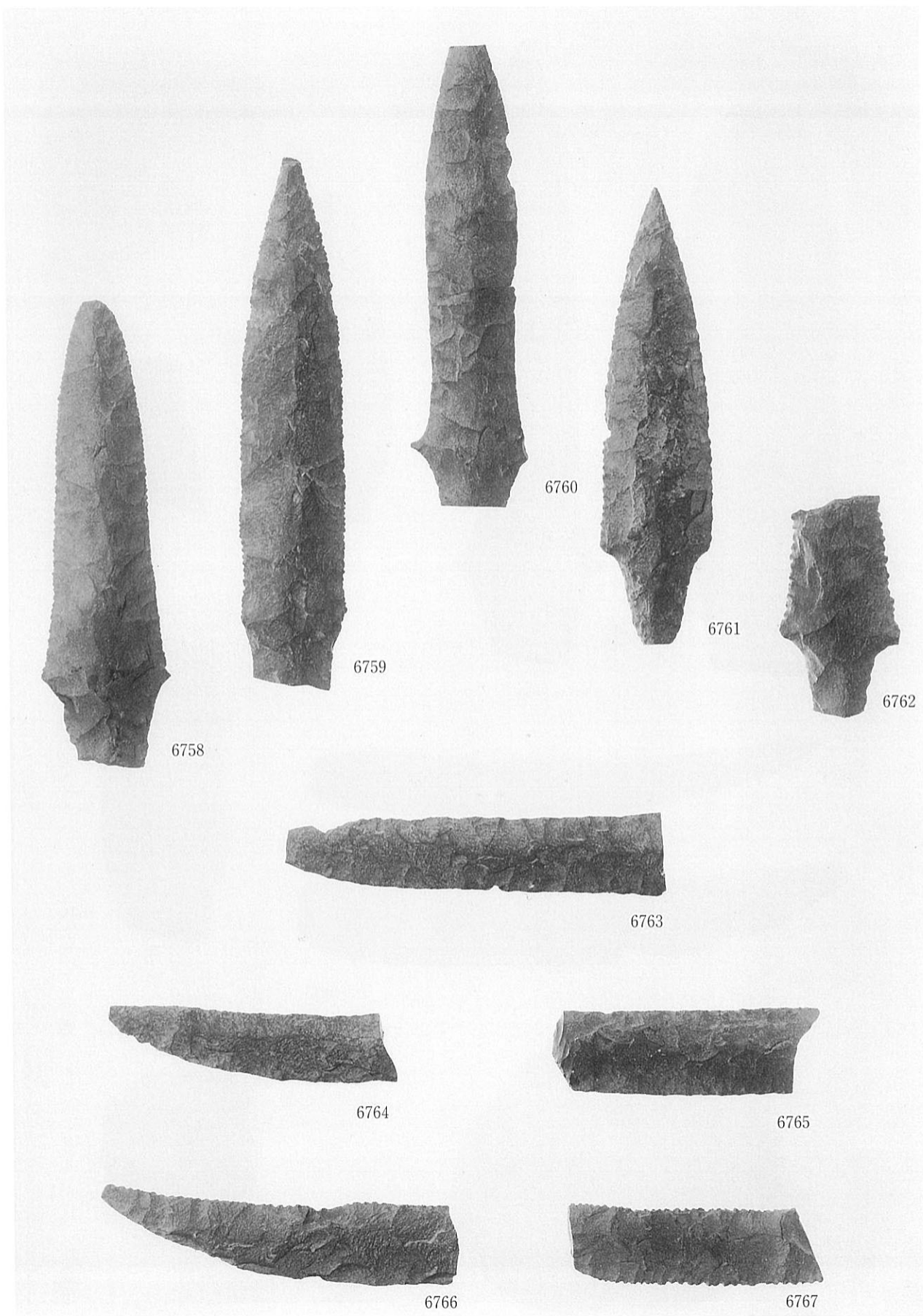
第9面川68流路部出土土器



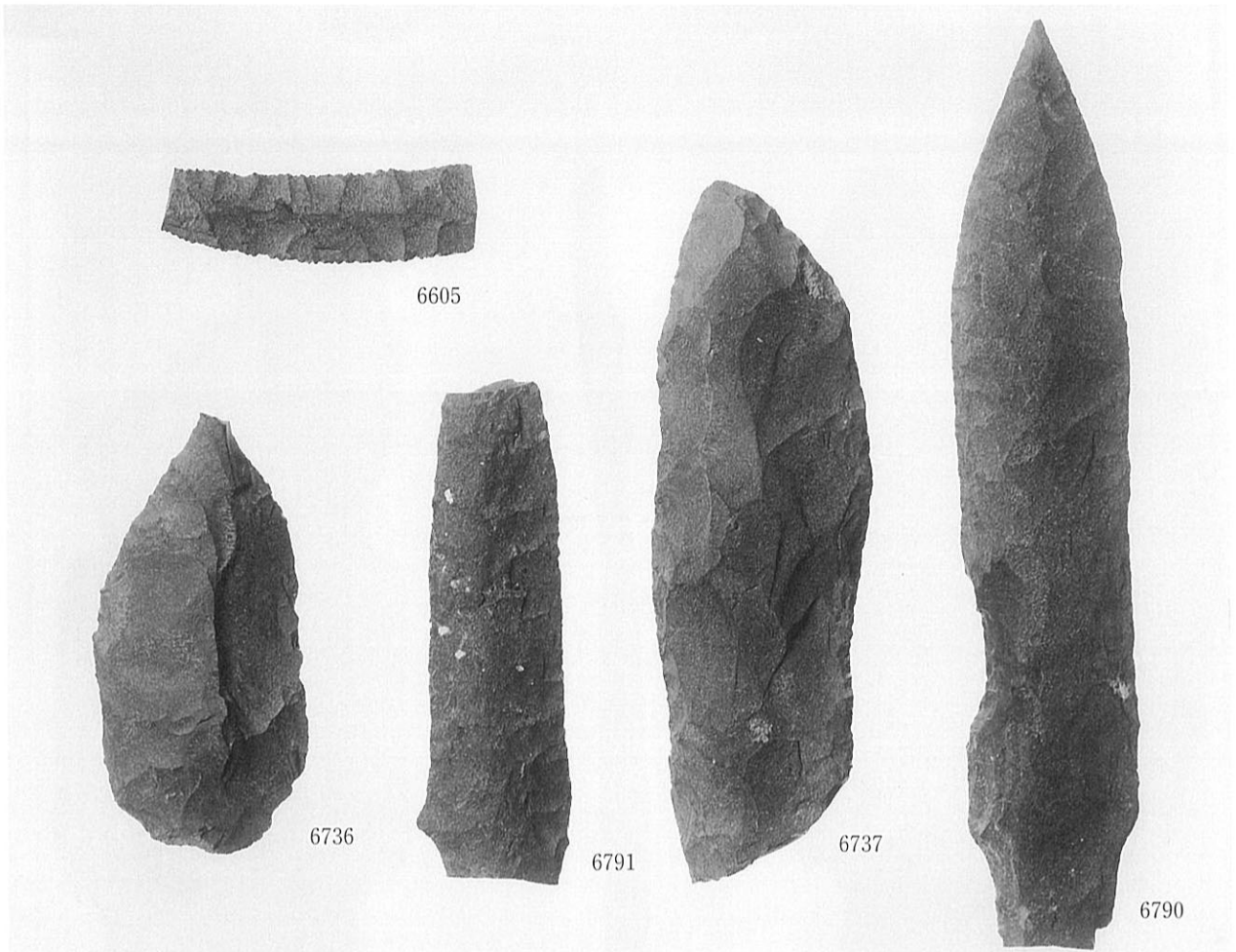
第11層出土土器



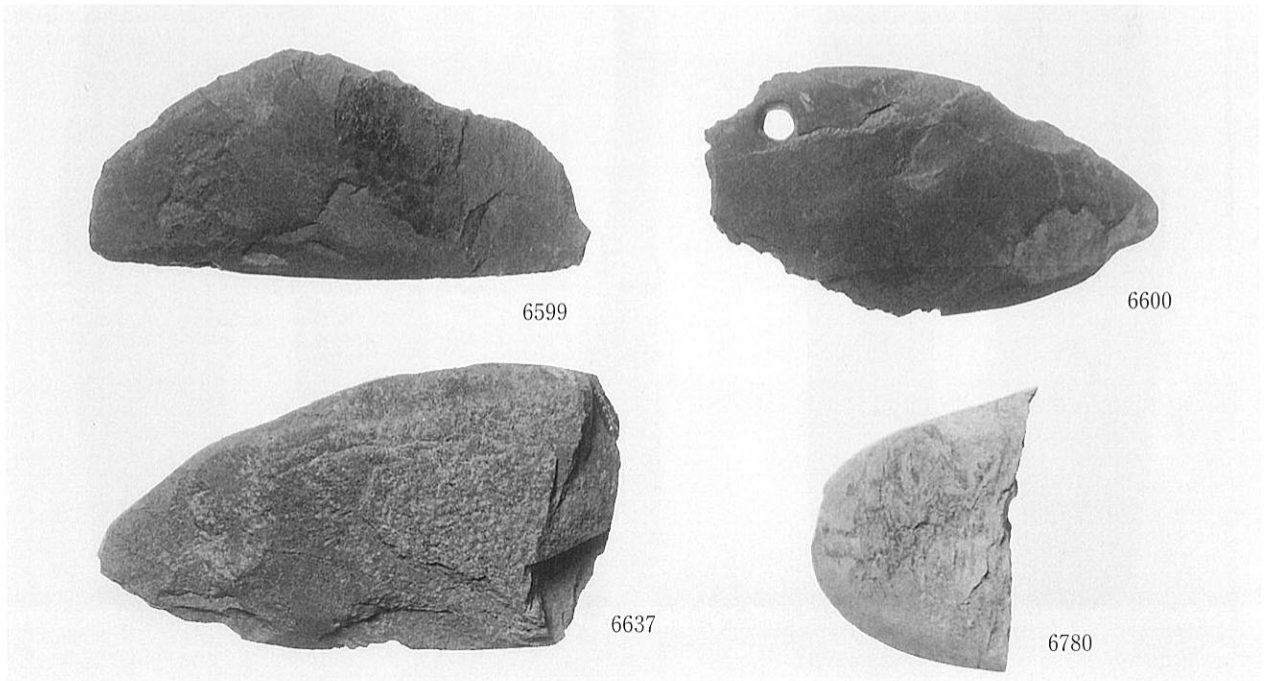
第8層出土石器



第9面溝77出土石器



6605：第7面 溝51 6736・6737：第9面川68肩部 6790：第9層以下 6791：第8層以下
出土打製石器



6599・6600：第6面 溝51 6637：第8層 6780：第9層
出土石包丁



6713

第9面川68出土木製人形 ひとがた